

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2016年度

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001559

国立国語研究所

年報

2016 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動（2016年度）



国際学会
"The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference"
(2016年10月14日～16日：国語研)



国際シンポジウム
"Mimetics in Japanese
and Other Languages of the World"
(2016年12月17日～18日：国語研)



コーパス合同シンポジウム
「コーパスに見る日本語のバリエーション
—助詞のすがた—」
(2017年3月9日：国語研)



国立国語研究所日本語教師セミナー（海外）
「日本語学習者コーパス（I-JAS）の概要と活用方法」
（2016年10月21日：北京師範大学）



国立国語研究所日本語教師セミナー（国内）
「自然会話コーパスの分析を日本語教育に生かす！
—明日の授業へのヒント—」
（2017年1月28日：国語研）



第22回NINJALチュートリアル
「学習者コーパスを使って研究しよう！」
（2017年2月17日：大阪大学）



「平成28年度 危機的な状況にある
言語・方言サミット（奄美大会）・与論」
（2016年11月13日：与論町総合体育館）

立川市歴史民俗資料館共同企画講演会
「立川は「たちかわ」か「たてかわ」か
—日本語の発音とアクセント—
(2016年12月11日：立川市女性総合センターアイム)



大学共同利用機関シンポジウム2016
「研究者に会いに行こう! —大学共同利用機関博覧会—
(2016年11月27日：アキバ・スクエア)



第10回NINJALフォーラム
「オノマトペの魅力と不思議」
(2017年1月21日：一橋大学一橋講堂)



「ニホンゴ探検 2016 —1日研究員になろう!」
(2016年7月16日：国語研)



「平成28年度 子ども霞が関見学デー」
(2016年7月27日～28日：旧文部省庁舎)



NINJAL 職業発見プログラム
(2016年10月21日：国語研)

目 次

2016 年度年報の発刊にあたって	3
I. 概要	5
1. 国立国語研究所のめざすもの	6
2. 組織	8
(1) 組織構成図	8
(2) 運営組織	9
運営会議	9
外部評価委員会	9
所内委員会組織	10
(3) 構成員	11
研究教育職員・特任研究員	11
客員教員	12
名誉教授	13
プロジェクト PD フェロー	14
外来研究員	14
II. 共同研究と共同利用	15
1. 共同研究プロジェクト	16
2. 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト	39
3. 外部資金による研究	41
4. 学術刊行物	43
5. 2016 年度公開中のコーパス・データベース	44
6. 研究成果の発信と普及	49
A. 国際シンポジウム	49
B. 合同シンポジウム・研究発表会	57
C. プロジェクトの発表会	57
D. NINJAL コロキウム	69
E. NINJAL サロン	70
F. 講習会・セミナー	71
7. センター・研究図書室の活動	73
研究情報発信センター	73
コーパス開発センター	73
研究図書室	73
III. 国際的研究協力と社会連携	75
1. 国際的研究協力	76
世界の大学・研究機関との提携	76
国際シンポジウム・国際会議の開催	76
日本語研究英文ハンドブック刊行計画	76
海外の研究者の招聘	78
2. 社会連携	78

消滅危機言語・方言の調査・保存・分析	78
日本語コーパスの拡充	78
第二言語（外国語）としての日本語教育研究	78
地方自治体との連携	78
訪問者の受入等	78
学会等の後援・共催	79
刊行物	79
一般向けイベント	80
児童・生徒向けイベント	81
3. 大学院教育と若手研究者育成	82
(1) 連携大学院	82
(2) 特別共同利用研究員制度	82
(3) NINJAL チュートリアル	82
(4) 優れたポストドクターの登用	83
IV. 教員の研究活動と成果	85
略歴, 所属学会, 役員・委員, 受賞歴, 参画共同研究, 研究業績（著書・編書, 論文・ブックチャプター, データベース類, その他の出版物・記事）, 講演・口頭発表, 研究調査, 学会等の企画運営, その他の学術的・社会的活動, 大学院教育・若手研究者育成	
V. 資料	159
1. 運営会議	160
2016 年度の開催状況	160
運営会議の下に置かれる専門委員会	161
(1) 所長候補者選考委員会	161
(2) 人事委員会	162
(3) 名誉教授候補者選考委員会	162
2. 評価体制	163
自己点検・評価委員会	163
外部評価委員会	163
3. 広報	164
4. 所長賞	165
5. 研究教育職員等の異動	166
VI. 外部評価報告書	167
平成 28 年度業務の実績に関する外部評価報告書	169
1. 評価結果報告書	173
平成 28 年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」に関する評価結果	174
平成 28 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果	256
2. 資料	271

2016 年度年報の発刊にあたって

2016 年度の年報をお届けします。昨年 10 月 1 日付けで影山前所長の後を受けて国立国語研究所（以下、国語研）第 9 代所長を拝命いたしました。着任以来まだ 3 カ月余りで、私自身がかかわった研究はごくわずかですが、この 8 年余り、客員教授としてまた運営委員として国語研の研究や運営にかかわり、その歩みをつぶさに見てきたものとしてその研究の全貌を見渡せる年報の発行をうれしく思います。

国語研は 1948 年 12 月に設立されました。来年度には 70 周年を迎えます。また、2009 年 10 月 1 日には、独立行政法人整備合理化計画により、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一員として再発足しました。再来年度には人間文化研究機構移管 10 周年を迎えます。移管以前も国語研は日本語に対してデータに基づく経験科学的なアプローチをしており、いわゆる「正しい日本語」を策定するような国語政策的なアプローチは取っていませんでした。例えば 1960 年代の国語研の『話し言葉の文型 1, 2』は独話録音データ、対話録音データに基づく画期的な文法研究で、世界的に見ても先駆的な研究と言えるでしょう。『分類語彙表』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『日本語話し言葉コーパス』、『日本語歴史コーパス』をはじめとして、国語研はいわゆる「文系」の日本語研究のみならず、日本語情報処理の基礎資料となる研究を数多く出版・公開してきています。また、社会言語学的研究にいち早く高度の統計的手法を用いてきたことも特筆に値するでしょう。移管に際しては、日本語の名前はそのまま英語の名前を National Institute for Japanese Language and Linguistics としました。これは国語研を狭い意味での日本語研究のみならず、生成文法、類型論などの理論言語学の成果に基づいた言語学的アプローチを全面に出した先端的言語研究の中心としようという意欲が表されていると思います。

国語研は人文系の日本語研究機関とされていますが、言語情報処理、認知科学関係の優秀な研究者を数多く有していますし、いわゆる人文学の伝統で訓練を受けた研究者の中にも工学的な言語処理に通曉した文理融合的研究者も多く働いています。現在のビッグデータや AI 時代の到来に当たって、国語研のさらなる発展のためそれらの人材により一層活躍していただく機会がやっていると認識しています。

国語研設立 70 周年、人間文化研究機構移管 10 周年を迎えるにあたり、国語研はこれまでの研究成果を総括し、その上に立って、より高い目的に向かって進んでいくために、記念事業を計画しています。皆様方のより一層のご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。

2018 年 1 月
国立国語研究所長
田 窪 行 則



概 要

1 国立国語研究所のめざすもの**沿革**

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論が行われてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究を行う機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が1948年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後、明治時代から大正、昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や、文語と口語の違いなど）を收拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国語研は廃止され、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関として再発足し、日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国語研は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として、国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し、共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで、日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため、大学共同利用機関への移行にあたっては研究所の英語名称に“linguistics”（言語学）という言葉を加え、National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」、略称NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは、日本語を人間言語のひとつとして捉え、ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり、そこには、当然のことながら、「国語及び国民の言語生活、並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

日本語の研究を深めることは、究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていくことが国語研の役割である。

2016年度の活動の概略

国語研では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、それらの土台となるのは「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」という研究所全体の研究目標である。この目標の達成に向けて、研究領域に設けられた合計6件の共同研究プロジェクトとコーパス開発センターで研究テーマを定め、数々の共同研究プロジェクトを実施した。

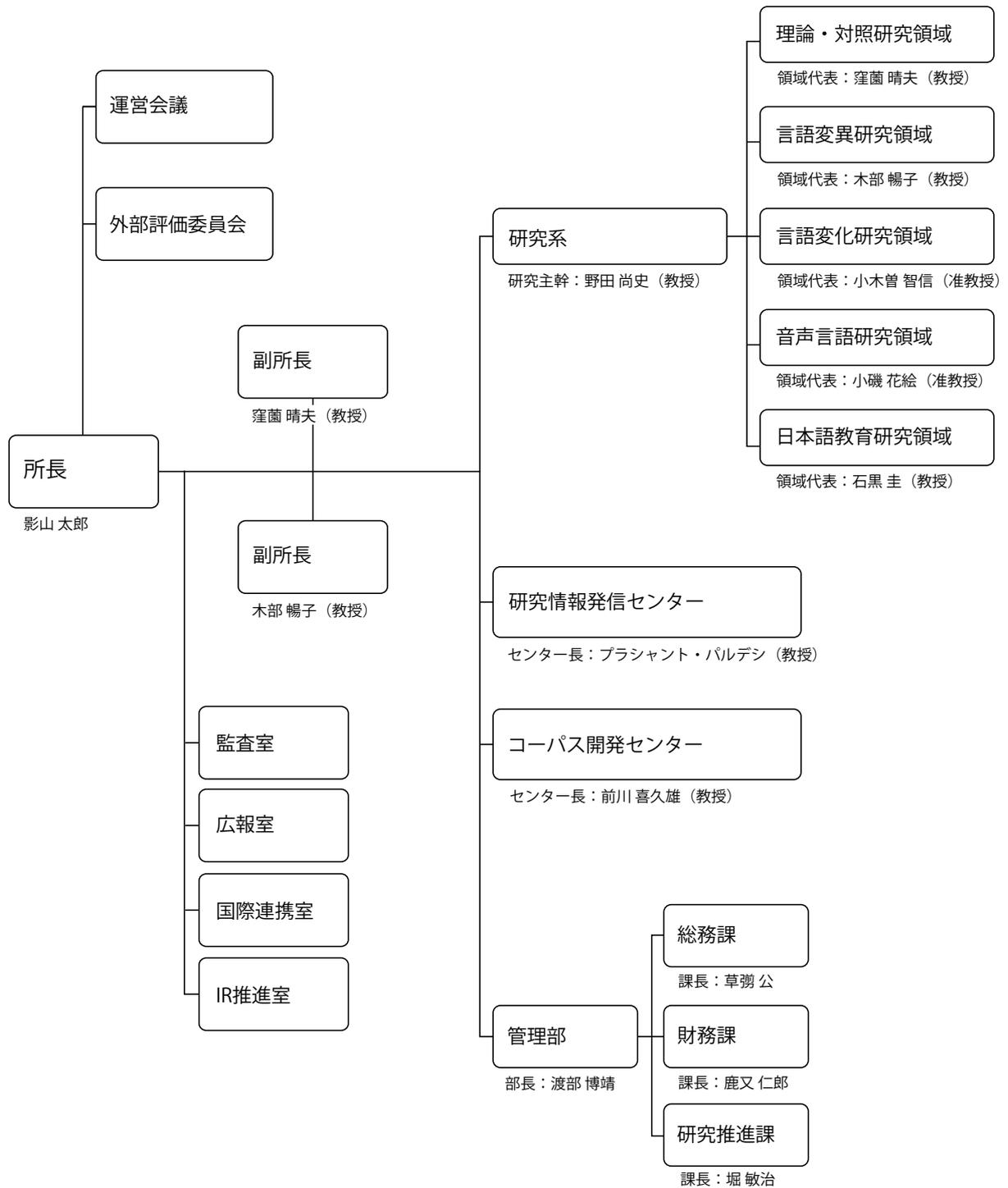
日本語研究の国際化に向けては、外国人研究者を専任教員、客員教員、共同研究員として招聘するとともに、中国・北京日本学研究中心、台湾・中央研究院語言學研究所、オックスフォード大学人文科学部との協定に加え、新たにペンシルベニア大学言語学科、ヨーク大学言語学科、ブランダイス大学情報科学科、コロラド大学ボルダー校言語学科との学術交流協定を締結した。また、ドイツ・De Gruyter Mouton社との協定による日本語研究英文ハンドブックシリーズ（全12巻）を、順次刊行している（既刊5巻）。

学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきであるから、多くの成果物を電子化し、ウェブサイト上で無償提供している。専門家向けに『国立国語研究所論集』などの刊行物、一般向けに『国語研 ことばの波止場』『NINJAL フォーラムシリーズ』などの冊子、研究資料・研究材料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『日本語歴史コーパス』、『アイヌ語口承文芸コーパス ー音声・グロスつきー』などのコーパス群、あるいは日本語教育者・学習者向けには『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』、『基本動詞ハンドブック』、『複合動詞レキシコン（国際版）』などのデータベース類と、多岐にわたる。さらに対象者別に、国際シンポジウム、コロキウム、チュートリアル、フォーラム、セミナー、ニホンゴ探検など、種類の異なるイベントを多数開催した。また、地方自治体との連携による地域社会への研究成果還元の一環として鳥根県隠岐の島町教育委員会及び鳥根大学と協働して島方言調査を実施し、隠岐の島町と共同で「隠岐の島方言・調査のつどい」を開催するなどの活動を行った。

活動・成果の詳細は各項目をご覧ください。

(1) 組織構成図

2016 年度



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

伊東 祐郎 東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授 / 留学生日本語教育センター長
上野 善道 東京大学名誉教授
呉人 恵 富山大学人文学部教授
近藤 泰弘 青山学院大学文学部教授
田窪 行則 京都大学名誉教授
樋口 知之 統計数理研究所長 / 情報・システム研究機構理事
益岡 隆志 関西外国語大学外国語学部教授
馬塚れい子 理化学研究所脳科学総合研究センター シニア・チームリーダー

(内部委員)

木部 暢子 副所長 / 教授
窪蘭 晴夫 副所長 / 教授
Timothy Vance 教授
野田 尚史 研究主幹 / 教授
Prashant Pardeshi 研究情報発信センター長 / 教授
前川喜久雄 コーパス開発センター長 / 教授

任期：2015年10月1日～2017年9月30日（2年間）

外部評価委員会

樺山 紘一 印刷博物館館長, 東京大学名誉教授, 元国立西洋美術館館長
林 史典 聖徳大学言語文化研究所長 / 教授, 筑波大学名誉教授, 元筑波大学副学長
仁科喜久子 東京工業大学名誉教授
門倉 正美 横浜国立大学名誉教授
後藤 斉 東北大学大学院文学研究科教授
渋谷 勝己 大阪大学大学院文学研究科教授, 日本学術会議連携委員
早津恵美子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院長 / 教授
峰岸 真琴 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

任期：2014年10月1日～2016年9月30日（2年間）

門倉 正美 横浜国立大学名誉教授
田野村忠温 大阪大学大学院文学研究科教授
沖 裕子 信州大学人文学部教授
小野 正弘 明治大学文学部教授
片桐 恭弘 公立はこだて未来大学学長
木村 英樹 追手門学院大学社会学部教授
佐久間まゆみ 早稲田大学大学院日本語教育研究科教授
橋田 浩一 東京大学大学院情報理工学研究科教授

任期：2016年10月1日～2018年9月30日（2年間）

所内委員会組織

●連絡調整会議（所長，研究教育職員，管理部長，その他所長が必要と認める者）

《連絡調整会議に置かれる専門委員会》

<管理運営関係>

- ・自己点検・評価委員会
- ・情報セキュリティ委員会
- ・知的財産委員会
- ・情報公開・個人情報保護委員会
- ・ハラスメント防止委員会
- ・研究倫理委員会
- ・施設・防災委員会
- ・研究図書室運営委員会
 - ・選書部会
- ・将来計画委員会

<学術・発信関係>

- ・プロジェクトレビュー編集委員会
- ・コーパス開発センター運営委員会
- ・研究情報発信センター運営委員会
- ・広報委員会
- ・研究情報誌編集委員会
- ・論集編集委員会

●共同研究プロジェクト推進会議（研究主幹，プロジェクトリーダー，所長の指名する研究所職員）

●安全衛生管理委員会

(3) 構成員

所長

影山 太郎 言語学, 形態論, 語彙意味論, 統語論

研究教育職員・特任研究員

○理論・対照研究領域

領域代表 / 教授

窪蘭 晴夫 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言
教授

Timothy Vance 言語学, 音声学, 音韻論, 表記法

Prashant Pardeshi 言語学, 言語類型論, 対照言語学

特任助教

船越 健志 言語学, 統語論, 生成文法

○言語変異研究領域

領域代表 / 教授

木部 暢子 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論
准教授

朝日 祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学

井上 文子 言語学, 日本語学, 方言学, 社会言語学

熊谷 康雄 言語学, 日本語学

助教

三井 はるみ 日本語学, 社会言語学, 方言文法

特任助教

原田 走一郎 方言学, 琉球語学, 記述言語学

○言語変化研究領域

領域代表 / 准教授

小木曾 智信 日本語学, 自然言語処理
教授

相澤 正夫 社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

大西 拓一郎 言語学, 日本語学

山崎 誠 言語学, 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

横山 詔一 認知科学, 心理統計, 日本語学

准教授

高田 智和 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

新野 直哉 言語学, 日本語学

特任助教

藤本 灯 国語学, 文献学, 古辞書

○音声言語研究領域

領域代表 / 准教授

小磯 花絵 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学
教授

前川 喜久雄 音声学, 言語資源学
准教授

柏野 和佳子 日本語学

山口 昌也 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

○日本語教育研究領域

領域代表 / 教授

石黒 圭 日本語学, 日本語教育学
教授

宇佐美まゆみ 言語社会心理学, 談話研究, 日本語教育学

野田 尚史 日本語学, 日本語教育学

准教授

野山 広 応用言語学, 日本語教育学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育
研究員

福永 由佳 日本語教育学, 社会言語学, 複数言語使用, 識字

○研究情報発信センター

特任助教

石本 祐一 音響音声学, 音声工学 (～ 2016.12.31)

○コーパス開発センター

准教授

浅原 正幸 自然言語処理

特任助教

石本 祐一 (2017.1.1 ～)

岡 照晃 計算言語学, 自然言語処理

○IR推進室

特任助教

山田 真寛 言語学, 形式意味論, 言語復興

客員教員 (2016年度在籍者)

客員教授

[理論・対照研究領域]

伊藤 順子 カリフォルニア大学教授

Wesley M. Jacobsen ハーバード大学教授

岸本 秀樹 神戸大学教授

小泉 政利 東北大学教授

斎藤 衛 南山大学教授
柴谷 方良 ライス大学教授
John Whitman コーネル大学教授
堀江 薫 名古屋大学教授
松本 曜 神戸大学教授
宮川 繁 東京大学特任教授
吉本 啓 東北大学教授

[言語変異研究領域]

岩崎 勝一 カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授
狩俣 繁久 琉球大学教授
佐々木 冠 札幌学院大学教授
渋谷 勝己 大阪大学教授
新田 哲夫 金沢大学教授

[言語変化研究領域]

青木 博史 九州大学准教授
岡崎 友子 東洋大学教授
金水 敏 大阪大学教授
田中 牧郎 明治大学教授
Bjarke Frellesvig オックスフォード大学教授

[音声言語研究領域]

大野 剛 アルバータ大学教授
菊池 英明 早稲田大学教授
伝 康晴 千葉大学教授

[日本語教育研究領域]

白井 恭弘 ケースウエスタンリザーブ大学教授
田中 真理 名古屋外国語大学教授
砂川 有里子 筑波大学名誉教授
迫田 久美子 広島大学名誉教授
糀山 洋介 名古屋大学教授

客員准教授

[理論・対照研究領域]

秋田 喜美 名古屋大学准教授

[言語変異研究領域]

Anna Bugaeva 東京理科大学准教授
下地 理則 九州大学准教授

名誉教授

角田 太作 2012.4.1 称号授与
John Whitman 2015.10.1 称号授与
迫田 久美子 2016.4.1 称号授与

プロジェクトPDフェロー（2016年度在籍者）

窪田 愛	理論・対照研究領域
陳 奕廷	理論・対照研究領域
松井 真雪	理論・対照研究領域
乙武 香里	言語変異研究領域
坂井 美日	言語変異研究領域
鴻野 知暁	言語変化研究領域
居關 友里子	音声言語研究領域
今村 泰也	日本語教育研究領域
小西 円	日本語教育研究領域
蒙 韞	日本語教育研究領域

外来研究員

- 青井 隼人（日本学術振興会特別研究員（PD）） 受入教員：木部 暢子
「関係性に着目した宮古語音韻構造の探求」（2014.4-2017.3）
- Clemens Poppe（日本学術振興会外国人特別研究員） 受入教員：窪藪 晴夫
「言語類型論から見た日本語諸方言におけるトーンと母音の相互作用」（2015.4-2017.3）
- 三樹 陽介（日本学術振興会特別研究員（PD）） 受入教員：木部 暢子
「消滅の危機に瀕する八丈語調査・記録と談話資料の作成・公開」（2015.4-2017.3）
- Stephan Wright Horn（オックスフォード大学（イギリス）） 受入教員：小木曾 智信
「近世以前の日本語の通時コーパスの統語情報付加：言語学研究の実用化に向けて」（2015.9-2016.8）
- 吳 孟根格日乐（赤峰学院外語教学部（中国）准教授） 受入教員：木部 暢子
「（中国領内）モンゴル語オールドス方言の変化・変遷とその趨勢についての調査研究」（2016.3-2016.8）
- Nguyen Bich Ha Thi（貿易大学日本語学部（ベトナム）言語学科長） 受入教員：柏野 和佳子
「論文形式文書作成のための日本語教育 ―ベトナム人の文化的特性による語彙の選択と構文―」（2016.3-2016.8）
- Armin Mester（カリフォルニア大学サンタクルズ校（アメリカ）教授） 受入教員：窪藪 晴夫
「マッチ理論と統語・韻律構造のミスマッチについて」（2016.6-2017.3）
- 玉 栄（内蒙古大学蒙古学学院（中国）教授） 受入教員：前川 喜久雄
「コーパスを利用した日本語、モンゴル語の韻律特徴の対照研究」（2016.9-2017.8）
- 劉 金鳳（無錫職業技術学院外国語及び観光学院（中国）副主任講師） 受入教員：石黒 圭
「日本語の接続詞の中日対照研究」（2016.9-2017.8）
- 陳 鳳川（暨南大学外国語学院日本語学部（中国）准教授） 受入教員：野田 尚史
「日本語学習者の日本語コミュニケーション能力育成の実践」（2016.9-2017.8）
- Giuseppe Pappalardo（ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学（イタリア）助教授）
受入教員：前川 喜久雄
「話し言葉コーパスに基づく現代日本語音声特徴の実験的分析」（2016.10-2016.11）



共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として(4) 研究所からの刊行物、(5) 2016年度公開中の各種コーパス・データベース、および(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催しを掲げる。

1 共同研究プロジェクト

第3期中期計画における国語研全体の研究課題は「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」である。これを達成するため、5研究領域とコーパス開発センターでは共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究領域・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。また、この研究課題は、国語研が所属する人間文化研究機構における、機関拠点型基幹研究プロジェクトの1つとして位置付けられている。

2016年度は、「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」のプロジェクトとして基幹型(6件)、領域指定型(5件)、および新領域創出型(3件)の3タイプと、コーパス基礎研究(1件)を実施した。

【基幹型】 6件

基幹型プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。5研究領域の専任教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

基幹型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法	理論・対照 研究領域教授	窪 蘭 晴夫	2016.4-2022.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i) 世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii) 一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii) 日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとはいえない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。</p> <p>本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語(諸方言を含む)を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を</p>			

図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関係する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

《2016年度の主要な成果》

1. 研究

- ・対照言語学研究を推進するために、公開研究発表会を合計7回開催し、これまでに合計363人が参加した。また2017年2月に、音声研究班と文法研究班の合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa）を開催した（参加者合計107人、うち海外機関所属研究者5人、大学院生16人、学生2人）。
- ・プロジェクト全体で論文76件、図書5冊、データベース3件を公開・刊行した。
- ・連濁や促音（重子音）に関する共同研究の成果を英文論文集（専門書）にまとめ、国際的な出版社から刊行していることは、日本の研究を広く海外に発信するという大きな意義を持つ。
- ・アクティブ・ラーニングに対応した日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』（野田尚史・野田春美共著、大修館書店）を完成した（2017年4月刊行予定）。
- ・共同研究員82人（うち大学院生5人、学振PD2人）による共同研究体制を整えた。共同研究員の所属機関数は50（うち海外の大学・研究所は10）である。

2. 共同利用・共同研究

- ・公開研究成果発表会を合計7回開催し、これまでに363人（延べ）が参加した。
- ・2つの公募型共同研究プロジェクトと合同で、プロジェクト全体の成果発表会 Prosody and Grammar Festa を開催した（参加者合計107人、うち海外機関所属研究者5人、大学院生16人、学生2人）。
- ・BCCWJ コーパス検索ツール NLB にオノマトベ検索機能を開発し、12月12日に公開した。
- ・名詞修飾表現に関する著名な業績である寺村秀夫（1999）『寺村秀夫論文集1—日本語文法編—』の英語訳・ウェブ公開作業の準備（著作権処理、翻訳）を整えた。
- ・鹿児島県の危機方言の一つである甕島方言について、アクセントデータベースを正式公開した（2017年3月）。
- ・コーパス検索ツール NLB にオノマトベ検索機能を開発する、日本語研究の名著（寺村秀夫論文集）を英訳する、危機方言（甕島方言）のアクセントデータベースを開発・公開するという共同利用に関わる活動は日本語研究に資するものであり、多くの日本語研究者による利用が期待される。
- ・海外機関所属の研究者10名を含むアドバイザリーボードを設置した。

3. 教育

- ・国際シンポジウムや研究発表会において、合計46名の大学院生に研究発表の機会を提供した。

- ・日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』（野田尚史・野田春美共著，大修館書店）を完成した（2017年4月刊行予定）。
- ・プロジェクトPDフェローを2人，非常勤研究員を5人雇用し，プロジェクト活動に参画させた。
- ・国際シンポジウム（JK24）において若手研究者12人（国内9人，海外3人）に対して発表のための旅費支援を行った。
- ・方言調査旅費の支援計画に応募してきた大学院生1名に対し，調査（老岐方言）の旅費を支援した。
- ・埼玉県の高校教員を対象にした教員研修会において講演を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・甑島方言の保存・調査と地元市民への啓蒙のために，鹿児島県薩摩川内市と共同事業の協議を開始した。
- ・「オノマトペの魅力と不思議」と題する一般向けの講演会を第10回NINJALフォーラムとして企画・開催し，NINJALフォーラムとしては過去最高の参加者（372名）を得た（2017年1月21日）。
- ・上記のフォーラムの成果を「オノマトペ」に関する啓蒙書『オノマトペの謎』（岩波書店，岩波科学ライブラリー）して立案し編集作業を完了した（2017年2月入稿，5月刊行予定）。
- ・立川市歴史民俗資料館と国語研の協定に基づき，日本語に関する講演会を開催した。
- ・国際日本語普及協会や東京言語研究所設立50周年セミナー，語学教育研究所シンポジウムにおいて，小中高教員に対して日本語アクセント等に関する講演・発表を行った。

5. グローバル化

- ・海外の研究者10名を含むアドバイザーボードを設置し，また海外の研究者13人を共同研究員に加えて共同研究を開始した。
- ・NINJAL国際シンポジウムとしてThe 24th Japanese / Korean Linguistic Conference（JK 24）とオノマトペ国際シンポジウム（Mimetics in Japanese and Other Languages of the World）を開催し，それぞれ予想を上回る参加者（193人と127人，いずれも異なり数）を得た。
- ・プロジェクト全体で，国際会議において45件の発表を行った。
- ・英語による研究論文集*Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project*（Timothy Vance and Mark Irwin eds.）をJohn Benjamins社から出版した（2016年6月）。また，*The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants*（Haruo Kubozono, ed., Oxford University Press）の編集を終え入稿し，校正作業を行った（2017年4月27日刊行予定）。
- ・*Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*（Cambridge University Press）に2編の論文（‘Pitch accent’および‘Mora and syllable’）を，*Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*（online, Oxford University Press）にも2編の論文（‘Accent in Japanese phonology’および‘Rendaku or Sequential Voicing in Japanese Phonology’）をそれぞれ寄稿した（それぞれHaruo Kubozono, Timothy Vance執筆）。

参加機関名

愛知教育大学，大阪大学，金沢大学，九州大学，京都大学，熊本大学，神戸大学，東京外国語大学，東京大学，東京女子大学，富山大学，名古屋大学，新潟大学，一橋大学，北海道大学，室蘭工業大学，琉球大学，総合地球環境学研究所，大阪府立大学，熊本県立大学，神戸市外国語大学，首都大学東京，沖縄大学，神田外国語大学，京都外国語大学，京都外国語短期大学，京都産業大学，慶応義塾大学，札幌学院大学，聖心女子大学，東京理科大学，同志社大学，東邦大学，東洋大学，日本女子大学，北星学園大学，美作大学，麗澤大学，日本学術振興会，理化学研

	究所, ルンド大学, マサリク大学, ラドバウド大学, カリフォルニア大学バークレー校, カリフォルニア大学ロサンゼルス校, カリフォルニア大学サンタクルス校, 韓国外国語大学, 国立東洋言語文化大学, 赤峰学院
共同研究員数	82名

基幹型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
統語・意味解析コーパスの開発と言語研究	理論・対照 研究領域教授	Prashant Pardeshi	2016.4-2022.3

《研究目的及び特色》

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報タグ付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) を開発するための基礎研究を行い、十分な規模のコーパスを構築し、公開する。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに5～6万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究的の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。

《2016年度の主要な成果》

1. 共同研究

- ・1万文の日本語のテキストに対して統語・意味解析情報付きコーパス（NPCMJ コーパス・Keyaki ツリーバンク）を構築し、6種類の検索用インターフェースとともに2016年12月に一般公開した。
- ・国内外の学会で発表を10件、国際ワークショップを1件（Unshared Task on Theory and System analysis with FraCaS, MultiFraCaS and JSeM Test Suites @国立国語研究所, 2016年11月13日）、国内ワークショップを1件（日本言語学会第153回大会@福岡大学, 2016年12月3～4日）実施し、研究成果を発信した。
- ・海外における統語解析情報付きコーパスの主要な拠点（University of Pennsylvania, University of York, University of Colorado Boulder, Brandeis University）で日本語のアノテーション方式について発表し、意見交換をした。

- ・NTT コミュニケーション科学基礎研究所との共同研究・共同実験に向けて協議し、協定を締結した。
 - ・対照言語学プロジェクトと共同でオノマトペ国際シンポジウム (Mimetics in Japanese and Other Languages of the World) を2016年12月17～18日に開催した(発表件数30件, うち学生発表件数が10件)。総参加者数は127人(うち海外機関所属外国人研究者26人, 学生52人)であった。さらに, オノマトペ国際シンポジウムの開催に合わせてBCCWJ コーパス検索ツールNLBにオノマトペ検索機能を開発し, 2016年12月12日に一般公開した。
 - ・コーパスの構築・公開を実施するために, 国立国語研究所ユニット, 東北大学ユニット, 神戸大学ユニットを合わせ, 非常勤研究員を10名以上雇用し, OJT方式で育成を行った。非常勤研究員の内4名は大学院生である。非常勤研究員以外に, 3名の学部生もアノテーション作業に参加している。
 - ・英語, 韓国語, 中国語など主要な言語の統語解析情報付きコーパス開発の実績のある University of Pennsylvania, University of York, University of Colorado Boulder, Brandeis University と交流協定を締結し, 研究者間の意見交換, 相互訪問, ツールの提供などを行った。
2. 共同利用・共同研究
- ・日英語によるプロジェクトホームページを開設し, 随時更新した。
 - ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki ツリーバンク検索・検出用のユーザフレンドリーインターフェースを開発し, 1万文規模のコーパスと共に公開した。
 - ・日本言語学会153回大会(福岡大学, 2016年12月3～4日)でワークショップを開催し, プロジェクトの成果を発表した。
 - ・プロジェクトの運営と成果発信について助言を求めるために, 海外研究者6名を含むアドバイザーボードを設置した。随時アドバイスを得ながらアノテーション方法, 研究成果の発信, 国際シンポジウムの開催の準備などを進めている。
3. 教育
- ・コーパスに基づく日本語統語論の教育に資する教材を開発・出版する準備作業を進めた。
 - ・コーパスの構築・公開を実施するために, 国立国語研究所ユニット, 東北大学ユニット, 神戸大学ユニットを合わせ, 非常勤研究員を10名以上雇用し, OJT方式で育成を行った。非常勤研究員の内4名は大学院生である。非常勤研究員以外に, 3名の学部生もアノテーション作業に参加している。また, コーパスに基づく研究の方法論などの指導を行っている。
4. 社会との連携及び社会貢献
- ・データ使用・公開に関して, 仙台の河北新報, 『基礎日本語文法』の著者である益岡隆志氏および田窪行則氏から承諾を得て, NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki ツリーバンクを検索用インターフェースと共に2016年12月に公開した。このデータは国内外の研究者・大学生などが研究目的で自由に使うことができる。
5. グローバル化
- ・ヨーク大学(英国), ペンシルバニア大学(米国), コロラド大学(米国), ブランダイス大学(米国)と連携協定を結び, 統語解析情報付きコーパス構築に関する共同研究を開始した。また, コロラド大学の大学院生を1名招へいし, プロジェクトが共催した国際シンポジウムで共同研究に基づく発表をしてもらった。
 - ・海外在住の研究者(6名)をアドバイザーとして加え, 統語解析情報付きコーパスの構築に関する意見交換を行った。
 - ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)のローマ字版構築の準備を進めた。

参加機関名	お茶の水女子大学, 京都大学, 筑波大学, 東北大学, 鳥取大学, 北陸先端科学技術大学院大学, 愛知淑徳大学, 関西外国語大学, 同志社大学, 南山大学, 立命館大学, 神戸大学, 神戸市外国語大学, マサチューセッツ大学, マサチューセッツ工科大学, デラウェア大学, ペンシルベニア大学, ヨーク大学
共同研究員数	21名

基幹型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成	言語変異 研究領域教授	木部 暢子	2016.4-2022.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献する。</p> <p>近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年のユネスコの危機言語リストには、日本で話されている8つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。特に、アイヌ語は危機の度合いが高く、系統関係も不明で、その解明のためのデータの整備と分析が急がれる。それだけでなく、日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。</p> <p>本プロジェクトの実施内容は、以下のとおりである。(1) 語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、『日本語諸方言コーパス』をはじめとする言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。</p> <p>なお、実施にあたっては、機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と連携する。</p> <p>《2016年度の主要な成果》</p> <p>1. 研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本各地の危機言語・方言の記録・保存のために、全国40地点の3点セット（語彙集、文法書、談話テキスト）の担当者を決定し、調査を開始した。 ・地域の言語の記録・保存、継承活動として、(1) 宮崎県椎葉村方言、(2) 島根県隠岐の島方言の合同調査、(3) 石川県白峰方言の合同調査を実施した。(1)は宮崎県東臼杵郡椎葉村教育委員会、椎葉民俗芸能博物館研究事業における5ヶ年計画「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」(2014～2018)との共同事業、(2)は島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共同実施、(3)は石川県白峰町の協力を得て実施したものである。これらの報告書は来年度作成の予定である。 ・調査報告書として、『沖縄県久米島方言調査報告書』（調査は2013年度実施）、『首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査2010-2016報告書』を2017年3月に刊行した。 ・この他、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文46件、報告書・論集4冊、図書2冊、発表・講演83件、データベース等5件、その他46件を公開した。 			

- ・世界的に言語や文化の多様性が重視される中、危機言語・方言に関する本プロジェクトの活動は、学術的・社会的に大きな意義を持つ。学術的には、プロジェクト共同研究員の五十嵐陽介、平子達也が日本音声学会全国大会で琉球と九州のアクセントの対応関係を新たに指摘した「[肩・種・汗・雨]と[息・舟・桶・鍋]がアクセント型で区別される日本語本土方言 一佐賀県杵島方言と琉球語の比較」を発表し、第30回日本音声学会全国大会 優秀発表賞を受賞した。社会的には、プロジェクトリーダー木部の研究や松森、山田の研究が東京新聞・中日新聞の社説、南海日日新聞、京都新聞等に取り上げられ、地域語の復権の重要性が紹介された。
- ・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下東京外大 AA 研）と共同で、フィールド調査に関する教育プログラムの開発と教科書の作成を行うための検討を進め、その一部を「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」で実践した。
- ・研究体制を強化するために、(1) 東京外大 AA 研、(2) 琉球大学と連携協定を締結した。(1) は、2017年度の東京外大概算要求に基づくもので、今年度は、クロスアポイントメントによる特別研究員1名の選考（2017年4月1日赴任）、フィールドワークに関する教育プログラムと教科書の開発に関する打合せ、「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」を実施した。(2) は、従来から行っていた琉球大学との連携を強化するもので、これに基づき、琉球大学に事業を委託し、沖縄本島北部方言の調査を実施した。

2. 共同利用・共同研究

- ・『日本の危機言語・方言音声データ』、『アイヌ語口承文芸コーパス』、『『日本言語地図』データベース』、『首都圏の言語の実態と動向に関するデータ』を補充・整備し、公開した（『日本の危機言語・方言音声データ』、『アイヌ語口承文芸コーパス』については、作業が遅れたため、5月の公開となった）。
- ・方言の音声データがほとんど公開されていない現状を改善するために、日本語諸方言の音声付きデータベース『日本語諸方言コーパス』（COJADS）の構築を進めている。今年度は、『ふるさとことば集成』の音声データと方言テキストデータを検索システムに載せるための整備を進め、47地点の音声データの整備を行った。2018年度にモニター版の公開を予定している。
- ・アイヌ語のコーパス、琉球語のデータベース、日本語諸方言の記述、諸方言コーパス等の危機言語・方言のデータは、学術的、社会的意義が大きいですが、まだ、これらを活用した研究成果はそれほどあがっていない。今後、データ量を増やし、これらを活用したパイロット的な研究を推進する予定である。

3. 教育

- ・AA 研 LingDy3 プロジェクトと共同でクロスアポイントメントによる特別研究員1名を公募し、選考を行った（2017年4月1日赴任）。
- ・東京外大 AA 研 LingDy3 プロジェクトと共同で、フィールド調査に関するワークショップ「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」を島根大学で開催した。
- ・フィールドワークを通じて若手研究者を育成するという本プロジェクトの人材育成方針に沿い、島根県隠岐の島方言調査に参加する大学院生を全国に公募し、書類審査で3人を選抜した。
- ・島根県隠岐の島方言調査を実施するにあたり、地元の大学である島根大学の学生に調査への参加を呼びかけ、3・4年生8人が隠岐の島調査に参加した。この8人と公募による大学院生3人に対しては、「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」、およびフィールドワークを通じて、言語調査の基礎と地域貢献について指導を行った。
- ・「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・与論」（2016年11月13日）や国語研セミナー「隠岐の島方言・調査のつどい」（2016年12月10日）を通じて、地域の言語・方言の継承

活動に携わる社会人に学び直しの場を提供した。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・宮崎県椎葉村椎葉民俗芸能博物館研究事業における5ヶ年計画「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」(2014～2018)に基づき、椎葉方言調査を実施した。また、島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共同で隠岐の島方言合同調査を、石川県白峰町の協力を得て白峰方言合同調査を実施した。
- ・文化庁、鹿児島県、与論町、与論町教育委員会、琉球大学と共催で、全国の方言研究者と方言継承活動に携わる人たちが方言の記録や継承に関する問題について意見交換を行う「危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)・与論」を開催した。
- ・方言継承活動の一環として島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共催で、市民向けセミナー「隠岐の島方言・調査のつどい」を隠岐の島町文化会館で開催した。
- ・上記の催し物を通して、研究成果を地域に発信した。
- ・プロジェクトのホームページを充実させ、「プロジェクトの成果物」、「フィールドワーク」の情報を発信した。

5. グローバル化

- ・2018年度に危機言語に関する国際シンポジウムを国立国語研究所で開催する。また、言語の記録に関するワークショップを2017年5月にハワイ大学で開催する。今年度はその準備を進めた。

参加機関名	岩手大学、岡山大学、九州大学、島根大学、上越教育大学、金沢大学、京都大学、熊本県立大学、札幌学院大学、東京理科大学、日本女子大学、北星学園大学、千葉大学、東京大学、東北大学、一橋大学、広島大学、福岡教育大学、琉球大学、愛知県立大学、首都大学東京、沖縄国際大学、関西大学、駒沢大学、成城大学、弘前学院大学、広島経済大学、文教大学、別府大学、安田女子大学、浦添市浦添小学校、椎葉民俗芸能博物館、日本学術振興会、フランス国立科学研究所、シンガポール国立大学、オークランド大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、県立広島大学
共同研究員数	53名

基幹型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開	言語変化研究 領域准教授	小木曾智信	2016.4-2022.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本プロジェクトは、上代(奈良時代)から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。</p> <p>既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済み</p>			

の「平安時代編」(平安仮名文学作品)、「室町時代編」(狂言)等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリシタン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」(代表者・高田智和)と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

《2016年度の主要な成果》

1. 研究

日本語の歴史を通時的に研究することのできる『日本語歴史コーパス』を構築し、これを活用した新しい日本語史研究を実施すること、さらにはコーパスの活用を広く普及することが、本研究プロジェクトの目的の一つである。これを実現するために次の取り組みを行った。

- ・コーパスを活用した日本語史研究の対象を拡大するために、『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編Ⅰ雑誌」ver. 1.0 (約1,400万語)、および「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」(『十六夜日記』『東関紀行』『海道記』『建礼門院右京大夫集』『とはずがたり』)の5作品、計約11万語)の構築を完了した。また、来年度以降の研究活用の準備のため、「奈良時代編Ⅰ万葉集」、「室町時代編Ⅱキリシタン資料」の本文・形態論情報の整備を予定通り実施した。
- ・上記資料を活用した日本語史研究を展開するため、コーパス活用班の研究会を各グループに分かれて合計12回行い、この中で①日本語史研究に資する資料選定と資料性検討、②日本語史研究に資するアノテーションの研究、③コーパスを活用した日本語史の研究を行った。また、このコーパス活用班を中心とする全体の研究成果の発表会として「通時コーパス」シンポジウム2017を2017年3月11日に開催し、18件の研究発表(口頭発表8件、ポスター発表10件)を行った(参加者数78名)。
- ・共同研究員のプロジェクトに関連する研究活動の成果は、謝辞を含まない関連する研究を含めて論文で56件、研究発表で79件に及び、計画を大きく上回った。

『日本語歴史コーパス』とその関連研究について、『日本語の研究』学界展望(第12巻3号p.32)において白百合女子大学中里理子教授により「2014年3月、国立国語研究所により日本語歴史コーパス「平安時代編完成版」が公開され、現在は「室町時代編Ⅰ狂言」、試作版「江戸時代編」等も公開されている。コーパスについては、『日本語学』(33-14, 2014.11)の特集「日本語史研究と歴史コーパス」や、近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』(ひつじ書房, 2016.10)によって、その意義と活用法を具体的に知ることができる。日本語史研究にコーパスが重要な位置を占めることを改めて感じる(下略、下点線引用者)」と評価された。

また、大阪大学田野村忠温教授による書評「近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』」(『日本語の研究』第12巻4号, 2016年10月)でも、「本書で概略が述べられ、応用事例の示された『日本語歴史コーパス』の完成は日本語研究史の時代を画する出来事となるであろう。」(p.158)と評価された。

- ・コーパスを活用する教育プログラムとして、連携大学院である東京外国語大学国際日本学研究科において「Japan Studies I コーパス日本語学入門」「Japan Studies II 日本語コーパスの活用」の授業を実施した。

また、コーパス研究の普及のためNINJALチュートリアル「『日本語歴史コーパス』活用入門—「中納言」による検索と集計—」を2016年9月（大阪）、2017年2月（東京）に開催した。

- ・共同研究員は56名（うち大学院生5名）、共同研究員の所属機関数は33（うち外国の大学は4機関）である。また、コーパス構築のため、プロジェクト非常勤研究員を5名、プロジェクトPDフェローを1名雇用した。さらに「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。

2. 共同利用・共同研究

大学の研究・教育活動で利用可能な『日本語歴史コーパス』を通時コーパスとして構築し、公開するのが本プロジェクトの重要な貢献の一つである。これを実現するために下記の取り組みを行った。

- ・「明治・大正編 I 雑誌」ver. 1.0（約1,400万語）を2016年10月に一般公開した。さらに、「鎌倉時代編 II 日記・紀行」（5作品、約11万語）を2017年3月に一般公開した。
- ・日本語学会春季大会（2016年5月、学習院大学）において、ワークショップ「『日本語歴史コーパス』の拡張とその課題—「通時コーパス」をめざして—」を開催した。
- ・『日本語歴史コーパス』の普及活動を行うとともに、コーパス開発センターと協力して利用しやすい登録システムを整備したことで、2016年4月～12月だけで2,050名以上の新規登録ユーザーがあり、計約2,700名となった（2016年12月現在）。
- ・日本語学会でのワークショップ「『日本語歴史コーパス』の拡張とその課題—「通時コーパス」をめざして—」には約80名の聴衆が参加し高い関心を得た。
- ・『日本語歴史コーパス』は日本語史研究の分野において広く参照されており、これを直接利用した研究論文（学会予稿集を含む）が2016年4月から10月までの半年間で33件発表された。なお、こうした研究成果のリスト「CHJを用いた研究業績一覧」を作成し、Webページ上での公開を開始した。
- ・オックスフォード大学と連携協定の下、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を同大学に派遣し万葉集コーパスの統語情報アノテーションの研究を行うなど、共同研究を推進した。

3. 教育

- ・コーパスを活用する教育プログラムとして、連携大学院である東京外国語大学国際日本学研究科において「Japan Studies I コーパス日本語学入門」「Japan Studies II 日本語コーパスの活用」の授業を実施した。

また、コーパス研究の普及のためNINJALチュートリアル「『日本語歴史コーパス』活用入門—「中納言」による検索と集計—」を2016年9月（大阪）、2017年2月（東京）に開催した。

- ・大学院生5名（うちプロジェクト非常勤研究員3名）、PDフェロー1名をプロジェクトのコーパス活用班に参加させ、日本語の歴史研究のための指導と援助を行った。
- ・PDフェロー、プロジェクトで雇用したプロジェクト非常勤研究員に対しコーパスの構築・活用法を指導することにより、コーパスを活用した日本語史研究を展開できる人材の育成に努めた。
- ・人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を連携協定先であるオックスフォード大学に派遣した。また、大学院生ら若手研究者に対して、通時コーパスを活用した研究発表のための費用（出張費、大会参加費）を援助した。

こうした若手研究者育成の成果として、来年度より教育職として大学に採用される者が複数出る見込みである。

- ・NINJAL チュートリアルとして一般社会人も対象として『日本語歴史コーパス』活用の講習会を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・(株)小学館および(株)ネットアドバンスと連携して『日本語歴史コーパス』検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」とのダイレクトリンクを実現した(2016年11月)。また、「明治・大正編I雑誌」とJKBooks『太陽』本文画像とのリンクを行った(2016年10月)。

【研究成果の社会への普及】

- ・『日本語歴史コーパス』を拡充しインターネット上で無償にて一般公開したほか、コーパス開発センターと協力して形態素解析用の電子辞書 UniDic を拡充し、これによる解析用ツール「Web茶まめ」をインターネット上で一般公開した。また、『日本語歴史コーパス』利用の講習会(チュートリアル)を実施してコーパス利用の社会への普及を図った。

5. グローバル化

- ・プロジェクトの共同研究員として海外の大学の研究者4名が参加した。
- ・オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で万葉集のコーパス構築、統語情報アノテーション、上代語に関する研究を共同で行った。また、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を同大学に派遣し共同研究を推進したほか、オックスフォード大学の大学院生を1名特別共同利用研究員として受け入れ指導を行った。
- ・『日本語歴史コーパス』の英文ホームページを作成し2016年10月より海外に向けて発信を開始した。
- ・台湾の国立台湾大学においてNINJALセミナー「データが主導する日本語研究」として『日本語歴史コーパス』の講習会を行った(2016年9月15日)。また、国際会議で計5本の研究発表を行った。

参加機関名	愛知教育大学, 大阪大学, 九州大学, 群馬大学, 埼玉大学, 千葉大学, 東北大学, 富山大学, 長崎大学, 奈良先端科学技術大学院大学, 福井大学, 北海道大学, 三重大学, 青山学院大学, 関西学院大学, 國學院大學, 駒澤大学, 上智大学, 昭和女子大学, 白百合女子大学, 成城大学, 中京大学, 東京電機大学, 東洋大学, 二松學舎大學, 花園大学, 明治大学, 立命館大学, コーネル大学, オックスフォード大学, シカゴ大学, 啓明大学校, 東京大学
共同研究員数	41名

基幹型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究	音声言語研究領域准教授	小磯 花絵	2016.4-2022.3
《研究目的及び特色》			
本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1)多様な日常場面の会話200時間を納めた大規			

模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班，及び，構築したコーパスを用いて，(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性や仕組みを研究するレジスター班，(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班，(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の4つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では，日常の会話行動に関する調査にもとづき，自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など，多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり，世界的に見ても新しい試みである。また，従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく，生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより，日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し，文字化した上で，形態論情報や統語情報，談話情報などのアノテーションを施し，一般に公開する。これにより，話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは，話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく，日本語教育や辞書編纂，音声情報処理，ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また，後世の人々が21世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では，現代の日常会話に加え，講演などの独話や発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ，発話を前提としない小説などの会話文，50年前の話し言葉など，多様なデータを対象に，高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して，話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み，その経年変化の実態を，実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして，昔の話し言葉のデータやBCCWJの小説などの会話文，国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは，大規模日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって，共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

《2016年度の主要な成果》

1. 研究

- ・コーパスに基づく実証的な話し言葉研究を推進するために，既存の話し言葉のコーパス・データベースを整備し，『国会会議録検索システム』ひまわり版，『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版，『日本語話し言葉コーパス』中納言版を一般公開した。また『女性のことば・男性のことば—職場編—』ひまわり版を整備し，プロジェクトメンバーに限定して公開した。
- ・今年度は上記のデータに基づき各班の研究を推進し，シンポジウム『日常会話コーパス』Iを2016年9月1日に，シンポジウム『日常会話コーパス』IIを2017年3月1日に国語研究所で開催し，研究成果を発信した。参加人数の合計は242名，口頭発表8件，ポスター発表10件，デモンストラレーション11件，パネルディスカッション1件であった。
- ・『日常会話コーパス』のデータとして190時間（延べ話者数793名）を収録し，2021年度の本公開に向けて準備を進めた。特に，データ公開に伴う法的・倫理的問題等について，知財関連を専門とする弁護士と面談して方針案を策定し，関連分野の研究者と意見交換するために，シンポジウム『日常会話コーパス』IIでパネルディスカッション「日常会話データの公開における倫理的・法的な問題について」を企画した。
- ・『日常会話コーパス』の設計のために準備研究として実施した会話行動調査の報告書として『一日の会話行動に関する調査報告』を2017年3月に刊行し，プロジェクトのホームページで公開した。
- ・そのほか，プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて，論文17件，報告書1冊，発表・講演100件，データベース3種4件を公開した。

- ・共同研究員 21 名（うち大学院生 1 名）による共同研究体制を整えた。共同研究員の所属機関数は 17 である。またプロジェクト非常勤研究員（PD フェロー）を 1 名、非常勤研究員を 6 名、技術補佐員を 4 名雇用し、コーパス構築およびその活用を視野に入れたアノテーション設計のための体制を築いた。

2. 共同利用・共同研究

- ・来年度からのプロジェクトの研究推進に向け、コーパス構築班では『日常会話コーパス』のデータとして 190 時間（延べ話者数 793 名）の収録と 34 時間分の文字化作業を、レジスター班では『BCCWJ』のうち 1930 サンプル（小説の 39%）の会話文への話者情報の付与を実施した。また経年変化班では『昭和話し言葉データ』50 時間（独話・対話各 25 時間）の文字化を完了させた。
- ・『名大会話コーパス』14 万語に形態論情報を付与し、会話・話者に関するメタ情報を整理した上で、2016 年 12 月 14 日にオンライン検索システム『中納言』および全文検索システム『ひまわり』にて公開した。『中納言』の実装はコーパス開発センターと共同で進めた。
- ・『国会会議録検索システム』ひまわり版として、1947 年～2012 年開催の本会議・予算委員会のデータ（11106 会議、4.5 億字）を整備し、開発版を 2016 年 5 月 24 日に、発言者の生年情報を付与した拡張版を 2016 年 12 月 8 日に公開した。
- ・『女性のことば・男性のことば 一職場編一』（ひつじ書房）の転記テキストに形態論情報を付与し、会話・話者に関するメタ情報を整理した上で、全文検索システム「ひまわり」で研究利用できるよう整備し、出版社の許諾を得てプロジェクトメンバーに限定して内部公開した。
- ・『日本語話し言葉コーパス』の形態論情報を BCCWJ と同じ体系に修正した上で、中納言版をコーパス開発センターと共同で構築し、2016 年 9 月 1 日に試験公開を、2017 年 3 月に一般公開を行った。

3. 教育

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象に、第 1 回コーパス利用講習会（ひまわり・中納言の 2 コース）を 2016 年 9 月 1 日に、第 2 回コーパス利用講習会（同 2 コース）を 2017 年 3 月 1 日に開催し、それぞれ 27 名、22 名が参加した。
- ・若手の非常勤研究員および共同研究員 6 名（うち大学院生 1 名）に対し、シンポジウム『日常会話コーパス』II（2017 年 3 月 1 日）で発表の機会を提供した。
- ・一橋大学との協定に基づき、2 名の連携教授が、コーパスを活用した計量的研究の演習を担当した。
- ・大学院生 1 名、学振 PD1 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。また若手研究者 6 名（うち大学院生 2 名）を非常勤研究員として雇用し、コーパス構築に携わると同時に、話し言葉研究のための指導と援助を行い、人材育成に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・『名大会話コーパス』と『日本語話し言葉コーパス』についてはオンライン検索システム「中納言」で公開することにより、また『名大会話コーパス』と『国会会議録』については全文検索システム「ひまわり」パッケージをホームページで公開することにより、書き言葉だけでなく話し言葉についてもコーパスを容易に検索できる環境を整えた。

5. グローバル化

- ・海外の研究者 1 名を共同研究員に加えて日常会話コーパスの設計・構築に関する共同研究を行った。
- ・共同研究員の鈴木亮子氏が代表をつとめる国際プロジェクト「会話における言語と相互行為の「単位」：複数言語からの創発的アプローチ」と連携し、発話単位などアノテーションの仕様について協議した。
- ・ロマンス語のコーパスプロジェクト「C-ORAL-ROM」を主宰する Emanuela Cresti 氏、Massimo

Moneglia 氏と日常会話コーパスの設計について議論した。	
・『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版, 『国会会議録』ひまわり版, 『日本語話し言葉コーパス』中納言版をウェブサイト上で海外に向けて発信した。	
参加機関名	お茶の水女子大学, 九州大学, 一橋大学, 千葉大学, 東京大学, 熊本大学, 関西学院大学, 名古屋大学, 愛知学院大学, 慶応義塾大学, 同志社女子大学, 日本女子大学, 早稲田大学, 国際交流基金, 日本学術振興会, アルバート大学, NHK 放送文化研究所
共同研究員数	21 名

基幹型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語学習者のコミュニケーションの多角的 解明	日本語教育 研究領域教授	石黒 圭	2016.4-2022.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。</p> <p>本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。</p> <p>サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。</p> <p>サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。</p> <p>サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調</p>			

査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

《2016年度の主要な成果》

1. 研究

- ・学習者の日本語使用面では、母語話者と学習者の自然会話コーパスである『BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語会話コーパス』と多言語を母語とする日本語学習者コーパスである『I-JAS (International corpus of Japanese As a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築に、当初の計画のとおり着手した。とくに、後者は準備段階を越え、検索システムであるI-JAS中納言とともに、第一次公開として225名分の発話データ、および145名分の作文データの公開に至った。
- ・学習者の日本語理解面では、中国・ベトナムで3回、計123名の学習者への文章理解過程調査を行うと同時に、国内・海外(中国・欧州等)の現地の調査協力者による所属機関の日本語学習者を対象にした読解調査を、当初の計画のとおり推進した。
- ・学習者のためのリソース開発面では、日本語学習者用の読解教材を作成するための共同研究を、当初の計画のとおり開始する一方、オンライン日本語基本動詞辞典である『基本動詞ハンドブック』の拡充を、当初の計画を超えて進め、後者が20見出し、例文音声1173文、ショートアニメを31点それぞれ新たに追加することができた。
- ・『基本動詞ハンドブック』に対して、九州大学の内田論准教授から「コーパスに基づいた先進的な取り組みとして一見の価値がある」と評価された。
- ・『BTSJ』に関わる講習会等を5回、『I-JAS』に関わるワークショップ等を3回、読解コーパスに関わるチュートリアルを2回開催し、大学院生を含む日本語教育研究者、および現場の日本語教師を対象に、研究成果の教育的普及に努めた。
- ・プロジェクト全体として、73機関(うち外国の大学・研究所は28機関)、101名の共同研究員(うち大学院生4名)を組織し(当初の計画では約90名)、プロジェクト非常勤研究員(PDフェロー)を3名、非常勤研究員を11名、技術補佐員を4名雇用した(当初の計画では順に3名、約7名、約3名)。

2. 共同利用・共同研究

- ・学習者の日本語使用面では、母語話者と学習者の自然会話コーパスである『BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語会話コーパス』と多言語を母語とする日本語学習者コーパスである『I-JAS (International corpus of Japanese As a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築に、当初の計画のとおり着手した。とくに、後者は準備段階を越え、検索システムであるI-JAS中納言とともに、第一次公開として225名分の発話データ、および145名分の作文データの公開に至った。
- ・学習者の日本語理解面では、中国・ベトナムで3回、計123名の学習者への文章理解過程調査を行うと同時に、国内・海外(中国・欧州等)の現地の調査協力者による所属機関の日本語学習者を対象にした読解調査を、当初の計画のとおり推進した。
- ・学習者のためのリソース開発面では、日本語学習者用の読解教材を作成するための共同研究を、当初の計画のとおり開始する一方、オンライン日本語基本動詞辞典である『基本動詞ハンドブック』の拡充を、当初の計画を超えて進め、後者が20見出し、例文音声1173文、ショートアニメを31点それぞれ新たに追加することができた。
- ・その結果、プロジェクト全体のデータベースの活用促進を図るという目的を達成するために、共同研究発表会を開催することが可能になり、プロジェクトの成果を共同利用・共同研究できる環境が整った。

- ・オンライン日本語基本動詞辞典に関わる研究成果である BCCWJ コーパス検索ツール NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) が、コーパスに基づいて編纂された日本初の国語辞典である『現代国語例解辞典』〔第5版〕(小学館)の編纂に使用された。
- ・日本語学習者の4年間の変容と成長のデータ収集および縦断コーパスの構築のために、連携協定を結んでいる北京日本語学研究センターと共同で年2回の現地調査を計画どおりに継続する一方、2016年4月に新たに連携協定を結んだ国際交流基金日本語国際センターとも、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究の一部を共同で推進した。

3. 教育

- ・コーパス構築作業に2名の大学院生が参加し、指導を行う一方、教室談話の分析に4名の大学院生が参加し、国際学会で発表を行った。さらに、インド在住の大学院生1名に視聴覚コンテンツ開発作業に携わり、インドの日本語教育現場との連携を深めた。
- ・一橋大学との連携講座に参画し、修士3名、博士10名の指導教員として研究論文の指導に当たる一方、非常勤講師として首都大学東京、大阪府立大学、南山大学、東海大学で大学院教育に協力した。
- ・雇用したプロジェクト非常勤研究員(PDフェロー)3名のうち、1名は博士論文を基にした著作を2017年2月に刊行し、残る2名もNINJALサロンで自身の研究成果を発表し、次年度以降、研究が本格化できる態勢を整えた。
- ・日本語教師セミナーを当初の計画どおりに国内・海外で1回ずつ開催し、社会人日本語教師の研修に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・外国人にとってわかりやすい日本語という視点を取り入れたビジネス日本語のプロジェクトを、企業関係者を中心とした日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと開始した。
- ・日本語教師セミナーを国内と国外で1回ずつ開催し、研究成果の社会への普及に努めたほか、日本語教師やボランティアを主な対象とする研修会を5回、そのほか、学習者、高校生らを対象とする講演を各地で開催した。

5. グローバル化

- ・海外在住のプロジェクト共同研究員28名を軸に、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を推進しているほか、連携協定を結んでいる北京日本語学研究センターと共同で、学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を継続している。さらに、『基本動詞ハンドブック』に関する発表とデモンストレーションをインドの2大学で開催した。
- ・日本語教師セミナー(海外)を中国の北京師範大学で計画どおりに実施した。
- ・NCRBの開発の趣旨と活用方法についての発表を、北京外国語大学および仁川大学の特別講義、韓国外国語教育学会の招待講演、2016年日本語教育国際研究大会の口頭発表として行った。また、BTSJやNCRBを生かした談話の理論研究やポライトネス研究を、第31回国際心理学会(横浜)の口頭発表、2016年日本語教育国際研究大会の口頭発表、第8回中日対照言語学シンポジウムの招待パネルにて発表した。
- ・日本語教育の教室談話(使用・理解)についての発表を、2016年度中国日本語教育研究会年次大会で、大学院生や現地の共同研究員とともに行った。
- ・日本語読解教材の作成に関するパネル発表を、第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムで、ヨーロッパの共同研究員とともに行った。

参加機関名

大阪大学, 金沢大学, 北見工業大学, 九州大学, 京都教育大学, 神戸大学, 埼玉大学, 筑波大学, 東京外国語大学, 東京海洋大学, 東京大学, 東北大学, 名古屋

	大学, 一橋大学, 広島大学, 福井大学, 北陸先端科学技術大学院大学, 北海道大学, 山口大学, 琉球大学, 国際教養大学, 首都大学東京, 大阪観光大学, 大阪産業大学, 大阪女学院大学, 学習院女子大学, 関西看護医療大学, 関西学院大学, 実践女子大学, 聖心女子大学, 清泉女子大学, 東亜大学, 東北学院大学, 名古屋学院大学, 法政大学, 武庫川女子大学, 明海大学, 早稲田大学, 神戸市立工業高等専門学校, 国際交流基金, 麗澤大学, 日本学生支援機構, 岩谷学園, バルセロナ自治大学, カリフォルニア大学ロサンゼルス校, プタペストビジネススクール, チュラーロンコーン大学, コロンビア大学, グリフィス大学, オックスフォード・ブルックス大学, サンフランシスコ州立大学, グルノーブル・スタンダール第三大学, サンフランシスコ市立大学, 香港大学, ミネソタ大学, アルバータ大学, オークランド大学, ハワイ大学, リュブリャーナ大学, ロンドン大学, ミュンヘン大学, パリディドロ第七大学, 広東培正学院, 慶熙大学校, 西安外国語大学, 台湾元智大学, 東海大学, トウラキットバンディット大学, 華中科技大学, 北京外国語大学, 明知大学人文科学研究所, 横浜国立大学
共同研究員数	92名

【領域指定型】 5件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を開始した。領域指定型は、中期計画に定められた基幹研究プロジェクトの範囲内で、各研究領域における共同研究を充実・補完するもの。

領域指定型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得	南山大学教授	村杉 恵子	2016.10-2019.9
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>極小主義アプローチに基づく統語理論は、併合やラベリングといった最低限必要とされるメカニズムによって、言語の諸特性（句構造、名詞句の分布、移動の義務的適用、移動の循環性と局所性、照応形に課せられる束縛条件、削除の諸条件など）を説明する仮説である。したがって、この枠組みに基づいた日本語の分析はそれ自体に意義があるといえるだろう。</p> <p>さらに、このプロジェクトは、統語理論を発展させる直接的な契機となりうる点で重要な意味をもつ。言語の相同と相違は、LGB（Lectures on Government and Binding）理論においては、統語原理群と付随するパラメータを仮説することにより説明されていた。一方、限られた普遍的特性のみを仮設する極小主義には、もはやその余地はない。したがって、日本語文法の類型的特徴と獲得のプロセスを適切に捉えるためには、そして、より一般的に言語間変異を説明するためには、基本的な操作や概念に踏み込んで研究を遂行しなければならない。ラベリング、素性値、フェイズといった基本的な操作や概念を、どのように設定・定義すれば、日本語の類型的特徴を捉えることができるのか。その仮説は、多言語の言語事実を広く正確に説明しうるのか。現時点での日本語文法の理論的研究は、統語理論の根幹に関する研究に礎となりうる。</p> <p>《2016年度の主要な成果》</p> <p>極小主義アプローチに基づく統語理論は、「併合」による構造の生成、そして情報の解釈部門へ</p>			

の「転送」を中心として構成される。この限られた理論的枠組みの中で、類型的な言語間変異、ならぶに幼児による個別言語の統語的特質の獲得がどのように説明されるのだろうか。

この問題について日本語研究から貢献すべく、各研究員は、お互いに情報を交換しながら様々な統語現象の分析を進展させ、研究を進めている。初期の研究成果を共有し、統合するために、2016年12月26日～27日には、国立国語研究所にて公開ワークショップを開催し、12名が研究発表を行った。議論された現象は、言語間変異が興味深い形で観察される照応系の分布、文法格、数表示、引用形式、省略、移動の局所性、主節不定詞などであり、統語と音韻、統語の意味の接点に言及しつつ考察が紹介された。また「併合」と「ラベリング」の獲得についても議論があった。さらに、より広い研究者を対象として The First International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics (2017年3月10日～12日 研究員2名) において、構造、格、削除、移動に関する研究成果が発表された。

参加機関名	南山大学, 北海道大学, 大阪大学, 神戸大学, 三重大学, 東北大学, 金城学院大学, 明海大学, 福岡大学, 横浜国立大学, 九州大学, 獨協大学, 山形大学, 中京大学
共同研究員数	14名

領域指定型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究	福岡女学院 大学教授	二階堂 整	2016.10-2019.9
《研究目的及び特色》 本研究は、これまでの日本語の方言研究や社会言語学的研究において、「フォーマル」または「カジュアル」のようにやや単純に場面への言語的反応としてとらえられてきた「スタイル」という概念を、言語への意識（イデオロギー）や話題等に対する話者の心的態度や社会的立ち位置の表明（スタンス取り）などにより生じる「言語変異の社会的意味」を考慮して、話者が自ら創り上げる言語的構造物であると仮定する。その上で、委員会や本会議のいくつかの状況に生じるスタイル変異を考察することにより、日本語のスタイル研究に新たな発展をもたらす。また最近の海外のスタイル研究では、特に質的側面からの議論が盛んだが、本研究でも量的研究に加えて、待遇表現、ポライトネスなどの質的側面の研究からの知見も取り入れた考察を行い、より総合的・包括的に言語変異とスタイル構築の関連を明らかにする。また、議会会議録資料を言語研究のためのデータベースとして整備することで、言語学のみならず、政治学等の他分野を含め、会議録を利用した国内外の研究での新たな相互作用が期待できる。			
《2016年度の主要な成果》 本年度は活動開始年度であり、まず組織内で、研究の方向・内容について、共通理解を持つよう、努めた。その上で、2017年2月17～18日、国立国語研究所で研究会を開催し、4名（言語系：二階堂・松田、情報系：高丸・乙武）の発表を行うとともに、来年度へ向けての研究打ち合わせを行った。			
参加機関名	福岡女学院大学, 高知大学, 宇都宮共和大学, 福岡大学, 弘前大学, 鹿児島大学, 神戸松蔭女子学院大学, 小樽商科大学, 関西大学, 東北大学		
共同研究員数	14名		

領域指定型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究	群馬大学 准教授	河内 昭浩	2016.10-2019.9
《研究目的及び特色》 本研究の目的は、『日本語歴史コーパス』をはじめとした言語資源を活用し、国語教育の古文教育分野に資する、新たな教材の開発と学習指導法の研究を行うことにある。国語教育学におけるコーパス活用研究は、語彙教育分野でその成果が認知されているものの、古文教育分野における研究、実践はいまだ行われていない。本研究によって開発する学習教材や指導法は、古文教育分野に新たな地平を開くものと期待できる。さらに、次期学習指導要領において高等学校国語の科目編成が大きく改訂され、古文の学習は新たに創設される科目である「言語文化」「古典探究」で行われる見込みである。特に必修科目となる「言語文化」は、「上代から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目」とされており、これはまさに「通時コーパス」と理念を一にするものである。本共同研究は、新科目の内容形成の基盤となり得るものであり、研究の意義は極めて高いと考えられる。			
《2016年度の主要な成果》 国語科古文教育におけるコーパス活用の研究目的を達するために、コーパス活用研究に関する研究発表会を3回開催した。研究成果として、通時コーパスシンポジウム（2017年3月11日、国立国語研究所）において、口頭発表（河内昭浩「新しい古典指導における通時コーパス活用の可能性」）とポスター発表（須永哲矢他「コーパスを利用した学習教材作成と、教材作成を通しての教育実践例」）を行った。			
参加機関名	群馬大学、埼玉大学、東京大学、昭和女子大学、富山大学		
共同研究員数	8名		

領域指定型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
会話における創発的参与構造の解明と類型化	慶應義塾大学 講師	遠藤 智子	2016.10-2019.9
《研究目的及び特色》 本研究の目的は、多様な会話インタラクションのマルチモーダル分析を通じ、参与構造が会話の各局面でどのように創発するのかを明らかにすること、およびその中に見出されるパターンを整理し類型化することで、個々の会話データを理解する際に注意すべきパラメータを明らかにすることである。 従来の会話を利用した言語研究や会話コーパスの構築においては、話し手・聞き手を単純に捉えるモデルが暗黙のうちに採用される傾向がある。他方、参与役割の多様性の問題に取り組んだ Goffman や Clark の研究は、理論的なモデル構築に主眼がおかれたため、現実の場面における参与構造の多様性を捉えきれていない。それに対して本研究では、様々な種類の活動をデータとして分析し、ボトムアップ的なアプローチでモデル構築を行なうことで以下のような研究の進展をもたらす：(1) 多様性を踏まえた参与構造モデルの提示、(2) 参与構造類型化のための枠組みの確立、(3) 参与構造が動的に構築されるプロセスの解明。			

《2016年度の主要な成果》	
<p>2016年10月よりプロジェクトが開始した初年度は、2016年11月に慶應義塾大学にてキックオフミーティングを行い、各メンバーが取り組んでいる相互行為活動について全体で理解を共有した。その後は各自で分析を進め、2017年3月の初旬に日常会話コーパスプロジェクトのシンポジウムにてメンバー4名（安井・杉浦・鈴木・遠藤）がポスター発表を行った。中旬には初の公開研究会を国語研にて開催し、参与構造がなぜ相互行為研究にとって重要であるのかを2件の総括的発表（片岡・高梨）で確認し、3件の事例研究（秦・坂井田・遠藤）にて各場面に個別の問題を検討したほか、全体討論を行った。</p>	
参加機関名	慶應義塾大学、東京外国語大学、愛知大学、千葉大学、大阪大学、京都大学、摂南大学、名古屋大学、九州大学、京都産業大学
共同研究員数	10名

領域指定型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発	早稲田大学 教授	小林 ミナ	2016.10-2019.9
《研究目的及び特色》			
<p>日本語教育におけるこれまでのライティング教材は、初級では「既習の文型や語彙を定着させる」ための作文が主であり、「学習者が実際に書く／打つ状況」を視野に入れたものはほとんど見られない。中級以上では、学術論文やビジネスメールなどが扱われるようになるが、そこでの学習項目は、教材作成者や教師によって経験的に設定されたものであり、「何を書かなければいけないのか」「どのような支援を必要としているのか」といった、学習者のニーズに即したものではない。また、現実のコミュニケーションにおけるライティングは、IT技術の発達やインフラ整備などにより、「手で書く」から「キーボードやタッチパネルで打つ」に移行している。これからのライティング教材は、このような現状も踏まえてデザインされるべきであろう。</p> <p>本研究では、「具体的な状況設定」から出発する日本語学習のためのライティング教材の開発を目的とする。「状況設定」「必要なスキル」「学習者が抱える困難点」に関する3つの実態調査の成果を踏まえて教材を作成することにより、現行教材が抱える問題点を克服する。また、ウェブ教材の特性を最大限に生かすことにより、練習の形態、改訂の可変性、利便性といった面においても、紙媒体の教科書の限界を克服することができる。</p>			
《2016年度の主要な成果》			
<p>「学習者が実際に何かを書く／打つ状況」を明らかにするために（【状況調査】）、調査方法の確立（Webアンケート回答システムの設計、および、システム構築における技術的側面の検討）、調査項目の検討を行い、状況調査の実施案を作成した。</p> <p>「【状況調査】で得られた状況で書く／打つために必要とされる言語、非言語のスキル」を明らかにするために（【スキル調査】）、スキル抽出のためのパイロット調査を行った。パイロット調査では日本語母語話者数名のSNS（LINE、Facebook、Instagram等）のやりとりを収集し、収集したデータに対して産出者や受信者へのインタビュー調査を行い、スキル抽出を行った。</p> <p>「【状況調査】で得られた状況で書く／打つ際に、学習者が抱える困難点」を明らかにするために（【困難点調査】）、スキル調査のパイロット調査の際に収集した実例と、研究会での発表内容をもとに、困難点調査を必要とする状況を抽出し、困難点調査方法の具体案を作成した。</p>			

公開研究発表会を1回、非公開研究発表会を3回開催した。	
参加機関名	早稲田大学, 群馬大学, 金沢大学, マレーシアプトラ大学, ナンヤン工科大学, 藤女子大学, 同志社大学, 帝京大学, 金沢工業大学, 長崎外国語大学, ブラジリア大学, 神戸大学
共同研究員数	15名

【新領域創出型】3件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を開始した。新領域創出型は、研究領域や基幹研究プロジェクトの枠を越えて、新たな研究の展開・創出を探るための萌芽的研究。

新領域創出型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究	早稲田大学 教授	酒井 弘	2016.10-2019.9
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>言語によるコミュニケーションなくしては、現在のような人類の繁栄は考えられなかった。これまでの実験を用いた言語研究は主に狭義の言語能力を対象にしてきたが、「狭義の言語機能は語用論機構に繋がっていなければ役に立たない」という趣旨のChomsky (2014) の言葉をひくまでもなく、人間の言語コミュニケーション能力を解明するためには、狭義の言語能力に加えて語用論能力の研究を推進することが必要不可欠である。そこで、本研究プロジェクトでは、関連性理論(Sperber and Wilson 1986/1995) や理性的言語行為モデル (Frank and Goodman 2012) などを踏まえて、狭義の言語能力のアウトプットである論理形式から表意(明意)や推意(暗意)を導く語用論的推論の認知基盤である語用論モジュールの仕組みを、日本語と系統的・類型的に異なる言語を比較しながら、脳機能計測を含む種々の実験手法を用いて実証的に研究する。</p>			
<p>《2016年度の主要な成果》</p> <p>プロジェクト第1回のミーティング及び公開研究発表会を2017年2月に実施し、最新の語用論研究の動向について情報提供のセミナーを開催するとともに、推論の認知神経メカニズムを実験的に検討する複数のプロジェクトを立ち上げるための意見交換を実施した。また、2017年7月に国立国語研究所で開催される国際学会MAPLL-TCP2017において、プロジェクトのメンバーが企画・実施に関わる形で「実験語用論」をテーマとするシンポジウムを開催することになり、開催に向けて準備を進めた。</p>			
参加機関名	早稲田大学, 東北大学, 目白大学, 津田塾大学, 三重大学, 香港中文大学, ロンドン市立大学		
共同研究員数	9名		

新領域創出型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用	茨城大学 教授	新納 浩之	2016.10-2018.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究の目的は以下の3つを作成し公開することである。(1) 語義を岩波国語辞典の語義にした all-words WSD システム, (2) 語義を分類語彙表のコード番号にした all-words WSD システム, (3) 分類語彙表と岩波国語辞典の対応表。word sense disambiguation (WSD) は、意味解析のプリミティブな処理でありながら、実際のシステムで利用されていない。これは通常の WSD が対象単語を限定しているからである。対象単語を限定しない all-words WSD システムが利用できれば、意味解析システムがより現実的なものとなり、同時に意味解析の研究も進展する。また分類語彙表のコードは概念であり、その説明が不足している。岩波国語辞典の語義と対応させることで、その概念が何を意味しているかが明確になる。更に岩波国語辞典の語義と対応させることで、分類語彙表に不足している部分や岩波国語辞典よりも詳細になっている部分が判明し、この観点から分類語彙表の評価が可能になる。</p>			
<p>《2016 年度の主要な成果》</p> <p>本年度の目標は岩波国語辞典の語義を付与する all-words WSD システムを開発することであった。まず all-words WSD のサーベイと利用するデータを準備し、各自が WSD に関する研究を行うことから開始した。年度末に公開研究発表会を言語処理学会第 23 回年次大会（筑波大学）のテーマセッション「語義タグの付与とその利用」として開催し、82 名の参加者のもと、本プロジェクトの研究成果として 3 件の発表を行った。目標とした all-words WSD システムは、研究代表者が以前開発した KyWSD を改良して流用した。</p>			
参加機関名	茨城大学, 北陸先端科学技術大学院大学, 山梨大学		
共同研究員数	5 名		

新領域創出型	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語の間接発話理解：第一言語，第二言語，人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究	東京学芸大学 教授	松井 智子	2016.10-2019.9
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>近年世界的にも文脈理解を含めた言語コミュニケーション（語用論）の発達研究の必要性が高まり、本研究代表者を含む複数の研究者が国際的な学術誌に特集を組んでいる（Ifantidou & Matsui 2013; Matsui 2014）。また、それぞれの言語文化に特有なコミュニケーションスタイルに関する文化比較的発達研究の重要性も指摘されている（Fitneva & Matsui 2014）。このような国際的な研究動向を背景に、言語学のみでなく、心理学や認知科学を含む学際的な研究領域として方法論も確立しつつある今、間接発話理解の総合的な習得研究の機は熟したと言えるだろう。さらに人工知能の研究が近年勢いを増しているが、文脈理解に関しては未だ研究が進んでいない中、本プロジェクトでアイロニーや間接的表現の計算モデルの構築と検証が成功すれば、世界に先じた研究として注目されることは間違いない。</p>			

《2016年度の主要な成果》	
<p>間接発話理解の発達研究で用いる課題の開発のために、「アイロニー」や「遠回しな言い方」などを含む間接発話の解釈メカニズムについて詳細に検討した。さらに就学児童や日本語学習者にも理解できる間接発話課題の開発を開始した。それらの成果報告とプロジェクトの構想発表を兼ねて、公開研究会を開催した。</p>	
参加機関名	東京学芸大学, 電気通信大学, 愛媛大学, 慶應義塾大学, 琉球大学, 北見工業大学
共同研究員数	7名

【コーパス基礎研究】 1件

基幹型プロジェクト等で構築される予定の日本語史, 日常会話, 方言, 日本語学習者に関するコーパスの効率的な構築を実現するために基礎研究を実施している。

コーパス基礎研究	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究	コーパス開発センター准教授	浅原 正幸	2016.10-2022.3
《研究目的及び特色》			
<p>所内プロジェクトに対する技術支援に必要な種々の基礎技術を開発すること, ならびにコーパスを活用した言語研究における新しい可能性を開拓することを目的として, コーパスアノテーションの拡張, 開発, および自動化に関する基礎研究を実施する。</p> <p>具体的な研究対象としては, 当面, 発声様式等の音声情報アノテーション, 語彙の意味アノテーション, 単語単位の係り受けアノテーションの3種類をとりあげるが, 今後, 研究の推移に応じて対象を拡張する。</p>			
《2016年度の主要な成果》			
<ul style="list-style-type: none"> ・2016年10月よりコーパス開発センターの共同研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」を開始した。浅原をリーダーとし, 所外共同研究者は, 音声アノテーション関係が10名, 意味アノテーション関係が3名, 係り受け構造アノテーション関係が7名である。所内からは, 石本, 岡, 加藤, 西川, 近藤, 山崎, 前川が参加している。2017年3月開催の「言語資源活用ワークショップ」および「語彙資源活用シンポジウム」では, この共同研究関係で15件の発表が行われた。 ・共同研究プロジェクトの係り受け班は Universal Dependencies プロジェクトに参加し, 2016年12月に大阪で開かれた国際会議 COLING-2016 の招待講演者 Joakim Nivre ほか3名と日本語の Universal Dependencies 適応について議論を行った。その成果は言語処理学会第23回年次大会のチュートリアル(聴講者約200名)で紹介したほか, CoNLL-2017のShared Task(評価型ワークショップ)に日本語の係り受けデータを提供した。 ・共同研究プロジェクトの語義班は, 言語処理学会第23回年次大会において「語義タグとその利用」と題したテーマセッション(2部制: 午前82名・午後42名参加)を新領域創出型プロジェクト「all-words WSDシステムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用」とともに企画した。発表は8件であり, そのうち7件が語義班からの発表であった。 			

・共同研究プロジェクトの音声班は、2016年9月にサンフランシスコで開催された国際会議 INTERSPEECH 2016 でフィラーの声質に関する口頭発表を行ったほか、同年12月には中央研究院言語学研究所（台湾）および国語研究所と共催の形で日本音声学会第334回日本音声学会研究例会シンポジウム「フィラーの音声学と言語学：日英中を対象に」（聴講者約40名）を開催した。

参加機関名	明治大学，茨城大学，国立情報学研究所，京都大学，奈良先端科学技術大学院大学，統計数理研究所，甲南大学，和歌山大学，千葉大学，宇都宮大学，日本アイ・ビー・エム株式会社
共同研究員数	24名

2 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。国立国語研究所もそれらのプロジェクト等に参画している。

広領域連携型基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構を構成する6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指す。

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

国語研・歴博が主導機関となって、「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」と題する連携研究を2016年度に開始した。日本列島において地域が直面しているさまざまな課題、特に地域社会の変貌や災害によって多様性が失われつつある状況が惹起する諸問題とその解決のために、人間文化研究機構の各機関が相互に連携し、地域における大学・博物館等とも協働しながら調査研究を推進する。

〈国語研ユニット〉方言の記録と継承による地域文化の再構築

研究代表者：木部暢子（言語変異研究領域教授）

地域社会の変貌により、地域の貴重な文化資源である方言が急速に衰退しつつある。本研究では、自治体や各地の大学・研究者と連携して地域の方言の記録や方言の継承活動を行うことにより、方言を主軸とする地域文化の再構築の可能性と方言の持つ文化的意義について研究を行う。

異分野融合による「総合書物学」の構築

歴史的典籍の「書物」としての面に着目して、従来の書誌学に異分野融合の観点を加え、「総合書物学」という研究分野の構築を目指す。国文研が主導機関となり、歴博、国語研、日文研の3機関の共同研究を基礎に、分野横断的な研究の進展を促し、新たな研究分野である「総合書物学」を構築する。

〈国語研ユニット〉表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化

研究代表者：高田智和（言語変化研究領域准教授）

文献学と言語計量的手法により、言語単位（単語、文節、句、文など）と表記・書記単位（仮名字体、漢字字体、連綿文字列、句読点等表記記号など）と書物や版面の形状（装丁、料紙、版型、頁遷移、行遷移など）との相関関係を明らかにする。また、既存の日本語歴史コーパスに表記情報・書誌形

態情報を加え、言語から見た書物、書物から見た言語を分析するための共同利用基盤を作成・提供することで、異分野融合による新領域「総合書物学」の形成に寄与する。

ネットワーク型基幹研究プロジェクト

日本関連在外資料調査研究・活用事業

欧米にある日本関連資料の中には、現地の日本文化研究者の不足や個人所蔵であることから、所在情報や資料価値の掌握がされていない貴重な資料が多数存在する。本事業はこうした文書、音声、実物資料を含む多様な資料の調査研究を進めると同時に、その成果を国内外で活用し、海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進する。

〈国語研プロジェクト〉北米における日本関連在外資料調査研究・活用 一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築

研究代表者：朝日祥之（言語変異研究領域准教授）

主として北米に移住した日本人に注目し、言語史・社会史・生活史を起点としながら、新たな資料論の創出を含む資料調査、並びに研究を行う。

研究資源高度連携事業

人間文化研究機構を構成する6研究機関や国立国会図書館、京都大学地域研究統合情報センター等が開発・蓄積したデータベースの横断検索が可能な統合検索システム（nihuINT）に次のデータベースを提供している。また、統合検索システムでの検索をより行いやすくするために人名一覧基盤システムの作成に協力している。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
- ・蔵書目録（図書）データベース
- ・蔵書目録（雑誌）データベース
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
- ・『日本言語地図』画像データベース
- ・『方言文法全国地図』画像データベース
- ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文データベース

3 外部資金による研究

○科学研究費補助金

研究種目	研究代表者	研究課題名	交付額 (千円) (直接経費)
基盤研究 (A) 一般	窪菌 晴夫	日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の 類型	6,800
基盤研究 (A) 一般	小木曾 智信	日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とそ の活用	9,200
基盤研究 (A) 一般	野田 尚史	読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程 の実証的研究	9,200
基盤研究 (A) 海外	木部 暢子	日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方 言研究の開拓	6,200
基盤研究 (A) 一般	迫田 久美子	海外連携による日本語学習者コーパスの構築及び言 語習得と教育への応用研究	8,400
基盤研究 (B) 一般	Prashant Pardeshi	統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノ テーション研究・複文を中心に	2,200
基盤研究 (B) 一般	山崎 誠	会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張	3,500
基盤研究 (B) 一般	浅原 正幸	言語コーパスに対する読文時間付与とその利用	2,900
基盤研究 (B) 一般	前川 喜久雄	自発音声コーパスの分析による filled pause の音声 学的特徴の解明	3,500
基盤研究 (B) 一般	高田 智和	字体記述のデジタル化に基づく文字規範史の定位	3,300
基盤研究 (B) 一般	小磯 花絵	コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴 の体系化	1,700
基盤研究 (B) 一般	石黒 圭	文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実 証的研究	6,800
基盤研究 (C) 一般	朝日 祥之	北海道北見市常呂町居住者の方言と郷里方言との相 関に関する社会言語学的研究	900
基盤研究 (C) 一般	柏野 和佳子	「書き言葉的」と「話し言葉的」という文体差のあ る語の分析	1,300
基盤研究 (C) 一般	熊谷 康雄	大規模方言分布データの計量的分析方法の開発	500
基盤研究 (C) 一般	新野 直哉	近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究	700
基盤研究 (C) 一般	石本 祐一	音声アシスタントとの円滑な話者交代を実現する音 声言語特徴の解明	1,100
基盤研究 (C) 一般	福永 由佳	多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関 する研究 —在日パキスタン人を中心に	400
基盤研究 (C) 一般	長崎 郁	19世紀半ば～20世紀半ばロシア北東地域のユカ ギール語資料に関する言語学的研究	900
基盤研究 (C) 一般	宮寄 由美	LINEにおける待遇表現ストラテジーの計量的研究	700

基盤研究 (C) 一般	渡辺 美知子	後続要素の複雑さが言い淀みの発生に及ぼす影響についての日英対照研究	1,100
挑戦的萌芽 研究	大西 拓一郎	方言圏論と方言区画論の統合による新しい言語地理学の創成	1,000
挑戦的萌芽 研究	Prashant Pardeshi	大規模コーパスに基づく日本語機能語の基礎研究と機能語検索ツールの応用	500
挑戦的萌芽 研究	浅原 正幸	近代語コーパスに対する統語情報アノテーションの基準策定	1,100
挑戦的萌芽 研究	野山 広	基礎教育保障学の構築に向けた萌芽研究	1,100
挑戦的萌芽 研究	山口 昌也	即時性と教育効果を考慮した協調学習過程の構造化手法に関する研究	800
若手研究 (B)	藤本 灯	文章と発話の自発性からみた主語標示の助詞「が・の」の計量的研究	1,500
若手研究 (B)	船越 健志	自然言語における省略可能な統語範疇に関する通言語的研究	700
若手研究 (B)	乙武 香里	讃岐方言における発話行為体系と発話未表現の相関の解明のための予備的研究	800
若手研究 (B)	坂井 美日	日本方言の活格性に関する基礎的研究	1,200
若手研究 (B)	加藤 祥	コーパスから取得しやすい情報と取得しにくい情報の研究	800
若手研究 (B)	黄 賢暉	韓国語サイソリにおける意味構造とプロソディの方言・言語対照研究	600
若手研究 (B)	渡辺 由貴	歴史コーパスに基づく中世・近世語の複合辞および連語の研究	1,300
若手研究 (B)	三樹 陽介	消滅の危機に瀕した八丈語の音声資料作成とその分析に関する研究	800
研究成果公開 促進費	今村 泰也	所有表現と文法化	900
研究成果公開 促進費	山崎 誠	テキストにおける語彙的結束性の計量的研究	900
研究成果公開 促進費	藤本 灯	山田孝雄著『日本文体の変遷』本文と解説	1,000
研究成果公開 促進費	井上 文子	日本の危機言語・方言データベース	5,400
特別研究員 奨励費	青井 隼人	関係性に着目した宮古語音韻構造の探求	900
特別研究員 奨励費	三樹 陽介	消滅の危機に瀕する八丈語の調査・記録と談話資料の作成・公開	1,100
特別研究員 奨励費	Clemens Poppe	言語類型論から見た日本語諸方言におけるトーンと母音の相互作用	700
研究活動 スタート支援	松井 真雪	超音波映像資料から見るロシア語の有声阻害音と無声阻害音の口頭特徴	800
研究活動 スタート支援	川端 良子	対話コーパスに基づく指示場面における発話機能の実証的研究	1,200

○寄附金（2016年度受入金額）

- ・「地域言語学習コンテンツ制作・利用プロジェクトを核とした琉球諸語の復興研究」（山田真寛）博報児童教育振興会（第11回児童教育実践についての研究助成）1,831千円
- ・「多文化・多言語社会としての日本の理解 —消滅危機言語の相互理解性と世代間継承度のための客観的尺度の創出—」（山田真寛）トヨタ財団（トヨタ財団研究助成プログラム）2,178千円
- ・「コトバ×デザイン×コミュニティ：消滅危機言語復興研究におけるデザインのちから」（山田真寛）DNP文化振興財団（グラフィック文化に関する学術研究助成）23千円

4 学術刊行物

『国立国語研究所論集』（NINJAL Research Papers）

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表及び所内若手研究者の育成を目的として、各年度に2回（7月と1月）、オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

○第11号（2016年7月）

藤本 灯

「色葉字類抄データベースの構築と展望」 pp.1-10.

日高水穂

「方言接触による授与動詞体系の変容 —FPJD 調査より—」 pp.11-24.

Yuichiro Kobayashi

“Heat map with hierarchical clustering: Multivariate visualization method for corpus-based languages studies” pp.25-36.

小西 光

「近代口語文翻訳小説コーパス構築の概要と計量的分析」 pp.37-62.

松田謙次郎

「大正～昭和戦前期のSP盤演説レコードにおける「場合」の読みについて」 pp.63-82.

Takayo Sugimoto

“Acquisition of rendaku by bilingual children: A case study” pp.83-92.

ポリー・ザトラウスキー

「未知の食べ物への言及の仕方 —試食会における同定と共感—」 pp.93-116.

田中ゆかり，林 直樹，前田忠彦，相澤正夫

「1万人調査からみた最新の方言・共通語意識 —「2015年全国方言意識 Web 調査」の報告—」 pp.117-146.

辻 加代子，井上史雄，柳村 裕

「岡崎における第三者敬語の位置づけ —「第三者尊敬表現」，「第三者謙讓表現」各場面のデータを中心に—」 pp.147-166.

鶴谷千春

「丁寧さを表現するために日本語母語話者が用いる韻律的特徴」 pp.167-180.

上野善道

「喜界島方言のアクセント資料（5）」 pp.181-213.

○第12号(2017年1月)

藤本 灯, 北崎勇帆, 市村太郎, 岡部嘉幸, 小木曾智信, 高田智和

「[人情本] コーパスの設計と構築」 pp.1-12.

船橋瑞貴

「口頭発表にみられる修復の日韓対照分析 —日本語教育での応用を視野に入れて—」 pp.13-28.

市村太郎, 村山実和子

「洒落本コーパス構築の試行」 pp.29-46.

Mayuki Matsui

“Interactions between speaking rate and temporal implementation of voicing contrast: A pilot acoustic study” pp.47-62.

生天目知美, 高原真理, 砂川有里子

「多義動詞としての「知る」と「分かる」の使い分け —コーパスを活用した類義語分析—」 pp.63-80.

野田大志

「現代日本語における動詞「ある」の多義構造」 pp.80-110.

島田泰子, 芝原暁彦

「方言研究における地形情報としてのDEM(数値標高モデル)導入の試み —言語地図分析における〈精密立体投影〉手法の可能性—」 pp.111-124.

田島孝治

「調査中の記録動作をデータ整理に活用する景観文字調査ツールの開発」 pp.125-138.

上野善道

「徳之島浅間方言のアクセント資料(3)」 pp.139-162.

ヴォロビヨワ・ガリーナ, ヴォロビヨフ・ヴィクトル

「非漢字系日本語学習者の漢字学習における阻害要因とその対処法 —体系的な漢字学習の支援を目指して—」 pp.163-180.

渡辺美知子, 外山翔平

「『日本語話し言葉コーパス』と対照可能にデザインされた英語話し言葉コーパスにおけるフィラーの分布の特徴」 pp.181-204.

柳村 裕

「話者の職業による敬語使用の差異と変化 —岡崎敬語調査資料の分析—」 pp.205-226.

銭谷真人

「仮名字体研究における「学術情報交換用変体仮名」の検証と応用」 pp.227-249.

5

2016年度公開中のコーパス・データベース

Webサイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベースを公開しているが、2016年度は下記資料の公開(ないし公開の継続)を行った。

コーパス

国立国語研究所で構築したコーパス(言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの)。

・現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

現代日本語の書き言葉の多様性を把握するために構築したコーパスで、書籍、雑誌、新聞、白書、Web、法律などから無作為に抽出した約1億語のテキストに形態論情報、文書構造タグを付与し、オンラインおよびDVDで公開している。

・BCCWJ 全文検索サイト『少納言』

国立国語研究所で開発された Web アプリケーションで、初心者でも簡単に BCCWJ 内の文字列を検索することができる。

・NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)

BCCWJ を検索するために、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システム。

・日本語話し言葉コーパス (CSJ)

日本語の自発音声を大量にあつめて多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所、情報通信研究機構 (旧通信総合研究所)、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベース。音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されている。

・日本語歴史コーパス (CHJ)

日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスで、将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められており、現在は構築済みの部分を公開中。

・近代語のコーパス

明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスで、『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』を公開している。『日本語歴史コーパス』『明治・大正編 I 雑誌』の一部としても検索可能。

・国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)

3か月間にわたり1億 URL をクロールして構築した258億語規模の Web テキストのコーパス。形態素解析・係り受け解析済みテキストからなる。

・中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス (C-JAS)

日本語学習者6名の3年間の縦断的発話データを公開している。

・多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)

12言語の母語の学習者および日本語母語話者の発話データ (ストーリーテリング、ロールプレイ、対話、絵描写)、作文データ (ストーリーライティング、エッセイとメール文 (任意))、発話の音声データを所収。

・コーパス検索アプリケーション『中納言』

国立国語研究所で開発されたコーパスを検索することができる Web アプリケーションで、短単位・長単位・文字列の3つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。

・アイヌ語口承文芸コーパス 一音声・グロスつき一

木村きみさん (1900-1988, 沙流川上流域のペナコリ出身) がアイヌ語で語った物語10編 (ウエペケレ (散文説話) 8編, カムイユカラ (神話) 2編) 約3時間分の音声に、日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成。

・日本語学習者による、日本語・母語対照データベース

国立国語研究所日本語教育センターが作成した「作文対訳データベース」および「発話対照データベース」を公開している。いずれも日本語学習者が同一の課題に基づき、日本語および自分の母語によって行った言語表現を対照可能な形でデータベース化したもの。

- ・ **統語・意味解析情報付き現代日本語コーパス (NPCMJ)**

現代日本語の書き言葉と話し言葉のテキストに対し文の統語・意味解析情報をタグ付けしたもの。簡単にコーパス内のツリー（統語構造付き文）を検索、閲覧、ダウンロード可能なウェブインターフェースとともに公開している。

- ・ **「日本の消滅危機言語・方言」データベース**

奄美・沖縄のことば、八丈島のことばをはじめとする、日本各地の消滅危機言語・方言の単語の発音や自然談話の発音を収録。文字化テキスト、共通語訳も公開している。

オンライン辞書

オンラインで検索できる辞書・用例集。

- ・ **基本動詞ハンドブック**

日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりや図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツール。例文、コロケーションなどの執筆には、国語研の『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』（約 1 億語）や筑波大学の『筑波ウェブコーパス』（約 11 億語）などの大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他のレファレンスには見られない生きた情報を提供している。

- ・ **複合動詞レキシコン（国際版）**

「押し上げる、晴れ渡る」など、日常よく使われる日本語複合動詞（2,700 語以上）に意味や用法の情報を付与した言語研究及び日本語学習用のオンライン辞書で、英語・中国語・韓国語翻訳付き。研究教育目的での元データのダウンロードも可能。

- ・ **トピック別 アイヌ語会話辞典**

1898 年に刊行された『アイヌ語會話字典』を底本とし、口語訳や音声・ビデオ・写真などのデータを付与したオンライン辞典。

- ・ **寺村誤用例集データベース**

日本語教育研究の礎を築いた故寺村秀夫氏による、諸外国からの留学生が書いた作文に見られる日本語の誤用を収集・分類したデータベース。

- ・ **Web データに基づく用例データベース（複合動詞、サ変動詞、形容詞）**

複合動詞、形容詞、サ変動詞の用例のデータベース。用例は、語ごとに構築した専用の Web コーパスから行っている。構築に際しては、(1) 語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2) 収集用例の偏りの軽減に配慮している。

言語地図

言語の多様性・分布を地図に表現した資料。

- ・ **使役交替言語地図**

世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベース。日本語を含む諸言語の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート（表）上で可視化し、有対自他動詞を類型論的な視点から分析できるウェブアプリケーションとなっている。

- ・ **日本言語地図**

各地の方言で、どのような語形や発音がどこに現れるかを表示した言語地図（方言地図）で、全国の方言の地理的分布を一望できる基礎資料。『日本言語地図』所載の地図の画像（全 300 図）を公開している。

・ 方言文法全国地図

文法事象の全国的な分布を展望できる言語地図（方言地図）で、方言研究における基本的な資料。『方言文法全国地図』所載の地図の画像（全 350 図）を公開している。

画像・PDF

方言地図や貴重書の画像ファイル，論文の PDF ファイルなど。

・ 日本語史研究資料（国立国語研究所蔵）

国立国語研究所研究図書室蔵書のうち，日本語史資料として著名なものや，歴史コーパスの原材料として利用できるものを選定し，デジタル画像や翻字本文を順次公開している。

・ 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』（全 54 冊，LC Control No. : 2008427768）の翻字本文（電子テキスト）を公開。また，全 54 巻を対象とした文字列検索も提供している。

・ 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』（LC Control No. : 2008427768）のうち，桐壺・須磨・柏木の原本画像を閲覧できる。原本画像と翻字本文を対照表示させることも可能。

・ 雑誌『国語学』全文データベース

日本語学会の（旧）機関誌『国語学』全巻の全文テキストデータベース。誌面の PDF ファイルも公開している。

ツール

言語資料を扱うためのプログラムや Web 上で利用するツール。

・ UniDic

形態論情報を付与した語彙資源。形態素解析器 MeCab 用の解析用辞書を公開している。

・ 形態素解析ツール Web 茶まめ

各種の UniDic を使って形態素解析を行うためのツール。形態素解析に必要な一連の作業を Web 上でわかりやすいインターフェースによって行うことができる。

・ (方言研究の部屋) データとプログラム

『方言文法全国地図』全データ（1～6 集），最新版 PDF 『方言文法全国地図』（1～6 集），方言文法全国地図作成の機械化（イラストレータ用プラグイン・白地図・記号），準備調査（調査票と地図・データ），言語地図データベースの公開ページ。

・ 全文検索システム『ひまわり』

『ひまわり』は，コーパス，用例集，辞書といった言語資料を全文検索するために開発されたソフトウェアである。XML で記述された言語資料を全文検索し，検索文字列に対する前後文脈や付与情報（書誌情報など）を表示することができる。

・ 教育活動観察支援システム FishWatchr

リアルタイムに進行する活動や，ビデオ撮影された活動に対する注釈づけを実現するとともに，注釈付け結果を用いて，グループでの振り返りを支援するツール。

カタログ

図書・研究資料などの書誌情報を中心とする資料。

・ 雑誌『国語学』全文データベース

日本語学会の（旧）機関誌『国語学』全巻の全文テキストデータベース。誌面の PDF ファイルも

公開している。

- ・ **日本語研究・日本語教育文献データベース**

学術雑誌、論文集等に掲載された日本語関係の論文等のデータベース。データは定期的に追加され、ウェブ上で21万件以上のデータから文献を検索することが可能。

- ・ **国立国語研究所蔵書目録データベース**

国立国語研究所研究図書室の所蔵する図書約15万冊と雑誌約5,800タイトルの目録・所蔵情報が検索できるデータベース。貴重書や視聴覚資料、特殊文庫の目録・所蔵情報も掲載している。

- ・ **ことばに関する新聞記事見出しデータベース**

国立国語研究所が1949年から2009年9月までのことばに関する新聞記事を集めた「切抜集」に所収されている新聞記事の、発行日・新聞名・見出し等を収録した「見出し（目録）データベース」。

- ・ **国立国語研究所刊行物データベース**

創立（1948年）から現在に至るまでの、国立国語研究所の刊行物を検索可能なデータベース。

- ・ **国立国語研究所学術情報リポジトリ**

国立国語研究所における学術研究・教育活動の成果及び国立国語研究所が所蔵する学術資料を電子的形態で収集・保存し、Web上で公開している。

- ・ **国立国語研究所研究資料室収蔵資料**

国立国語研究所がこれまでに実施した調査研究において収集・作成した研究資料の概要をまとめた目録。

その他データ

各種言語調査等のデータ。

- ・ **『分類語彙表 増補改訂版』研究用データ**

分類語彙表とは、「語を意味によって分類・整理したシソーラス（類義語集）」で、書籍版の『分類語彙表 増補改訂版』の元となったデータを加工したもの。データベースソフトに取り込めるようCSV形式になっており、レコード総数は101,070件。

- ・ **現代雑誌 200万字言語調査語彙表**

2001年から2004年にかけて行われた「現代雑誌の語彙調査 —1994年発行70誌—」の調査結果の語彙表。

- ・ **「学校の中の敬語」アンケート調査データ**

国立国語研究所が1989年から1990年にかけて中学生・高校生を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関するアンケート調査で得られたデータ。中学生は東京2,456名、山形339名、高校生は東京2,222名、大阪1,004名が回答している。

- ・ **岡崎敬語調査データベース**

国立国語研究所が中心となって、愛知県岡崎市で行った敬語調査のデータベース。岡崎敬語調査（OSH）は、1953（昭和28）年、1972（昭和47）年、2008（平成20）年に行われ、戦後の55年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かる。

- ・ **沖縄語辞典データ集**

国立国語研究所資料集5『沖縄語辞典』の本文篇、索引篇、地名一覧表のデータ。

- ・ **『日本語教育のための基本語彙調査』データ**

国立国語研究所報告78『日本語教育のための基本語彙調査』（1984）の「基本語彙 五十音順表」、
「意味分類体語彙表」、
「分類項目一覧表」を電子化したもの

・『幼児・児童の連想語彙表』データ

国立国語研究所報告 69『幼児・児童の連想語彙表』（1981）の「全連想語彙調査表」および「頭音連想語彙調査表」を電子化したものです。

・甌島方言アクセントデータベース

甌島（鹿児島県薩摩川内市）の各集落について2名ずつの話者のアクセントを、各話者の許諾を得て公開している。

6 研究成果の発信と普及

国語研では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは専門家向けのものを挙げる。

A. 国際シンポジウム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をしている。

I. NINJAL 国際シンポジウム

○The 24th Japanese/Korean Linguistic Conference

2016年10月14日～16日（国立国語研究所）

10月13日 Satellite workshop 1: Syllables and Prosody

Jongho Jun (SNU)

“Syllable count effects in Korean n-insertion”

Junko Ito (UC Santa Cruz) and Armin Mester (UC Santa Cruz)

“On superheavy syllables”

Lisa Davidson (NYU)

“Prosodic conditioning of the implementation of phonation in obstruents”

Haruo Kubozono (NINJAL)

“Syllables and moras in Japanese dialects”

Shigeto Kawahara (Keio University) and Jason Shaw (Yale University)

“Interaction of high vowel devoicing and syllabification”

Seunghun Lee (ICU) and Hyun Kyung Hwang (NINJAL)

“The status of syllables within the prosodic hierarchy in Korean”

10月14日

Opening remarks: Taro Kageyama, Director (NINJAL)

Oral Session 1

Kaoru Horie (Nagoya University)

“Differential degrees of retention of lexical meaning in Japanese and Korean functional categories: A typological and constructional approach”

Simon Barnes-Sadler (SOAS, University of London)

“Dialectometric approaches to Korean”

Chikako Takahashi (Stony Brook University)

“Information structure of Japanese ditransitive”

Oral Session 2

Hiroshi Aoyagi (Nanzan University)

“On the productivity of verb-stem expansion in Japanese and Korean”

Takayuki Akimoto (Chuo University)

“An applicative approach to affected subject transitives in Japanese”

Poster Session 1

Masayuki Yasuhara (Teikyo University)

“Marked/ unmarked anti-causative pairs of “verbal noun and suru” expressions”

Takeo Suzuki (Atomi University/Waseda University)

“A further exploration into the source of affectivity of the Ni-passive with an inanimate subject”

Seunghun Lee (International Christian University) and Shigeto Kawahara (Keio University)

“Korean vocative truncation and information theory”

Jinsok Lee

“Discourse effect of personification in variation of Japanese and Korean demonstratives”

Chihkai Lin (Soochow University)

“Gemination in Sino-Japanese revisited”

Céleste Guillemot (International Christian University)

“Coarticulation may not be universal: The production of /u/ by Japanese L1 speakers and French L2 learners”

Yoshihiko Asao (National Institute of Information and Communication Technology)

“Word-internal pronouns in Japanese”

Hyunjun Park (City University of Hong Kong)

“Korean caki as an empathy locus”

Rihito Shirata (JEPS/University of the Ryukyus) and Lukas Rieser (Kyoto University)

“Why, and how, are why-clauses different? The case of Kikaijima Ryukyuan *nuwa* / *nuka*”

Shun Ihara (Osaka University)

“The dynamics of the Japanese sentence-final particle *ne*”

Myeong Hyeon Kim (University of Illinois Urbana-Champaign)

“The processing of scrambling in native Korean speakers”

Gen Fujita (Sophia University)

“Head parameter revisited: Comparative syntax between English and Japanese”

Akari Ohba (Ochanomizu University) and Kyoko Yamakoshi (Ochanomizu University)

“Children’s acquisition of scalar implicatures in Japanese”

Yiting Chen (NINJAL)

“A constructionist approach to double negatives in Japanese”

Shuangshuang Hu (UiL-OTS/Utrecht University) and René Kager (UiL-OTS/Utrecht University)

“Koreans’ cross-dialect phonological perception of Japanese pitch accent”

Yasuyuki Fukutomi (Fukushima University)

“to suru’ constructions-especially ‘need’ -in Japanese”

Takanobu Nakamura (Sophia University)

“Distributivity and event partition: Evidence from Japanese and Korean”

Tomoko Ishizuka (Aoyama Gakuin University) and Hilda Koopman (UCLA)

“Steps towards a minimalist analysis of Japanese *no*”

Miho Onishi (Nagoya College) and Sujin Oh (Hanyang University)

“The use of the noun *ikioi* in Japanese and *kisey* in Korean in sentence-final position”

Yoonjeong Lee (University of Southern California) and Louis Gokdstein (University of Southern California/Haskins Laboratories)

“Global and local interaction of consonant type and tone in the Korean accentual pdrase”

Keunyoung Lee (University of Oregon)

“Non-traditional idenxical functions of Korean honorifics in natural conversations: A corpus-based study of Korean verbal honorific suffix-*si*”

James Whang (New York University) and Frans Adriaans (New York University)

“The role of phonotactics and alternations in the acquisition of Japanese high vowel reduction”

Arum Kang (Korea University) and Suwon Yoon (University of Texas, Arlington)

“‘Disjunction’ as an epistemic modal: Nonveridical equilibrium”

Mira Oh (Chonnam National University)

“A perceptual analysis of consonant cluster simplification in Korean”

Eun Hee Kim (University of Illinois at Urbana-Champaign)

“Korean overt pronouns with local antecedents”

Akihiko Sakamoto (Tokiwa University), Keita Ikarashi (University of Aizu), and Ryohei Naya (University of Tsukuba/JSPS)

“The form-function interface in Japanese compounding formation”

Ji-Yeon Park (Nagoya University)

“Semantic extension and grammar of mimetics in Japanese and Korean”

Yusuke Yoda (Toyo Gakuen University)

“Morphological telescope: The condition of allomorphy and allosemy”

Oral Session 3

Hideharu Tanaka (Mie University)

“Exhaustiveness in Japanese compound verbs: A mereological approach”

Osamu Sawada (Mie University) and Jun Sawada (Aoyama Gakuin University)

“On the property of mirativity in the Japanese model demonstrative *ano*”

Magdalena Kaufmann (University of Connecticut)

“What “may” and “must” may be in Japanese”

10月15日

Oral Session 4

Heejeong Ko (Seoul National University)

“Interarboreal matters in syntax: The case of right-dislocation”

Yoshiki Fujiwara (Meiji Gakuin University/University of Connecticut)

“The acquisition of V-stranding VP-ellipsis in Japanese”

Yutaka Sato (International Christian University)

“The verbal noun *mo* construction in Japanese news headlines”

Oral Session 5

Chung-Hye Han (Simon Fraser University), Kyeong-Min Kim (Simon Fraser University), Keir Moulton (Simon Fraser University), Michael Fetters (University of Maryland), and Jeffrey Lidz (University of Maryland)

“Null objects in Korean: Experimental evidence for the NP ellipsis analysis”

Wataru Sugiura (Meiji Gakuin University) and Hiroyuki Shimada (Meiji Gakuin University)

“A quantified subject and negation in child Japanese conditionals”

Poster Session 2

Makiko Takekuro (Waseda University)

“Discordance in interaction: Rethinking the *gasshuukoku* (‘united states’) metaphor on Ishigaki Island”

Hayeun Jang (University of Southern California)

“/o/- - stems as faster late-starters in decay of Korean vowel harmony”

Woo-Bong Shin (Korea University), Hyang Won Lee (Korea University), Jeffrey J. Holliday (Korea University), and Jiyoung Shin (Korea University)

“The perception of Korean regional dialects is mediated by talker age”

Yukino Kobayashi (Tsukuba University of Technology)

“Non-argument approach to Raising-to-Object”

Asuka Saruwatari (Kindai University)

“Wh-NP (rhetorical) questions in Japanese: In comparison with Korean and Chinese”

Jason Ginsburg (Osaka Kyoiku University) and Naomi Ogasawara (Gunma Prefectural Women’s University)

“Generating Japanese imperatives with a labeling-based machine”

Yu Nakajima (Sophia University)

“Agreeing D and island effects in Japanese”

Yuta Tatsumi (University of Connecticut)

“Reciprocal nouns in Japanese”

Atsushi Fujimori (Shizuoka University), Noriko Yamane (Kobe University), and Noriko Yoshimura (University of Shizuoka)

“Identifying syntax-driven intonation phrases in native and non-native Japanese”

Norihumi Kuroshima (Tokyo University of Foreign Studies/JSPS)

“Converb + topic marker’ conditionals in Korean”

Yuya Noguchi (Osaka University)

“Syntactic analysis of a nominative noun phrase in Japanese imperatives”

Hideaki Yamashita (YCU)

“Asymmetries in clausal complement ellipsis in Japanese”

Hiroaki Saito (University of Connecticut)

“Imperative and tense in Japanese”

Kanako Ikeda (Ochanomizu University) and Kyoko Yamakoshi (Ochanomizu University)

- “Children’s acquisition of the argument / adjunct asymmetry in wh-questions and the Complex NP Constraint in Japanese”
Mieko Takada (Aichi Gakuin University), Eun Jong Kong (Korea Aerospace University), Kiyoko Yoneyama (Daito Bunka University), and Mary Beckman (The Ohio State University)
- “Do pitch and voice quality cue word-initial “voicing” in Tōhoku Japanese?”
Kaori Miura (Kyushu Sangyo University)
- “Voice adjuncts in Japanese”
Natsuko Nakagawa (JSPS/Chiba University)
- “Topic marker in Shiraho dialect, Yaeyama Ryukyuan”
Yugyeong Park (University of Delaware), Semoon Hoe (Seoul National University), and Dongsik Lim (Hongil University)
- “Conditionals with the direct evidential: Their meaning and theoretical implementations”
Goeun Kim (Seoul National University)
- “Tonal changes between generations in Busan dialect”
Brent de Chene (Waseda University)
- “Reanalysis triggers in Japanese morphology”
Clemens Poppe (NINJAL/JSPS)
- “Fixed floating accent and mobile linked accent in Suzu Japanese”
Atsushi Oho (Tohoku University)
- “A very last resort: Scope shifting operations in Japanese”
Lukas Rieser (Kyoto University), Yu Izumi (Kyoto University), Magdalena Kaufmann (University of Connecticut), Stefan Kaufmann (University of Connecticut), and Muyi Yang (Kyoto University)
- “What-*tai* teaches us about wanting”
Takashi Nakajima (Toyama Prefectural University)
- “The mechanism of transitivity alternation”
Shin Fukuda (University of Hawaii at Manoa), Jon Sprouse (University of Connecticut), and Hajime Ono (Tsuda College)
- “Experimental syntax and unaccusativity in Japanese: A first-look at the role of lexical semantics”
Mariko Sugehara (Doshisha University)
- “The influence of L1 lexical prominence systems on the judgement of stress locations in written English words: Comparison between Japanese and Seoul Korean speakers”
Naoto Sato (Seitoku University)
- “Existential reading in *made-ni* / *kkaci* and *aida-ni* / *tongan* clauses”
Dorothy Ahn (Harvard University)
- “Deictic demonstratives and perspective: Evidence from giving verbs”
Toshiko Oda (Tokyo Keizai University)
- “Compositional analysis of Japanese *ayauku* / *ayai* ‘almost’”
Hee-Rahk Chae (Hankuk University of Foreign Studies)
- “The structural ambiguity of the imperfective -ko iss- in Korean”
Kyaee-Sung Park (University of Oregon)
- “A diachronic approach to the comparative construction in Korean”

Taewoo Kim (Seoul National University/UCLA)

“The role of (inter) subjectification in the development of addresses honorific-sup-in Korean”

Oral Session 6

Shin-Ichiro Sano (Keio University)

“A corpus-based study of singletons and geminates in Japanese: Segmental properties and contextual factors”

Kaori Idemaru (University of Oregon), Lucien Brown (University of Oregon), and Bodo Winter (University of Birmingham)

“The polite voice in Japanese: Acoustic correlates of polite and casual speech styles with comparison to Korean”

Seoyoung Kim (Seoul National University)

“Compound tensification in Seoul Korean”

Lisa Davidson (New York University)

“The essential role of phonetic detail in the interpretation of non-native clusters”

10月16日

Oral Session 7

Gijis Van der Lubbe (Urasoe Elementary School)

“Japanese-Northern Ryukyuan language contact and structural convergence: The case of embedded interrogative constructions”

Matthew Zisk (Yamagata University)

“Formation principles and diffusion of Chinese loan translations and loan derivations in Japanese”

Oral Session 8

Arum Kang (Korea University)

“The scalar dimension of Korean *ku*”

Eunhee Lee (University at Buffalo)

“Case alternation and stacking on non-nominative subjects in Korean: A new information structural approach”

Oral Session 9

Teruyuki Mizuno (Kyoto University) and Michael Yoshitaka Erlewine (National University of Singapore)

“Contrast sluicing and complementary questions”

Myungkwan Park (Dongguk University) and Ui-Jong Shin (Dongguk University)

“Extraction out of *kure* or *do so* anaphora: Korean vs. English”

Wonsuk Jung (University of Basque Country)

“Surprising instances of forward gapping in Korea”

Masatoshi Koizumi (Tohoku University)

“Brain activations differentially modulated by case marking, thematic role, and grammatical function during sentence comprehension in Japanese and Korean”

10月17日 Satellite workshop 2: Addressing Classic Issues on Movement and Its Locality in Japanese and Korean under the Current Minimalist Framework

Nobu Goto (Toyo University) and Kensuke Takita (Meikai University)

“Labeling and *Tough*-Movement”

Heejeong Ko (Seoul National University)

“Locality and Anti-Locality in Scrambling: Evidence from Small Clause Domains”

Hideaki Yamashita (Yokohama City University)

“Overt/Covert Distinction in Japanese Syntax”

Jun Abe (Former professor of Tohoku Gakuin University)

“The Nature of Scrambling and Its Interaction with Labeling”

○ Mimetics in Japanese and Other Languages of the World

2016年12月17日～18日（国立国語研究所）

12月17日

Opening remarks: Taro Kageyama, Director (NINJAL)

Session 1

G. Tucker Childs (Portland State University)

“The knowledge of ideophones and multilingualism: A West African pilot study”

Haruo Kubozono (NINJAL)

“The phonological structure of Japanese mimetics and motherese”

Nahyun Kwon (JSPS/Nagoya University)

“Canonical approach to phonaesthemes in Korean ideophones”

Poster Session1

Jeongdo Kim and Anni Jaaskelainen (University of Helsinki)

“Lexicalization of Finnish mimetics”

Duggirala Vasanta (Osmania University)

“On the iconicity of ideophones in Tmlugu”

Yang Wu (Okayama University)

“Lexical and grammatical properties of Japanese mimetic verbs”

Ji-Yeon Park (Nagoya University)

“Semantic specification and verbalization of Japanese and Korean mimetics”

Yee Ping Wong (Sophia University)

“A study on the ABAB and AABB patterns in Hong Kong Cantonese mimetics”

Ayaka Suzuki (University of Tsukuba)

“Contrasting *ru*- and *teiru*-forms of Japanese mimetic verbs, with special focus on semantic domains involving direct perception”

Prashant Pardeshi (NINJAL) and Kimi Akita (Nagoya University)

“Lexical portraits of Japanese mimetics: Browsing through the BCCWJ corpus using NLB”

Session 2

Shoko Hamano (The George Washington University)

“Monosyllabic and disyllabic roots in the diachronic development of mimetic expressions”

Akio Nasu (University of Tsukuba)

“The phonological regularity of Japanese mimetics: Segmental markedness in mimetic neologism”

Session 3

Gérard Diffloth (formerly of École française d'Extrême-Orient)

“Historical morphology in Austroasiatic Expressives”

Kiyoko Toratani (York University)

“Classification of nominal compounds with mimetic components: A Construction Morphology perspective”

Keiko Murasugi (Nanzan University)

“Mimetics as the argument-structure sprouts in child Japanese”

12月18日

Session 4

Iraide Ibarretxe-Antuñano (University of Zaragoza)

“The importance of ideophones in the lexicalization of motion events”

Noriko Iwasaki (SOAS, University of London) and Keiko Yoshida (Leiden University)

“The use of mimetics and gesture among speakers of Japanese as a second language”

Masako Ueda Fidler (Brown University)

“Probing onomatopoeia with corpus data in Czech”

William J. Herlofsky (Nagoya Gakuin University)

“Translation as an investigative tool: Searching for a common ground for examining mimetics in Japanese and JSL”

Poster Session 2

Thomas Van Hoey (National Taiwan University)

“Ideophones in premodern Chinese: Revisiting Dingemanse’s implicational hierarchy”

Tomoaki Takayama (Kanazawa University)

“On the relationship between a sound-symbolic system and sound changes: A case study of the delabialization in Japanese”

Sachiko Hirata-Mogi (Idea Lab, Co.)

“The relationship between the frequency of mimetics and inter-participant familiarity in the Japanese MapTask Dialogue Corpus”

Chiarung Lu (National Taiwan University)

“Ideophones of cognitive state and their implications”

Miyuki Kamiya (University of York)

“Japanese mimetics as prenominal modifiers: The implication of the distributions of stative mimetics”

Jing-Xin Zhang (Kobe University)

“Elucidating the behavior of five mimetics markers in BCCWJ from the perspective of Japanese-language education”

Ian Joo (National Chiao Tung University)

“Thai phonestheme /pl-/”

Session 5

Mark Dingemanse (Max Planck Institute for Psycholinguistics)

“Ideophones and sensory language in social interaction”

Kimi Akita (Nagoya University/NINJAL)

“Ideophones, gaze, and facial expressions: A preliminary report from Japanese”

Mutsumi Imai (Keio University)

“What insights can we draw from universal and language-specific sound symbolism onto the Symbol Grounding Problem?”

Janis B. Nuckolls (Brigham Young University)

“Rethinking mono-sensory, implicational approaches to ideophones in Pastaza Quichua and the Americas”

B. 合同シンポジウム・研究発表会

複数のプロジェクトが共同で行うシンポジウムや研究発表会。

○コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—助詞のすがた—」

2017年3月9日（国立国語研究所）

下地理則

「日琉諸語における格標示と焦点化 一格と取り立ての体系的な研究を目指して」

木部暢子

「諸方言コーパスに見る日本語諸方言の助詞」

小木曾智信

「書き言葉コーパスに見る助詞の時代差・文体差」

浅原正幸, 岡 照晃

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する述語項構造のアノテーションの分析」

小磯花絵

「話しことばコーパスに見る助詞のイントネーション」

迫田久美子

「日本語学習者における助詞の誤用と習得研究」

C. プロジェクトの発表会

プロジェクト等の主催で、公開研究発表会や学術シンポジウム等を、日本各地を会場として開催している。

I. プロジェクト主催のシンポジウム・ワークショップ

○シンポジウム「日常会話コーパス」I

2016年9月1日（国立国語研究所）

第一部

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』の構築」

丸山岳彦

「『昭和話し言葉コーパス』の構築」

第二部

コーパスデモンストレーション

第三部

山崎 誠

「レジスターの違いによる話しことばの変異」

伝 康晴

「Language use in the wild: 日常場面を観察する意義」

○第1回学習者コーパスワークショップ「学習者コーパス (I-JAS) を利用するために」

2016年12月3日 (国立国語研究所)

第一部

石川慎一郎

「世界の英語学習者コーパス研究の潮流：How から Why へ」

小西 円

「I-JAS における語彙の分析から見えること」

奥野由紀子

「『書く』と『話す』に見られるバリエーションには何が起因しているのか？」

第二部

細井陽子

「I-JAS の概要」

佐々木藍子

「量的分析のために」

迫田久美子

「質的分析のために」

○合同研究発表会「日本語学習者のコミュニケーションの解明に向けて」

2017年2月4日 (国立国語研究所)

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語会話コーパスと共同構築型自然会話リソースバンク (NCRB) の活用法」

石黒 圭, 烏 日哲

「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の分析」

中北美千子, 野田尚史

「日本語学習者の聴解過程の解明に向けて」

迫田久美子, 野山 広

「学習者コーパスに見る外国人と日本人のコミュニケーション」

生天目知美

「基本動詞ハンドブックの活用と教育への応用 — 「知る」と「分かる」の類義語分析を例に一」

○Prosody and Grammar Festa「対照言語学」プロジェクト第1回合同研究発表会

2017年2月18～19日 (国立国語研究所)

2月18日

酒井 弘 (早稲田大学), 小泉政利 (東北大学)

「実験語用論研究の展望：言語は文脈といつ・どのように結び付けられるのか」

窪蘭晴夫 (国立国語研究所)

「鹿児島方言の「の」の縮約と音節構造」

五十嵐陽介（一橋大学），田村智揮（一橋大学），中野晃介（一橋大学），高橋佑希（一橋大学）

「鹿児島県種子島中種子方言のアクセント型の実現」

広瀬友紀（東京大学），小林由紀（東京大学），伊藤たかね（東京大学）

「言語理解におけるピッチアクセント情報：事象関連電位測定実験による検討」

馬塚れい子（理化学研究所）

「乳児音声発達における知覚狭窄：アジア言語比較研究からの展望」

2月19日

野田尚史（国立国語研究所）

「とりたて表現の対照研究を行う意義と方法」

大澤 舞（東邦大学）

「just が表す「限定」と「反限定」

中西久実子（京都外国語大学）

「日本語学習者のとりたて表現の使用実態と習得の問題」

井上 優（麗澤大学）

「「とりたて」の日中対照」

村杉恵子（南山大学），高野祐二（金城学院大学）

「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」

米田信子（大阪大学）

「バンドゥ語の名詞修飾構文 一意味関係と形式」

呉人 恵（富山大学）

「コリヤーク語の名詞修飾節 一分詞と定型動詞による相補的形成」

益岡隆志（関西外国語大学）

「日本語の名詞修飾節構文 一機能論的分析を目指して一」

○シンポジウム「日常会話コーパス」Ⅱ

2017年3月1日（国立国語研究所）

口頭発表

前川喜久雄

「自発音声イントネーションの研究：その成果と日常会話に向けた課題」

高崎みどり

「文章・談話資料中の広義“疑似会話文”について」

ポスター発表

伝 康晴

「共同作業場面における指示副詞「こう」の使用：現場指示再考」

鈴木亮子

「会話から見える名詞って？」

遠藤智子

「相互行為フレームと受益構文：子ども養育者相互行為における「てあげる」構文を例に」

杉浦秀行

「探索活動中に参与者に向けられた指差しの非指示的特性」

安井永子

「語りにおけるジェスチャーの繰り返しについての分析」

川端良子

「日本語地図課題対話における指示的発話の形式と機能」

臼田泰如

「態度や関心の共有手段としての演技：会話における演技の連鎖構造の分析」

丸山岳彦

「『昭和話し言葉コーパス』におけるメタデータの設計」

宮崎由美, 山崎 誠, 柏野和佳子

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録の小説を対象とした話者属性情報付与の検討」

居關友里子, 伝 康晴

「発話動詞の依存関係に関するアノテーションの試み —日常会話コーパスのための談話行為タグの設計に向けて—」

口頭発表

森本郁代

「日常場面と制度的場面：裁判員裁判の評議の分析」

服部 匡

「話し言葉のコーパスを用いた変化・変異研究の可能性」

パネルディスカッション

高梨克也, 西野暢助, 小磯花絵

「日常会話データの公開における倫理的・法的な問題について」

○「第1回 BTSJ 日本語会話コーパス活用シンポジウム」

2017年3月4日（国立国語研究所）

宇佐美まゆみ

「語用論のために必要なトランスクリプトとは？ —BTSJ 日本語会話コーパスとその比較文化語用論における意義」

曹 大峰

「これからのコーパスのあり方とそれを使った語用論的研究の意義 —対照研究の視点から」

母 育新

「BTSJ に基づいた日中対照研究 —中国人日本語学習者の依頼行動を例に—」

生天目知美

「友人間の依頼会話におけるポライトネス・ストラテジーの日中韓比較」

李 宇霞

「親疎関係によるポライトネスの日中対照研究 —ディスコースポライトネス理論の観点から—」

野口英美

「自然会話における否定的応答表現 —「いいえ」系応答詞の使用 / 非使用に着目して—」

○第2回学習者コーパスワークショップ「学習者コーパス利用の可能性を考える」

2017年3月10日（国立国語研究所）

第一部

大関浩美

「学習者コーパスと第二言語習得研究 —コーパスを使ってできること、できないこと—」
石川慎一郎, 砂川有里子, 仁科喜久子, 望月圭子 (司会: 迫田久美子)
招待パネル「研究におけるコーパス利用の可能性と課題」

第二部

細井陽子

「I-JAS の概要」

佐々木藍子

「量的分析のために」

迫田久美子

「質的分析のために」

○シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア —形態論・意味論・統語論を中心に—」

2017年3月11日 (キャンパスプラザ京都)

田川拓海

「外来語動名詞の形態統語研究に向けて —範疇, 語種, 形態構造—」

佐々木冠

「現代日本語における未然形」

森 篤嗣

「旧 JLPT 語彙表に基づく形態素解析単位の考察」

森山卓郎

「接続詞と文脈的意味をめぐって」

長谷川信子

「文の機能と文の階層・サイズ —生成文法の視点から—」

中俣尚己

「日本語に潜む程度表現」

天野みどり

「構文の意味派生の推測と抑制 —テモラウ構文とテクレル構文を例に一—」

佐藤琢三

「〈全該当〉を表す語の主観性と集合形成」

○「通時コーパス」シンポジウム 2017

2017年3月11日 (国立国語研究所)

口頭発表

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』 ver.2017.3 —通時コーパス構築進捗報告—」

ホイット・ロング

「日本近代文学と「遠読」の可能性」

浅原正幸

「『日本語歴史コーパス』に対する統語・意味情報アノテーション」

鴻野知暁

「上代・中古における引用句内部の述語活用形をめぐって」

ポスター発表

大川孔明

「平安鎌倉時代の文学作品の文体類型 —計量的手法を用いて—」

鴻野知暁

「短単位 N-gram を利用した万葉集の統計的分析の試み」

後藤 睦

「ガ・ノの上接語の通時的変化」

須永哲矢, 塚田桃加, 山下美咲, 中村那智, 中林みやこ, 澤崎彩音, 竹山怜那, 大和海菜

「コーパスを利用した学習教材作成と, 教材作成を通しての教育実践例」

銭谷真人, 藤本 灯

「人情本コーパスの進捗状況」

田中牧郎

「平安時代の「もろもろ」と「よろづ」—コーパスによる語誌研究—」

服部紀子, 近藤明日子, 小木曾智信, 間淵洋子

「国定国語教科書のコーパス化」

福山雅深, 堤 智昭, 高田智和

「コーパス検索結果からの画像参照方式の改良」

村山実和子

「洒落本コーパスの構築と課題」

山崎 誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本 灯

「語誌データベースの設計とその活用」

渡辺由貴

「『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅱ キリシタン資料』の現状と今後」

口頭発表

橋本行洋

「複合語「よるあるき / よるありき (夜歩き)」の存否」

市村太郎

「江戸・上方洒落本における程度副詞の使用状況」

近藤泰弘

「古典語コーパスからの語彙集作成について」

河内昭浩

「新しい古典指導における通時コーパス活用の可能性」

高田智和

「古辞書類に基づく語彙データベースの検討」

II. 各プロジェクトの研究発表会

○「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾表現」研究発表会

2016年7月9日 (神戸大学)

ブラシャント・パルデン

「プロジェクトの概要」

ブラシャント・パルデン

「マラーティー語の名詞修飾表現は English (European)-type か, Japanese (Asian)-type か?」

岸本秀樹

「マラーティー語と日本語の写真名詞構文について」

堀江 薫

「日本語の名詞修飾節の「ウチ」と「ソト」：主節現象・主節化に関して」

Masayoshi Shibatani

“What can modify nouns?”

○「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」音声研究班「語のプロソディーと文のプロソディー」研究発表会

2016年9月16日（国立国語研究所）

松倉昂平

「福井県三国町安島方言におけるアクセントの中和」

平田 秀

「三重県尾鷲方言の助詞のアクセントについて」

菅原真理子

「大阪方言における語頭子音の声の有無と式音調：語種間での比較」

佐藤久美子

「長崎市方言における複合法則の適用について」

松井真雪, 黄 賢暲

「アクセント対立の中和と句末境界音調の相互作用 —東京方言に関する初期報告—」

○「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会

2016年9月19～20日（国立国語研究所）

9月19日

竹内史郎

「主節の主語標示ガの発達について —中央語の歴史における—」

佐々木冠

「関東地方の方言における格と文法関係」

小西いずみ

「富山市方言における主語・目的語標示と主題標示」

木部暢子

「諸方言コーパスに見る格と取り立て —九州方言を中心に—」

9月20日

風間伸次郎

「[連体形]の定動詞化について」

狩俣繁久

「琉球諸語のとりたて —那覇方言のとりたて助詞 du を中心に—」

下地理則

「格・取り立てと無助詞現象：琉球語と九州方言を例に」

原田走一郎

「談話から見る黒島方言の格標示」

金田章宏

「宮古大神島方言 名詞の格ととりたて」

- 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾表現」研究発表会
2016年11月19日（名古屋大学）

ブラシャント・パルデシ

「言語地図作成用アンケート調査について」

大島資生

「日本語の相対名詞連体修飾の統語的特性について」

加藤重広

「日本語関係節構造の類型性と語用論的制約」

金水 敏

「古典日本語の名詞修飾節再訪 一連帯節・准体節・主名詞内在関係節・形状性名詞句一」

佐々木冠

「日本語方言の名詞修飾構造とその周辺」

堀江 薫, ハイタリー

「『内の関係』と『外の関係』の名詞修飾節の通言語的バリエーション：クメール語・日本語・英語を中心に」

益岡隆志

「日本語から見た名詞修飾構文 一これまでの研究とこれからの課題一」

- 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」音声研究班「語のプロソディーと文のプロソディー」研究発表会

2016年12月4日（福岡大学）

ワークショップ「イントネーション研究の新展開」

松井真雪, 黄 賢暲

「音調研究の方法としての「置換反復発話」—Warner(1997)の追検討—」

佐藤久美子

「長崎市方言における不定語を含む語・文の音調と複合法則」

三村竜之

「岡山方言のイントネーションの記述に向けて 一疑問文イントネーションを中心とした予備的考察一」

- 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾表現」研究発表会
2016年12月9～10日（国立国語研究所）

12月9日

柴谷方良（コメンテーター：堀江 薫, 岸本秀樹）

「Edward Keenan(1976)およびKeenan and Comrie(1977)の批判的レビュー」

12月10日

柴谷方良

「Teramura(1975–1978)の批判的レビュー」

全体討論

○「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」研究発表会

2016年12月26～27日（国立国語研究所）

12月26日

斎藤 衛

「照応形束縛とA移動の局所性について」

越智正男

「ガ/ノ交替とフェイズ理論に関する考察」

藤井友比呂

「日本語における可算・不可算の別と一般数」

宮本陽一

「日本語の引用について」

高橋大厚

「ラベル付けと省略」

村杉恵子

「ミニマリスト理論からみる主節不定詞現象」

12月27日

船越健志

「日本語の動詞移動に関して」

奥 聡

「随意的『顕在』移動と義務的『非顕在』移動」

杉崎鉦司

「幼児日本語における作用域の（抗）再構築」

岸本秀樹

「日本語の述語形成をめぐる諸問題」

瀧田健介

「ラベル付けと書き出し領域の可能性」

多田浩章

「外心的ラベルづけの拡大について」

○「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」研究発表会

2017年2月11日（国立国語研究所）

セッション1

原由理枝

「意味論と語用論のインターフェイス：日本語の証拠性を中心に」

セッション2

須藤靖直

「スカラー含意研究の動向」

全体ディスカッション

○「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発」研究発表会

2017年2月12日（国立国語研究所）

小林ミナ

「なぜ「具体的な状況設定」から出発するのか」

中井好男

「コミュニケーションの文脈依存性と日本語学習教材における問題 —LINE における誘いへの断りに関する学習者の経験から—」

松田真希子

「「具体的な状況設定」に基づく産出スキルとはどのようなものか —SNS に投稿された料理写真のコメント分析を例に—」

船橋瑞貴

「書く / 打つ言語生活の実態調査 —「具体的な状況」を「設定」するための調査デザイナー—」

○「議会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会

2017年2月17日（国立国語研究所）

二階堂整

「議会議録におけるスタイル」

高丸圭一，木村泰知

「地方議会議録コーパスの概要について」

乙武北斗

「地方議会議録検索システムについて」

松田謙次郎

「国会議会議録における旧字体の消滅過程 —「國」の場合」

○「日本語の間接発話理解：第一言語，第二言語，人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」研究発表会

2017年3月3日（国立国語研究所）

宇佐美まゆみ

「本公募研究企画の趣旨に代えて：日本語の間接発話理解とポライトネス —子供，外国人，そして人工知能は，いかにポライトネスを習得するのか」

松井智子

「間接発話解釈における言葉と心の理解の関係について」

内海 彰

「認知修辞学における非字義的表現へのアプローチ」

中村太戯留

「アイロニー理解における音声と文脈の役割」

三浦優生

「児童による間接発話の解釈に及ぼすプロソディの影響」

田中章浩

「表情とプロソディが矛盾する発話表現に対する解釈：日蘭比較研究」

小柳かおる

「第二言語習得に認知的視点から見た言語処理 / 言語学習のプロセス —間接発話理解の心的メカニズム」

指定討論（指定討論者：田中廣明）

ディスカッション

○「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」研究発表会

2017年3月4日（東北大学）

ブラシャント・パルデシ

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」

岸本秀樹

「教材開発と構造体コーパス：現状と課題」

Kei Yoshimoto

“How to annotate what”

Alastair James Butler

“The Keyaki Treebank and the NPCMJ: Bridging a growing divide”

Stephen Wright Horn

“Grammatical principles for annotation and query”

堀田智子

「日本語学習者の話し言葉データに見られる中間言語の諸相」

檜山祥太, 佐藤亮輔, 周 振

「アノテーション研究（東北チーム）」

金城由美子

「言語資料としての国会会議録」

岸山 健, 折笠 誠

「アノテーション研究（NINJAL チーム）」

Alastair James Butler

“Introducing techniques for better Tregex searching”

○「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会「第12回音韻論フェスタ」

2017年3月8～9日（立命館大学）

3月8日

Naoya Watabe

“Formalization of phonological idiosyncrasy: A case study on Slavic languages”

黄 竹佑

「日本語漢語における句アクセント —限定詞分析による—考察」

清水克正

「閉鎖子音のVOTについての考察：言語間比較と普遍性」

Kohei Nichimura

“Loanword voicing optionality in CSJ”

Paul A. Lyddon, Mark Irwin

“The resistance of moraic nasals to rendaku inhibitors”

Clemens Poppe

“The role of syllable structure in tone-segment interaction in Japanese dialects”

Timothy J. Vance

“Onset optimization in Japanese”

Stuart Davis

“The problem of intervocalic syllabification in English”

3月9日

西原哲雄

「隣接性と文法化に基づく形態音韻論的論構造の変化」

平地祐章, 田畑敏幸

「アルファベット頭文字語とそのアクセント型 —理論分析の試み」

脇坂美和子

「滋賀県湖北方言の愛称のアクセントについて」

氏平 明

「念仏の短縮形の形成過程について」

高山知明

「ハ行子音の脱唇音化と中世日本語の擬音語・擬態語」

松森晶子

「九州二型体系の複合語アクセント型はなぜ中和するのか —通時的視点から探る—」

○「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」「日本語基本動詞ハンドブック」班研究発表会

2017年3月13日（岡山国際交流センター）

野田大志

「多義動詞の意味分析におけるメタ言語の選定および語義の区分をめぐって」

有蘭智美

「『基本動詞ハンドブック』における語義の認定に関して」

黒田史彦

「動詞『入れる』にみる主体性について」

今井新悟

「格フレームによる語義分類の試み」

末繁美和

「変わった振る舞いをする語の記述方法について」

中溝朋子

「〈落ちる〉〈落とす〉の作成過程における問題」

今里典子

「『置く』と『Vておく』の語義と関係」

李 相穆

「語彙学習における視覚情報の有効性に関する一考察」

今村泰也, 原美弥子

「ショートアニメの開発について」

ブラシャント・パルデン

「今後の展望」

○「会話における創発的参与構造の解明と類型化」研究発表会

2017年3月16日（国立国語研究所）

遠藤智子

「プロジェクト概要説明」

片岡邦好

「コミュニケーションを枠づける —その要因と多様性を考える—」

秦かおり

「本当は不均衡な私たち：ママ友の語りにみる参与の創発性と多層性」

坂井田瑠衣

「歯科診療における創発的参与：縦と横の重要性」

遠藤智子

「儀礼の終わりはどのように達成されるか：参与の仕方と空間利用」

高梨克也

「参与の次に来る問いとしての成員性と関与」

D. NINJAL コロキウム

日本語・言語学・日本語教育のさまざまな分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会。研究者・大学院生のみならず一般にも公開。原則として月1回、国立国語研究所で開催している。2016年度は下記10件を開催した。

○第69回 2016年5月17日

長谷川葉子（カリフォルニア大学バークレー校教授）

「「が」と「は」再考」

○第70回 2016年6月7日

堀江 薫（名古屋大学教授／国語研客員教授）

「「非従属節」のタイポロジー —言語類型論研究と「言いさし」研究の接点—」

○第71回 2016年7月5日

酒井 弘（早稲田大学教授）

「話者の視線を通して探る思考と言語の相関性 —日本語、スペイン語、カクチケル語における文産出実験を通して—」

○第72回 2016年7月19日

ウェスリー・M・ヤコブセン（ハーバード大学教授）

「プロドロップ言語における項構造のあり方 —日本語の場合を中心に—」

○第73回 2016年9月6日

ジョン・ホイットマン（コーネル大学教授／国語研客員教授）

「「漢文訓読」と Vernacular Reading —アジアとアジア以外—」

○第74回 2016年11月1日

松本 曜（神戸大学教授／国語研客員教授）

「日本語における移動事象の言語化 —通言語的実験研究から見る—」

○第75回 2016年12月20日

浜野祥子（ジョージ・ワシントン大学教授）

「日本語文法サイトへの果てしない道のり」

○第76回 2017年1月24日

菊池英明（早稲田大学教授／国語研客員教授）

「表現豊かな音声の研究のための演技音声収集とその利用」

- 第 77 回 2017 年 2 月 28 日
 榎山洋介（名古屋大学教授 / 国語研客員教授）
 「百科事典的意味の諸相」
- 第 78 回 2017 年 3 月 14 日
 Stuart Davis（インディアナ大学教授）
 “Foot structure and English schwa syncope”

E. NINJAL サロン

国語研の研究者（共同研究員を含む）を中心として、各々の研究内容を紹介することによって情報交換を行う場である。外部からの聴講も歓迎している。2016 年度は第 141 回から第 157 回までを開催した。

- 第 141 回 2016 年 4 月 12 日
 島田泰子（二松學舎大學教授）
 「方言研究における地形情報としての DEM（数値標高モデル）導入の試み：言語地図分析における〈精密立体投影〉手法の可能性」
- 第 142 回 2016 年 5 月 31 日
 陳奕廷（理論・対照研究領域プロジェクト PD フェロー）
 「複合語の対照性と非対称性について—基底と精緻化の観点から—」
- 第 143 回 2016 年 6 月 21 日
 宇佐美まゆみ（日本語教育研究領域教授）
 「言語研究への言語社会心理学的アプローチ」
- 第 144 回 2016 年 6 月 28 日
 松井真雪（理論・対照研究領域プロジェクト PD フェロー）
 「発話速度に応じた、閉鎖音の時間特徴の可変性：通言語的観点から」
- 第 145 回 2016 年 7 月 12 日
 居關友里子（音声言語研究領域プロジェクト PD フェロー）
 「制度的場面の終結に関する一考察」
- 第 146 回 2016 年 7 月 26 日
 坂井美日（言語変異研究領域プロジェクト PD フェロー）
 「熊本方言における格標示と焦点化について」
- 第 147 回 2016 年 9 月 13 日
 大内康裕（言語変異研究領域プロジェクト非常勤研究員）
 「磁気テープの多チャンネル読み取りによる高速デジタルアーカイビング」
- 第 148 回 2016 年 9 月 27 日
 乙武香里（言語変異研究領域プロジェクト PD フェロー）
 「讃岐方言の発話未表現と発話行為の相関—質問とその周辺の連続性—」
- 第 149 回 2016 年 10 月 4 日
 浅原正幸（コーパス開発センター准教授）
 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する読み時間付与」
- 第 150 回 2016 年 10 月 11 日

鴻野知暁（言語変化研究領域プロジェクトPDフェロー）

「上代日本語の複合動詞の項構造 —異なる項構造の一体化を中心に—」

○第151回 2016年10月18日

岡 照晃（コーパス開発センター特任助教）

「万葉集の原文-訓読文の自動アライメント —コーパスアノテーションの効率化に向けて—」

○第152回 2016年10月25日

蒙 韞（日本語教育研究領域プロジェクトPDフェロー）

「読解過程における日本語学習者の語の意味理解 —文脈情報を手がかりとして—」

○第153回 2016年11月8日

青井隼人（外来研究員 / 日本学術振興会特別研究員（PD））

「南琉球宮古多良間方言におけるNP1 = nu NP2のピッチパターン」

○第154回 2016年11月22日

小西 円（日本語教育研究領域プロジェクトPDフェロー）

「I-JASのタスクと産出語彙の関連について —日本語母語話者データのコレスポンデンス分析に基づいて—」

○第155回 2016年11月29日

窪田 愛（理論・対照研究領域プロジェクトPDフェロー）、プラシャント・パルデシ、アラスデア・ジェームズ・バトラー

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究 —アノテーション方式、検索・抽出方法を中心に—」

○第156回 2016年12月3日

宇佐美まゆみ（日本語教育研究領域教授）

「語用論的分析のための「BTSJ日本語会話コーパス」の特徴と自然会話リソースバンク（NCRB）について」

○第157回 2017年3月21日

田中弥生（音声言語研究領域プロジェクト非常勤研究員）、柏野和佳子、角田ゆかり、伝 康晴、小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』構築と収録状況」

F. 講習会・セミナー

○第1回 BTSJ 活用方法講習会

2016年5月28日（国立国語研究所）

宇佐美まゆみ（国立国語研究所）、木林理恵（日本学生支援機構）

「『BTSJ文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』の操作方法～「自然会話分析のための文字化入力支援と基本的な分析項目の自動集計システム」を使った研究の方法～」

○第1回 コーパス利用講習会

2016年9月1日（国立国語研究所）

コース1：全文検索システム「ひまわり」講習会

コース2：オンライン検索システム「中納言」講習会

○平成 28 年度国立国語研究所日本語教師セミナー（海外）「日本語学習者コーパス（I-JAS）の概要と活用方法」

2016 年 10 月 21 日（北京師範大学）

迫田久美子

「学習者コーパスを用いた日本語教育研究の可能性と広がり」

野山 広

「日本語学習者コーパス研究の展望」

○第 2 回 BTSJ 活用方法講習会

2016 年 11 月 19 日（国立国語研究所）

宇佐美まゆみ（国立国語研究所）

「『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』の操作方法～「自然会話分析のための文字化入力支援と基本的な分析項目の自動集計システム」を使った研究の方法～」

○第 3 回 BTSJ 活用方法講習会

2016 年 12 月 12 日（九州大学）

宇佐美まゆみ（国立国語研究所）

「『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』の操作方法～「自然会話分析のための文字化入力支援と基本的な分析項目の自動集計システム」を使った研究の方法～」

○平成 28 年度国立国語研究所日本語教師セミナー（国内）「自然会話コーパスの分析を日本語教育に生かす！—明日の授業へのヒント—」

2017 年 1 月 28 日（国立国語研究所）

宇佐美まゆみ

「『BTSJ 自然会話コーパス』とはどのようなもので、それを使って何ができるのか」

川口義一

「自然なコミュニケーションの特徴は、会話教育にいかにかけるか」

石黒 圭, 胡 方方

「教室談話の分析は、いかに日本語教育にかけるか」

萩原孝恵

「『だから』の語用論的分析は、いかに日本語教育にかけるか」

○第 2 回コーパス利用講習会

2017 年 3 月 1 日（国立国語研究所）

コース 1：全文検索システム「ひまわり」講習会

コース 2：オンライン検索システム「中納言」講習会

研究情報発信センター

日本語研究の国際拠点である国立国語研究所の一部として、情報発信に関わる研究開発や、研究資料の収集・管理を行っている。

- 英文 Web サイトの改修を行った。
- 『日本語研究・日本語教育研究文献データベース』に文献情報を定期的に追加（5月・7月・10月・1月・3月の年度内5回合計5,379件）および国立大学の学術リポジトリとのリンクを進めた。
- 『国立国語研究所学術情報リポジトリ』で『国立国語研究所論集』第11～12号、『NINJAL フォーラムシリーズ』1～7、『国立国語研究所報告』（一部：主に論文集）を公開した。
- 『国立国語研究所論集』第11号（2016年7月）・第12号（2017年1月）を刊行した。
- 研究資料室収蔵資料の概要の一般公開を開始した。
- デジタル化収蔵音源の視聴サービス（貯蔵音源データベース）の所内配信を開始した。

コーパス開発センター

研究系と連携して言語資源の開発整備及び基礎研究を進め、言語資源に関する共同利用の利便性を高めることを目的としている。具体的には、言語コーパスにくわえ、形態素解析用電子化辞書、コーパス検索ツールなどの研究開発を進めている。

- 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS）を公開した（2016年5月）。
- 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』（短単位データ）および『女性雑誌コーパス』に短単位情報を付与したバージョンを公開した（2016年10月）。
- 『名大会話コーパス』に形態論情報を付与したバージョンを公開した（2016年12月）。
- 『日本語話し言葉コーパス』（中納言版）を公開した（2017年2月）。
- 『国語研日本語ウェブコーパス』を公開した（2017年3月）。

研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

カードキーによる入退室の管理及び照明の人感センサーを整備し、所内教職員に対して夜間・休日開館も開館している。また、閲覧室に新着コーナーを設け、新着雑誌・図書を利用しやすい環境に整えている。

- ・開室日時：月曜日～金曜日 9時30分～17時
（土曜日・日曜日・祝休日・年末年始・毎月最終金曜日は休室）
- ・主なコレクションには、東条操文庫（方言）、大田栄太郎文庫（方言）、保科孝一文庫（言語問題）、見坊豪紀文庫（辞書）、カナモジカイ文庫（文字・表記）、藤村靖文庫（音声科学）、林大文庫（国語学）、輿水実文庫（国語教育）、中村通夫文庫（国語学）などがある。
- ・『国立国語研究所蔵書目録データベース』を Web 検索できる。
- ・図書館間文献複写サービス（NACSIS-ILL）により、所属機関の図書館を通して複写を申し込み、郵送で受け取ることができる。

所蔵資料数（2017年4月1日現在）

	図書	雑誌
日本語	121,520 冊	5,340 種
外国語	31,418 冊	528 種
計	152,938 冊	5,868 種

※視聴覚資料など7,819点を含む



国際的研究協力と社会連携

1 国際的研究協力

国語研全体の研究テーマである「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

世界の大学・研究機関との提携

世界各地の大学や研究機関等と、共同研究の促進や研究者の交流等を目的とした学術交流協定を締結している。協定先は、海外で日本語や日本語教育を研究している機関に加え、言語学や情報科学の研究機関にも及び、これらの協定により、日本語研究から世界の言語研究へ、世界の言語研究から日本語研究へ、という両方向の交流を強化し、世界規模で研究を促進することをめざしている。

協定締結先（2017年3月31日時点）

相手先機関名	概要・目的
中央研究院（台湾）	東アジア地域における言語学研究の更なる発展を目的とした連携・協力
北京外国語大学北京日本学研究中心（中国）	中国語母語話者の日本語学習者縦断コーパスの構築及び実証的な共同研究の遂行を目的とした連携・協力
オックスフォード大学人文科学部（イギリス）	歴史コーパス構築及び日本語史研究を始めとする日本語研究の国際化の進展を目的とした連携・協力
ペンシルベニア大学言語学科（アメリカ）	統語・意味解析コーパスの構築及び文法の言語対照的側面における共同研究の遂行を目的とした連携・協力
ヨーク大学言語学科（イギリス）	
ブランダイス大学情報科学科（アメリカ）	
コロラド大学ボルダー校言語学科（アメリカ）	

国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、NINJAL 国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している。

日本語研究英文ハンドブック刊行計画

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton（ドゥ・グロイター・ムートン社 ベルリン／ポストン）からの申し出により、国語研の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定に基づき、2014年から、日本語および日本語言語学に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ（全12巻予定）を順次刊行している。このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者（専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員）だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集を行う大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語

研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良（ライス大学 教授） Masayoshi Shibatani (Rice University)

影山太郎（国立国語研究所 所長） Taro Kageyama (Director-General, NINJAL)

シリーズの構成

全巻英文，各巻 600 ～ 700 ページ

1. *Handbook of Japanese Historical Linguistics*
Edited by Bjarke Frellesvig (University of Oxford/NINJAL), Satoshi Kinsui (Osaka University/NINJAL) and John Whitman (Cornell University/NINJAL)
2. *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*
Edited by Haruo Kubozono (NINJAL)
3. *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*
Edited by Taro Kageyama (NINJAL) and Hideki Kishimoto (Kobe University/NINJAL)
4. *Handbook of Japanese Syntax*
Edited by Masayoshi Shibatani (Rice University/NINJAL), Shigeru Miyagawa (MIT/NINJAL) and Hisashi Noda (NINJAL)
5. *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*
Edited by Wesley Jacobsen (Harvard University) and Yukinori Takubo (Kyoto University/NINJAL)
6. *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*
Edited by Prashant Pardeshi (NINJAL) and Taro Kageyama (NINJAL)
7. *Handbook of Japanese Dialects*
Edited by Nobuko Kibe (NINJAL) and Tetsuo Nitta (Kanazawa University)
8. *Handbook of the Ryukyuan Languages*
Edited by Patrick Heinrich (Dokkyo University), Shinsho Miyara (formerly, University of the Ryukyus) and Michinori Shimoji (Kyushu University/NINJAL)
9. *Handbook of Japanese Sociolinguistics*
Edited by Fumio Inoue (Meikai University/NINJAL), Mayumi Usami (NINJAL), and Yoshiyuki Asahi (NINJAL)
10. *Handbook of Japanese Psycholinguistics*
Edited by Mineharu Nakayama (Ohio State University/NINJAL)
11. *Handbook of Japanese Applied Linguistics*
Edited by Masahiko Minami (San Francisco State University/NINJAL)
12. *Handbook of the Ainu Language*
Edited by Anna Bugaeva (Tokyo University of Science/NINJAL)

海外の研究者の招聘

海外の研究者を専任や客員教員として招へいすると同時に、研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また、海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究を行う、外来研究員（2016年度新規5名）や特別共同利用研究員（2016年度新規1名）として受け入れている。

2 社会連携

消滅危機言語・方言の調査・保存・分析

2009年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語（話者が非常に少なくなってきた言語）には、日本国内の8つの言語（方言）が含まれている。国語研ではこれらの諸方言を集中的に記録し、言語学的に分析するプロジェクトを進めている。これによって、世界の危機言語研究に貢献すると同時に、方言を使用している地域社会とその文化の活性化に寄与することを目的としている。

日本語コーパスの拡充

ある言語の全貌を正確に把握するためには、その言語を大量に収集し、分析する必要がある。書き言葉や話し言葉の資料を、大量かつ体系的に収集し、それを詳細に検索できるようにしたものを、「コーパス」という。国語研では日本語コーパスの整備を推進し、話し言葉、書き言葉、上代から近代までの日本語、方言、日常会話、学習者などの多様なコーパスの構築・公開を進めている。2016年度には258億語規模の『国語研日本語ウェブコーパス（NWJC）』を新たに公開した。これらにより、様々な種類の日本語の実態が端的に把握できる等の利便性を、研究者のみならず、日本語（国語）教師、日本語学習者、マスコミなど多方面に提供している。

第二言語（外国語）としての日本語教育研究

近年、日本で生活している外国人や留学生の増加にともなって日本語学習に対するニーズが拡大・多様化している中で、国語研では、日本語を母語としない人の学習・習得について基礎的な研究を行い、国内外の日本語教育を学術的に支援している。

地方自治体との連携

- 地方自治体の協力を得て、研究成果を分かり易く説明するNINJALセミナーを各地で開催した。（内容はp.80に掲載）
- 立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書による活動
 - ・2016.7.16 一般公開イベント「ニホンゴ探検」において、「れきみんワークショップ」と銘打ち、歴史民俗資料館職員による所蔵品の展示及び説明を行った。
 - ・2016.12.11 立川市女性総合センター・AIMにおいて、理論・対照研究領域教授 窪蘭晴夫による共同企画講演会「立川は「たちかわ」か「たてかわ」か 一日本語の発音とアクセント」を開催した。

訪問者の受入等

NINJAL 職業発見プログラム

- 2016. 4.13 愛知教育大学附属岡崎中学校
- 2016. 7. 7 仙台第一高等学校
- 2016. 8. 3 兵庫高校

- 2016. 8. 5 早稲田実業学校中等部
- 2016. 8.10 富山高校
- 2016. 8.19 明星学園中学校
- 2016.10.21 横浜翠嵐高校
- 2016.11.16 開智高校
- 2017. 2. 2 海城中学校

見学・研修・視察等

- 団体見学 6件（専修大学，東京学芸大学，十文字学園女子大学の日本語学関係ゼミなど）
- 研修対応 2件（府中市立小中学校教育研究会など）
- 視察対応 4件（文部科学省研究振興局学術機関課長など）

学会等の後援・共催

- ・ Tutorial workshop of OJAD 2016.5.28, 2016.6.4
主催者：Project OJAD
開催地：国際交流基金ロサンゼルス日本文化センター，ボストン大学
- ・ 第7回立川文学賞 2016.7-2017.9
主催者：立川文学賞実行委員会
- ・ 基礎教育保障学会設立大会 2016.8.21（共催）
主催者：基礎教育保障学会
開催地：国立国語研究所
- ・ 平成28年度日本語教育能力検定試験 2016.10.23
主催者：公益財団法人日本語教育支援協会
- ・ 日本語ボランティアシンポジウム2016「つながろう！日本語教室を越えて」 2016.12.3
主催者：公益財団法人名古屋国際センター，東海日本語ネットワーク
開催地：名古屋国際センター
- ・ 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2016」 2016.12.9-11（共催）
主催者：情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会
開催地：国文学研究資料館，国立国語研究所
- ・ 第15回全養協公開講座 2017.1.14
主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会
開催地：SYDホール
- ・ 第8回産業日本語研究会・シンポジウム 2017.3.8
主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），一般財団法人日本特許情報機構
開催地：丸ビルホール

※共同で主催したものは除く

刊行物

NINJAL フォーラムシリーズ

一般向け講演会「NINJAL フォーラム」の内容を「NINJAL フォーラムシリーズ」として冊子とWeb上で公開している。

○ NINJAL フォーラムシリーズ6『世界の漢字教育 日本語漢字をまなぶ』

2014年9月21日に開催された第8回NINJAL フォーラムでの講演を文字化。2017年1月20日発行，

全 82 ページ。

- NINJAL フォーラムシリーズ 7 『ここまで進んだ！ここまで分かった！国立国語研究所の日本語研究』

2016 年 3 月 5 日に開催された第 9 回 NINJAL フォーラムでの講演を文字化。2016 年 8 月 10 日発行、全 60 ページ。

『国語研 ことばの波止場』(NINJAL Research Digest)

国語研の研究活動及び研究成果に関する情報を研究者コミュニティだけでなく、大学生から一般市民の方までが読んで楽しめる研究情報誌。2016 年度に創刊し、第 1 号を発行した(年 2 回刊行予定)。

- Vol. 1 (2017 年 3 月)

特集：国語研では、いま、何を研究しているのか？—始動する「最先端基幹プロジェクト」—
コラム、研究者紹介、著書紹介

一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学术界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点からフォーラムを開催している。

- 第 10 回「オノマトペの魅力と不思議」

2017 年 1 月 21 日 (一橋大学一橋講堂 学術総合センター)

講演

今井むつみ (慶應義塾大学)

「オノマトペはことばの発達に役立つか？」

秋田喜美 (名古屋大学)

「外国語にもオノマトペはあるか？」

岩崎典子 (ロンドン大学 SOAS)

「外国人は日本語のオノマトペを使えるか？」

小野正弘 (明治大学)

「オノマトペの意味は変化するか？」

坂本真樹 (電気通信大学)

「「もふもふ」はどうやって生まれたか？」

パネルディスカッション

コーディネーター：窪蘭晴夫 (国立国語研究所)

パネリスト：今井むつみ、秋田喜美、岩崎典子、小野正弘、坂本真樹

NINJAL セミナー

各共同研究プロジェクトにおいて、その研究内容を様々な形で一般の方々に発表し、地域社会等と触れ合う場として NINJAL セミナーを次のように実施した。

- 「言語データと日本語研究」

2016 年 9 月 20 日 (国立台湾大学)

- 「隠岐の島方言のつどい」

2016 年 12 月 10 日 (隠岐島文化会館)

その他

- 「ことば」展示（「立川体験スタンプラリー」対象イベント）
2016年10月15日（国立国語研究所）
- 大学共同利用機関シンポジウム2016（出展）
2016年11月27日（アキバ・スクエア）

児童・生徒向けイベント

NINJAL 職業発見プログラム（中学・高校生向け）

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問の楽しさやすばらしさを知ってもらうためのプログラム。（受入校は、p.78に掲載）

NINJAL ジュニアプログラム（小学生向け）

小学生を対象に、子どもたちの身近にある題材を取り上げ、楽しみながら普段使っている日本語について考えられるような、ワークショップや出前授業などを実施した。

- 「めざせ！辞書引きの達人」
2016年6月21日（立川市立第六小学校）
対象：小学3年生
講師：柏野和佳子（音声言語研究領域准教授）
- 「めざせ！辞書引きの達人」
2016年10月22日（立川市立西砂小学校）
対象：小学4年生
講師：柏野和佳子（音声言語研究領域准教授）
- 「学んでみよう！多摩のことば，青梅のことば」
2016年12月1日（青梅市立若草小学校）
対象：小学5,6年生
講師：三井はるみ（言語変異研究領域助教）

ニホンゴ探検 2016 — 1日研究員になろう —

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるプログラムが人気のイベント。

- 2016年7月16日（国立国語研究所）
 - ・ことばのミニ講義
「知らなかった！気づかない方言」朝日祥之（言語変異研究領域准教授）
「ようこそ，ドキドキ・ワクワクの世界へ —オノマトペの不思議」石黒 圭（日本語教育研究領域教授）
 - ・全国方言の旅
 - ・辞書引きコーナー
 - ・にほんごスタンプラリークイズ
 - ・れきみんワークショップ

その他

- 平成28年度子ども霞が関見学デー（出展）

3 大学院教育と若手研究者育成

(1) 連携大学院：一橋大学大学院言語社会研究科，東京外国語大学大学院総合国際学研究科

2005年度から，一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は，日本語教育学，日本語学，日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。その中で，国立国語研究所は日本語学の分野を担当している。また，2016年度から東京外国語大学大学院総合国際学研究科との新たな連携大学院を開始した。

(2) 特別共同利用研究員制度

国語研では，国内外の大学の要請に応じて，日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国語研の設備，文献等の利用や，国語研の研究者から研究指導を受けることができる制度である。（2016年度新規2名受入）

(3) NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を，第一線の教授陣によって，大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で，若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国語研の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ，年数回，全国各地で実施している。2016年度は第20回～第23回を実施した。

受講対象：原則として，大学院生レベル

- ・大学院生（修士課程または博士課程に在籍する者）
- ・修士課程または博士課程を修了後，原則として6年未満の者
- ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
- ・大学院進学を目指す学部学生等

○第20回 2016年9月10日（イオンコンパス大阪駅前会議室）

『『日本語歴史コーパス』活用入門―「中納言」による検索と集計―』

講師：小木曾智信（言語変化研究領域准教授）

○第21回 2017年2月10日（国立国語研究所）

『『日本語歴史コーパス』活用入門―「中納言」による検索と集計―』

講師：小木曾智信（言語変化研究領域准教授）

○第22回 2017年2月17日（大阪大学豊中キャンパス）

「学習者コーパスを使って研究しよう！」

講師：石黒圭（日本語教育研究領域教授）

○第23回 2017年2月24日（国立国語研究所）

「学習者コーパスを使って研究しよう！」

講師：石黒圭（日本語教育研究領域教授）

(4) 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自ら行うことで研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクト PD フェロー）を設け、公募により積極的に採用している。（2016 年度在籍者 10 名，内新規採用 5 名）



教員の研究活動と成果

影山 太郎 (かげやま たろう) 国立国語研究所 所長

1949 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (南カリフォルニア大学, 1977)

【学歴】 大阪外国語大学英語学科卒業 (1971), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了 (1973), 南カリフォルニア大学大学院言語学科博士課程修了 (1977)

【職歴】 神戸学院大学教養部助手 (1973-1974), 大阪大学言語文化部講師 (1978-1980), 同助教授 (1980-1987), 関西学院大学文学部教授 (1987-2009), パリ第7大学 (招聘教授, 2008), 関西学院大学名誉教授 (2009), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構教授・日本語研究機関設置準備室長 (2009), 国立国語研究所 所長 (2009.10)

【専門領域】 言語学, 形態論, 語彙意味論, 統語論, 言語類型論

【所属学会】 日本言語学会, 日本語学会, 日本語文法学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 顧問 (元会長)・評議員; 日本語学会 評議員; 関西言語学会 運営委員; 特定非営利活動法人言語資源協会 (GSK) 理事; 日本国際教育支援協会 理事; 文化庁文化審議会国語分科会臨時委員; 財団法人新村出博士記念財団 委員; *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (Oxford University Press) 顧問・代表編集委員

【受賞歴】

1994 第22回金田一京助博士記念賞 (金田一京助博士記念会, 著書『文法と語形成』)

1980 市河賞 (財団法人語学教育研究所, 著書『日英比較 語彙の構造』)

1973 東京言語研究所言語学懸賞論文賞 (東京言語研究所, 論文「場所理論的見地から」『言語の科学5』)

【研究業績】

《著書・編書》

Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen (eds.)

Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.7.

《論文・ブックチャプター》

Taro Kageyama

“Agents in anticausative and decausative compound verbs”, Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen (eds.) *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond*, pp.89-124, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.7.

影山太郎

「対照言語学から照射した現代日本語文法 一名詞抱合と言語類型一」, 『日本語文法』16 (2), pp.32-47, 2016.9.

《その他の出版物・記事》

影山太郎

「国立国語研究所 ―グローバル化と日本語研究―」, 『東京外国語大学 国際日本研究 報告 (I) : 2015 年度国際シンポジウム「国際日本研究 ―対話, 交流, ダイナミクス」』 pp.71-76, 東京外国語大学大学院国際日本学研究院, 2017.3.

【講演・口頭発表】

影山太郎

「複合語の小宇宙から日本語文法の宇宙を探る」(招待講演), 東京言語研究所開設 50 周年セミナー, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2016.9.3.

【その他の学術的・社会的活動】

・日本語言語学 (Japanese linguistics) の国際的普及のために次の活動を行った。

- (1) Oxford University Press との出版契約により, 2013 年 12 月開催の NINJAL 国際シンポジウム「日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎」をまとめた英文論文集 (Taro Kageyama, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*) の編集・査読を進めた。
- (2) Oxford University Press との契約により, オンライン刊行物 *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (<http://linguistics.oxfordre.com>) の Advisory Board 及び Senior Editor として, Taro Kageyama “Compound and complex predicates in Japanese” の論文を執筆するとともに, 次の論文の編集・取りまとめを行った (Malka Rappaport Hovav “Argument realization in syntax”, Hideki Kishimoto “Argument realization and case in Japanese”, Masahiko Minami “Second language acquisition of Japanese”, Timothy Vance “*Rendaku* or sequential voicing in Japanese phonology”, Mineharu Nakayama “Japanese psycholinguistics”, Bjarke Frellesvig “Old and Middle Japanese”, James Yoon “Korean syntax”, Yoshiko Matsumoto “Noun modification construction in Japanese”, Sachiko Ide & Kishiko Ueno “Politeness in Japanese”). いずれも, 2016–2017 年に刊行。
- (3) Cambridge University Press との契約により, Yoko Hasegawa (ed.) *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics* に論文 “Events and properties in morphology and syntax” を寄稿した。2017-2018 年に刊行予定。

窪 蘭 晴夫 (くぼの はるお) 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 領域代表, 副所長

1957 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学, 1988)

【学歴】 大阪外国語大学外国語学部卒業(1979), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了(1981), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退 (1982), 英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了(1986)

【職歴】 南山大学外国語学部 助手 (1982), 同 講師 (1984), 同 助教授 (1990), 大阪外国語大学外国語学部 助教授 (1992), カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員 (フルブライト若手研究員) (1994-1995), マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員 (1995), 神戸大学文学部 助教授 (1996), 同 教授 (2002), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授, 研究系長 (2010-2016), 同 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 領域代表, 副所長 (2016)

【専門領域】 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学, 日本音韻論学会, 日本語学会, 関西言語学会, 日本音響学会, Association for Laboratory Phonology, International Phonetic Association

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 会長; 日本音声学 評議員; 日本学術会議 連携会員; 理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員; 市河三喜賞 審査委員・幹事; 東京言語研究所 運営委員; The Association for Laboratory Phonology, Executive Committee member (-2016.7); *Oxford Studies in Phonology and Phonetics Series* (OUP), Advisory Editor; International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS), Permanent Council member; *Lingua*, Editorial Board member

【受賞歴】

2015 国立国語研究所第10回所長賞

2013 国立国語研究所第6回所長賞

2010 国立国語研究所第1回所長賞

1997 金田一京助博士記念賞 (金田一賞)

1995 市河三喜賞

1988 名古屋大学英文学会 IVY Award

1985 イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2016年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」: コーディネーター

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」, 26244022: 研究代表者
- ・挑戦的萌芽研究 「「呼びかけイントネーション」に関する萌芽的研究」, 25580098: 研究代表者
- ・基盤研究 (S) 「乳児音声発達の起源に迫る: アジアの言語から見た発達メカニズムの解明」, 16H06319: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Haruo Kubozono

“Diphthongs and word accent in Japanese”, *KLS (Proceedings of the 40th Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society)*, 36, pp.195–206, 2016.6.

Haruo Kubozono

“Diversity of pitch accent systems in Koshikijima Japanese”, 『言語研究』150 (1), pp.1–31, 2016.9.

窪菌晴夫

「日本語の二重母音」, 日本音韻論学会 (編) 『現代音韻論の動向: 日本音韻論学会の歩みと展望』, pp.22–25, 開拓社, 2016.9.

《辞書・辞典類》

窪菌晴夫

「ママは昔パパだったのか? —五十音図の秘密—」, 「「むっつ」と「みっつ」の関係とは—数詞の謎—」, 中島平三 (編) 『ことばのおもしろ事典』, pp.112–125, 朝倉書店, 2016.4.

Haruo Kubozono

“Accent in Japanese phonology”, *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (online encyclopedia), Oxford University Press, 2017.2.

《その他の出版物・記事》

窪菌晴夫

「日本語音声の謎と難問」, 『日本語学』35 (5), pp.2–12, 2016.5.

窪菌晴夫

「「マクる?」「り」…中高年を煙に巻く若者の略語」, YOMIURI オンライン, 2016.9.12.

【講演・口頭発表】

窪菌晴夫

「日本語の音韻研究—わかったこと、やり残したこと」(招待講演), 日本音韻論学会春季大会シンポジウム, 首都大学東京, 2016.6.24.

Haruo Kubozono

“Mora and syllable in the pitch accent system of Koshikijima Japanese” (招待講演), *Japanese and Korean Accent: Diachrony, Reconstruction, and Typology*, 東京外国語大学, 2016.7.2.

Haruo Kubozono

“Mora and syllable in pitch accent systems” (招待講演), KALS & KACL, プサン大学, 2016.8.24.

窪菌晴夫

「音韻論の課題—日本語音声の研究を中心に」(招待講演), 東京言語研究所, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2016.9.4.

Haruo Kubozono

“Moras and syllables in Japanese dialects” (招待講演), *Syllables and Prosody*, 国立国語研究所, 2016.10.13.

窪菌晴夫

「英語と日本語のアクセント規則」(招待講演), 語学教育研究所, 東京家政大学, 2016.11.20.

Haruo Kubozono

“Language contact and accent changes in Japanese” (招待講演), アメリカ音響学会・日本音響学会ジョイントミーティング, Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort, 2016.11.29.

窪菌晴夫

「日英語の頭韻と音節構造」(招待講演), 津田塾大学言語文化研究会講演会, 津田塾大学, 2016.12.9.

Haruo Kubozono

“The phonological structure of Japanese mimetics and motherese” (招待講演), NINJAL 国際シンポジウム (Mimetics in the World's Languages), 国立国語研究所, 2016.12.17.

窪蘭晴夫

「鹿児島方言の「の」の縮約と音節構造」, Prosody and Grammar Festa, 国立国語研究所, 2017.2.18.

窪蘭晴夫

「日本語のプロソディーと音節構造」, PAIK 2017-03 (関西音韻論研究会), 神戸大学, 2017.3.25.

【研究調査】

- ・ 2016.6 薩摩川内市 (鹿児島県) 鹿児島方言のプロソディー調査
- ・ 2016.8 甑島 (鹿児島県薩摩川内市) 甑島方言のプロソディー調査
- ・ 2016.11 薩摩川内市 (鹿児島県) 鹿児島方言の語法調査
- ・ 2016.12 薩摩川内市 (鹿児島県) 鹿児島方言のプロソディー調査
- ・ 2017.2 小林市 (宮崎県) 小林方言のプロソディー調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」音声研究班共同研究発表会, 国立国語研究所, 2016.9.16.
- ・ Syllbles and Prosody (JK24 サテライトワークショップ), 国立国語研究所, 2016.10.13.
- ・ NINJAL 国際シンポジウム The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, 国立国語研究所, 2016.10.14-16.
- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」音声研究班共同研究発表会, 福岡大学, 2016.12.4.
- ・ NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」, 一橋講堂, 2017.1.21.
- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクト合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa), 国立国語研究所, 2017.2.18-19

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「新語はこうして作られる」(招待講演), 国際日本語普及協会研修会, 国際日本語普及協会, 2016.6.23.
- ・「立川は「たちかわ」か「たてかわ」か ―日本語の発音とアクセント」(招待講演), 立川市歴史民俗資料館共同企画講演会, 立川市女性総合センター, 2016.12.11.
- ・「言葉を学ぶということ」(招待講演), 大宮中央高校教員研修会, 大宮中央高校, 2016.12.20.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師 (集中講義)
早稲田大学大学院 (2016.7)
南山大学大学院 (2016.8)
- ・ 日本学術振興会 PD (外国人特別研究員) 1名の受入

Timothy J. Vance (ティモシー・J・バンス) 研究系 (理論・対照研究領域) 教授

1951 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (シカゴ大学, 1979)

【学歴】 ワシントン大学 (セントルイス) 卒業 (1973), シカゴ大学大学院言語学科修士課程修了 (1976), シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了 (1979)

【職歴】 ハワイ大学マノア本校 准教授 (1988), コネチカット・カレッジ 准教授 (1993), 同 教授 (1994), アリゾナ大学 教授 (2000), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2010), 同 研究情報資料センター長 (2013-2016), 同 研究系 (理論・対照研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 言語学, 音声学, 音韻論, 表記法

【所属学会】 日本言語学会, 言語科学会, 日本音声学, 日本音韻論学会, Acoustical Society of America, American Association of Teachers of Japanese, Association for Laboratory Phonology, Linguistic Society of America

【受賞歴】

2016 言語科学会 JCHAT 賞 (年次国際大会の発表賞)

【2016 年度に参画した共同研究】

・ 基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: メンバー

【研究業績】

《著書・編書》

Timothy J. Vance and Mark Irwin (eds.)

Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project, Amsterdam: John Benjamins, 2016.6.

《論文・ブックチャプター》

Timothy J. Vance

“Introduction”, Timothy J. Vance and Mark Irwin (eds.) *Sequential Voicing in Japanese*, pp.1-12, Amsterdam: John Benjamins, 2016.6.

Nobuyuki Nakazawa, Timothy J. Vance, Mark Irwin, and Paul A. Lyddon

“Rendaku awareness of Japanese learners in Taiwan”, Timothy J. Vance and Mark Irwin (eds.) *Sequential Voicing in Japanese*, pp.57-77, Amsterdam: John Benjamins, 2016.6.

Timothy J. Vance and Atsushi Asai

“Rendaku and individual segments”, Timothy J. Vance and Mark Irwin (eds.) *Sequential Voicing in Japanese*, pp.119-137, Amsterdam: John Benjamins, 2016.6.

Mizuki Miyashita, Mark Irwin, Ian Wilson, and Timothy J. Vance

“Rendaku in Tōhoku Japanese” Timothy J. Vance and Mark Irwin (eds.) *Sequential Voicing in Japanese*, pp.173-193, Amsterdam: John Benjamins, 2016.6.

Timothy J. Vance

“JFL learners and big numbers: Pitch-accent and phrasing”, *Proceedings of ISAPh2016: Diversity in Applied Phonetics (ISAPh 2016)*, pp.42-45, 2016.11.

Katsuo Tamaoka, Kyoko Hayakawa, and Timothy J. Vance

“Triple operations of rendaku processing: Native Chinese and Korean speakers learning Japanese”, *Journal of Japanese Linguistics*, Vol.32, pp.31-55, 2017.1.

Timothy J. Vance

"Rendaku following a moraic nasal", 『音韻研究の新展開 – 窪蘭晴夫教授還暦記念論文集』, pp.19-39, 2017.3.

《辞書・辞典類》

Timothy J. Vance

"Rendaku or sequential voicing in Japanese phonology", Mark Aronoff (eds.), *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*, Oxford: Oxford University Press, 2017.3.

【講演・口頭発表】

Timothy J. Vance, Shigeto Kawahara, and Mizuki Miyashita

"Lyman's Law, the OCP, and prenasalization in Northern Tōhoku Japanese", *NWAV Asia-Pacific* 4, 国立中正大学, 2016.4.22.

Timothy J. Vance

"Toward a spelling pronunciation typology: Examples from Japanese" (招待講演), *Phonology Forum* 2016, 金沢大学, 2016.8.26.

Timothy J. Vance

"Compound words in English and Japanese" (招待講演), 英語コミュニケーション課程主催講演会, 群馬県立女子大学, 2016.11.9.

Timothy J. Vance

"Big numbers: Accent and intonation" (招待講演), *Language Learning and Teaching Workshop*, 立命館大学, 2016.11.17.

Timothy J. Vance

"Compound words in English and Japanese" (招待講演), English Department Seminar, 大阪女学院大学, 2017.1.16.

Timothy J. Vance

"Rendaku (sequential voicing) in Japanese" (招待講演), English Department Seminar, 大阪女学院大学, 2017.1.16.

Timothy J. Vance

"The Japanese syllable debate" (招待講演), *GLOW in Asia XI*, National University of Singapore, 2017.2.21.

Timothy J. Vance

"Onset optimization in Japanese", 第12回音韻論フェスタ, 立命館大学, 2017.3.8.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・NINJAL 国際シンポジウム The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, 国立国語研究所, 2016.10.

【その他の学術的・社会的活動】

・"Benjamin Smith Lyman and Lyman's Law" (招待講演), Reischauer Institute Japan Forum, Harvard University, 2016.12.2.

・"Benjamin Smith Lyman and Rendaku: The discovery of a law" (招待講演), Stanford-Oberlin Commemorative Lecture Series, 桜美林大学, 2017.1.12.

・「「連濁」に見る日本語の奥行き」(招待講演), IUC レクチャー・シリーズ, 国際文化会館, 2017.3.2.

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

研究系(理論・対照研究領域)教授, 研究情報発信センター長

【学位】博士(学術)(神戸大学, 2000)

【学歴】ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了(1993), 神戸大学大学院文化科学研究科修了(2000)

【職歴】神戸大学文学部 講師(2005), 同 人文学研究科 講師(2007), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授(2009), 同 教授(2011), 同 研究系長(2014-2016), 同 研究系(理論・対照研究領域)教授, 研究情報発信センター長(2016)

【専門領域】言語学, 言語類型論, 対照言語学

【所属学会】日本語文法学会, 日本言語学会, 関西言語学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 評議員

【受賞歴】

2016 国立国語研究所第12回特別所長賞

2010 国立国語研究所第1回所長賞

2007 第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞: パルデシ・プラシャント, 桐生和幸, 石田英明, 小磯千尋(編)2007. 『日本語—マラーティー語基本動詞用法事典』(428ページ)。財団法人博報児童教育振興会2005年度第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書。

2000 The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to “*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*”, Sage Publications. New Delhi, Thousand Oaks, & London. Paper title: “The Passive and Related Constructions in Marathi.”

【2016年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: サブリーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: サブリーダー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」, 15H03210: 研究代表者
- ・基盤研究(C)「マルチメディアを用いた外国語学習過程のモデル化」, 15K01076: 研究分担者
- ・挑戦的萌芽研究「大規模コーパスに基づく日本語機能語の基礎研究と機能語検索ツールへの応用」, 16K13228: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

プラシャント・パルデシ, 今井新悟, 赤瀬川史朗

『日本語コーパス活用入門—NINJAL-LWP 実践ガイド』, 大修館書店, 2016.7.

《論文・ブックチャプター》

Peter Hook and Prashant Pardeshi

“Noun-modifying constructions in Marathi”, Matsumoto Yoshiko, Bernard Comrie and Peter Sells (eds.) *Noun-Modifying Clause Constructions in Languages of Eurasia: Rethinking*

Theoretical and Geographical Boundaries, pp.293-329, Amsterdam: John Benjamins, 2017.3.

《データベース類》

- ・ プラシャント・バルデシ, 秋田喜美『NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)』(オノマトペ検索機能追加) 2016.12.

<http://nlb.ninjal.ac.jp/>

《その他の出版物・記事》

プラシャント・バルデシ

「イントロダクション」(ワークショップ「統語・意味解析情報付き日本語コーパスの構築に向けて」), 日本言語学会第 153 回大会予稿集, 2016.12.

プラシャント・バルデシ

「まとめと将来の展望」(ワークショップ「統語・意味解析情報付き日本語コーパスの構築に向けて」), 日本言語学会第 153 回大会予稿集, 2016.12.

【講演・口頭発表】

プラシャント・バルデシ

「マラーティー語の名詞修飾表現は English (European)-type か, Japanese (Asian)-type か?」, 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾表現」研究発表会, 神戸大学, 2016.7.9.

Alastair Butler, Shiro Akasegawa, Prashant Pardeshi, and Kei Yoshimoto

“A parsed corpus of Japanese enriched to reach levels of semantic analysis” (招待講演), Brandeis University Boston, 2016.9.2.

今村泰也, 高原真理, 中溝朋子, プラシャント・バルデシ

「基本動詞(多義動詞)の理解に役立つ視聴覚コンテンツ —ショートアニメを中心に—」, 2016 年度日本語教育学会秋季大会, ひめぎんホール, 2016.10.9.

プラシャント・バルデシ

「イントロダクション」, ワークショップ「統語・意味解析情報付き日本語コーパスの構築に向けて」(日本言語学会第 153 回大会), 福岡大学, 2016.12.4.

プラシャント・バルデシ

「まとめと将来の展望」, ワークショップ「統語・意味解析情報付き日本語コーパスの構築に向けて」(日本言語学会第 153 回大会), 福岡大学, 2016.12.4.

Prashant Pardeshi and Kimi Akita

“Lexical portraits of Japanese mimetics: Browsing through the BCCWJ corpus using NLB” (ポスター発表), NINJAL International Symposium 2016. Mimetics in Japanese and Other Languages of the World, 国立国語研究所, 2016.12.17.

今村泰也, 高原真理, 中溝朋子, プラシャント・バルデシ

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」, 「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」研究発表会, 東北大学, 2017.3.5.

Prashant Pardeshi

“Implicature vs Entailment in Chinese, Japanese, Korean, Hindi and Marathi transitive clauses: A contrastive study” (招待講演), A Seminar Jointly Organized by the Centre for Japanese Studies, Centre for Korean Studies and Centre for Chinese and Southeast Asian Studies, Jawaharlal Nehru University, 2017.3.22.

プラシャント・バルデシ

「体系的な基本動詞学習『基本動詞ハンドブック』の活用」(招待講演), The Bhutan Centre for Japanese Studies (ブータン日本語学校), 2017.3.24.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾表現」共同研究発表会, 神戸大学, 2016.7.9.
- ・NINJAL 国際シンポジウム The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, 国立国語研究所, 2016.10.14-16.
- ・国際ワークショップ Unshared Task on Theory and System analysis with FraCaS, MultiFraCaS and JSeM Test Suites, 国立国語研究所, 2016.11.13.
- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾表現」共同研究発表会, 名古屋大学, 2016.11.19.
- ・日本言語学会第 153 回大会ワークショップ「統語・意味解析情報付き日本語コーパスの構築に向けて」, 福岡大学, 2016.12.4.
- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾表現」共同研究発表会, 国立国語研究所, 2016.12.9-10.
- ・NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and Other Languages of the World, 国立国語研究所, 2016.12.17-18.
- ・NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」, 一橋講堂, 2017.1.21.
- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクト合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa), 国立国語研究所, 2017.2.18-19.
- ・「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」共同研究発表会, 東北大学, 2017.3.5.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「プネーにおける日本語教育の歴史を振り返って」(記事協力), 『インド通信』第 453 号, 2016.7.1.

船越 健志 (ふなこし けんし) 研究系 (理論・対照研究領域) 特任助教

【学位】 Ph.D. (言語学) (メリーランド大学, 2014)

【学位】 早稲田大学第一文学部総合人文学科卒業 (2007), 大阪大学大学院言語文化研究科専攻博士前期課程修了 (2009), メリーランド大学大学院言語学科博士課程修了 (2014)

【職歴】 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 特任助教 (2015) 同 研究系 (理論・対照研究領域) 特任助教 (2016)

【専門領域】 言語学, 統語論, 生成文法

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会

【受賞歴】

2016 国立国語研究所第13回所長賞

【2016年度に参画した共同研究】

・領域指定型共同研究プロジェクト「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」：メンバー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

・若手研究 (B) 「自然言語における省略可能な統語範疇に関する通言語的研究」15K16773：研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Kenshi Funakoshi

“Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese”, *Journal of East Asian Linguistics*, 25(2), pp.113-142, 2016.5.

【講演・口頭発表】

船越健志

「動詞残余型動詞句削除分析」, 日本言語学会, 慶応義塾大学, 2016.6.26.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・NINJAL 国際シンポジウム The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, 国立国語研究所, 2016.10.14-16.

・「日本語から生成文法へ：統語理論と言語獲得」研究発表会, 国立国語研究所, 2016.12.26-27.

【その他の学術的・社会的活動】

・ *Journal of East Asian Linguistics*, 査読者

・ *Natural Language and Linguistic Theory*, 査読者

・ *The proceedings of Japanese/Korean Linguistics Conference 24*, 編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

・ 大学院非常勤講師

明治学院大学大学院

木部 暢子 (きべのぶこ) 研究系 (言語変異研究領域) 教授, 領域代表, 副所長

1955 生

【学位】 博士 (文学) (九州大学, 1998)

【学歴】 九州大学文学部文学科卒業 (1978), 九州大学大学院文学研究科修士課程修了 (1980)

【職歴】 純真女子短期大学 助手 (1980), 同 講師 (1981), 福岡女学院短期大学 講師 (1985), 鹿児島大学法文学部 助教授 (1988), 同 教授 (1999), 同 副学部長 (2004), 同 学部長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授, 副所長 (2010), 同 研究系長 (2010-2016), 同 研究系 (言語変異研究領域) 教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】 日本学術会議 会員; 日本語学会 理事; 日本音声学会 理事; 日本言語学会 評議員; 文部科学省文化審議会 委員; 文化庁平成 28 年度危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会 委員; 独立行政法人大学評価・学位授与機構 国立大学教育研究評価委員会 専門委員

【受賞歴】

1990 新村出財団 研究助成

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: リーダー
- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: メンバー
- ・ 広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国語研ユニット「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: リーダー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (A)「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」, 26244022: 研究分担者

【研究業績】

《報告書・論集》

木部暢子 (編)

『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 久米島方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2017.3.

《論文・ブックチャプター》

木部暢子

「記述方言学の研究動向」, 『方言の研究』 2, pp.63-82, 日本方言研究会, 2016.9.

木部暢子

「久米島方言の音韻」, 木部暢子 (編)『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 久米島方言調査報告書』, pp.25-44, 国立国語研究所, 2017.3.

木部暢子

「隠岐の島の方言」, 『隠岐の文化財』 34, pp.24-38, 隠岐の島教育委員会, 2017.3.

《データベース類》

- ・ 木部暢子 (編)『「日本の消滅危機言語・方言」データ』(「与那国祖納方言の基礎語彙」 「沖縄県首

里方言の談話」追加) 2017.3.

<http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>

《その他の出版物・記事》

木部暢子

「地域語に見る大和言葉」, 『日本語学』 36 (1), pp.52-61, 明治書院, 2017.1.

【講演・口頭発表】

木部暢子

「対格表現の地域差 一助詞ゼロをめぐる一」(招待講演), 東京外国語大学語学定例研究会, 東京外国語大学, 2016.7.6.

木部暢子

「諸方言コーパスに見る格と取り立て 一九州方言を中心に一」, 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共同研究発表会「格と取り立て」, 国立国語研究所, 2016.9.21.

木部暢子

「諸方言の「やる・くれる・もらう」一テキストを使った方言研究一」, 九州方言研究会, 宮崎中央公民館, 2017.1.7.

木部暢子, 佐藤久美子, 中西太郎, 中澤光平

「『日本語諸方言コーパス』の構築について」, 言語資源活用ワークショップ 2016, 国立国語研究所, 2017.3.7.

木部暢子

「方言コーパスに見る日本語諸方言の助詞」, 平成 28 年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション 一助詞のすがた一」, 国立国語研究所, 2017.3.9.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共同研究発表会, 国立国語研究所, 2016.9.19-20.
- ・危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)・与論, 与論町砂美地来館, 2016.11.3.
- ・平成 28 年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション 一助詞のすがた」, 国立国語研究所, 2017.3.9.

【研究調査】

- ・2016.11.3-6 島根県隠岐郡隠岐の島町 仲村・都万方言調査
- ・2016.12.11 島根県隠岐郡隠岐の島町 都万方言調査
- ・2017.1.20-23 石川県白山市白峰町 白峰方言調査
- ・2017.2.26-28 岩手県八戸市 八戸方言調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「鳥の声の聞きなしと地域の文化」(招待講演), 鳥獣と国土政策懇談会, 自然環境研究センター, 2016.5.26.
- ・「お国言葉学校で伝承」(インタビュー記事), 日経新聞夕刊, 2016.7.1.
- ・「奄美の危機状況」(招待講演), 危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会, 金融庁会議室, 2016.9.23.
- ・「琉球の食文化」(招待講演), 人文機構シンポジウム(第 29 回)「和食文化の多様性 一日本列島の

- 食文化を考える―」, 味の素グループ高輪研修センター, 2016.10.15.
- ・「言葉たちの"声"を聞こう」(インタビュー記事), 東京新聞, 2016.10.30.
- ・「アクセント特徴的 島根大と国立国語研究所 昨年に続き隠岐の島で方言調査」(インタビュー記事), 山陰中央新報, 2016.11.5.
- ・「八丈, 奄美, 与論・国頭, 被災地の状況」(招待講演), 危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)・与論, 与論町砂美地来館, 2016.11.13.
- ・「まもろう隠岐方言」(インタビュー記事), 山陰中央新報こども新聞, 2016.11.30.
- ・ *Handbook of Japanese Dialects* (HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series, De Gruyter Mouton), 編集委員
- ・『明解方言学辞典』(三省堂), 編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 連携大学院
東京外国語大学大学院国際日本学研究科 連携教授
- ・ 日本学術振興会特別研究員の受入(2名)
青井隼人「関係性に着目した宮古語音韻構造の探究」
三樹陽介「消滅の危機に瀕する八丈語の調査・記録と談話資料の作成・公開」
- ・ 外来研究員の受入(1名)
吴 孟根格日乐(赤峰学院大学(中国))「モンゴル語オルドス方言の変化・変遷とその趨勢についての調査研究」(2016年3月～8月)

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

1973 生

【学位】 博士 (文学) (大阪大学, 2004)

【学歴】 関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業 (1997), エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了 (1998), 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了 (2004)

【職歴】 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員 (2004), 同 研究開発部門言語生活グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 社会言語学, 言語学, 日本語学

【所属学会】 International Congress for Dialectologists and Geolinguists, Methods, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会, 日本言語政策学会, 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会

【学会等の役員・委員】 変異理論研究会 世話人; METHODS, International steering committee member; NWAV-AP, Steering committee member; *Asia-Pacific Language Variation*, Editorial board member; 北海道方言研究会 副会長

【受賞歴】

2013 国立国語研究所第6回所長賞

2010 第9回徳川宗賢優秀賞 (社会言語科学会)

2010 国立国語研究所第1回所長賞

【2016年度に参画した共同研究】

- ・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用」国語研プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用 —言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」: リーダー
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「地方会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」: メンバー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「北海道北見市常呂町居住者の方言と郷里方言との相関に関する社会言語学的研究」15K02586: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「北海道における方言使用の現状と実時間変化」, 『北海道方言研究会会報』93, pp.23-31, 2017.2.

《その他の出版物・記事》

朝日祥之

「東北ことばも九州弁も…世界で見つけた「ニホンゴ」」, YOMIURI オンライン, 2016.12.13.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

“An innovative use of Japanese ‘verb-te-ageru’ in instructional speech: A Japanese women’s

language hypothesis”, Sociolinguistics Symposium 21, University of Murcia, 2016.6.16.

Yoshiyuki Asahi

“Little Gifu in Tokoro: Dialect contact, maintenance, and change in the Japanese small town in Hokkaido”, Sociolinguistics Symposium 21, University of Murcia, 2016.6.17.

朝日祥之

「日本関連在外資料を活用した日系移民の言語生活研究」(招待講演), I-URIC Colloquim, 国立天文台, 2016.7.14.

朝日祥之

「北海道における方言使用の現状と実時間変化」, 第218回北海道方言研究会例会, 北星学園大学, 2016.9.11.

【研究調査】

- ・2016.5 Honolulu市 音源調査
- ・2017.3 Sacramento市 音源調査
- ・2017.3 Los Angeles市 音源調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「知らなかった!気づかない方言」(講義), ニホンゴ探検2016, 国立国語研究所, 2016.7.16.
- ・「ら抜き言葉と言葉の変化」(インタビュー), FMラジオ J-WAVE「RADIOFAST」, 2016.11.25.
- ・*Asia-Pacific Language Variation*, Editorial board member
- ・『言語研究』『ICPLJ10』『MethodsXVI』, 査読協力

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
一橋大学大学院言語社会研究科

井上 文子 (いのうえ ふみこ) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】 修士 (文学) (大阪大学, 1992)

【学歴】 高知女子大学文学部国文学科卒業 (1984), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了 (1992), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退 (1994)

【職歴】 大阪大学文学部 助手 (1994), 国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員 (1995), 同 主任研究官 (1997), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同情報資料部門資料整備グループ グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 社会言語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, 日本語文法学会

【受賞歴】

1993 第11回新村出記念財団 研究助成

【2016年度に参画した共同研究】

・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」:
メンバー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

・基盤研究 (A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933 :
研究分担者
・研究成果公開促進費 (データベース)『日本の危機言語・方言データベース』, 16HP8006 : 作成代
表者

【その他の学術的・社会的活動】

・NINJAL 職業発見プログラム (早稲田実業学校中等部) (講師), 国立国語研究所, 2016.8.5.

熊谷 康雄 (くまがい やすお) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

1955 生

【学位】 修士 (文学) (埼玉大学, 1984)

【学歴】 埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業 (1976), 埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程言語文化論専攻修了 (1984)

【職歴】 国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1988), 同 情報資料研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1998), 同 情報資料部門 部門長 (2001), 国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 日本行動計量学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 電子情報通信学会, American Dialect Society, International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」:
サブリーダー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (C) 「大規模方言分布データの計量的分析方法の開発」, 26370555 : 研究代表者
- ・ 基盤研究 (A) 「日本諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933 : 研究分担者

【研究業績】

《データベース類》

- ・ 熊谷康雄 (編) 『『日本言語地図』 データベース』 (データ追加), 2017.3.
<http://www.lajdb.org/TOP.html>

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「全国方言の旅 : 東京方言」 (担当), ニホンゴ探検 2016, 国立国語研究所, 2016.7.16.
- ・ Methods XVI (the 16th International Conference on Methods in Dialectology), organizing committee member

三井 はるみ (みついはるみ) 研究系 (言語変異研究領域) 助教

【学位】 修士 (文学) (東北大学, 1986)

【学歴】 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3年の課程単位修得満期退学 (1989)

【職歴】 昭和女子大学 講師 (1989), 国立国語研究所 主任研究官 (1997), 人間文化研究機構国立国語研究所 助教 (2009)

【専門領域】 日本語学, 社会言語学, 方言文法

【所属学会】 日本語学会, 日本方言研究会, 社会言語科学会, 日本音声学会, 日本語文法学会

【学会等の役員・委員】 日本方言研究会 世話人; 日本音声学会 会計監査

【2016年度に参画した共同研究】

・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」:
メンバー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

・ 基盤研究 (A)「日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築」,
26244024: 研究分担者
・ 基盤研究 (A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933:
研究分担者

【研究業績】

《報告書・論集》

三井はるみ, 鎗水兼貴 (編)

『首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査 2010-2016 報告書』, 国立国語研究所,
2017.3.

《論文・ブックチャプター》

三井はるみ

「東京都方言」, 方言文法研究会 (小西いずみ, 日高水穂) (編)『全国方言文法辞典資料集 (3)
活用体系 (2)』, pp.57-66, 2017.1.

《その他の出版物・記事》

三井はるみ

「東京のほお～言!!」(「ふんごまっしえー」(2016.4.9), 「したときある」(4.16), 「イチゴ」(5.21),
「厚い」(6.11), 「早くない?」(6.18), 「おっこちる」(7.9), 「ごあます」(7.25), 「もす」(8.6),
夏休み特集「してください」「バナナむし」(8.13), 「はがき」(9.24), 「～てほしい」(10.1), 「おこじゅ」
(10.8), 「おっぺす」(11.19), 「せんぞやまんぞ」(11.26), 「しょっぱい」(2017.1.14), 「あめんぼ
う」(1.21), 「いも」(2.25), 「あるって」(3.18), 「しゃて」(3.25)), 『朝日新聞』朝刊

【研究調査】

- ・ 2016.10.6 東京都羽村市・青梅市・八王子市 方言文献調査
- ・ 2016.11.6 東京都青梅市 地域巡検
- ・ 2016.11.10 東京都青梅市 方言調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ NINJAL ジュニアプログラム「学んでみよう! 多摩のことば青梅のことば」(講師), 青梅市立若草
小学校, 2016.12.1

原田 走一郎 (はらだ そういちろう) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

1982 生

【学位】 博士 (文学) (大阪大学, 2016)

【学歴】 東京外国語大学外国語学部卒業 (2006), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了 (2011), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学 (2015)

【職歴】 与那国町教育委員会 嘱託員 (2015), 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員, 国立国語研究所研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2016)

【専門領域】 方言学, 琉球語学, 記述言語学

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会

【受賞歴】

2015 日本語学会秋季大会発表賞

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・ 広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国語研ユニット「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: メンバー
- ・ 東京外国語大学 AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」: 共同研究員

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

原田走一郎

「南琉球八重山黒島方言における二重有声摩擦音」『日本語の研究』12 (4), pp.103-117, 2016.10.

【講演・口頭発表】

原田走一郎

「談話から見る黒島方言の格標示」, 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共同研究発表会, 国立国語研究所, 2016.9.20.

【研究調査】

- ・ 2016.6 沖縄県八重山郡竹富町黒島 方言調査
- ・ 2016.8 鹿児島県薩摩川内市甕島 方言調査
- ・ 2016.9 宮崎県椎葉村 方言調査
- ・ 2016.11 島根県隠岐の島町 方言調査
- ・ 2016.12 沖縄県八重山郡竹富町黒島 方言調査
- ・ 2017.1 石川県白峰 方言調査
- ・ 2017.2 沖縄県宮古島市 方言調査
- ・ 2017.3 沖縄県八重山郡竹富町黒島 方言調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ NINJAL 職業発見プログラム (開智高校) (講師), 国立国語研究所, 2016.11.16.
- ・ 黒島方言監修 黒島老人クラブ「びゃーしま むぬい」(方言下敷き)

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 研究系 (言語変化研究領域) 准教授, 領域代表

1971 生

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2014)

【学歴】 東京大学文学部第3類 (語学文学) 卒業 (1995), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程 日本文化研究専攻修了 (1997), 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (2014)

【職歴】 明海大学外国語学部 講師 (2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授, 領域代表 (2016), 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授 (クロスアポイントメント) (2016)

【専門領域】 日本語学, 自然言語処理

【所属学会】 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 日本語文法学会, 近代語学会, 東京大学国語国文学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 編集委員; 言語処理学会 編集委員

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第2回所長賞

2011 情報処理学会山下記念研究賞

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: リーダー
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 共同研究員

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用」, 15H01883: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小木曾智信

「使用頻度から見た中古仮名文学作品の語彙 —コーパスにもとづく分析—」, 国語語彙史研究会 (編) 『国語語彙史の研究』 35, pp.15-37, 和泉書院, 2016.4.

小木曾智信

『日本語歴史コーパス』の現状と展望」, 東京大学国語国文学会 (編) 『國語と國文學』 93 (5), pp.72-85, 明治書院, 2016.5.

小木曾智信

「自然言語処理から照射した現代日本語文法 —統計的機械学習と「文法」—」, 日本語文法学会 (編) 『日本語文法』 16 (2), pp.20-31, くろしお出版, 2016.9.

小木曾智信

「テーマ解説 コーパス」青木博史, 小柳智一, 高山善行 (編) 『日本語文法史研究』 3, pp.255-266, ひつじ書房, 2016.12.

藤本 灯, 北崎勇帆, 市村太郎, 岡部嘉幸, 小木曾智信, 高田智和

「[人情本コーパス] の設計と構築」, 『国立国語研究所論集』 12, pp.1-12, 2017.1.

Toshinobu Ogiso

“Stylistic differences across time and register in Japanese texts: A quantitative analysis based on the NINJAL corpora” Andrej Bekeš and Irena Srdanović (eds.) *Japanese Language from Empirical Perspective*, Ljubljana: Znanstvena založba FF, 2017.

《データベース類》

・近藤明日子, 間淵洋子, 服部紀子, 小木曾智信ほか『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌 (Ver.1.0)』2016.10.

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html

・鴻野知暁, 渡辺由貴, 小木曾智信ほか『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 II 日記・紀行』2017.3.

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/kamakura.html

・堤 智昭, 小木曾智信『Web 茶まめ (Ver.2017.1)』2017.1.

<http://chamame.ninjal.ac.jp/>

【講演・口頭発表】

小木曾智信, 池上 尚, 渡辺由貴, 市村太郎, 近藤明日子, 間淵洋子

「『日本語歴史コーパス』の拡張とその課題 — 「通時コーパス」をめざして—」, 日本語学会 2016 年度春季大会, 学習院大学, 2016.5.15.

堤 智昭, 小木曾智信

「Web アプリケーションによる形態素解析の支援 — 『Web 茶まめ』の開発」(ポスター発表), 日本語学会 2016 年度春季大会, 学習院大学, 2016.5.15.

小木曾智信

「日本語史研究資料のエンコーディング — 事例と問題点 —」(招待講演), 国際ワークショップ 日本語テキストのモデルと TEI, 東京大学, 2016.8.31.

Yuki Watanabe, Taro Ichimura, and Toshinobu Ogiso

“The definition of the word unit in the Corpus of Toraakira-bon Kyōgen” (ポスター発表), PNC 2016 Annual Conference and Joint Meetings, The Getty Center, Los Angeles, 2016.8.16–18.

Toshinobu Ogiso

“Construction of the Corpus of Historical Japanese” (ポスター発表), PNC 2016 Annual Conference and Joint Meetings, The Getty Center, Los Angeles, 2016.8.16–18.

小木曾智信

「日本語コーパスの調査方法 — コーパス検索アプリケーション「中納言」入門 —」, NINJAL セミナー「言語データと日本語研究」, 国立臺灣大學, 2016.9.20.

服部紀子, 間淵洋子, 近藤明日子, 小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』 Ver.1.0 の公開」(ポスター発表), 日本語学会 2016 年度秋季大会, 山形大学, 2016.10.30.

小木曾智信

「コーパスの語種・頻度から見た日本語(史)資料の位相」(招待講演), 東京外国語大学語学研究所定例研究会, 東京外国語大学, 2016.11.2.

Toshinobu Ogiso

“On Japanese corpora and tokenization” (招待講演), Digital Humanities Workshop: The Impact of the Digital on Japanese Studies, University of Chicago, 2016.11.12.

小木曾智信

「多重の読みを持つテキストのコーパス化」, 言語資源活用ワークショップ 2016, 国立国語研究所,

2017.3.7.

小木曾智信

「書き言葉コーパスに見る助詞の時代差・文体差」, 平成 28 年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション —助詞のすがた—」, 国立国語研究所, 2017.3.9.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』 ver. 2017.3 —通時コーパス構築進捗報告」, 「通時コーパス」シンポジウム 2017, 国立国語研究所, 2017.3.11.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2016」, 国文学研究資料館・国立国語研究所, 2016.12.9-11
- ・ コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション —助詞のすがた—」, 国立国語研究所, 2017.3.9.
- ・ 「通時コーパス」シンポジウム 2017, 国立国語研究所, 2017.3.11.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 外来研究員（博報日本研究フェローシップ）の受入
Stephen Wright Horn（オックスフォード大学（イギリス））「近世以前の日本語の通時コーパスの統語情報付加：言語学研究の実用に向けて」
- ・ 特別共同利用研究員の受入
久屋愛実（オックスフォード大学大学院）「コーパスに基づく外来語の社会言語学的研究」
Maria Telegina（オックスフォード大学大学院）“Temporal and Spatial Concepts in Japanese Language World View”
- ・ 大学院非常勤講師
東京大学大学院人文社会系研究科「コーパス言語学入門（言語学特殊講義, 人文情報学特殊講義）」
- ・ 連携大学院連携教授
東京外国語大学大学院総合国際学研究科「Japan Studies 1（コーパス日本語学入門）」「Japan Studies 2（日本語コーパスの活用）」
- ・ 講習会
日本語歴史コーパス「中納言」講習会（講師）, 国立国語研究所, 2016.5.17.
第 20 回 NINJAL チュートリアル「『日本語歴史コーパス』活用入門 —「中納言」による検索と集計—」（講師）, イオンコンパス 大阪駅前会議室, 2016.9.10.
第 21 回 NINJAL チュートリアル「『日本語歴史コーパス』活用入門 —「中納言」による検索と集計—」（講師）, 国立国語研究所, 2017.2.10.

相澤 正夫 (あいざわ まさお) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

1953 生

【学位】 修士 (言語学) (東京大学, 1980)

【学歴】 東京大学文学部第 3 類 (語学文学) 言語学専修課程卒業 (1977), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了 (1980), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程第 1 種博士課程単位取得退学 (1984)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 研究員 (1984), 同 主任研究官 (1990), 同 室長 (1991), 同 言語体系研究部 部長 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 部門長 (2001), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同 副所長 (2009-2013), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 社会言語科学会, 日本音声学

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員; 『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員; NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』レビュー委員

【受賞歴】

2016 国立国語研究所第 12 回所長賞

2014 国立国語研究所第 8 回所長賞

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (B) 「『昭和話し言葉コーパス』の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」, 16H03426: 研究分担者
- ・ 統計数理研究所公募型共同利用 一般研究 2 「調査方法の異なる大規模言語意識調査データの比較分析」, 28- 共研 -2024: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

田中ゆかり, 林 直樹, 前田忠彦, 相澤正夫

「1 万人調査からみた最新の方言・共通語意識 — 「2015 年全国方言意識 Web 調査」の報告—」, 『国立国語研究所論集』11, pp.117-145, 2016.7.

《その他の出版物・記事》

相澤正夫

書評「新刊・寸感」『日本語学』35 (5), 明治書院, 2016.5.

相澤正夫

NHK 放送文化研究所 (編) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(最終校閲担当), NHK 出版, 2016.5.

相澤正夫

書評「新刊・寸感」『日本語学』35 (12), 明治書院, 2016.11.

【講演・口頭発表】

Tadahiko Maeda, Yukari Tanaka, Naoki Hayashi, and Masao Aizawa

“Impacts of sociodemographic factors on the type of regional dialects usage in contemporary Japan”, International Sociological Association, RC25 PROGRAMME “Language and Representation: Struggles in the Global Age” 3rd Forum of Sociology, Vienna, 2016.7.12.

田中ゆかり, 前田忠彦, 林直樹, 相澤正夫

「2015年全国方言意識 Web 調査に基づく話者類型」, 計量国語学会第60回記念大会, 日本大学文理学部, 2016.10.8.

相澤正夫

「[SPレコード日本語学]事始」(招待講演), 2016年 CAAS & NINJAL ユニット合同セミナー「声・音・文字・表象と歴史」, 東京外国語大学, 2017.2.1.

山崎 誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本 灯

「語誌データベースの設計とその活用」, 「通時コーパス」シンポジウム 2017, 国立国語研究所, 2017.3.11.

【研究調査】

・2016.12 共同調査「2016年全国方言意識 web 調査」の企画・実施 (実施主体: 日本大学文理学部)

【その他の学術的・社会的活動】

・NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』掲載論文8件 (2016.8～2017.3) のレビュー

・NINJAL 職業発見プログラム (富山高校) 講師, 国立国語研究所, 2016.8.10.

・NINJAL 職業発見プログラム (海城中学) 講師, 国立国語研究所, 2017.2.2.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

東京外国語大学大学院

大西 拓一郎 (おおにし たくいちろう) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

1963 生

【学位】 修士 (文学) (東北大学, 1987)

【学歴】 東北大学文学部卒業 (1985), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1987), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学 (1989)

【職歴】 東北大学文学部 助手 (1991), 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員 (1993), 同 主任研究官 (1996), 同 室長 (1999), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 言語地理学, 日本語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), 変異理論研究会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語文法学会, 中日理論言語学研究会, 九州方言研究会, 日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員; SIDG, committee of accountants

【受賞歴】

2016 国立国語研究所第 13 回所長賞

【2016 年度に参画した共同研究】

・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

・挑戦的萌芽研究「方言圏論と方言区画論の統合による新しい言語地理学の創生」, 16K13232: 研究代表者

・基盤研究 (B)「語史再構における言語地理学的解釈の再検討 ―類型的定式化の試み―」, 16H03415: 研究分担者

・基盤研究 (B)「無敬語地帯の地域特性と敬語行動 ―日本語敬語研究の再起動を目指して―」, 15H03204: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

大西拓一郎

『ことばの地理学 ―方言はなぜそこにあるのか』, 大修館書店, 2016.9.

大西拓一郎 (編)

『新日本言語地図 ―分布図で見渡す方言の世界―』, 朝倉書店, 2016.12.

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「方言地理学の研究動向」, 『方言の研究』 2, pp.83-97, ひつじ書房, 2016.9.

《データベース類》

・『全国方言分布調査 (FPJD) 調査結果・新日本言語地図 (NLJ) データ』 2017.1.

http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html

・『言語地図画像データベース』 2017.3.

http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html

《その他の出版物・記事》

大西拓一郎

「方言の動詞否定辞過去形に見る日本語の重層性」, 『日本語学』 36 (2), pp.14-24, 明治書院, 2017.2.

【講演・口頭発表】

大西拓一郎

「言語地理学と方言圏論」(招待講演), 第7回嶺南漢語方言研究会 言語地理学分科会, 賀州学院, 2016.8.20.

大西拓一郎

「方言区画論と言語地理学」(招待講演), 中日方言地理学研究会, 陝西師範大学, 2016.8.23.

【研究調査】

- ・ 2016.8 和歌山県御坊市 方言敬語調査
- ・ 2016.11 長野県伊那市 言語地理学調査
- ・ 2017.3 長野県茅野市 方言記述調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「「方言圏論」への批判提起:『ことばの地理学』出版」(インタビュー記事), 毎日新聞, 2016.9.12.
- ・ 「諏訪の方言・やまうら言葉 CD 完成披露会」講師, 2016.11.19.
- ・ 「「ずら」の言語地理学」(招待講演), 平成28年度放送大学公開講演会, 諏訪市文化センター, 2016.12.10.
- ・ 「否定の「ン」原点は西日本, 瀬戸内海 舟運の塩とともに伝わる」(インタビュー記事), 山梨日日新聞, 2017.1.1.
- ・ 日本語学会 常任査読委員

山崎 誠 (やまざき まこと) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

1957 生

【学位】 博士 (学術) (東京学芸大学, 2015)

【学歴】 埼玉大学教養学部教養学科卒業 (1980), 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第 5 学年中退 (1984), 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了 (2015)

【職歴】 国立国語研究所言語計量研究部 研究員 (1984), 同 言語体系研究部第一研究室 研究員 (1988), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1995), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員 (2001), 同 第一領域長 (2003), 同 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2015), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

【所属学会】 日本語学会, 計量国語学会, 言語処理学会, 語彙研究会, 日本語教育学会, 社会言語科学会, 情報知識学会, 日本語文法学会, 日本行動計量学会, 情報処理学会, 表現学会

【学会等の役員・委員】 計量国語学会 理事

【受賞歴】

2007 言語処理学会第 12 回年次大会優秀発表賞

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 班長 (語誌データベース班)
- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: 班長 (レジスター班)
- ・ コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (B)「会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張」, 15H03212: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (B)「『昭和話し言葉コーパス』の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」, 16H03426: 研究分担者
- ・ 基盤研究 (B)「日本語の多様な表現性を支える複合辞などの『形式語』に関する総合研究」, 26284064: 研究分担者
- ・ 基盤研究 (C)「日本語教師支援のための学習者コーパス文法項目データベースの構築と公開」, 15K02654: 研究分担者
- ・ 研究成果公開促進費 (学術図書)『テキストにおける語彙的結束性の計量的研究』, 16HP5072: 代表者

【研究業績】

《著書・編書》

山崎 誠

『テキストにおける語彙的結束性の計量的研究』, 和泉書院, 2017.2.

《論文・ブックチャプター》

山崎 誠

「第 3 章 語彙 —日本語にはどんな言葉が多いの?」, 計量国語学会 (編)『データで学ぶ日本語学入門』, 朝倉書店, 2017.3.

《その他の出版物・記事》

山崎 誠

「コーパスが変える日本語の科学 —日本語研究はどのように変わるか—」, 『日本語学』 35 (13), pp.12-17, 明治書院, 2016.12.

【講演・口頭発表】

Makoto Yamazaki

“Coherence and quantitative measures of text”, International Quantitative Linguistics Conference (QUALICO) 2016, Trier, Germany, 2016.8.25.

山崎 誠

「レジスターの違いによる話しことばの変異」, シンポジウム「日常会話コーパス」 I, 国立国語研究所, 2016.9.1.

堀 恵子, 江田すみれ, 山崎 誠

「非母語話者日本語教師支援のために必要な品詞情報は何か」(ポスター発表), 2016年日本語教育国際研究大会, Bali Nusa Dua Convention Center, 2016.9.10.

宮寄由美, 山崎 誠, 柏野和佳子

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録の小説を対象とした話者属性情報付与の検討」(ポスター発表), シンポジウム「日常会話コーパス」 II, 国立国語研究所, 2017.3.1.

山崎 誠

「『分類語彙表』の特徴と問題点」, 語彙資源活用シンポジウム, 国立国語研究所, 2017.3.6.

宮寄由美, 柏野和佳子, 山崎 誠

「発話文への発話者情報付与の基本設計 —『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録の小説を対象に—」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.7.

加藤 祥, 浅原正幸, 山崎 誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーションの試行」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.7.

堀 恵子, 内丸裕佳子, 加藤恵梨, 小西 円, 山崎誠, 江田すみれ, 建石 始, 中俣尚己, 李 在鎬

「機能語用例文データベース『はごろも』の今後の展開」, 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.7.

山崎 誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『分類語彙表』を利用した漢字3文字略熟語の抽出」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.8.

山崎 誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本 灯

「語誌データベースの設計とその活用」(ポスター発表), 「通時コーパス」シンポジウム2017, 国立国語研究所, 2017.3.11.

山崎 誠, 柏野和佳子

「『分類語彙表』の多義語に対する代表義情報のアノテーション」, 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.14.

加藤 祥, 浅原正幸, 山崎 誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーション」, 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.14.

【その他の学術的・社会的活動】

・『三省堂国語辞典』編集委員

- ・日本語文法学会 学会誌委員会委員
- ・日本語教育学会 審査・運営協力員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授
- ・オンライン検索システム「中納言」講習会（講師），第1回コーパス利用講習会，国立国語研究所，2016.9.1.
- ・オンライン検索システム「中納言」講習会（講師），第2回コーパス利用講習会，国立国語研究所，2017.3.1.

横山 詔一 (よこやま しょういち) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

1959 生

【学位】博士 (心理学) (筑波大学, 1991)

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業 (1981), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得 (1983), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学 (1985)

【職歴】上越教育大学学校教育学部 助手 (1985), 国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員 (1991), 同 情報資料研究部 主任研究官 (1995), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長 (2001), 同 研究開発部門 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2009), 同 研究情報資料センター長 (2009-2013), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】認知科学, 心理統計, 日本語学

【所属学会】日本心理学会, 社会言語科学会, 計量国語学会, 日本語学会, 日本教育工学会, 行動計量学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事; 社会言語科学会 監事; 日本語学会 会計監査

【受賞歴】

2010 社会言語科学会 第9回徳川宗賢賞 (優秀賞)

2010 国立国語研究所 第1回所長賞

1997 日本教育工学会 第11回日本教育工学会論文賞

【2016年度に参画した共同研究】

・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

・基盤研究 (B) 「プロトコルを用いた個別学習者概念辞書の作成と読解力向上への教育実践的応用」, 26282052: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石塚晴通 (監修), 高田智和, 馬場 基, 横山詔一 (編)

『漢字字体史研究 二: 字体と漢字情報』, 勉誠出版, 2016.11.

《論文・ブックチャプター》

横山詔一

「電子メディアの漢字と東アジアの文字生活」, 梁 蘊嫻 (編) 『東アジアにおけるトランスナショナルな文化の伝播・交流 —メディアを中心に—』日本学研究叢書, pp.205-222, National Taiwan University Press, 2016.8.

横山詔一

「字体規範意識のデータサイエンス: 字体選好の地域差を探る」, 石塚晴通 (監修), 高田智和, 馬場 基, 横山詔一 (編) 『漢字字体史研究 二: 字体と漢字情報』, pp.64-80, 勉誠出版, 2016.11.

横山詔一

「第2章 文字・表記 —文字と社会生活はどのようにかわるの?」計量国語学会 (編) 『データで学ぶ日本語学入門』, pp.14-21, 朝倉書店, 2017.3.

《その他の出版物・記事》

横山詔一

書評「新刊・寸感」, 『日本語学』 35 (6), 明治書院, 2016.6.

横山詔一

書評「新刊・寸感」, 『日本語学』 35 (13), 明治書院, 2016.12.

【研究調査】

・ 2017.3 京都市 用法や意味の言語変化に関する研究動向調査

【その他の学術的・社会的活動】

・ 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所 運営会議委員

・ 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点事業 運営委員

・ 博報財団「児童教育実践についての研究助成」, 審査委員

【大学院教育・若手研究者育成】

・ 大学院講義

東京大学大学院総合文化研究科 (客員教授)

・ 修士論文審査

東京大学大学院総合文化研究科 (副査), 2016.7.22, 2017.2.8.

高田 智和 (たかだ ともかず) 研究系 (言語変化研究領域) 准教授

1975 生

【学位】博士 (文学) (北海道大学, 2004)

【学歴】北海道大学文学部卒業 (1999), 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了 (2001), 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了 (2004)

【職歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2005), 同 言語資源グループ 研究員 (2006), 同 言語生活グループ 研究員 (2007), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

【所属学会】日本語学会, 訓点語学会, 計量国語学会, 情報処理学会, 日本言語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会広報委員会 委員 (-2016.5); 計量国語学会 理事; 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 運営委員, 情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員; 訓点語学会 委員 (2016.11-)

【受賞歴】

2016 日本語学会大会発表賞

2013 北海道大学文学部同窓会楡文賞

2010 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010 国立国語研究所第1回所長賞

2007 日本規格協会標準化貢献賞

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 代表者
- ・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用事業」国語研プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査・研究活用 —言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」: 共同研究員

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「字体記述のデジタル化に基づく文字規範史の定位」, 26284066: 研究代表者
- ・基盤研究 (S) 「木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集」, 25220401: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「歴史的文字に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人文・情報学融合研究」, 26244041: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用」, 15H01883: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石塚晴通 (監修), 高田智和, 馬場 基, 横山詔一 (編)

『漢字字体史研究 2 —字体と漢字情報—』, 勉誠出版, 2016.11.

《論文・ブックチャプター》

石塚晴通, 高田智和

「漢字字体と文献の性格との関係 — 『漢字字体規範史データベース (石塚漢字字体資料)』の文献選定—」石塚晴通 (監修), 高田智和, 馬場 基, 横山詔一 (編) 『漢字字体史研究 2 — 字体と漢字情報—』, 勉誠出版, pp.349-359, 2016.11.

藤本 灯, 高田智和

「[人情本コーパス]の表記情報アノテーション」, 石塚晴通 (監修), 高田智和, 馬場 基, 横山詔一 (編) 『漢字字体史研究 2 — 字体と漢字情報—』, 勉誠出版, pp.222-243, 2016.11.

藤本 灯, 北崎勇帆, 市村太郎, 岡部嘉幸, 小木曾智信, 高田智和

「[人情本コーパス]の設計と構築」, 『国立国語研究所論集』12, pp.1-12, 2017.1.

《データベース類》

・日本語史研究資料 (国立国語研究所蔵) 『音韻分布図』『口語法分布図』(画像, 2016.11), 『大学抄』『絶句抄』『増補下学集』『唐話纂要』『蛮語箋』『再考増補標註古言梯』『三語便覧』『ゑんざりしことば』『音韻仮字用例』『英語箋』(画像, 2017.1), 『小三金五郎仮名文章娘節用』『梅暦余興春色辰巳園』(翻字テキスト, 2017.3)

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalld/>

《その他の出版物・記事》

高田智和

書評「新刊・寸感」, 『日本語学』35 (10), 明治書院, 2016.9.

高田智和

書評「新刊・寸感」, 『日本語学』36 (3), 明治書院, 2017.3.

高田智和

「変体仮名の国際標準化について」, 『海外平安文学研究ジャーナル インド編 2016』, pp.25-30, 2017.3.

高田智和

「国立歴史民俗博物館蔵『源氏物語』「鈴虫」の仮名字体記述 — 国立歴史民俗博物館蔵『源氏物語』「鈴虫」の仮名字体記述—」, 『古写本『源氏物語』触読研究ジャーナル』2, pp.91-102, 2017.3.

【講演・口頭発表】

高田智和, 守岡知彦

「CHISEによる漢字字体のデジタル記述 — 漢字字体規範史データベースを例として—」(ポスター発表), 日本語学会 2016 年度春季大会, 学習院大学, 2016.5.15.

高田智和

「行政用文字の符号標準化の取り組み」(招待講演), 第 61 回国際東方学会議, 日本教育会館, 2016.5.20.

早田美智子, 高田智和

「図書データ追加による「日本語研究・日本語教育文献データベース」の機能拡張」(ポスター発表), 日本語学会 2016 年度秋季大会, 山形大学, 2016.10.29.

高田智和

「変体仮名の国際標準化について」(招待講演), 第 8 回インド国際日本文学研究集会, 国際交流基金日本文化センター, 2016.11.11.

高田智和

「東アジアの文字と文字コード」, シンポジウム「漢字文化圏の 100 年 + α 」(招待講演), 富山大学, 2016.11.27.

田島孝治, 堤 智昭, 高田智和, 小助川貞次

「訓点資料の加点情報に対する階層的なデータ化の試み ―春秋経伝集解を事例として―」(ポスター発表), 人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2016), 国文学研究資料館・国立国語研究所, 2016.12.10.

大内英範, 後藤 真, 鈴木卓治, 高田智和, 古瀬 蔵

「次期 nihuINT における研究資源共有の新たなかたち」, 人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2016), 国文学研究資料館・国立国語研究所, 2016.12.10.

堤 智昭, 田島孝治, 高田智和, 小助川貞次

「コンピュータを用いた主要ヲコト点の関係性の解析」, 人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2016), 国文学研究資料館・国立国語研究所, 2016.12.10.

【研究調査】

- ・ 2016.5.24 国立国会図書館 古辞書写本調査
- ・ 2016.6.6-8 ミシガン大学図書館 昭和戦前期漢字学習書調査
- ・ 2017.3.1 漢喃研究所 ベトナム語漢文加点資料調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2016」, 国文学研究資料館・国立国語研究所, 2016.12.9-11.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ NINJAL セミナー「言語データと日本語研究」(講師), 台湾大学, 2016.9.20.
- ・ 「文字と文字とをつなぐ」(招待講演), 文字情報技術促進協議会ラウンドテーブル, マイクロソフト品川本社, 2016.10.26.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
政策研究大学大学院

新野 直哉 (にいの なおや) 研究系 (言語変化研究領域) 准教授

1961 生

【学位】 博士 (文学) (東北大学, 2010)

【学歴】 東北大学文学部文学科卒業 (1984), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1986), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退 (1988)

【職歴】 宮崎大学教育学部 助手 (1988), 同 講師 (1989), 同 助教授 (1992), 国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官 (1996), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 文献情報グループ 主任研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本近代語研究会, 表現学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 日本近代語研究会 運営委員; 日本語学会 大会企画運営委員

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第 2 回所長賞

【2016 年度に参画した共同研究】

・ 基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

・ 基盤研究 (C)「近現代の新語・新用法及び言語規範意識の研究」, 16K02751: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「レポート⑥『浮雲』における人称代名詞」, 青葉ことばの会 (編)『日本語研究法【近代語編】』, おうふう, 2016.9.

新野直哉

「“世間ずれ”の「誤用」について」, 『近代語研究』19, pp.265-283, 2016.10.

新野直哉

「平成期『読売新聞』の記事に見られる副詞“全然”に関する言語規範意識」, 『国語学研究』56, pp.1-14, 2017.3.

《その他の出版物・記事》

新野直哉

「[[研究ノート] “世間ずれ”の「誤用初出例」について」, 『言語文化研究』16, pp.29-39, 2017.3.

【講演・口頭発表】

新野直哉

「術語“慣用語”・“接頭辞(語)”が一般メディアで使用される際の意味について」(招待講演), 第 112 回漢字漢語研究会, 早稲田大学早稲田キャンパス, 2016.8.3.

新野直哉

「平成期新聞記事における副詞“全然”に関する言語規範意識」, 「近現代の新語・新用法および

言語規範意識の研究」会議，国立国語研究所，2016.9.10.
山崎 誠，相澤正夫，大西拓一郎，柏野和佳子，高田智和，新野直哉，藤本 灯
「語誌データベースの設計とその活用」（ポスター発表），「通時コーパス」シンポジウム 2017，
国立国語研究所，2017.3.11.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NINJAL 職業発見プログラム（明星学園中学校）講師，国立国語研究所，2016.8.29.
- ・「若者はなぜ「大丈夫です」と言うのか？」（コメント），『潮』9月号，2016.9.
- ・「グッド！モーニング」（取材協力），テレビ朝日，2016.8-

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
目白大学大学院

藤本 灯 (ふじもと あかり) 研究系 (言語変化研究領域) 特任助教

【学位】 博士 (文学) (東京大学, 2014)

【学歴】 東京大学文学部言語文化学科日本語日本文学専修課程卒業 (2005), 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野修士課程修了 (2007), 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程単位取得退学 (2011)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2011), 東京大学大学院人文社会系研究科研究員 (2014), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 特任助教 (2015), 同 研究系 (言語変化研究領域) 特任助教, 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員 (2016)

【専門領域】 国語学, 文献学, 古辞書

【所属学会】 日本語学会, 訓点語学会, 東京大学国語国文学会, 近代語学会, 国語語彙史研究会

【受賞歴】

2016 国立国語研究所第12回所長賞 (若手研究者奨励賞)

2016 漢検漢字文化研究奨励賞優秀賞

2015 新村出記念財団刊行助成

2014 日本語学会大会発表賞

【2016年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 共同研究員

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究 (B) 「『色葉字類抄』を中心とする本邦国語辞書収録語彙の通時的研究」, 16K16849: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立」, 16H03422: 連携研究者

【研究業績】

《著書・編書》

藤本 灯, 田中草大, 北崎勇帆

『山田孝雄著『日本文体の変遷』本文と解説』, 勉誠出版, 2017.2.

《論文・ブックチャプター》

藤本 灯

「色葉字類抄データベースの構築と展望」, 『国立国語研究所論集』11, pp.1-9, 2016.7.

藤本 灯, 田中草大, 北崎勇帆

「山田孝雄の未刊稿『日本文体の変遷』一附『院政鎌倉時代文法史』『院政鎌倉期の語法』一」, 『日本語の研究』12 (4), pp.175-182, 2016.10.

藤本 灯, 高田智和

「『人情本コーパス』の表記情報アノテーション」, 石塚晴通 (監修), 高田智和, 馬場基, 横山詔一 (編) 『漢字字体史研究2 一字体と漢字情報』 pp.222-243, 勉誠出版, 2016.11.

藤本 灯, 北崎勇帆, 市村太郎, 岡部嘉幸, 高田智和

「『人情本コーパス』の設計と構築」, 『国立国語研究所論集』12, pp.1-12, 2017.1.

《データベース類》

- ・日本語史研究資料 (東京大学文学部国語研究室蔵) 『珍説豹之巻』『四季眺望恩愛二葉草』『秋色艶麗処女七種』『清談松之調』『春色連理梅』『春色恋廻染分解』『花暦封じ文』『鶯塚千代の初声』 (画

像公開), 2016.4.

<http://kokugo.l.u-tokyo.ac.jp/data/>

- ・日本語史研究資料(国立国語研究所蔵)『小三金五郎仮名文章娘節用』『梅暦余興春色辰巳園』(翻字テキスト公開), 2017.3.

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/>

【講演・口頭発表】

藤本 灯

「『色葉字類抄』が示す消極的要素の意味するもの ―本文に明示されない事項の解明に向けて―」(招待講演), 第112回国語語彙史研究会, 奈良女子大学, 2016.4.23.

Akari Fujimoto

“Current status and prospects in the study of the Iroha-Jiruishō”, AsiaLex2016, Manila, 2016.6.2.

藤本 灯, 高田智和

「人情本コーパスの表記情報アノテーション」(招待講演), 第2回日本語の歴史的典籍国際研究集会プログラム「日本古典籍への挑戦 ―知の創造に向けて―」, 国文学研究資料館, 2016.7.29.

藤本 灯

「『いろは字類抄』の序文・跋文・奥書類に見える本書の受容」, 第115回訓点語学会研究発表会, 東京大学山上会館, 2016.11.13.

村山実和子, 銭谷真人, 藤本 灯, 岡 照晃

「近世後期口語資料の形態素解析 ―ルビ情報を利用した精度向上の試み―」(ポスター発表), 人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもんこん2016), 国文学研究資料館・国立国語研究所, 2016.12.10.

銭谷真人, 藤本 灯

「人情本コーパスの進捗状況」, 「通時コーパス」シンポジウム2017(ポスター発表), 国立国語研究所, 2017.3.11.

山崎 誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本 灯

「語誌データベースの設計とその活用」, 「通時コーパス」シンポジウム2017, 国立国語研究所, 2017.3.11.

【研究調査】

- ・2016.10 ほか 国立国会図書館 『伊呂波字類抄』写本調査
- ・2016.10 東洋文庫 『伊呂波字類抄』写本調査
- ・2016.11 神宮文庫 『伊呂波字類抄』写本調査
- ・2016.11 慶應義塾大学 『伊呂波字類抄』写本調査
- ・2016.11 静嘉堂文庫 『色葉字類抄』写本調査
- ・2016.11 蓬左文庫 『伊呂波字類抄』写本調査
- ・2016.11 京都大学 『色葉字類抄』写本調査
- ・2016.11 國學院大學 『伊呂波字類抄』写本調査
- ・2017.1 山田孝雄文庫 山田孝雄自筆資料(『日本文体の変遷』等)調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・職業発見プログラム(仙台第一高校)講師, 国立国語研究所, 2016.7.7.
- ・NINJALセミナー「言語データと日本語研究」講演, 国立台湾大学, 2016.9.20.

【大学院教育・若手研究者育成】

・ 大学院非常勤講師

成蹊大学教養カリキュラム

早稲田大学教育学部

小磯 花絵 (こいそ はなえ) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授, 領域代表

【学位】博士 (理学) (奈良先端科学技術大学院大学, 1998)

【学歴】千葉大学文学部卒業 (1994), 千葉大学大学院文学研究科修士課程修了 (1996), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (1998)

【職歴】ATR 知能映像通信研究所研修研究員 (1996), 国立国語研究所言語行動研究部 研究員 (1998), 同 主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】社会言語科学会, 言語処理学会, 日本音声学会, 人工知能学会, 日本認知科学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 理事・事業委員; 日本学術会議 特任連携会員

【受賞歴】

2002 情報処理学会山下記念研究賞

1996 人工知能学会大会論文賞

1996 人工知能学会研究奨励賞

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: リーダー
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「会話における創発的参与構造の解明と類型化」: コーディネーター

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化」, 16H03421: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「発話連鎖アノテーションに基づく対話過程のモデル化」, 26284055: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「インタラクティブ性の有無を考慮した話し言葉・書き言葉間の変換のための基礎的研究」, 25330252: 研究分担者

【研究業績】

《報告書・論集》

小磯花絵, 渡部涼子, 横森大輔, 土屋智行, 相澤正夫, 伝 康晴

『一日の会話行動に関する調査報告』, 国立国語研究所, 2017.3.

《国際会議録》

Hanae Koiso, Tomoyuki Tsuchiya, Ryoko Watanabe, Daisuke Yokomori, Masao Aizawa, and Yasuharu Den

“Survey of conversational behavior: Towards the design of a Balanced Corpus of Everyday Japanese Conversation”, *Proceedings of the 10th edition of the Language Resources and Evaluation Conference*, pp.4434–4439, Portorož, Slovenia, 2016.5.

Hanae Koiso, Yayoi Tanaka, Ryoko Watanabe, and Yasuharu Den

“A Large-Scale Corpus of Everyday Japanese Conversation: on methodology for recording naturally occurring conversations”, *Proceedings of LREC 2016 workshop on casual talk among humans and machines*, Portorož, Slovenia, 2016.5.

《データベース類》

- ・オンライン検索システム『中納言』用『名大会話コーパス』, 2016.12.

<http://pj.ninjal.ac.jp/conversation/nuc.html>

・オンライン検索システム『中納言』用『日本語話し言葉コーパス』, 2017.2.

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/chunagon.html

【講演・口頭発表】

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』の構築」, シンポジウム「日常会話コーパス」I, 国立国語研究所, 2016.9.1.

渡辺知希, 菊池英明, 高松 亮, 小磯花絵

「ストーリーテリングの習熟過程における命題構造の変化」(ポスター発表), 電子情報通信学会, 早稲田大学, 2016.12.16.

高梨克也, 西野暢助, 小磯花絵

「日常会話データの公開における倫理的・法的な問題について」, シンポジウム「日常会話コーパス」II, 国立国語研究所, 2017.3.1.

小磯花絵

「『日常会話コーパス』プロジェクト —コーパスに基づく話し言葉の多角的研究—」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.7.

前川喜久雄, 浅原正幸, 小木曾智信, 小磯花絵, 木部暢子, 迫田久美子

「日本語コーパスの包括的検索環境の実現に向けて」, 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.7.

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝 康晴, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』収録の進捗状況」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.8.

川端良子, 臼田泰如, 西川賢哉, 徳永弘子, 小磯花絵

「『日常会話コーパス』の転記基準と作業工程」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.8.

柏野和佳子, 西川賢哉, 小磯花絵

「『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版公開データの作成」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.8.

小磯花絵

「話しことばコーパスに見る助詞のイントネーション」, コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション —助詞のすがた—」, 国立国語研究所, 2017.3.9.

居關友里子, 第十早織, 伝 康晴, 小磯花絵

「日常会話コーパスのための談話行為タグの設計」(ポスター発表), 言語処理学会, 筑波大学, 2017.3.14.

臼田泰如, 川端良子, 西川賢哉, 徳永弘子, 小磯花絵

「『日常会話コーパス』の転記基準について」(ポスター発表), 言語処理学会, 筑波大学, 2017.3.14.

小磯花絵, 居關友里子, 臼田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝 康晴, 西川賢哉

「『日本語日常会話コーパス』の設計と構築」(ポスター発表), 言語処理学会, 筑波大学, 2017.3.15.

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝 康晴, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』構築における会話収録方法」(ポスター発表), 言語処理学会, 筑波大学, 2017.3.15.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・コーパス利用講習会 I, 国立国語研究所, 2016.9.1.
- ・シンポジウム「日常会話コーパス」 I, 国立国語研究所, 2016.9.1.
- ・コーパス利用講習会 II, 国立国語研究所, 2017.3.1.
- ・シンポジウム「日常会話コーパス」 II, 国立国語研究所, 2017.3.1.
- ・I-URIC フロンティアコロキウム 2016, ホテルアソシア静岡, 2017.3.2-3.
- ・コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—助詞のすがた—」, 国立国語研究所, 2017.3.9.
- ・ことば・認知・インタラクション 5, 東京工科大学蒲田キャンパス, 2017.3.13.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授
- ・博士論文審査
一橋大学大学院 (副査), 2017.2.
- ・修士論文審査
一橋大学大学院 (3件), 2017.1.
- ・大学院非常勤講師
東京外国語大学大学院

前川 喜久雄 (まえかわ きくお)

研究系 (音声言語研究領域) 教授, コーパス開発センター長

1956 年生

【学位】 博士 (学術) (東京工業大学, 2011)

【学歴】 上智大学外国語学部フランス語学科卒業 (1980), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了 (1982), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退 (1984)

【職歴】 鳥取大学教育学部 助手 (1984), 同 講師 (1987), 国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1992), 同 室長 (1994), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長 (2001), 同 言語資源グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授, 同 研究系長, コーパス開発センター長 (2009), 同 副所長 (2013-2016), 同 研究系 (音声言語研究領域) 教授 (2016), 一橋大学 連携教授 (2005-2014)

【専門領域】 音声学, 言語資源学

【所属学会】 ISCA, IPA, 日本言語学会, 日本音響学会, 日本語学会, 日本音声学会

【学会等の役員・委員】 日本音声学会 オープンサイエンス担当理事

【受賞歴】

2012 日本音声学会優秀論文集「PNLP の音声的形狀と言語的機能」, 『音声研究』15 (1)

2012 国立国語研究所第4回所長賞

2011 日本音声学会優秀論文賞「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」, 『音声研究』14 (2)

2010 国立国語研究所第1回所長賞

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」:メンバー
- ・ コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」:メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (B)「自発音声コーパスの分析による filled pause の音声学的特徴の解明」26284062: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

前川喜久雄

「千葉勉と梶山正登の仕事: その時代背景」, 『音声研究』20 (3), pp.112-114, 2016.12.

《国際会議録》

Kikuo Maekawa and Hiroki Mori

“Voice-quality difference between the vowels of filled pauses and ordinary lexical items”, *Proc. INTERSPEECH 2016*, pp.3171-3175, 2016.9.

《その他の出版物・記事》

前川喜久雄

「仮想講義 言語資源学入門」, 『日本語学』35 (13), pp.2-11, 明治書院, 2016.12.

前川喜久雄

「物理学が言語に出会った話: 千葉と梶山の母音研究 (前編)」, 『窮理』6, pp.26-32, 窮理舎, 2017.3.

【講演・口頭発表】

前川喜久雄

「千葉勉と梶山正登の仕事：その時代背景」（招待講演），第30回日本音声学会全国大会，早稲田大学，2016.9.17.

前川喜久雄，森 大毅

「日本語フィラーの声質分析」（招待講演），第334回日本音声学会研究例会，十文字学園女子大学，2016.12.3.

前川喜久雄

「言語研究と言語資源」（招待講演），人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん2016），国文学研究資料館・国立国語研究所，2016.12.9.

前川喜久雄，浅原正幸，小木曾智信，小磯花絵，木部暢子，迫田久美子

「日本語コーパスの包括的検索環境の実現に向けて」，言語資源活用ワークショップ，国立国語研究所，2017.3.7.

玉 栄，西川賢哉，前川喜久雄

「モンゴル語アクセント研究のためのデータベース」，言語資源活用ワークショップ，国立国語研究所，2017.3.7.

【その他の学術的・社会的活動】

・ *Language & Linguistics* (Sage Publishing), Editorial board member

【大学院教育・若手研究者育成】

・ 外来研究員の受入

博報財団国際日本研究フェローシップ招聘研究員（中国内蒙古大学）

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】 博士 (学術) (東京工業大学, 2016)

【学歴】 東京女子大学文理学部日本文学科卒業 (1991), 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2015)

【職歴】 富士通株式会社システムエンジニア (1991-1998), 情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター研究員 (1991-1997), 国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 日本語学

【所属学会】 計量国語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 情報処理学会情報規格調査会 学会試行標準 WG3 小委員会主査・学会試行標準専門委員会委員・学会試行標準 WG9 小委員会委員

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」:メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」:メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「『書き言葉的』と『話し言葉的』という文体差のある語の分析」, 26370554: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「ソーシャルメディアにおける市民意見を活用したシティプロモーション」 16H02913: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張」, 15H03212: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「論理的文章を推敲する力を涵養する Flip Education 環境の構築と評価」, 25282060: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

古賀良彦 (監修), 柏野和佳子, 市村太郎, 平本智弥 (著)

『心を癒す えんぴつでなぞる「百人一首」』, PHP 研究所, 2016.11.

【講演・口頭発表】

柏野和佳子

『『名大会話コーパス』デモンストレーション』, シンポジウム「日常会話コーパス」I, 国立国語研究所, 2016.9.1.

柏野和佳子

「学術的文章作成時に留意すべき「書き言葉的」「話し言葉的」な語の分類」, 計量国語学会第60回大会, 日本大学, 2016.10.8.

柏野和佳子, 西川賢哉

『名大会話コーパス』デモンストレーション, シンポジウム「日常会話コーパス」II, 国立国語研究所, 2017.3.1.

宮寄由美, 山崎 誠, 柏野和佳子

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録の小説を対象とした話者属性情報付与の検討」, シンポジウム「日常会話コーパス」Ⅱ, 国立国語研究所, 2017.3.1.

宮壽由美, 柏野和佳子, 山崎 誠

「発話文への発話者情報付与の基本設計 — 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録の小説を対象に一」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.7.

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝 康晴, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』収録の進捗状況」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.8.

柏野和佳子, 西川賢哉, 小磯花絵

「『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版公開データの作成」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ2016, 国立国語研究所, 2017.3.8.

山崎 誠, 柏野和佳子

「『分類語彙表』の多義語に対する代表義情報のアノテーション」(ポスター発表), 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.14.

柏野和佳子, 立花幸子, 平本智弥, 関 洋平

「市民意見の収集システムで得られたツイートからの「保育園」「教育」に関する意見抽出」(ポスター発表), 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.15.

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝 康晴, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』構築における会話収録方法」(ポスター発表), 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.15.

小磯花絵, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝 康晴, 西川賢哉

「『日本語日常会話コーパス』の構築」(ポスター発表), 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.15.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「辞書引きコーナー」(担当), ニホンゴ探検2016, 国立国語研究所, 2016.7.16.
- ・NINJAL ジュニアプログラム(立川市立第六小学校)(出前授業講師), 2016.6.21.
- ・NINJAL ジュニアプログラム(立川市立西砂小学校)(出前授業講師), 2016.10.22.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・外来研究員の受入
博報財団国際日本研究フェロシップ招聘研究者
- ・オンライン検索システム「中納言」講習会(講師), 第1回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2016.9.1.
- ・オンライン検索システム「中納言」講習会(講師), 第2回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2017.3.1.

山口 昌也 (やまぐち まさや) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

1968 生

【学位】 博士 (工学) (東京農工大学, 1998)

【学歴】 東京農工大学工学部数理情報工学科卒業 (1992), 東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了 (1994), 東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了 (1998)

【職歴】 東京農工大学工学部 助手 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 研究員 (2006), 同 主任研究員 (2008), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本教育工学会, 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会

【受賞歴】

2007 財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2016 年度に参画した共同研究】

・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」:メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的萌芽研究「即時性と教育効果を考慮した協調学習過程の構造化手法に関する研究」, 26560135:研究代表者
- ・基盤研究 (B) 『「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究』, 16H03426:研究分担者
- ・学習院大学・人文科学研究所共同研究「日本語指導者の成長を促すリソース利用に関する研究 — 授業データ活用の可能性を探る—»:客員研究員

【研究業績】

《データベース類》

- ・「観察支援システム FishWatchr Mini」, 2016.7.
<https://csd.ninjal.ac.jp/f/m.html>
- ・「全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ」(525 作品追加などの更新), 2016.10.
- ・「観察支援システム FishWatchr (ver.0.9.8.2)」, 2016.12.
- ・「全文検索システム『ひまわり』用『名大会話コーパス』パッケージ」, 2016.12.
- ・「全文検索システム『ひまわり』用『国会会議録』パッケージ」(更新), 2017.2.
- ・「全文検索システム『ひまわり』(ver.1.6.a20170316)」, 2017.3.
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/>

【講演・口頭発表】

山口昌也

「日本語学習者間の協働学習における観察・振り返り活動を支援する — 教育活動観察支援システム FishWatchr を使って—」, 第 31 回北海道大学留学生センター日本語・日本語教育研修会, 北海道大学, 2016.8.6.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『国会会議録』パッケージ」(ポスター発表), シンポジウム「日

常会話コーパス」Ⅰ，国立国語研究所，2016.9.1.

山口昌也，柳田直美，北村雅則

「モバイルデバイス向け学習者用観察支援ツールの開発」(ポスター発表)，日本教育工学会第32回全国大会，大阪大学，2016.9.18.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『国会会議録』パッケージの整備」(ポスター発表)，シンポジウム「日常会話コーパス」Ⅱ，国立国語研究所，2017.3.1.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』における言語分析支援機能の拡張」(ポスター発表)，言語資源活用ワークショップ2016，国立国語研究所，2017.3.8.

【その他の学術的・社会的活動】

・産業日本語研究会 世話人

【大学院教育・若手研究者育成】

・全文検索システム「ひまわり」講習会(講師)，第1回コーパス利用講習会，国立国語研究所，2016.9.1.

・全文検索システム「ひまわり」講習会(講師)，第2回コーパス利用講習会，国立国語研究所，2017.3.1.

石黒 圭 (いしぐろ けい) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表

【学位】 博士 (文学) (早稲田大学, 2008)

【学歴】 一橋大学社会学部卒業 (1993), 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 (1995), 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導修了 (1999)

【職歴】 一橋大学留学生センター 講師 (1999), 同 助教授 (2004), 一橋大学国際教育センター 准教授 (2010), 同 教授 (2013), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 准教授 (2015), 同 教授 (2015), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】 日本語学, 日本語教育学

【所属学会】 専門日本語教育学会, 日本語学会, 日本語教育学会, 日本語文法学会, 日本文体論学会, 表現学会, 早稲田日本語学会

【学会等の役員・委員】 表現学会 理事; 日本語教育学会 大会委員; 日中言語研究と日本語教育研究会 編集委員; 国立大学日本語教育研究協議会 代表理事; 日本語学会 評議員; 日本語文法学会 評議員

【受賞歴】

2009 第7回日本語教育学会奨励賞

【2016年度に参画した共同研究】

・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: リーダー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究」, 16H0343: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「大学・大学院でのキャリア形成に資する在学段階別日本語ライティング教育の開発と評価」, 26284072: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「社会科学系基礎文献における語彙の分野横断的包括分析調査と Web 辞書の試作」, 26370597: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究」, 15H01884: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「講義理解における要約力に関する研究」, 16K02825: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石黒 圭

『語彙力を鍛える 一量と質を高めるトレーニング』, 光文社, 2016.5.

五味政信, 石黒 圭 (編)

『心ときめくオキテ破りの日本語教授法』, くろしお出版, 2016.5.

石黒 圭

『書きたいことがすらすら書ける! 「接続詞」の技術』, 実務教育出版, 2016.7.

《論文・ブックチャプター》

石黒 圭

「教師は何もしなくていい 学習者が主体的に学べる環境作り」, 五味政信, 石黒 圭 (編) 『心ときめくオキテ破りの日本語教授法』, pp.170-184, くろしお出版, 2016.5.

石黒 圭

「社会科学専門文献の接続詞の分野別文体特性 一分野ごとの論法と接続詞の選択傾向との関係一」, 庵功雄, 佐藤琢三, 中俣尚己 (編) 『日本語文法研究のフロンティア』, pp.161-182, くろしお出版, 2016.6.

石黒 圭

「わかりやすい文章表現の条件」, 野村雅昭, 木村義之 (編) 『わかりやすい日本語』, pp.141-152, くろしお出版, 2016.10.

石黒 圭

「日本語教育専攻大学院留学生のための語彙シラバス」, 森 篤嗣 (編) 『現場に役立つ日本語教育研究 2 ニーズを踏まえた語彙シラバス』, pp.159-178, くろしお出版, 2016.10.

《その他の出版物・記事》

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (25) 臨時一語の機能」, 『指導と評価』 62-4, pp.39-41, 2016.4.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (26) 接頭辞による限定」, 『指導と評価』 62-5, pp.42-44, 2016.5.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (27) 自動詞と他動詞」, 『指導と評価』 62-6, pp.33-35, 2016.6.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (28) 混成語の作り方」, 『指導と評価』 62-7, pp.39-41, 2016.7.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (29) 副詞に表れる気持ち」, 『指導と評価』 62-8, pp.36-38, 2016.8.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (30) 比喩の使い手」, 『指導と評価』 62-9, pp.36-38, 2016.9.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (31) 二つのタイプの受身文」, 『指導と評価』 62-10, pp.36-38, 2016.10.

石黒 圭

「オノマトペ」をあなどれない三つの理由」, YOMIURI オンライン, 2016.10.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (32) 動詞の力を強くする」, 『指導と評価』 62-11, pp.36-38, 2016.11.

石黒 圭

「接続詞は論理的か」, 『月刊経団連』 64-11, p.45, 2016.11.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (33) 助詞の不思議」, 『指導と評価』 62-12, pp.39-41, 2016.12.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (34) 主述関係が重視される理由」, 『指導と評価』 63-1, pp.36-38, 2017.1.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (35)」, 『指導と評価』 63-2, pp.36-38, 2017.2.

石黒 圭

「読点はここに打て! 文章は読んでもらってナンボ」, 『望星』 48-2, pp.10-17, 東海大学出版会, 2017.2.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (36)」, 『指導と評価』 63-3, pp.39-41, 2017.3.

【講演・口頭発表】

石黒 圭

「日本語教室のピア・リーディング —協働学習はどうすればうまくいくのか—」(招待講演), 日本語教育学会 2016 年度研究集会第 4 回北海道地区, 北海道大学, 2016.7.2.

佐野彩子, 石黒 圭, 蒙 ユン, 布施悠子, 志賀玲子

「クラウドソーシング発注書における日本語表現のパイロット調査」(招待講演), 第 18 回日本テレワーク学会, ちよだプラットフォームスクウェア, 2016.7.3.

石黒 圭

「文書作成における接続詞の役割 —接続詞を使うと文書は論理的になるのか—」(招待講演), テクニカルコミュニケーションシンポジウム 2016, 工学院大学, 2016.8.25.

田中啓行, 霍 沁宇, 胡 方方, 石黒 圭

「学術的文章のピア・リーディングにおける読解課題の設計に関する一考察」, 日本語教育学会秋季大会, ひめぎんホール, 2016.10.9.

布施悠子, 石黒 圭

「学術的文章の協働学習における教師のフィードバックについての一考察」(ポスター発表), 日本語教育学会秋季大会, ひめぎんホール, 2016.10.9.

胡 方方, 石黒 圭

「ピア・リーディング授業における合意形成のプロセス —多肢選択的な課題と自由記述式の課題を比較して—」, 2016 年度上海外国語大学日本学国際シンポジウム, 上海外国語大学, 2016.11.12.

石黒 圭, 胡 方方

「教室談話の分析は, いかに日本語教育に生かせるか」(招待講演), 国立国語研究所日本語教師セミナー, 国立国語研究所, 2017.1.28.

石黒 圭, 烏 日哲

「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の分析」(招待講演), 国立国語研究所日本語教育研究領域合同研究発表会, 国立国語研究所, 2017.2.4.

石黒 圭

「文章理解において学習者は文脈情報をどう生かすか —中国語母語話者を対象にしたケーススタディー—」(招待講演), 日本台湾交流協会台北事務所, 文藻外語大学, 2017.3.25.

【研究調査】

- ・ 2016.6.1-5 黒竜江大学日本語学科 (中国哈爾濱市) 日本語文章の語彙理解調査
- ・ 2016.11.13-16 青島大学日本語学科 (中国青島市) 日本語文章の語彙理解調査
- ・ 2017.3.16-20 中山大学日本語学科 (中国広州市) 日本語文章の語彙理解調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 国立国語研究所日本語教師セミナー, 国立国語研究所, 2017.1.28.
- ・ 日本語教育研究領域合同研究発表会「日本語学習者のコミュニケーションの解明に向けて」, 国立国語研究所, 2017.2.4.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「断り上手」(取材協力), 『MEN'S NON-NO』 2016 年 7 月号, 2016.6.10.
- ・ 「語彙力の強化」(出演), 「視点・論点」, NHK E テレ, 2016.6.17.

- ・「日本語の言葉」(招待講演), 第 692 回東京 YMCA 午餐会, 東京大学 YMCA, 2016.6.23.
- ・「OH! HAPPY MORNING」(出演), JFM, 2016.6.30.
- ・「ようこそ, ドキドキ・ワクワクの世界へーオノマトペの不思議ー」(講義), ニホンゴ探検 2016, 国立国語研究所, 2016.7.16.
- ・「若者はなぜ『大丈夫です』と言うのか?」(コメント), 『潮』9月号, 2016.8.5.
- ・「羽鳥慎一モーニングショー」(コメント), テレビ朝日, 2016.8.18.
- ・「教科書読み取れない」(インタビュー記事), 『東京新聞』, 2016.8.21.
- ・「ずるい『書き方』完全マニュアル」(取材協力), 『日経ビジネスアソシエ』2016年10月号, 2016.9.10.
- ・「ニュースの視点 国語に関する世論調査からみる日本語の変遷」(出演), TBS ニュースバード, 2016.10.3.
- ・「読解 読みのスキルを育て, 言語力と思考力を伸ばす」(招待講演), 第 8 回国際ナショナル日本語教師会研究会, アメリカン・スクール・イン・ジャパン, 2016.10.22.
- ・「中国人学生の自然な日本語の使い方」(招待講演), 日中友好会館「JENESYS2.0」中国大学生訪日団第 28 陣セミナー, ホテルイースト 21 東京, 2016.10.24.
- ・「外国人の『誤用』日本人の『誤用』」(講演), 大学共同利用機関シンポジウム 2016, アキバ・スクエア, 2016.11.27.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
 - 一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授
- ・大学院非常勤講師
 - 南山大学大学院
- ・「聴解における予測の役割とその指導法」(ゲストスピーカー), 早稲田大学日本語教育研究科教育文法論, 早稲田大学, 2016.7.1
- ・第 22 回 NINJAL チュートリアル「学習者コーパスを使って研究しよう!」(講師), 大阪大学豊中キャンパス, 2017.2.17.
- ・第 23 回 NINJAL チュートリアル「学習者コーパスを使って研究しよう!」(講師), 国立国語研究所, 2017.2.24.
- ・博士論文審査
 - 一橋大学大学院 (主査) 2 件, 2016.6, 2017.3.
 - 一橋大学大学院 (副査) 1 件, 2017.3.
- ・外来研究員の受入 (1 名)

宇佐美 まゆみ (うさみ まゆみ) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授

【学位】博士 (教育学 (Ed.D)) (ハーバード大学, 1999)

【学歴】立教大学文学部心理学科卒業 (1981), 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科修士課程修了 (1991), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科博士課程単位取得修了 (1992)

【職歴】財団法人交流協会台北事務所 日本語教育専門家 (1984), コルビー大学現代外国語学部 客員講師 (1987), シカゴ大学東アジア言語・文化学部 専任講師 (1988), 昭和女子大学文学部 専任講師 (1993), 東京外国語大学外国語学部 助教授 (1997), 同 教授 (2002), 同 大学院地域文化研究科言語教育学講座 教授 (2005), 同 総合国際学研究院 教授 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (日本語教育研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学

【所属学会】社会言語科学会, 日本語教育学会, 日本語用論学会, 日本語学会, 日本心理学会, 日本社会心理学会, ヨーロッパ日本語教師会, 言語処理学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 理事・発表賞選考委員長; 大学日本語教員養成課程研究協議会 監事; 日本語ジェンダー学会 評議員

【2016 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: リーダー
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「日本語の間接発話理解: 第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」: コーディネーター

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A)「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・基盤研究 (A)「つかえタイプの非流ちょう性に関する通言語的調査研究」, 15H02605: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「公用語の地域差・時代差に関する社会言語学的総合研究」, 16H03420: 研究分担者
- ・基盤研究 (C)「観光接触場面におけるホスピタリティと日本語の役割: 日本のオモテナシとポライネス」, 15K02653: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

宇佐美まゆみ

「自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材を使った『対話』と『会話』の教育」, 『ヨーロッパ日本語教育』20, pp.231-236, 2016.6.

宇佐美まゆみ

「なぜポライとなつてもりがインポライトになるのか —ディスコース・ポライネス理論の観点から日本語教育に示唆できること—」, 『ヨーロッパ日本語教育』21, pp.73-81, 2017.3.

【講演・口頭発表】

宇佐美まゆみ, 東 伴子, 高木三知子

「なぜポライトなつもりがインポライトになるのか —ディスコース・ポライトネス理論の観点から日本語教育に示唆できること—」(パネル『インポライトネスと日本語教育 —異文化理解促進のために日本語教育に何ができるか—』), 第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, Ca' Foscari University of Venice, 2016.7.8.

Mayumi Usami

“Discourse Politeness Theory as an interpersonal theory”, 第31回国際心理学会, パシフィコ横浜, 2016.7.26.

宇佐美まゆみ

「ディスコース・ポライトネス理論と談話の対照研究 —異文化間ミスコミュニケーションの未然防止と日本語教育に示唆できること—」(招待講演), 第8回中日対照言語学シンポジウム, 延辺大学, 2016.8.20.

宇佐美まゆみ

「NCRB 開発の趣旨と活用方法, 今後の課題」(招待講演), 北京外国語大学 特別講義, 北京外国語大学, 2016.8.25.

宇佐美まゆみ

「NCRB 開発の趣旨と活用方法, 今後の課題」(招待講演), 仁川大学 特別講義, 仁川大学, 2016.8.31.

宇佐美まゆみ

「自然会話コーパスの構築と第二言語教育」(招待講演), KAFLE (韓国外国語教育学会), 韓国外国語大学, 2016.9.3.

宇佐美まゆみ

「インドネシア人日本語観光ガイドのコミュニケーション行動の分析 —ポライトネスとオモテナシの観点から—」, ICJLE (日本語教育国際研究大会), Bali Nusa Dua Convention Center, 2016.9.10.

宇佐美まゆみ

「NCRB 開発の趣旨と活用方法 —自然会話教材作成支援機能を中心として—」, ICJLE (日本語教育国際研究大会), Bali Nusa Dua Convention Center, 2016.9.10.

宇佐美まゆみ

「日本語教育学という視点からの自然会話の研究」(招待講演), 早稲田大学日本語教育研究科小林ミナ研究室主催ゲストセッション, 早稲田大学, 2017.1.26.

宇佐美まゆみ

「『BTSJ 自然会話コーパス』とはどのようなもので, それを使って何ができるのか」(招待講演), 国立国語研究所日本語教師セミナー, 国立国語研究所, 2017.1.28.

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語会話コーパスと共同構築型自然会話リソースバンク(NCRB)の活用法」(招待講演), 日本語教育研究領域合同研究集会「日本語学習者のコミュニケーションの解明に向けて」, 国立国語研究所, 2017.2.4.

宇佐美まゆみ

「ディスコース・ポライトネス理論の展開と第二言語習得論」(招待講演), 第2言語習得研究会第96回研究会, お茶の水女子大学, 2017.2.18.

Mayumi Usami

“Language education and political issues: why do political issues matter in language classroom?”

(招待講演), CJSJ/JSPS Symposium, UC Berkeley, 2017.2.24.

宇佐美まゆみ

「本公募研究企画の趣旨に代えて：日本語の間接発話理解とポライトネス —子供, 外国人, そして人工知能は, いかにポライトネスを習得するのか」, 「日本語の間接発話理解：第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」共同研究発表会, 国立国語研究所, 2017.3.3.

宇佐美まゆみ

「語用論のために必要なトランスクリプトとは? —BTSJ 日本語会話コーパスとその比較文化語用論における意義」, 第1回 BTSJ 日本語会話コーパス活用シンポジウム, 国立国語研究所, 2017.3.4.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・第1回 BTSJ 活用方法研究会, 国立国語研究所, 2016.5.28.
- ・第2回 BTSJ 活用方法研究会, 国立国語研究所, 2016.11.29.
- ・第3回 BTSJ 活用方法研究会, 九州大学伊都キャンパス, 2016.12.12.
- ・国立国語研究所日本語教師セミナー, 国立国語研究所, 2017.1.28.
- ・日本語教育研究領域合同研究集会「日本語学習者のコミュニケーションの解明に向けて」, 国立国語研究所, 2017.2.4.
- ・「日本語の間接発話理解：第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」共同研究発表会, 国立国語研究所, 2017.3.3.
- ・第1回 BTSJ 日本語会話コーパス活用シンポジウム, 国立国語研究所, 2017.3.4.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「あさいち」(企画協力), NHK, 2017.1.29-2.13. (9回)

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
首都大学東京大学院
- ・博士論文審査
東京外国語大学大学院 (外部審査委員), 2017.3.

野田 尚史 (のだ ひさし) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹

1956 生

【学位】博士 (言語学) (筑波大学, 1999)

【学歴】大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業 (1979), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了 (1981), 大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退 (1981)

【職歴】大阪外国語大学国語学部 助手 (1981), 筑波大学文芸・言語学系 講師 (1985), 大阪府立大学総合科学部 講師 (1991), 同 助教授 (1993), 同 教授 (1999), 大阪府立大学人間社会学部 教授 (2005), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授 (2012), 同 センター長 (2015-2016), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹 (2016)

【専門領域】日本語学, 日本語教育学

【所属学会】日本語学会, 日本語教育学会, 日本言語学会, 日本語文法学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 計量国語学会, 日本語用論学会, 関西言語学会, 専門日本語教育学会, ヨーロッパ日本語教師会, American Association of Teachers of Japanese, Canadian Association for Japanese Language Education

【学会等の役員・委員】日本語学会 理事・評議員; 日本語教育学会 審査・運営協力員; 日本言語学会 事務局長・評議員; 日本語文法学会 評議員; 社会言語科学会 理事・学会誌編集委員長・徳川宗賢 賞選考委員; 言語系学会連合 運営副委員長; 文化審議会国語分科会 臨時委員

【受賞歴】

2006 第4回日本語教育学会奨励賞

【2016年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「とりたて表現」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: メンバー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究」, 15H01884: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究」, 16H03438: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」, 15H03210: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野田尚史

「非母語話者の日本語理解のための文法」, 庵 功雄, 佐藤琢三, 中俣尚己 (編) 『日本語文法研究のフロンティア』, pp.307-326, くろしお出版, 2016.5.

野田尚史, 中島晶子, 村田裕美子, 中北美千子

「日本語母語話者との対話における中級日本語学習者の聴解困難点」, 『ヨーロッパ日本語教育』 20, pp.219-224, 2016.6.

田中真理, 迫田久美子, 野田尚史

「日本語学習者コーパスにおける対話 —ロールプレイ, メール, エッセイの分析をとおして—」, 『ヨーロッパ日本語教育』 20, pp.102-119, 2016.6.

野田尚史

「日本語の文の構造とわかりにくさ」, 木村義之 (編) 『わかりやすい日本語』, pp.35-48, くろしお出版, 2016.10.

野田尚史

「話しことばの動的な文法 —日本語学習者が日本語を聞いたり話したりするために—」, 『日中言語研究と日本語教育』 9, pp.1-12, 好文出版, 2016.10.

《その他の出版物・記事》

野田尚史

「日本語構造体コーパスの有用性と課題 —条件節を含む複文を例として—」, KLS, 36, p.215, 関西言語学会 2016.6.

野田尚史

「来日外国人と話す一番簡単な方法」, YOMIURI オンライン, 2016.10.19.

野田尚史

「[書評]『談話資料 日常生活のことば』(現代日本語研究会 遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編 ひつじ書房 2016年)」, 『ことば』 37, pp.138-142, 現代日本語研究会, 2016.12.

【講演・口頭発表】

野田尚史, 小西 円, 桑原陽子, 穴井宰子, 中島晶子, 村田裕美子

「実生活に役立つ初級日本語読解教材の作成と試用」, 第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, カ・フォスカリ大学, 2016.7.7.

野田尚史

「日本語のとりたて表現 —対照言語学的な観点から—」(招待講演), 神田外語大学大学院言語教育講演会, 神田外語大学, 2016.7.30.

野田尚史

「限定を表すとりたて表現はどんなときに使われるか? —日本語とスペイン語の対照研究—」, 2016年日本語教育国際研究大会 (Bali-ICJLE(2016)), Bali Nusa Dua Convention Center, 2016.9.10.

中北美千子, 野田尚史

「日本語学習者の聴解過程の解明に向けて」, 日本語教育研究領域合同研究発表会「日本語学習者のコミュニケーションの解明に向けて」, 国立国語研究所, 2017.2.4.

野田尚史

「とりたて表現の対照研究を行う意義と方法」, 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクト合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa), 国立国語研究所, 2017.2.19.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア —形態論・意味論・統語論を中心に—」, キャンパスプラザ京都, 2016.3.11.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「中級日本語学習者の聴解の実態」(招待講演), 国際日本語普及協会 (AJALT) 会員研修, 2016.7.28.
- ・「日本語コミュニケーション教育のための文法」(招待講演), 福岡 YWCA 日本語教師養成講座修了生会第 37 回研修会, 2016.10.22.
- ・「外国の人たちに日本語でどう接するか? —やさしい日本語の使用と相手の立場に立った理解—」(招待講演), 福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座, こくさいひろば (福岡市), 2016.11.19; えるピア久留米生涯学習センター (久留米市), 2016.11.20; 八幡西生涯学習総合センター (北九州市), 2016.11.21.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
首都大学東京大学院
大阪府立大学大学院
- ・博士論文審査
一橋大学大学院 (副査), 2017.1.

野山 広 (のやま ひろし) 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授

1961 生

【学位】 修士 (文学) (早稲田大学, 1988), 修士 (日本語応用言語学) (モナシユ大学, 1995), 修士 (教育学) (早稲田大学, 1996)

【学歴】 早稲田大学卒業 (1985), 早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了 (1988), 豪州モナシユ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了 (1995), 早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了 (1996), 早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学 (2001)

【職歴】 文化庁文化庁国語課 専門職員 (日本語教育調査官) (1997), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員 (2004), 同 領域長 (2005), 同 整備普及グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員 (2009), 同 准教授 (2010), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 応用言語学, 日本語教育学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究

【所属学会】 基礎教育保障学会, 日本語教育学会, 社会言語科学会, 異文化間教育学会, 移民政策学会, ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】 基礎教育保障学会 常任理事・副会長; 日本語教育学会 代議員・大会委員会委員・多文化系学会連携協議会会長; 移民政策学会 理事・企画委員; 異文化間教育学会 常任理事・若手交流委員会委員長; 多文化社会専門職機構 代表理事; 日本語プロフィেশンシー研究会 監事; 港区国際化推進アドバイザー会議 委員長 (座長)

【2016 年度に参画した共同研究】

・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

・ 挑戦的萌芽研究「基礎教育保障学の構築に向けた萌芽研究」, 16K13454: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野山 広

「CLD 生徒に対する縦断調査の結果から窺える対話と継承語の重要性」, 『ヨーロッパ日本語教育』20, pp.322-327, 2016.6.

野山 広, 桶谷仁美

「CLD 児童・生徒の言語環境の整備と日本型多文化共生社会 —社会参加という観点から—」, 『異文化間教育』44, pp.18-32, 2016.9.

野山 広

「基礎教育保障学会の設立と識字・日本語学習をめぐる新たなうねり —多様な教育機会確保法案の成立を視野に入れつつ—」, 『部落解放研究』205, pp.159-181, 2016.10.

《その他の出版物・記事》

野山 広, 北川裕子, 伽羅谷美穂, 佐々木久美子, 成田雅与

「違いを超えて, 生き方を選択できる地域づくり~多様性を認めた先にあるもの~」, 『日本女性会議 2016 秋田 みつめてみとめてあなたと私~多様性 (ダイバーシティ) とは~報告書』, pp.114-123, 2017.3.

【講演・口頭発表】

野山 広

「複言語・複文化環境に生きる子どもの可能性探究とネットワーク構築の重要性 —CLD 児のこ
とばの学びを日本語の位置付けとバイリンガル教育の観点から考える—」, 東海大学ヨーロッパ
学術センター主催ワークショップ, 東海大学ヨーロッパ学術センター, 2016.4.30.

鎌田 修, 伊東祐郎, 嶋田和子, 西川弘幸, 野山 広, 六川雅彦

「日本語口頭能力試験“JOPT”の開発とその意義:アカデミック, ビジネス, そしてコミュニティー
部門における共生に基づく言語使用能力の測定」(パネル), 第20回ヨーロッパ日本語教育シン
ポジウム, カ・フォスカリ大学, 2016.7.9.

野山 広, 嶋田和子, 村田晶子

「在住外国人の日本語会話能力と言語生活に関する縦断研究 —Welfare Linguistics という観点か
ら—」(パネル), 第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, カ・フォスカリ大学, 2016.7.9.

野山 広

「日本語口頭能力テスト JOPT が目指している口頭能力記述化のこころみ~評価指標の開発から
わかったこと」, ICJLE2016 (International Conference of Japanese Language Education 2016),
Bali Nusa Dua Convention Center, 2016.9.11.

野山 広

「日本語学習者コーパス研究の展望」, ICJLE2016 (International Conference of Japanese Language
Education 2016), Bali Nusa Dua Convention Center, 2016.9.11.

野山 広

「日本語学習者コーパス研究の展望~縦断調査の結果を踏まえながら~」, 国立国語研究所日本語
教師セミナー, 北京師範大学, 2016.10.21.

野山 広

「学びの場の確保とリテラシー教育の重要性~日本語の位置づけの多様性という観点から~」, 第
62回全国夜間中学校研究大会, ユートリヤすみだ生涯学習センター, 2016.12.1.

野山 広

「多文化化する地域~日本語を通じた地域住民とのコミュニケーション~」, 上智大学短期大学学
部特別公開講座, 上智大学短期大学学部, 2017.1.19.

迫田久美子, 野山 広

「学習者コーパスに見る外国人と日本人のコミュニケーション」, 日本語教育研究領域合同研究発
表会「日本語学習者のコミュニケーションの解明に向けて」, 国立国語研究所, 2017.2.4.

【研究調査】

- ・2016.10 中国・北京師範大学 北京師範大学, 北京日本学研究センターとの協働による縦断調査
- ・2017.3 秋田県能代市 OPI (Oral Proficiency Interview) の枠組みを活用した, 日本語学習者
の会話力, 言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査等

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「多文化共生社会と地域日本語教育」, 西東京市日本語ボランティア入門講座, 西東京市役所田無庁
舎, 2016.5.16.
- ・「多文化共生社会と地域日本語教育~その醍醐味と可能性」, 足立区日本語ボランティア支援講座,
足立区エルソフィア (梅田地域学習センター), 2016.6.7.
- ・「外国人児童・生徒教育の今日的な課題 —バイリンガル教育の観点から—」, 東京都専門性向上研修:

- 日本語指導の基礎・基本（初期指導），東京都教職員研修センター，2016.8.9.
- ・「異文化間のコミュニケーションの重要性と日本語の位置づけ」，佐賀県多文化共生基盤づくり：地域日本語教育コーディネーター養成講座，佐賀商工ビル，2016.9.3.
 - ・「複言語・複文化環境に生きる子どもの可能性」，ジャカルタ日本人学校講演会，ジャカルタ日本人学校，2016.9.15.
 - ・「複言語家族における親子の日本語〈リテラシー〉」，チーム・もっとなぐ第2回ワークショップ，Bildungszentrum in Bildungscampus Nürnberg，2016.9.25.
 - ・「複言語家族における親子の日本語と読み書き〈リテラシー〉」，ブラウンシュバイク邦人保護者会，ブラウンシュバイク生涯学習センター，2016.9.28.
 - ・「多言語環境における言語習得プロセスとそれに伴う補習校の支援方法」，ドイツ補習授業校（全国研修会），ベルリン・中央学園，2016.10.1.
 - ・「基礎教育に不可欠な381字の生活基本漢字から考えるー複言語環境における子どもの日本語と読み書き〈リテラシー〉ー」，特定非営利法人日本語教育ボランティア協会（JABORA），クリエート浜松，2016.10.15.
 - ・「地域に定住した外国人（日本語学習者）の日本語使用者としての対話力を育てる≡「声」を聴く！～約10年間，学習者，支援者，関係者に寄り添いながら，協働で実施・展開してきた縦断調査から見えてきたこと～」，特定非営利法人日本語教育ボランティア協会（JABORA），クリエート浜松，2016.12.17.
 - ・「多様性を意識した地域日本語教育の展開と留学生の存在の重要性～日本の人口減少と多言語・多文化化の現状を踏まえつつ～」，平成28年度兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業キックオフシンポジウム「留学交流を通じた多文化共生」，兵庫県国際交流会館，2017.1.27.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
政策研究大学院大学
東海大学大学院

福永 由佳 (ふくなが ゆか) 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員

【学位】 修士 (日本語教育) (ウイスコンシン大学, 1993)

【学歴】 金沢女子大学文学部英米文学科卒業 (1991), ウイスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了 (1993)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員 (2001), 同 日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員 (2009), 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員 (2016)

【専門領域】 日本語教育学, 社会言語学, 複数言語使用, 識字

【所属学会】 日本語教育学会, 社会言語科学会, 日本言語政策学会, 日本質的心理学会, 言語管理研究会

【学会等の役員・委員】 日本質的心理学会 研究交流委員; 言語管理研究会接触場面分科会 運営委員

【2016年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」:メンバー
- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」:メンバー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (C)「多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関する研究 —在日パキスタン人を中心に」, 26370522:研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

福永由佳

「“パキスタンストリート”の言語景観 —自律, 排除, そして共存—」, 『ことばと社会』18, pp.143-151, 三元社, 2016.10.

【講演・口頭発表】

福永由佳

「多言語使用者の言語管理 —『母語』を中心に—」, 言語管理研究会, 青山学院大学, 2016.12.17.

【研究調査】

- ・ 2016.5 三郷市 多言語使用意識調査
- ・ 2016.6 市川市・大分市 多言語使用意識調査
- ・ 2016.7 射水市・松山市 多言語使用意識調査, 多言語自然談話収録
- ・ 2016.8 千葉市・射水市 多言語使用意識調査
- ・ 2016.9 府中市 多言語使用意識調査
- ・ 2016.10 松山市 多言語使用意識調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ (取材協力) NHK 富山放送局, 2016.8.23.
- ・ (取材協力) NHK 青少年教育番組部, 2016.11-12.

石本 祐一 (いしもと ゆういち)

研究情報発信センター 特任助教 (～ 2016.12.31), コーパス開発センター 特任助教 (2017.1.1 ～)

【学位】 博士 (情報科学) (北陸先端科学技術大学院大学, 2004)

【学歴】 宇都宮大学工学部卒業 (1997), 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士前期課程修了 (2000), 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士後期課程修了 (2004)

【職歴】 東京工科大学メディア学部 助手 (2007), 同 助教 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員 (2010), 情報システム研究機構国立情報学研究所 特任研究員 (2010), 人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員 (2013), 同 研究情報資料センター 特任助教 (2013), 同 コーパス開発センター 特任助教 (2017)

【専門領域】 音響音声学, 音声工学

【所属学会】 日本音響学会, 電子情報通信学会

【受賞歴】

2016 Oriental COCOSDA 2016 ITN Best Paper Award (Yuichi Ishimoto and Mika Enomoto)

【2016 年度に参画した共同研究】

・ 基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」:メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

・ 基盤研究 (C)「音声アシスタントとの円滑な話者交替を実現する音声言語特徴の解明」, 15K00390 : 研究代表者

【研究業績】

《国際会議録》

Yuichi Ishimoto and Mika Enomoto

“Experimental investigation of end-of-utterance perception by final lowering in spontaneous Japanese”, *Proceedings of Oriental COCOSDA 2016*, pp.205-209, 2016.10.

【講演・口頭発表】

石本祐一, 寺岡丈博, 榎本美香

「韻律情報と文節係り受け構造を用いた発話末予測モデルの検討」(ポスター発表), 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会, 富山大学, 2016.9.16.

大須賀智子, 石本祐一, 黒岩眞吾, 柘植 覚

「AWA 長期間収録音声コーパスの公開について」(ポスター発表), 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会, 富山大学, 2016.9.16.

石本祐一, 近藤綾子, 竹内雅樹, 馬塚れい子

「自閉症スペクトラム者の韻律特徴の可視化・体験プログラムの開発」(ポスター発表), 日本発達神経科学学会第 5 回学術集会, 東京大学, 2016.11.26.

Yuichi Ishimoto, Takehiro Teraoka, and Mika Enomoto

“A study on prediction of end-of-utterance by prosodic features and phrase-dependency structure in spontaneous speech” (ポスター発表), 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and the Acoustical Society of Japan, Hawaii, 2016.12.2.

石本祐一

「コーパス構築における発話アノテーションの現状」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ 2016, 国立国語研究所, 2017.3.7.

石本祐一, 寺岡丈博, 榎本美香

「韻律情報と文節係り受け構造を用いた発話末予測モデルの構築」(ポスター発表), 日本音響学会 2017 年春季研究発表会, 明治大学, 2017.3.15.

浅原 正幸 (あさはら まさゆき) コーパス開発センター 准教授

1975 生

【学位】博士(工学)(奈良先端科学技術大学院大学, 2003)

【学歴】京都大学総合人間学部基礎科学科卒業(1998), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了(2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了(2003)

【職歴】奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教(2004), 国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授(2012), 同 言語資源研究系 准教授(2014), 同 コーパス開発センター 准教授(2016)

【専門領域】自然言語処理

【所属学会】情報処理学会, 言語処理学会, 言語学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会自然言語処理研究会 運営委員; 言語処理学会 編集委員

【受賞歴】

2014 吉川克正, 浅原正幸, 松本裕治

言語処理学会論文誌『自然言語処理』2014年論文賞, 「Markov Logic による日本語述語項構造解析」

2011 Yanyan Luo, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto

Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering, “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”

2010 Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto

The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine), “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”

2008 岩立将和, 浅原正幸, 松本裕治

言語処理学会第14回年次大会 優秀発表賞, 「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」

2003 浅原正幸

平成15年度情報処理学会 山下記念研究賞, 「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」

【2016年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」:メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」:メンバー
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用」:コーディネーター
- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」:リーダー

【2016年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「言語コーパスに対する読文時間付与とその利用」, 25284083:研究代表者
- ・挑戦的萌芽研究「近代語コーパスに対する統語情報アノテーションの基準策定」, 15K12888:研究代表者
- ・基盤研究(C)「「修辞機能」と「脱文脈化程度」の観点からのテキスト分析手法確立と自動化の検討」,

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

浅原正幸, 加藤 祥

「文書間類似度について」, 『自然言語処理』 23 (5), pp.463-498, 2016.12.

《国際会議録》

Takaaki Tanaka, Yusuke Miyamo, Masayuki Asahara, Sumire Uematsu, Hiroshi Kanayama, Shinsuke Mori, and Yuji Matsumoto

“Universal Dependencies for Japanese”, *Proceedings of LREC 2016*, pp.1651-1658, 2016.5.

Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto, and Toshio Morita

“Demonstration of ChaKi.NET -- beyond the corpus search system”, *Proceedings of COLING 2016, the 26th International Conference on Computational Linguistics: System Demonstrations*, pp.49-53, 2016.12.

Masayuki Asahara, Kazuya Kawahara, Yuya Takei, Hideto Masuoka, Yasuko Ohba, Yuki Torii, Toru Morii, Yuki Tanaka, Kikuo Maekawa, Sachi Kato, and Hikari Konishi

“‘BonTen’ -- corpus concordance system for ‘NINJAL Web Japanese Corpus’”, *Proceedings of COLING 2016, the 26th International Conference on Computational Linguistics: System Demonstrations*, pp.25-29, 2016.12.

Masayuki Asahara, Hajime Ono, and Edson T. Miyamoto

“Reading time annotation for ‘Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese’”, *Proceedings of COLING 2016, the 26th International Conference on Computational Linguistics*, pp.684-694, 2016.12.

Masayuki Asahara and Yuji Matsumoto

“BCCWJ-DepPara: A syntactic annotation treebank on the ‘Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese’”, *Proceedings of the 12th Workshop on Asian Language Resources (ALR12)*, pp.49-58, 2016.12.

《データベース類》

- ・コーパス開発センター 『国語研日本語ウェブコーパス』, 2017.3.
http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/nwjc/
- ・コーパス開発センター 『梵天』, 2017.3.
<http://bonten.ninjal.ac.jp/>
- ・浅原正幸 「BCCWJ-EyeTrack」, 2016.12. (中納言より配布)
- ・浅原正幸 「BCCWJ-ToriClause」, 2017.3. (中納言より配布)
- ・浅原正幸 「nwjc2vec (version 2017-SP)」, 2017.3. (DVD-R で配布)

【講演・口頭発表】

浅原正幸, 小野 創, 宮本エジソン正

「BCCWJ-EyeTracking — 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 に対する読み時間アノテーション」, 電子情報通信学会 TL, 早稲田大学, 2016.7.23.

遠藤直子, 浅原正幸, 山内雄介

「[「テキストチャットを利用した対面ディスカッション」の試み」, 教育改革 ICT 戦略大会, アルカディア市ヶ谷, 2016.9.8.

加藤 祥, 浅原正幸

「恋愛小説において物語を特徴づける表現 —タイトルと帯に見られる表現分析の試み—」(ポスター発表), 第38回社会言語科学会研究大会, 京都外国語大学, 2016.9.4.

浅原正幸, 高橋雄太

「近代語コーパスに対する統語アノテーション基準の検討」, 日本語学会2016年度秋季大会, 山形大学, 2016.10.30.

浅原正幸

「『国語研日本語ウェブコーパス』とその検索系「梵天」」, 第66回JSL漢字学習研究会, 国立国語研究所, 2017.2.25.

加藤 祥, 浅原正幸, 山崎 誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーションの試行」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2017.3.7.

前川喜久雄, 浅原正幸, 小木曾智信, 小磯花絵, 木部暢子, 迫田久美子

「日本語コーパスの包括的検索環境の実現に向けて」, 言語資源活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2017.3.8.

鈴木 類, 古宮嘉那子, 浅原正幸, 佐々木 稔, 新納浩幸

「『分類語彙表』の類義語と分散表現を利用した all-words 語義曖昧性解消」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2017.3.8.

松本理美, 浅原正幸, 有田節子

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する節の意味分類情報アノテーション —基準策定, 仕様書作成の必要性について—」(ポスター発表), 言語資源活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2017.3.8.

宮内拓也, 浅原正幸, 中川奈津子, 加藤 祥

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』への情報構造アノテーションの分析」, 言語資源活用ワークショップ, 国語研究所, 2017.3.8.

浅原正幸

「読み時間と情報構造について (ちょっとながめ)」, 言語資源活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2017.3.8.

浅原正幸, 岡 照晃

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する述語項構造アノテーションの分析」, 平成28年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション —助詞のすがた—」, 国立国語研究所, 2017.3.9.

浅原正幸

「『日本語歴史コーパス』に対する統語・意味情報アノテーション」, 「通時コーパス」シンポジウム2017, 国立国語研究所, 2017.3.11.

鈴木 類, 古宮嘉那子, 浅原正幸, 佐々木 稔, 新納浩幸

「『分類語彙表』の類義語と分散表現を利用した all-words 語義曖昧性解消」, 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.14.

浅原正幸, 岡 照晃

「nwjc2vec:『国語研日本語ウェブコーパス』に基づく単語の分散表現データ」, 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.14.

加藤 祥, 浅原正幸, 山崎 誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーション」, 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.14.

宮内拓也, 浅原正幸, 中川奈津子, 加藤 祥

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』への情報構造アノテーションの構築」, 言語処理学会第23回年次大会, 2017.3.15.

浅原正幸, 小野 創, 宮本エジソン正

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の読み時間とその被験者属性」(ポスター発表), 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.15.

田中弥生, 浅原正幸

「Yahoo! 知恵袋における修辞ユニット分析の発話機能認定に関する諸問題」, 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.16.

浅原正幸

「読み時間と情報構造について (ちょっとみじかめ)」, 言語処理学会第23回年次大会, 筑波大学, 2017.3.16.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 10th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC 2016), Scientific Committee Member, Portorož, 2016.5.23-28.
- ・ The 15th Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies (NAACL HLT-2016), Program Committee Member, San Diego, 2016.6.12-17.
- ・ The Fifth Conference on Natural Language Processing and Chinese Computing & The Twenty Fourth International Conference on Computer Processing of Oriental Languages (NLPCC-ICCPOI 2016), Program Committee Member, Kunming, 2016.12.2-6.
- ・ The 26th International Conference on Computational Linguistics (COLING-2016), Program Committee Member, Osaka International Convention Center, 2016.12.13-16.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「梵天講習会」講師, 国立国語研究所 (2016.9.28, 10.14, 10.17, 10.27, 11.04, 11.11, 11.18, 11.25), 学習院大学 (12.6), イオンコンパス大阪駅前会議室 (12.14), 国立国語研究所 (2017.1.13), 同志社大学 (1.16), 立命館大学 (1.17), 神戸大学 (1.17), 国立国語研究所 (1.20, 1.27), 東北大学 (2.13), 九州大学 (2.14), 国立国語研究所 (3.23, 3.24, 3.27, 3.28)
- ・ 「258億語の日本語コーパスをウェブで公開～国立国語研究所」(報道記事), INTERNET Watch, 2017.3.
- ・ 言語処理学会第23回年次大会発表賞 選考委員
- ・ 統計数理研究所『統計数理』64(2)「特集 統計的言語研究の現在」 編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 博士論文審査
総合研究大学院大学 (学外審査委員)

岡 照晃 (おか てるあき) コーパス開発センター 特任助教

1987 生

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2015)

【学歴】 豊橋技術科学大学工学部卒業 (2010), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了 (2012), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了 (2015)

【職歴】 京都大学大学院情報学研究科 特定研究員 (2015), 人間文化研究機構国立国語研究所言語変化研究領域 プロジェクト非常勤研究員 (2016), 同 コーパス開発センター 特任助教 (2016)

【専門領域】 計算言語学, 自然言語処理

【所属学会】 言語処理学会

【受賞歴】

2011 情報処理学会第 201 回自然言語処理研究会学生奨励賞

2009 豊橋技術科学大学平成 21 年度後期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2009 豊橋技術科学大学平成 21 年度前期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2008 舞鶴工業高等専門学校学業成績優秀賞

【2016 年度に参画した共同研究】

・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【講演・口頭発表】

村山実和子, 銭谷真人, 藤本 灯, 岡 照晃

「近世後期口語資料の形態素解析 —ルビ情報を利用した精度向上の試み—」(ポスター発表), 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2016」, 国文学研究資料館・国立国語研究所, 2016.12.10.

岡 照晃

「文字単位の多対多自動アライメントを用いた日本語歴史コーパスのルビアノテーションの自動修正」, 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2016」, 国文学研究資料館・国立国語研究所, 2016.12.10.

Teruaki Oka and Tomoaki Kono

“Original-transcribed text alignment for Manyosyu written by old Japanese language”, Language Technology Resources and Tools for Digital Humanities (LT4DH), 大阪国際会議場, 2016.12.11.

岡 照晃

「『UniDic』の拡張計画」, 語彙資源活用シンポジウム, 国立国語研究所, 2017.3.7.

岡 照晃

「『日本語歴史コーパス』短単位アノテーション作業効率化に向けた形態素解析用辞書『UniDic』の段階的特殊化の検討 —近松コーパスを例として—」, 言語資源活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2017.3.9.

岡 照晃

「nwjc2vec: 『国語研日本語ウェブコーパス』に基づく単語の分散表現データ」, 言語処理学会第 23 回年次大会 (NLP2017), 筑波大学, 2017.3.14.

山田 真寛 (やまだ まさひろ) IR 推進室 特任助教

1982 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (デラウェア大学, 2010)

【学歴】 国際基督教大学教養学部語学科卒業 (2005), デラウェア大学大学院言語学・認知科学研究科博士課程修了 (2010)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2010), 広島大学教育学研究科言語と認知の脳科学プロジェクトセンター ポスドク研究員 (2013), 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット 特定助教 (2014), 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所 IR 推進室 特任助教 (2016)

【専門領域】 言語学, 形式意味論, 言語復興

【受賞歴】

2014 京都大学学際研究着想コンテスト奨励賞

【2016 年度に参画した共同研究】

・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」:
メンバー

【2016 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究 (B) 「琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究」, 16K16824 :
研究代表者
- ・DNP 文化振興財団 グラフィック文化に関する学術研究「コトバ×デザイン×コミュニティ～消滅
危機言語復興研究におけるデザインのちから」: 研究代表者
- ・ユニバーサル財団 研究助成「コミュニティ主体の消滅危機言語の復興・地域伝統言語の世代間継承」:
研究代表者
- ・博報財団 第 11 回児童教育実践についての研究助成「地域言語学習コンテンツ制作・利用プロジェ
クトを核とした琉球諸語の復興研究」: 研究代表者
- ・トヨタ財団 研究助成プログラム「多文化・多言語社会としての日本の理解－消滅危機言語の相互
理解性と世代間継承度のための客観的尺度の創出」: 研究代表者
- ・DNP 文化振興財団 グラフィック文化に関する学術研究「絵とともに語ることばの未来 多言語表
記民話絵本のブックデザイン」: 共同研究者

【研究業績】

《論文》

山田真寛

「ドゥナン (与那国) 語の動詞形態論」, 田窪行則, ジョン・ホイットマン, 平子達也 (編) 『琉
球諸語と古代日本語 一日琉祖語の再建にむけて』, pp.249-279, くろしお出版, 2016.4.

《その他の出版物・記事》

森澤ケン, 山田真寛

『与那国の人とことば 2016』, 言語復興の港, 2016.8.

【講演・口頭発表】

山田真寛

「言語復興の港 ー消滅危機言語の復興プロジェクト」(招待講演), 立命館大学ライスボールセミ

ナー, 立命館大学, 2016.6.21.

山田真寛

「敬語体系の意味論・語用論 ―琉球与那国語の調査・分析の事例報告」(招待講演), 日本言語学会第153回大会公開シンポジウム, 福岡大学, 2016.12.4.

山田真寛

「琉球与那国語の敬語表現の意味」(招待講演), 南山大学人文学部言語学講演会, 南山大学, 2016.12.16.

山田真寛

「消滅危機言語復興コンテンツのつくりかた」(招待講演), 第11回琉球諸語研究会, 品川区第一集会所, 2016.12.17.

Masahiro Yamada, Fumi Yamamoto, Akiko Yokoyama-Tokunaga, Kayoko Shimoji, Yurie Asakawa, and Yukie Matsumura

“Picture book project for all”, The 5th International Conference on Language Documentation and Conservation, University of Hawai'i at Mānoa, 2017.3.4.

Shoichi Iwasaki, William O'Grady, Changyong Yang, Hiroyuki Nakama, Masahiro Yamada, Yukinori Takubo, and Sejung Yang

“Mutual intelligibility and mutual respect: The effect of language devaluation on self-esteem and well being”, The 5th International Conference on Language Documentation and Conservation, University of Hawai'i at Mānoa, 2017.3.3.

【研究調査】

- ・ 2016.8.12-27 沖縄県八重山郡与那国町 与那国語調査
- ・ 2016.9.5-12 鹿児島県大島郡知名町・和泊町 沖永良部語調査
- ・ 2016.9.13-16 鹿児島県大島郡与論町 与論語調査
- ・ 2016.9.17-20 鹿児島県大島郡知名町・和泊町 沖永良部語調査
- ・ 2016.9.23-28 宮城県石巻市 石巻方言調査
- ・ 2016.11.3-6 島根県隠岐郡隠岐の島町 仲村・都万方言調査
- ・ 2017.1.20-23 石川県白山市白峰町 白峰方言調査
- ・ 2017.1.26-26 沖縄県八重山郡与那国町 与那国語調査
- ・ 2017.2.28-3.1 米国ハワイ州 ハワイ語教育に関する調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「消滅危機の島言葉 絵本に 「言語の多様性知って」 立命大研究員ら出版」(取材記事), 京都新聞, 2016.5.13.
- ・ 「「言語復興の港」プロジェクトチーム カードやわらべ歌で方言学ぶ 山田さんらがワークショップ開く」(取材記事), 八重山毎日新聞, 2016.8.27.
- ・ 「「言語復興の港」PJ 島の言葉, 守り伝えて 上平川方言絵本, 児童へ」(取材記事), 南海日日新聞, 2016.9.9.
- ・ 「「言語復興の港」プロジェクト ―沖永良部語の辞書をつくろう」(招待講演), 酔庵塾, 知名公民館, 2016.9.12.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
関西学院大学大学院文学研究科「英語学特殊講義 (形式意味論入門)」

京都大学大学院文学研究科「Introduction to Transcultural Studies」

・ ゲストレクチャー

「言語復興の港 ―消滅危機言語の復興プロジェクト」, 九州大学, 2016.11.

「言語復興の港」, 福岡大学, 2017.1.



資 料

1

運営会議

運営会議規程

- ・委員は 20 名以内、うち過半数は所外の学識経験者。
- ・所内委員は、副所長、研究主幹、センター長、他所長の氏名する教授又は客員教授 若干名。
- ・会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会、人事委員会、名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
- ・議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2016 年度の開催状況

○第 1 回 2016 年 7 月 1 日 14:00～16:00（ステーションコンファレンス東京）

議事概要確認

1. 前回議事概要（案）について

審議事項

1. 所長候補者選考委員会の設置について
2. 教授（理論・対照研究領域）の選考について
3. 特任助教（コーパス開発センター）の選考について
4. 教授（言語変化研究領域）の内部選考について
5. 准教授（言語変異研究領域）の公募について
6. 特任助教（IR 推進室）の公募について
7. 名誉教授の選考について
8. 客員教員の選考について
9. 東京外大 AA 研とのクロスアポイントメントによる特任助教の選考手続きについて

報告事項

1. 第 2 期中期目標・中期計画期間に係る実績報告について
2. 平成 29 年度概算要求（案）について
3. 公募型共同研究について
4. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

○第 2 回 2016 年 10 月 1 日 14:00～17:00（ステーションコンファレンス東京）

議事概要確認

1. 前回議事概要（案）について

審議事項

1. 所長候補者の選考について
2. 人事委員会の設置について
3. 研究教育職員候補者選考（外部公募）内規に関する申合せの改正について

4. 教授（言語変化研究領域）の内部選考（昇任）について
5. 准教授（言語変異研究領域）の選考について
6. 特任助教（IR推進室）の選考について
7. 研究教育職員の任期に関する規程について

報告事項

1. 東京外大 AA 研とのクロスアポイントメントによる特任助教の公募について
2. 平成 27 年度業務の実績に関する外部評価報告書について
3. 公募型共同研究の採択について
4. 学術交流協定について
5. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

○第 3 回 2017 年 2 月 20 日 10:00～13:00（フクラシア東京ステーション）

議事概要確認

1. 前回議事概要（案）について

審議事項

1. 特任助教（博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業）の公募について
2. 名誉教授候補者の選考について
3. 客員教員の選考について

報告事項

1. 東京外大 AA 研とのクロスアポイントメントによる特任助教の選考結果について
2. 平成 29 年度運営費交付金について
3. 平成 28 事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について
4. 平成 29 年度計画（案）について
5. 学術交流協定について
6. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

所長候補者選考委員会規程

- ・委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関することを行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する（研究所内の委員を過半数とする）。
- ・委員の任期は 1 年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

所長候補者選考委員会審議状況

- 2016年7月1日 所長候補者選考委員会設置，所長候補者選考委員会（第1回）開催
2016年7月14日 所長候補者選考委員会（第2回）開催
2016年8月22日 所長候補者選考委員会（第3回）開催（メール審議）
2016年8月30日 適任者名簿を提出
(2016年10月1日 運営会議（第2回）にて田窪行則氏を所長候補者に決定)
(2016年10月12日 人間文化研究機構長に推薦)

(2) 人事委員会

人事委員会規程

- ・委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する，研究所外の者及び研究所内の者若干名で組織する。
- ・委員の任期は1年とし，再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ・委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
- ・委員会の議事は出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは委員長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。

人事委員会審議状況

- 2016年4月18日（第1回メール審議），2016年6月17日（第2回）
研究系（理論・対照研究系）教授として松本曜氏を運営会議に推薦
コーパス開発センター特任助教として石本祐一氏と岡照晃氏を運営会議に推薦
(2016年7月1日開催の運営会議（第1回）で採用決定)
2016年7月1日（第3回），2016年9月21日（第4回）
IR推進室特任助教として山田真寛氏を運営会議に推薦
研究系（言語変化研究領域）教授として小木曾智信准教授を運営会議に推薦
(2016年10月1日開催の運営会議（第2回）で採用・昇任決定)

(3) 名誉教授候補者選考委員会

名誉教授称号授与規程

- ・研究所の教授として10年以上勤務し，学術研究上特に功績があった者。
- ・研究所の教授としての勤務年数が前号の規定に満たないが，学術研究上特に顕著な功績があった者。
- ・研究所の所長又は副所長として，研究所の運営に関し功績が特に顕著であった者。
- ・名誉教授の選考は，研究所の運営会議において行う。

名誉教授候補者選考委員会審議状況

- 2016年6月17日（第1回）
名誉教授として迫田久美子氏（元国立国語研究所教授），John Bradford Whitman氏（元国立国語研究所教授）を運営会議に推薦
(2016年7月1日開催の運営会議（第1回）で称号授与決定)

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、2016年度の「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し、外部評価委員がその専門的立場から検証を行った

自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関すること、外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2016年度は6回開催した。

外部評価委員会

外部評価委員会規程

- ・委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること、共同研究プロジェクト等の評価に関すること、その他評価に関することについて審議する。
- ・委員会は10名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- ・委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- ・委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- ・委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

平成28年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成28年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価を行い、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行う。研究所が作成した、平成28年度の計画及びその実施状況が記入された「平成28年度業務の実績報告書」（「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証。

共同研究プロジェクトの評価

人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」を構成する、各基幹型共同研究プロジェクトのリーダーが作成した自己点検報告書に基づいて、外部評価委員会委員による書面審査を行った。

平成 28 年度評価にかかる外部評価委員会開催状況

○外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】（第 1 回）

2017 年 1 月 13 日 15:00～17:00（ステーションコンファレンス東京）

議事

1. 平成 28 年度国立国語研究所外部評価について
2. 今後のスケジュールについて
3. その他

○外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】（第 2 回）

2017 年 2 月 20 日 14:00～16:00（ステーションコンファレンス東京）

議事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 28 年度共同研究プロジェクト暫定評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト 平成 28 年度点検・評価報告書について
4. その他

○外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】（第 3 回）

2017 年 6 月 22 日 13:30～15:30（TKP 東京駅前カンファレンスセンター）

議事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 28 年度共同研究プロジェクト評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
4. 平成 28 年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 平成 28 年度「組織・運営」、「管理業務」の評価について
6. その他

3 広報

「Ⅲ. 国際的研究協力と社会連携」に挙げた社会連携活動の他、以下のような活動を行った。

○国語研 Web サイト <http://www.ninjal.ac.jp/>

各種催し物、データベース等、国語研の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広いコンテンツを紹介

○『国立国語研究所要覧 2016/2017』

国語研の特色や研究系・センターの活動、共同研究プロジェクト等の紹介冊子

○『国立国語研究所リーフレット 2016/2017』

○『国立国語研究所英文リーフレット』

○国語研からの御案内（メールマガジン）

シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、職員公募など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信している。原則として月 2 回発行。

○国語研ムービー

国語研の研究を分かりやすく紹介した動画を制作し、Web 配信 (Youtube) やイベント時の上映を行っている。2016 年度は以下の動画を制作、公開。

- ・国語研教授が語る「濁る音の謎」(1) 鼻濁音, (2) 連濁
- ・ことばのミニ講義「知らなかった! 気づかない方言」, 「ようこそ, ドキドキ・ワクワクの世界へ—オノマトペの不思議—」

4 所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰を行い、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし、原則として年2回行う。

○第13回所長賞：2016年度前期（対象期間：2016年4月1日～2016年9月30日）

〈特別所長賞〉

- ・ Timothy J. Vance（研究系（理論・対照研究領域）教授）

業績：Timothy J. Vance and Mark Irwin (eds.) *Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project*, John Benjamins, 2016.6.

理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版

〈所長賞〉

- ・ 大西拓一郎（研究系（言語変化研究領域）教授）

業績：大西拓一郎（著）『ことばの地理学：方言はなぜそこにあるのか』, 大修館書店, 2016.8.

理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

- ・ 船越健志（研究系（理論・対照研究領域）特任助教）

業績：Kenshi Funakoshi “Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese”, *Journal of East Asian Linguistics*, vol.25(2), pp.113-142, 2016.5.

理由：世界を代表すると認められる専門誌に掲載された学術論文

○第14回所長賞：2016年度後期（対象期間：2016年10月1日～2017年3月31日）

〈若手研究者奨励賞〉

- ・ 今村泰也（研究系（日本語教育研究領域）プロジェクト PD フェロー）

業績：今村泰也『所有表現と文法化—言語類型論から見たヒンディー語の叙述所有』, ひつじ書房, 2017.3.

理由：博士論文（ないしその改訂版）等、単著の出版

- ・ 白田泰如（研究系（音声言語研究領域）プロジェクト非常勤研究員）

業績：白田泰如「態度や関心の共有のための資源としての演技：雑談における演技の分析」, 『社会言語科学』19(2), 2017.3.

理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

- ・ 服部紀子（研究系（言語変化研究領域）プロジェクト非常勤研究員）

業績：服部紀子「江戸期蘭語学における日本語の格理解—『六格前篇』と『和蘭語法解』を比較して—」, 『日本語の研究』13(1), 2017.1.

理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

5

研究教育職員等の異動（2016年度中の異動者）

2016. 4. 1	教授	宇佐美 まゆみ	採用	研究系
2016. 4. 1	特任助教	原田 走一郎	採用（併任）	研究系
2016. 9. 1	特任助教	岡 照晃	採用	コーパス開発センター
2016.12. 1	特任助教	山田 真寛	採用	IR 推進室
2016.12.31	特任助教	石本 祐一	辞職	研究情報発信センター
2017. 1. 1	特任助教	石本 祐一	採用	コーパス開発センター
2017. 3.31	教授	Timothy J. Vance	定年退職	研究系
2017. 3.31	特任助教	船越 健志	任期満了	研究系



外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

平成 28 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

平成 29 年 6 月 22 日

はじめに

国立国語研究所は、国内外の大学及び研究機関との大規模な共同研究を通して、人間言語としての日本語（国語）が持つ2つの基本機能 — 社会におけるコミュニケーションの道具としての機能と、思考・論理・認知・創造性など人間の知的活動の基盤としての機能 — を総合的に研究し、世界の諸言語とも比較対照しながらその本質を解明することを目的とする研究所です。この研究活動を通して、人間文化に関する理解と洞察を深めるとともに、研究成果や関連する研究文献情報を研究者コミュニティ、大学ならびに一般社会に幅広く発信・提供することを主眼としています。

2009年10月に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移行して以来、第2期中期目標・中期計画期間の6年間には印刷成果物から電子成果物に及ぶ多種多様な研究成果を蓄積しました。それらの成果を踏まえ、平成28年度から第3期中期目標・中期計画期間の研究活動を推進していますが、今期の研究活動の中軸となるのは、機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」です。これの実施にあたっては、対照言語学、統語・意味解析コーパス、消滅危機言語・方言、日本語史コーパス、日常会話コーパスおよび日本語教育・日本語学習に関する6つの班に分かれ、相互に連携しながら全国的・国際的レベルの共同研究を推進しています。また、この基幹研究を補完し新領域開拓の可能性を探る研究として、外部研究者をリーダーとする合計8件の公募型共同研究を実施するとともに、人間文化研究機構が主宰する「広領域連携型基幹研究プロジェクト」と「ネットワーク型基幹研究プロジェクト」にも参画し、極めて広範囲にわたる研究活動を展開しています。

このたび、国立国語研究所に設置された外部評価委員会には、基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の研究活動を中心に、コーパス開発センター、研究情報発信センター、ならびに研究所全体の業務運営について平成28年度の実績評価をお願いしました。その評価結果がこの報告書となっています。第3期中期目標・中期計画期間の初年度のため実質的な研究成果は多くはありませんが、外部評価委員のみなさまには、改善点の指摘・要望も含め、詳細にわたる的確な評価をいただきました。この評価結果を、共同研究プロジェクトおよび各組織のPDCAサイクルに活かし、次年度はより高い水準を目指していく所存です。

平成 29 年 7 月
国立国語研究所長
影山 太郎

目 次

1. 評価結果報告書	1
1. 平成 28 年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」に関する評価結果	2
2. 平成 28 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果	84
2. 資料	99
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	100
2. 国立国語研究所平成 28 年度業務の実績に関する評価の実施について	101
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧	102
4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	103
5. 国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第 1 回)	105
国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第 2 回)	106
国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第 3 回)	107

1. 評価結果報告書

平成 28 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

平成 29 年 1 月 13 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第 1 回)

平成 29 年 2 月 20 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第 2 回)

平成 29 年 6 月 22 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第 3 回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 門倉正美

国立国語研究所平成28年度外部評価にあたって

国立国語研究所は平成28年度より第3期中期計画期間に入り、日本語教育研究部門をセンター組織から研究領域組織へと位置づけ直すなどの組織再編を行うとともに、共同研究プロジェクトを統合する基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」を開始した。

本報告書は、外部評価委員会において、平成28年度における基幹研究プロジェクトへの評価（「総合評価」）、各共同研究プロジェクトへの評価、2つのセンターへの評価、「組織・運営」「管理業務」への評価を行った結果をまとめたものである。

委員会におけるこれらの評価判定の過程で、評価基準について議論され、合意された点があるので、あらかじめ記しておきたい。

それは、「計画を上回って実施した」という評価基準をどう理解するかという点である。「計画を上回る」ということを単に字義通りに解すれば、極端な場合、当初の計画が十分に質的に高いものでなくても、ともかくも当初計画を上回る量の業績をあげれば「計画を上回って実施した」と評価されることになる。それでは、質的に高い当初計画を計画通りに実施して、「計画どおりに実施した」と評価されたものよりも、一見、高評価がなされているように見えてしまう。

本委員会では、こうした矛盾を避けるため、当初計画および達成された業績について、その質を判断し、質的に高い成果をあげたものだけを「計画を上回って実施した」と評価することにした。つまり、本委員会における「計画を上回って実施した」という評価は、「計画を上回っている」とことと、達成された成果の「質が高い」との2つの条件が満たされていることを意味している。

この点は、評価は、単に量を見るだけでなく、質を見なければならぬものであるという本義からして、妥当な判断基準である、と考える。

なお、この判断基準についての議論と合意は、前期（2012年度～2015年度）の外部評価委員会でも同様に行われたものを再確認して、踏襲したものであることを付記しておく。

平成29年6月
外部評価委員会
委員長 門倉正美

機関拠点型基幹研究プロジェクト総合評価

平成28年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

本評価書は、当該の基幹研究プロジェクトを構成する6つのプロジェクトに対する8名の外部評価委員の評価に基づいて、外部評価委員会において合議し、基幹研究プロジェクト全体を総合的に判断したものである。

狭く細分化された日本語研究を融合・総合化するために「総合的日本語研究」という学際的かつ国際的な研究枠組みのもとに、6つのテーマによる研究班が従前の研究蓄積を生かしてそれぞれの研究を初年度として順調に始動した、と評価する。中でも、「危機言語・方言」、「通時コーパス」は計画を上回る実績をあげている。

本基幹研究の中心的な特徴の一つとしてコーパスの構築とその利用による言語研究がある。この点は、6つの研究班のうち4つがコーパスを研究の柱としており、1つがドキュメンテーションとしてのデータベース構築を主要課題としている点に端的に表れている。

大規模なデータベースやコーパスの構築は国立国語研究所（以下、国語研と略記）がこれまでも「日本語話し言葉コーパス」（2004年公開）、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（2011年公開）などにおいて主導的な役割を果たしてきた領域であり、大学共同利用機関としての国語研の役割として重要かつ有用である。また、「日常会話コーパス」や「日本語歴史コーパス」などは、先進的なテーマ領域のコーパス構築に取り組むものとして高く評価できる。その一方で、国語研がコーパスに基づく言語研究を牽引しているだけに、コーパスの設計と改良およびその利用について広い視野から目配りする姿勢も必要だろう。「日常会話コーパス」と「日本語学習者コーパス」への外部評価委員の評価において当該コーパスの「目的と射程」、「データの量と質の的確さ」、「利用方法」の点検の必要性が指摘されているが、こうした点を含めて、全般的に、コーパスの構築と利用を核とする研究においては、識見に基づいた意見に対する説明責任があると思われる。今後のコーパス言語学研究を推進するためにも、シンポジウムで意見を交換すること（「日常会話コーパス」研究班、およびコーパス関連の4研究班合同のもの）に加えて、コーパスのあり方や使い方そのものをテーマとしてより広範囲に意見を求める場の確保を検討していただきたい。

日本語研究の最新成果の英語による国際的発信が積極的に展開されている点（国際シンポジウムの開催や英文による研究書の精力的刊行など）は評価できる。それと合わせて、日本語学における過去の優れた業績の英訳紹介（今年度は『寺村秀夫論文集Ⅰ－日本語文法編－』の英訳の取り組みが開始された）についても、日本語学のさまざまな領域での代表的論文集のような形での英訳が望まれる。また、アジア諸言語との対照研究という観点からは、英語圏だけでなく、中国、韓国、ロシアなどの近隣諸国や他のアジア諸国の当該学界との連携も重要だろう。この点は、一部なされて

いるが、より充実することが求められる。

教育への貢献，社会連携，社会貢献については，必要な努力がなされていると評価する。ただし，デジタル・デバイスの発展と普及を生かした，さらに効率的かつ効果的な教育貢献，社会貢献のあり方（例えば，講習会の内容のインターネットでの公開など）の検討と実現が望まれる。

《評価項目》

1. 研究成果について

公開研究発表会・講演会等，国際シンポジウム等における成果の公開，論文・論集・報告書・図書・データベース等の学術成果の刊行・公開，フィールド調査の展開等，本プロジェクトは全体として，プロジェクト初年度として妥当な量の研究成果をあげていると評価する。特に各種データベースおよび各種コーパスの構築と公開が着々と進展している点を高く評価したい。

「対照言語学」と「統語コーパス」合同によるオノマトペの国際シンポジウム開催はテーマとして，また国際的発信という点で興味深いが，その成果が「対照言語学」研究や「総合的日本語研究」にどのように生かされるのかについての説明がほしい。また，「総合的日本語研究」を志向する点からすると，複数の研究班による合同研究会や各研究班の成果の所内発表会をより多く行う必要があらう。研究分野間の壁を乗り越えて「日本語の研究を融合・総合化」し，「新たな総合的日本語研究のモデルを開拓する」（『国立国語研究所要覧 2016-2017』）というプロジェクトの目標に照らせば，「融合・総合化」がさらに踏み込んだ形で図られ，日本語研究の「新たなモデル」が具体的な形で提示されることが期待される。

各研究班においてデータベースとコーパスの構築と公開が計画通りに進み，その使用法と研究への応用についての講習会活動が東京圏だけでなく地方においても行われている点は評価に値する。

データベースやコーパスは十分に活用されることによってその有用性と効力を発揮するものである。活用を促す研究発表会，講習会，シンポジウムを地道に行っていくことは重要である。しかし，講習会は参加するための日時や場所の制約が大きく，参加者数もあまり多くないようである。データベースやコーパスの意義の周知と，利用の促進を促すために，もっと多くの人たちがアクセスしやすい形での情報提供（例えば，講習会の内容のインターネットでの公開など）を工夫する必要があるのではないかと。また，コーパスのあり方そのものについても，種々の観点から検討の必要性が提起されており，シンポジウム（「日常会話コーパス」シンポジウムやコーパス合同シンポジウム）などで一回的に意見を求めるだけでなく，より広範囲に意見を求める体制の整備や，アドバイザーボードの設置なども検討していただきたい。

2. 研究水準について

「日本語歴史コーパス」が『日本語の研究』の「学界展望」で意義ある研究として言及されたことは学術的意義の評価として認められる。また，「危機言語・方言」が取り組む地域語の復権の重要性が新聞記事によって紹介された点も，評価できる。マスメディア等への発信の機会は，研究活動の広報として積極的にとらえていく姿勢が必要だろう。

「日本語歴史コーパス」の利用登録者数が飛躍的に増大した点，「日本語歴史コーパス」を直接利用した研究論文が半年間で33件あった点は，データベースの共同利用が好反応を見せている面とし

て評価できる。また、BCCWJ コーパスの検索ツール (NINJAL-LWP For BCCWJ (NLB)) が『現代例解国語辞典』(第5版, 小学館) の編纂に使用されたことも評価できる。

国語研が力を注いでいる種々のデータベースやコーパスが、今後、学術研究および一般の用途にいつそう広範かつ効果的に利用されるようになることを期待したい。そのためにも、コーパスのあり方と使い方に関する開かれた議論、コーパスおよびツールに関する正確・詳細な解説文書の作成・公開、コーパス利用法に関するアクセスしやすい情報提供が必要と思われる。

3. 研究体制について

広く国内外の研究者を共同研究員として組織し、研究者ネットワークを構築して研究を推進している。国語研の研究内容および学術界・社会における位置と役割からして、国内外にわたる広範な研究者ネットワークを形成することと、国内外の大学・研究機関と連携していくことは重要である。この点での実績は、この課題に十分応えていると評価できる。ただし、本基幹プロジェクトのテーマである「総合的日本語研究の開拓」における「総合性」という点からすると、さらにいつそうの学際的な広がりや深みをもつことが望ましい。また、国語研の研究者ネットワークが、その研究テーマと研究活動の意義と魅力によって国内外の優れた研究者をより広範かつ多様に惹きつけることを期待したい。

大学共同利用機関として、共同利用体制を強化するために、海外の大学・機関4つを含めて合計8つの大学・研究機関と交流協定を結び、共同でデータ公開を行ったことは評価できる。

共同研究や国際会議運営に高度な助言を受けるために海外の研究機関所属の10人を含むアドバイザリーボードを「対照言語学」と、「統語コーパス」が設置したことも有意義な試みとして評価する。今後、アドバイザリーボードにおいてどのような議論がなされ、どのように研究の進展に有益だったかについて説明がなされると、アドバイザリーボードという制度の有効性を測るうえでも参考になるだろう。

4. 教育について

東京外国語大学、一橋大学との連携教授、クロスアポイントメントを通じての連携は、大学の機能強化への貢献、および研究過程と研究成果の教育的普及として評価できる。全国の大学院生19人、JSPS 特別研究員10人を共同研究員としてプロジェクトに参画させている点や、「危機言語・方言」がフィールド調査のワークショップを行う中で大学院生を指導している点などは国語研の特徴を生かした教育的貢献と言える。

「対照言語学」による日本語学教材『日本語を分析するレッスン』や「統語コーパス」による「コーパスに基づく日本語統語論」教材、「危機言語・方言」が準備しているフィールド調査に関する教材などは興味深い観点からの教材となると思われるが、今後は、教育面でのそれらの成果を「総合的日本語研究」として有機的に統合していくことが期待される。

5. 人材育成について

若手研究者の育成に関しては、上記のプロジェクト共同研究員としての参画や学会参加への旅費支援などを積極的に行っている点が評価できる。予算の許す範囲で、なおいつそう若手研究者の育

成を国語研の特徴を生かす形で努力していくことが期待される。

社会人の学び直しへの貢献も国語研の大切な役割の一つであろう。中高大の教師向けセミナーや日本語教師や日本語ボランティア向けセミナー、社会人向けの方言セミナーなどは、その点で評価できる。これらについても、「総合的日本語研究」という国語研の研究の方向性と有機的関連をもち、かつ社会的意義の高いテーマによる貢献のさらなる展開が望まれる。

6. 社会連携について

「統語コーパス」とNTTコミュニケーション科学基礎研究所との連携、「通時コーパス」とジャパンナレッジなどとの連携など、評価できる。ただし、当然のことながら、連携企業の利益追求とは一線を画す必要がある。

地域社会との連携という点では、「立川」の読み方に関する講演会や「学んでみよう！多摩のことは青梅のことは」講演会のように地元根差す企画を今後も継続的に続けていくことを期待したい。

「危機言語・方言」が文化庁や地元自治体・教育委員会などと連携して「危機言語・方言」サミットを発足以来継続して共催してきている努力は特筆に値する。

7. 社会貢献について

上記の地元を焦点をあてた講演会の開催は好感がもてる企画である。オノマトペをテーマとするNINJALフォーラムや、その成果をまとめた啓蒙書の出版も、一般人の日本語への関心を喚起するという点で評価できる。

研究成果の社会への発信は、データベースとコーパスの拡充が主な成果となっており、その点は国語研の特徴を生かした社会貢献として評価に値する。

社会への発信と社会貢献を飛躍的に拡大できる可能性をもつ試みとして、国語研が主催した講演会、フォーラム、コーパス講習会などの内容のインターネットでの公開を検討・実現していただきたい。すでに国語研ウェブサイトの「国語研ムービー」で講演の一部が公開されているが、そうした公開動画の種類（とりわけ、コーパス講習会の内容のこうした形での公開には大いに意味がある）と規模の拡充が期待される。それによって時間と場所の制約から解放され、現在とは比較にならないほど多数の人々が見ることができるようになる。こうした試みは、世界的に大学講義のインターネット公開などの形ですでに広範に行われており、研究成果の社会への発信方法としてきわめて有効なうえに、多額の費用を要することでもないので、ぜひ実現を望みたい。

8. 国際連携について

海外の研究者受入と海外大学との連携は、日本語研究の国際水準の向上を目指すという国語研の重要な課題を遂行するために必須である。各研究班が当該研究における高レベルの研究機関との連携を強化している点は評価できる。

今後は、当該研究の必要性に応じて、英語圏以外のアジア諸国やロシアなどの研究機関や研究者との連携も重要となろう。その点で、「対照言語学」による Japanese/Korean Linguistic Conference の共催や「学習者のコミュニケーション」における、北京日本学研究中心との共同、および I-JAS 公開や読解コーパス公開を通じての世界諸国の日本語教育研究者との連携が一つのモデルケースと

なることを期待したい。-

-

9. 国際発信について

- 「対照言語学」と「統語コーパス」によって、国際シンポジウムが3回開催されたことは、上記の日本語研究の国際水準向上を触発する一つの契機として評価できる。-

- 英語による研究成果の発信に関しては、研究員による国際学会での講演や発表などのさらなる拡充が期待される。前回の中期計画以来継続しているムートン社刊の日本語研究ハンドブックのシリーズの刊行が順調に進んでいる点は高く評価する。「対照言語学」が取り組み始めた『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編一』の英訳刊行は有意義であり、この経験を生かして、さらに、これまでの日本語研究における画期的な業績をジャンルごとに集約した英訳論集が刊行されれば、日本語研究の国際水準向上に資するところが非常に大きいと思われる。-

-

10. その他特記事項

- プロジェクトが複数の研究班や複数のテーマに分かれて実施されている場合、現在の自己点検報告書の「研究成果一覧」のように、プロジェクト構成員の業績を年代順に列記する方式では、個々の研究班やテーマの研究状況が分かりにくい。来年度以後はこの点に関して記述方法の改善を望みたい。-

- また、現在の記述では、研究成果のうちどの範囲のものが真に共同研究の成果であると言えるのかが必ずしも判然としない。もし単にプロジェクト構成員の研究成果であるという理由でそれをプロジェクトの成果として認定するとすれば、共同研究の意味があいまいになる。これは国立国語研究所における共同研究の理念に関わる問題でもあり、来年度以後は共同研究の意味を明確に確認できる形での報告となることを望みたい。-

-

《次年度の研究推進に向けた意見》

次年度以降の研究推進に向けて、特に講演会、フォーラム、コーパス講習会などの内容のインターネット公開の実現、拡充に向けて検討していただきたい。-

各プロジェクト・センターの評価

対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窪菌 晴夫

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の観点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

2. 年次計画（ロードマップ）

平成 28 年度（研究プロジェクトの始動）

1. 日英語によるプロジェクト HP を開設し、以後、随時更新する。
2. 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員 (PD) 2 名に対して研究指導を行う。
3. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
4. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
5. NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese Korean Linguistics Conference (JK 24) (10 月 14~16 日) とオノマトペ国際シンポジウム (12 月 17~18 日) の 2 つを開催する。またその成果の取りまとめ（論文集の編集）に着手する。
6. オノマトペをテーマに一般社会向けの NINJAL フォーラムを開催する（平成 29 年 1 月 21 日）。

7. 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』, Mouton Handbook (Contrastive Linguistics の巻), The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
8. 言語地図の立案を開始する(項目・言語の選択, 刊行方法等)。
9. 大学院生向けのチュートリアル(第1回)を開催する。
10. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 29 年度(研究プロジェクトの展開)

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し, 研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員(PD) 1 名に対して研究指導を行う。
2. 研究班, 研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
4. 国際認知言語学会を他機関と共同誘致する。
5. 前年度に開催した NINJAL 国際シンポジウム 2 件と NINJAL フォーラム 1 件の成果を取りまとめ, それぞれ論文集, 啓蒙書として編集を行う。
6. 言語地図の作成を開始する。
7. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 30 年度(研究成果の中間とりまとめ)

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し, 研究指導を行う。また PD フェローの任期終了に伴い, 年度末に平成 31~33 年度の PD フェロー 2 名を募集する。
2. 研究班, 研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 平成 28 年度に開催した NINJAL 国際シンポジウム 2 件と NINJAL フォーラム 1 件の成果物(論文集・啓蒙書)の編集を完了し, 刊行する。
4. 前年度に開催した「プロソディー」と「名詞修飾」に関する国際シンポジウムの成果をそれぞれ研究論文集として取りまとめる(公刊は 1~2 年後)。
5. 「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウムを開催する。
6. 引き続き言語地図の作成を行う。
7. 音声関係の啓蒙書に着手する(1 冊目)。
8. 大学院生向けのチュートリアル(第 2 回)を開催する。
9. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 31 年度(研究プロジェクトの拡充)

1. 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し, 研究指導を行う。
2. 研究班, 研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 「プロソディー」に関する国際シンポジウム(2 回目)を開催する。
4. 前年度に開催した「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集として取りまとめる(公刊は 1~2 年後)。
5. 「プロソディー」と「名詞修飾」に関する研究論文集の編集を終え, 刊行する。

6. 引き続き言語地図の作成を行う。
7. 音声関係の啓蒙書を出版する（1冊目）
8. 文法関係の啓蒙書に着手する（2冊目）。
9. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 32 年度（研究成果のとりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集として取りまとめる（公刊は 1 ～ 2 年後）。
4. 言語地図の取りまとめを行う。
5. 文法関係の啓蒙書を出版する（2冊目）
6. 大学院生向けのチュートリアル（第 3 回）を開催する。
7. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 33 年度（研究成果の公刊）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 一般社会向けの NINJAL フォーラム（第 2 回）を開催する。
3. 「動詞の意味構造」に関する研究論文集の編集を終え、刊行する。
4. 言語地図を公刊（公開）する。
5. 大学院生向けのチュートリアル（第 4 回）を開催する。
6. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

【3 年目までの成果物】〔編者〕

1. Sequential Voicing in Japanese Compounds (John Benjamins). 2016 年〔バンス〕
2. 『コーパス研究入門』（大修館）. 2016 年.〔パルデシ〕
3. Mouton Handbook of Contrastive Linguistics (De Gruyter Mouton). 2017 年.〔パルデシ〕
4. The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants (Oxford University Press). 2017 年〔窪菌〕
5. Tonal Change and Neutralization (De Gruyter Mouton). 2017 年.〔窪菌〕
6. Proceedings of the 24th Japanese Korean Linguistics Conference (CSLI). 2018 年〔船越・窪菌〕
7. オノマトペに関する啓蒙書（NINJAL フォーラムの成果。国内出版社）2018 年〔窪菌〕

【5 年目までの成果物】上記に加え次のものを刊行する

1. オノマトペに関する英文論文集（海外出版社）2019 年〔パルデシ〕
2. 『日本語と諸言語のとりたて表現（仮題）』国内出版社，2019 年〔野田〕
3. プロソディー関係の英文論文集，2019 年〔窪菌〕
4. 名詞修飾関係の英文論文集，2019 年〔パルデシ〕

- 5. 音声関係の啓蒙書 1 冊 2019 年〔窪菌〕
- 6. 文法関係の啓蒙書 1 冊 2020 年〔野田〕

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. 対照言語学研究を推進するために、公開研究発表会を合計 7 回（平成 28 年 7 月 9 日、9 月 16 日、11 月 19 日、12 月 4 日、12 月 9-10 日、平成 29 年 3 月 8-9 日、3 月 11 日）開催し、これまでに合計 363 人が参加した（うち外国人研究者 9 人、大学院生を含む学生 60 人。但し、12 月 4 日のワークショップを除く）。発表数は合計 43 件であった（うち学生が筆頭著者の発表 1 件）。また、平成 29 年 2 月 18-19 日には、プロジェクトの 3 つの班と 2 つの公募型共同研究プロジェクトの合同研究発表会(Prosody and Grammar Festa)を開催し、107 人の参加者を得た（うち外国人研究者 5 人、大学生を含む学生 18 人）。</p> <p>2. NINJAL 国際シンポジウムとして、国際シンポジウムを 2 件開催した。まず The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 24)を慶應義塾大学言語文化研究所と共催で平成 28 年 10 月 14~16 日に誘致開催した（発表件数 98 件、うち学生発表件数が 31 件）。参加者数は 193 人（異なり数。うち海外機関所属研究者 46 人、大学院生・学生 52 人）であった。次に統語・意味解析コーパスプロジェクトと共同でオノマトペ国際シンポジウム(Mimetics in Japanese and Other Languages of the World)を平成 28 年 12 月 17~18 日に開催した（発表件数 30 件、うち学生発表件数が 10 件）。参加者数は 127 人（うち海外機関所属研究者 26 人、学生 52 人）であった。さらに、オノマトペ国際シンポジウムの開催に合わせて BCCWJ コーパス検索ツール NLB にオノマトペ検索機能を開発し、12 月 12 日に一般公開した。</p> <p>3. 研究成果として <i>Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project</i> (Tim Vance and Mark Irwin eds.)を John Benjamins 社から出版した（平成 28 年 6 月）。また <i>The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants</i> (Haruo Kubozono, ed., Oxford University Press)の編集作業を完了し平成 28 年 6 月に入稿した（平成 29 年 4 月 27 日に刊行）。<i>Tonal Change and Neutralization</i> と <i>Mouton Handbook of Contrastive Linguistics</i> (Mouton 社)については編集作業を継続した。この他、プロジェクト全体で論文 76 件、図書 5 冊、データベース 3 件を公開・刊行した（「研究成果一覧」参照）。</p> <p>4. 啓蒙書『オノマトペの謎』（岩波書店）の編集作業を完了し平成 29 年 2 月に入稿した（平成 29 年 5 月に刊行予定）。また英文の研究論文集 <i>Proceedings of JK 24</i> (CSLI 社)の編集を進め、オノマトペ英文論文集の準備を開始した。</p> <p>5. 連濁や促音（重子音）に関する共同研究の成果を英文論文集（専門書）にまとめ、国際的な出版社から刊行している。日本の研究を広く海外に発信する意義は大きい。その一方で、研究成果を日本語の啓蒙書にまとめ全国的な出版社から刊行する意義も小さくない。</p> <p>6. アクティブ・ラーニングに対応した日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』（野田尚史・野田春美共著、大修館書店）を完成した（平成 29 年 4 月に刊行）。</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <p>7. 共同研究員 82 人（うち大学院生 5 人、学振 PD 2 人）による共同研究体制を整えた。共同研究員の所属機関数は</p>	

50（うち海外の大学・研究所は10）である。

8. プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）を2人、非常勤研究員を5人雇用した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
1. 日英語によるプロジェクトホームページを開設し、研究班ごとに随時更新した。	
2. 海外から専門家を招へいし、名詞修飾表現に関する言語地図作成上の諸問題を検討し、計画を作成した。	
3. 公開研究成果発表会を合計7回開催し、これまでに延べ363人が参加した（うち海外機関所属研究者7人、大学院生を含む学生60人、但し12月4日のワークショップを除く）。7回の内訳は、プロソディー班3回、名詞修飾表現班3回、とりたて表現班1回である。とりたて班はさらに、打合せ会議を2回実施した。	
4. プロジェクト全体（音声研究班と文法研究班）と公募型共同研究プロジェクト（「日本語から生成文法理論へ」と「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」）の合同成果発表会として平成29年2月18-19日にProsody and Grammar Festaを開催し、今年度の研究成果を一堂に発表した（参加者合計107人、うち海外機関所属研究者5人、大学院生16人、学生2人）。	
5. BCCWJ コーパス検索ツールNLBにオノマト検索機能を「統語・意味解析コーパスプロジェクト」と共同で開発し、12月12日に公開した。	
6. 名詞修飾表現に関する著名な業績である寺村秀夫（1999）『寺村秀夫論文集1—日本語文法編—』の英語訳・ウェブ公開作業の準備（著作権処理、翻訳）を整えた。来年度にウェブ公開の予定である。	
7. 鹿児島県甕島方言のアクセントデータベースを正式公開した（平成29年3月）。	
8. コーパス検索ツールNLBにオノマト検索機能を開発する、日本語研究の名著（寺村秀夫論文集）を英訳する、危機方言（甕島方言）のアクセントデータベースを開発・公開するという共同利用に関わる活動は日本語研究に資するものであり、多くの日本語研究者による利用が期待される。	
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画	
9. 共同研究員82人（うち大学院生5人、学振PD2人）により共同研究体制を整えた。共同研究員の所属機関数は50（うち海外の大学・研究所は10）である。	
10. プロジェクトの運営と成果発信について助言を求めるために、海外機関所属の研究者10名を含むアドバイザーボードを設置した。	
11. 米国コーネル大学言語学科と学術交流協定に向けた交渉を行った。	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
1. 大学院生5人、学振PD2人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。	
2. 合計46名の大学院生に発表の機会を提供した（研究成果発表会5名、国際シンポジウム41名）。チュートリアルは今年度割り当てがなく、次年度以降の担当となった。	
3. 国内の4つの大学院（南山大学、早稲田大学、大阪府立大学、首都大学東京）において日本語学・言語学の授業を担	

当した。

4. アクティブ・ラーニングに対応した日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』（野田尚史・野田春美共著、大修館書店）を完成した（平成 29 年 4 月刊行）。

（2）人材育成に関する計画

5. 若手研究者を育成するために、プロジェクト PD フェロー）を 2 人，非常勤研究員を 5 人雇用し，音声と文法の研究者を育成した。PD フェローは三重大学と学術振興会 PD にそれぞれ平成 29 年 4 月からの採用が決定した。
6. 国際シンポジウム（JK24）において若手研究者 12 人（国内 9 人，海外 3 人）に対して発表のための旅費支援を行った。また方言調査旅費支援を希望した大学院生 1 名に対して旅費（老岐方言調査，29 年 1 月）を支援した。
7. 埼玉県の高校教員を対象にした教員研修会において「言葉を学ぶということ」と題する講演を行った（平成 28 年 12 月 20 日，大宮中央高校）。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
	<ol style="list-style-type: none">1. 甌島方言の保存・調査と地元市民への啓蒙について，鹿児島県薩摩川内市と共同事業の協議を開始した。2. 「オノマトペの魅力と不思議」と題する一般向けの講演会を NINJAL フォーラムとして企画・開催した（平成 29 年 1 月 21 日）。参加者は 372 名であった。3. 上記のフォーラムの成果を「オノマトペ」に関する啓蒙書『オノマトペの謎』（岩波書店，岩波科学ライブラリー）として立案し，編集作業を完了した（平成 29 年 2 月入稿，5 月に刊行予定）。4. 立川市歴史民俗資料館と国語研の協定に基づき，日本語に関する講演会「立川は「たちかわ」か「たてかわ」かー日本語の発音とアクセントー」（平成 28 年 12 月 11 日）を開催した。参加者は 50 人であった。5. 国際日本語普及協会（AJALT）の研修会において，日本語教師を対象に「新語はこうして作られる」と題する講演を行った（平成 28 年 6 月 23 日）。参加者は約 50 名であった。6. 東京言語研究所設立 50 周年セミナー（平成 28 年 9 月 4 日）において，中高大の教師を含む参加者（約 100 名）に対して「音韻論の課題」と題する講演を行った。7. 語学教育研究所の年次大会の小中高教員を対象にしたシンポジウムにおいて「英語と日本語のアクセント規則」と題する講演を行った（平成 28 年 11 月 20 日）。参加者は 29 名であった。8. オノマトペの教育・研究に資する検索機能を開発し，一般公開した。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
	<ol style="list-style-type: none">1. 海外機関所属の研究者 10 名を含むアドバイザーボードを設置し，プロジェクトの運営や成果発信についてアドバイスを求めた。2. 海外機関所属の研究者 13 人を共同研究員に加え，日本語の音声と文法に関する共同研究を行った。また海外の研究者 2 人を外来研究員として受入れ，共同研究を行った。3. 米国コーネル大学言語学科と連携するために学術交流協定の準備を行った。4. NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese /Korean Linguistic Conference（JK 24）を慶應義塾大学言語文化研究所とともに誘致し，3 日間開催した（平成 28 年 10 月 14-16 日）。発表件数は 98 件（うち学生による発表 31 件），

参加者は193人（うち海外機関所属研究者46人，大学院生・学生52人）であった。また，JK 24のサテライト行事として，プロソディーと文法（統語論）に関するワークショップをそれぞれ開催した（平成28年10月13日，17日）。発表はそれぞれ6件と4件，参加者は40人（うち海外機関所属研究者11人，大学院生・学生15人）と14人（うち海外機関所属研究者4人，大学院生・学生2人）であった。

5. NINJAL 国際シンポジウムとしてオノマトペ国際シンポジウム(Mimetics in Japanese and Other Languages of the World, 平成28年12月17~18日)を開催した。発表件数は30件（うち学生発表件数が10件），参加者は127人（うち海外機関所属研究者26人，学生52人）であった。

6. 上記の2つのNINJAL 国際シンポジウムの成果を英文論文集として取りまとめるべく，編集作業に着手した。JK24については平成29年3月までに編集作業をほぼ完了し，平成29年度前半に入稿予定（平成30年前半にアメリカのCSLI社から出版）の見通しである。オノマトペ国際シンポジウムについては出版計画を作成中である。

7. プロジェクト全体で，国際会議において45件の発表を行った（上記NINJAL 国際シンポジウムでの発表2件を含む，研究成果一覧を参照）。

8. 英語による研究論文集 *Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project* (Tim Vance and Mark Irwin eds.)をJohn Benjamins社から出版した（平成28年6月）。

9. 英語による研究論文集の編集作業を進め，*The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Haruo Kubozono ed., Oxford University Press)については平成28年6月に入稿し，校正作業を進めた（平成29年4月27日刊行）。*Tonal Change and Neutralization* (Mouton社) および *Mouton Handbook of Contrastive Linguistics* (Mouton社) については編集作業を継続している。

10. *Cambridge Handbook of Japanese Linguistics* (Cambridge University Press)に2編の論文（‘Pitch accent’ および ‘Mora and syllable’）を，*Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (online, Oxford University Press) にも2編の論文（‘Accent in Japanese phonology’ および ‘Rendaku or Sequential Voicing in Japanese Phonology’）をそれぞれ寄稿した（それぞれHaruo Kubozono, Tim Vance執筆）。

6. その他

1. 甌島方言の保存・調査と地元市民への啓蒙について，鹿児島県薩摩川内市と共同事業の協議を始めた。

Ⅲ. 全体の状況（総括）

【成果の概要】

1. 研究に関する計画

・対照言語学研究を推進するために，公開研究発表会を合計7回開催し，これまでに合計363人が参加した。また平成29年2月に，音声研究班と文法研究班の合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa）を開催した（参加者合計107人，うち海外機関所属研究者5人，大学院生16人，学生2人）。

・プロジェクト全体で論文76件，図書5冊，データベース3件を公開・刊行した。

・連濁や促音（重子音）に関する共同研究の成果を英文論文集（専門書）にまとめ，国際的な出版社から刊行していることは，日本の研究を広く海外に発信するという大きな意義を持つ。

・アクティブ・ラーニングに対応した日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』（野田尚史・野田春美共著，大修館書店）を完成した（平成29年4月刊行）。

- ・ 共同研究員 82 人（うち大学院生 5 人，学振 PD 2 人）による共同研究体制を整えた。共同研究員の所属機関数は 50（うち海外の大学・研究所は 10）である。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・ 公開研究成果発表会を合計 7 回開催し，これまでに 363 人（延べ）が参加した。
- ・ 2 つの公募型共同研究プロジェクトと合同で，プロジェクト全体の成果発表会 Prosody and Grammar Festa を開催した（参加者合計 107 人，うち海外機関所属研究者 5 人，大学院生 16 人，学生 2 人）。
- ・ BCCWJ コーパス検索ツール NLB にオノマト検索機能を開発し，12 月 12 日に公開した。
- ・ 名詞修飾表現に関する著名な業績である寺村秀夫（1999）『寺村秀夫論文集 1—日本語文法編一』の英語訳・ウェブ公開作業の準備（著作権処理，翻訳）を整えた。
- ・ 鹿児島県の危機方言の一つである甌島方言について，アクセントデータベースを正式公開した（平成 29 年 3 月）。
- ・ コーパス検索ツール NLB にオノマトペ検索機能を開発する，日本語研究の名著（寺村秀夫論文集）を英訳する，危機方言（甌島方言）のアクセントデータベースを開発・公開するという共同利用に関わる活動は日本語研究に資するものであり，多くの日本語研究者による利用が期待される。
- ・ 海外機関所属の研究者 10 名を含むアドバイザーボードを設置した。

3. 教育に関する計画

- ・ 国際シンポジウムや研究発表会において，合計 46 名の大学院生に研究発表の機会を提供した。
- ・ 日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』（野田尚史・野田春美共著，大修館書店）を完成した（平成 29 年 4 月刊行）。
- ・ プロジェクト PD フェローを 2 人，非常勤研究員を 5 人雇用し，プロジェクト活動に参画させた。
- ・ 国際シンポジウム（JK24）において若手研究者 12 人（国内 9 人，海外 3 人）に対して発表のための旅費支援を行った。
- ・ 方言調査旅費の支援計画に応募してきた大学院生 1 名に対し，調査（老岐方言）の旅費を支援した。
- ・ 埼玉県の高教員を対象にした教員研修会において講演を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・ 甌島方言の保存・調査と地元市民への啓蒙のために，鹿児島県薩摩川内市と共同事業の協議を開始した。
- ・ 「オノマトペの魅力と不思議」と題する一般向けの講演会を第 10 回 NINJAL フォーラムとして企画・開催し，NINJAL フォーラムとしては過去最高の参加者（372 名）を得た（平成 29 年 1 月 21 日）。
- ・ 上記のフォーラムの成果を「オノマトペ」に関する啓蒙書『オノマトペの謎』（岩波書店，岩波科学ライブラリー）として立案し編集作業を完了した（平成 29 年 2 月入稿，5 月刊行予定）。
- ・ 立川市歴史民俗資料館と国語研の協定に基づき，日本語に関する講演会を開催した。
- ・ 国際日本語普及協会や東京言語研究所設立 50 周年セミナー，語学教育研究所シンポジウムにおいて，小中高教員に対して日本語アクセント等に関する講演・発表を行った。

5. グローバル化に関する計画

- ・ 海外の研究者 10 名を含むアドバイザーボードを設置し，また海外の研究者 13 人を共同研究員に加えて共同研究を開始した。

- ・NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese /Korean Linguistic Conference (JK 24)とオノマトペ国際シンポジウム(Mimetics in Japanese and Other Languages of the World)を開催し、それぞれ予想を上回る参加者(193人と127人、いずれも異なり数)を得た。
- ・プロジェクト全体で、国際会議において45件の発表を行った。
- ・英語による研究論文集 *Sequential Voicing in Japanese : Papers from the NINJAL Rendaku Project* (Tim Vance and Mark Irwin eds.) を John Benjamins 社から出版した(平成28年6月)。また、*The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Haruo Kubozono, ed., Oxford University Press)の編集を終え入稿し、校正作業を行った(平成29年4月27日刊)。
- ・*Cambridge Handbook of Japanese Linguistics* (Cambridge University Press)に2編の論文(‘Pitch accent’ および ‘Mora and syllable’)を、*Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (online, Oxford University Press)にも2編の論文(‘Accent in Japanese phonology’ および ‘Rendaku or Sequential Voicing in Japanese Phonology’)をそれぞれ寄稿した(それぞれ Haruo Kubozono, Tim Vance 執筆)。

6. その他

- ・プロジェクト全体(音声研究班と文法研究班)の合同成果発表会(Prosody and Grammar Festa)を開催するにあたり、対照言語学の視点を共有する二つの公募型共同研究プロジェクト(平成28年9月に発足した「日本語から生成文法理論へ」と「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」)にも参加を呼びかけ、対照言語学研究と言語理論研究・実験的研究の融合を図った。
- ・人材育成の一環としてプロジェクトPDフェローを2名雇用しその育成に務めた結果、平成29年4月から三重大学と学術振興会(特別研究員)への採用が決まった。
- ・当初計画においては【研究成果の社会への普及】としてNINJALフォーラムとその報告書のみを企画していたが、実際には立川市歴史民俗資料館との協定に基づく講演や薩摩川内市との共同事業をはじめとして、当初計画になかった事業を数多く実施した。

【今後の課題】

- ・今後も、国内外の大学等研究機関から若手研究者を受け入れ、プロジェクトの活動を通じて優秀な人材を育成し、当該分野に優秀な人材を送り出すことで大学の機能強化に貢献していく予定である。

平成28年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

次年度以降の本格的なプロジェクトの展開に向け、広く国内外から共同研究員を募り、海外機関所属の研究者を含むアドバイザーボードを設置するなど、世界水準の共同研究の遂行と国際的な研究ネットワークの構築を目指す研究態勢が整備されたことは、年度当初の計画に沿った成果として評価される。

「始動」の年度であることもあり、本プロジェクトの中心課題である「対照言語学の観点から」の研究成果の発信が、現時点ではシンポジウムおよびワークショップでの発表や公刊予定の論文集

の編集段階に留まっており、いまだ外部からの質的評価を得る段階には至っておらず、次年度以降の評価が俟たれる。

すでに論文として公表された成果のなかにはそれらのタイトルから「対照言語学の観点」に基づくと見受けられるものが少なく、加えて、単著のものが多数を占める。今後は、共同研究の体制を活かし、複数の研究者による共通のテーマについての共著論文もより多く公表されることを期待する。

《評価項目》

1. 研究成果について

- ・外国人研究者や多数の学生を含む二百数十名の参加者を得て、年間7回にわたる公開研究発表会を開催したこと、また、NINJAL 国際シンポジウムとして、The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 24) を開催したこと、さらには、より広域的な視野と知見を求めて他領域のプロジェクトとの合同研究発表会を開催することなど、今年度の計画に沿った積極的な研究成果の発信がなされた点が評価される。
- ・オノマトペ国際シンポジウム (Mimetics in Japanese and Other Languages of the World) の開催が28年度の研究成果の一つとして挙げられているが、本プロジェクトの「目的及び特色」についての記述 (共同研究プロジェクト 自己点検報告書(平成28年度) 「I. プロジェクトの概要」「1. 目的と特色」参照) にはオノマトペ研究への言及が一切ない。本プロジェクトが目的とする「とりたて表現」「動詞の意味構造」「語のプロソディーと文のプロソディー」「名詞修飾表現」の研究課題とオノマトペ研究との関連が読みとりにくい。
- ・本年度が本研究プロジェクトの始動期であることを差し引いてはみても、なお、「対照言語学」の観点からの研究成果であるとは認め難いものが、論文や口頭発表の大半を占めている。プロジェクトの目的に沿った成果のより多くの産出が次年度以降期待される。

2. 研究水準について

- ・合計 363 人の参加者を得て計7回の公開研究発表会を行い、研究成果の積極的なアウトプットに努めたこと、また、「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」をそれぞれテーマとする3つの班と2つの公募型共同研究プロジェクトとの協働による合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa) を開催し、研究活動の有機的な連携と共同研究の促進に取り組んだ点が評価できる。
- ・*Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project* を John Benjamins 社から出版したこと、Oxford University Press からの出版に向けて *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* を入稿したこと、Mouton 社からの出版に向けて *Tonal Change and Neutralization* と *Handbook of Contrastive Linguistics* の編集作業を継続していることなど、世界的に影響のある著名な出版社からの刊行につながる成果を挙げたことは、本プロジェクトの研究水準の高さを示すものであり評価に値する。

3. 研究体制について

海外の研究機関を含む50の研究機関から幅広く共同研究員を募り、80名を越える共同研究員を雇

用し、加えて外部の研究機関に属する研究者 10 人を含むアドバイザーボードを設置し、共同研究体制の充実と強化を図った点は評価される。

但し、共同研究員の選定の方針や基準 がプロジェクトの目的との関連において明確に示されているとは言い難く、研究者ネットワーク がどのようなかたちで構築され、機能しているのかも分かりにくいため、評価がむずかしい。

また、研究業績のなかには数種類の外国語を対象にしたものが見られるが、「対照言語学の観点から」の日本語研究という本プロジェクトの目的、および共同研究員 80 名余名を擁する研究体制の規模に鑑みれば、より多様な外国語を視程に捉えた共同研究の成果があるべきであり、そうした点を踏まえての研究体制の構築および充実が望まれる。

- ・日英語によるHPを開設し、随時更新していること、また、海外機関所属の研究者 10 人を含むアドバイザーボードを設置し、プロジェクトの運営と成果発信についての助言を求めたことは、いずれも世界水準での研究活動の推進と研究成果のグローバルな発信にとって有益であり、評価に値する。但し、アドバイザーボードについては、どのような研究者からどのような形でどのような助言を受け、どのような改善を実現したかがまったく分からないのは残念である。

- ・名詞修飾表現に関する言語地図作成に関して、諸問題の検討および計画の作成がなされたとあるが、次年度以降計画が着実に推進され、言語地図の共同利用が速やかに実現を見ることが期待される。

- ・名詞修飾表現に関する研究として画期的な成果を収め、今日も関連研究に対してもなお大きな影響力をもつ『寺村秀夫論文集 1 ——日本語文法編——』の英訳・Web 公開を目指し、その作業に着手したことは高く評価される。

4. 教育について

国内の4つの大学院において日本語学・言語学の授業を担当したことなど、また、アクティブ・ラーニングに対応した日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』（大修館書店）の刊行に漕ぎつけたことなど、大学院等の教育協力に関する今年度の計画を予定通り実行に移し、研究成果の教育的普及に貢献できた点が評価できる。

5. 人材育成について

大学院生 5 人、学振 PD 2 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させたこと、研究成果発表会や国際シンポジウムの機会を通して 46 名の大学院生に発表の機会を提供したこと、若手のプロジェクト PD フェローを 2 人、非常勤研究員を 5 人雇用し、音声と文法の研究者の育成を図ったこと、海外の研究者を含む若手研究者 12 名に対し、国際シンポジウム（JK24）での発表のための旅費支援を行ったことまた、大学院生 1 名に対して方言調査のための旅費支援を行ったことは、若手研究者を育成するための今年度の計画に沿うものであり、評価される。

6. 社会連携について

甌島方言の保存・調査と地元市民への啓蒙について、鹿児島県薩摩川内市と共同事業の協議を開

始したことは、次年度以降の計画の遂行にとって有益であり、評価できる。

7. 社会貢献について

・語学教育研究所の年次大会の小中高教員を対象にしたシンポジウムにおいて「英語と日本語のアクセント規則」と題する講演を行ったことは、「対照言語学の観点」からの研究成果の社会的発信として評価できる。ただし、参加者が29名に留まったことが惜まれる。次年度以降の広報活動にも期待したい。

・埼玉県の高校教員を対象にした教員研修会において「言葉を学ぶということ」と題する講演を行ったこと、立川市歴史民俗資料館と国語研の協定に基づき、「立川は「たちかわ」か「たてかわ」かー日本語の発音とアクセントー」と題する講演会を開催したこと、東京言語研究所設立50周年セミナーにおいて中高大の教師を含む参加者に対して「音韻論の課題」と題する講演を行ったことなど、社会貢献を目指すいくつかの取り組みが積極的になされた点は、国研の事業として評価できるが、これらの講演の内容が本プロジェクトの「対照言語学の観点」からのものであるのか否かで不明瞭であり、評価の対象にはなりにくい。

8. 国際連携について

・海外機関所属の研究者10名を含むアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信についてグローバルな視点からのアドバイスを積極的に求めていること、また、海外機関所属の研究者13人を共同研究員に加え、日本語の音声と文法に関する共同研究を行うなど、国際研究ネットワークの強化と世界水準の研究の深化を図っている点が評価される。

・連携先の研究機関や共同研究者が、今後も特定の地域に偏ることなく、より一層広域的に、バランス良く選定されることが期待される。

9. 国際発信について

NINJAL国際シンポジウムとしてThe 24th Japanese /Korean Linguistic Conference (JK 24)を開催し、なおかつ、その成果を英文論文集としてアメリカのCSLI社から出版する予定であること、また、JK 24のサテライト行事として、プロソディーと文法（統語論）に関するワークショップを開催したこと、英語による研究図書*Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project*をJohn Benjamins社から出版したこと、*Mouton Handbook of Contrastive Linguistics* (Mouton社)の編集作業を継続していること、*Cambridge Handbook of Japanese Linguistics* (Cambridge University Press)および*Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (online, Oxford University Press)にそれぞれ2編の論文寄稿したことなど、研究成果の国際発信に意欲的に取り組み、多くの成果を挙げている点が高く評価される。

10. その他特記事項

特になし。

統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究

プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報タグ付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) を開発するための基礎研究を行い、十分な規模のコーパスを構築し、公開する。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに 5～6 万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。

2. 年次計画（ロードマップ）

平成 28 年度：研究プロジェクトの始動

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を 10 数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
7. ネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
8. 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
9. 日英版のユーザフレンドリーなインターフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1 万文）。

平成 29 年度：研究プロジェクトの推進

1. 平成 28 年度の 1. ～ 5. を引き続き実施する。
2. 国際シンポジウム (Parsed Corpora of the World' s Languages: Theory and Practice) を企画し, 実施する。研究成果の編集を開始する。
3. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスを公開する (1 万文を追加する)。

平成 30 年度: 研究成果の中間とりまとめ

1. 平成 28 年度の 1. ～ 5. を引き続き実施する。
2. 国際シンポジウム (Parsed Corpora of the World' s Languages: Theory and Practice) の研究成果を海外の定評のある研究雑誌または出版社から刊行する。
3. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスを公開する (1 万文を追加する)。
4. 大学院生向けの講習会 (チュートリアル) を開催する。

平成 31 年度: 研究プロジェクトの拡充

1. 平成 28 年度の 1. ～ 5. を引き続き実施する。
2. 国際シンポジウム (New Frontiers in Corpus Linguistics: Breaking the Semantic Barrier) を企画し, 実施する。研究成果の編集を開始。
3. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスを公開する (1 万文を追加する)。
4. 大学院生向けの講習会 (チュートリアル) を開催。
5. 啓蒙書・普及書を執筆する。

平成 32 年度: 研究成果のとりまとめ

1. 平成 28 年度の 1. ～ 5. を引き続き実施する。
2. 国際シンポジウム (New Frontiers in Corpus Linguistics: Breaking the Semantic Barrier) の研究成果を海外の定評のある出版社から刊行する。
3. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスを公開する (1 万文を追加する)。
4. 大学院生向けの講習会 (チュートリアル) を開催する。
5. 啓蒙書・普及書を刊行する。

平成 33 年度: 研究成果の公開

1. 平成 28 年度の 1. ～ 5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスを公開する (1 万文を追加する)。
3. 大学院生向けの講習会 (チュートリアル) を開催する。

【3 年までの成果物】

- ・海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集: 国際シンポジウム (Parsed Corpora of the World' s Languages: Theory and Practice) の研究成果。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス (3 万文) をユーザフレンドリインターフェースと共に公開。

【5年までの成果物】

- ・論文集：国際シンポジウム（New Frontiers in Corpus Linguistics: Breaking the Semantic Barrier）の研究成果を海外の定評のある出版社から刊行する。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3 万文）をユーザフレンドリインターフェースと共に公開。
- ・啓蒙書・普及書（1 冊）

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>（1）研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none">・1 万文の日本語のテキストに対して統語・意味解析情報付きコーパス（NPCMJ コーパス・Keyaki ツリーバンク）を構築し、6 種類の検索用インターフェースとともに平成 28 年 12 月に一般公開した。・国内外の学会で発表を 10 件、国際ワークショップを 1 件（Unshared Task on Theory and System analysis with FraCaS, MultiFraCaS and JSeM Test Suites@国立国語研究所，平成 28 年 11 月 13 日），国内ワークショップを 1 件（日本語学会第 153 回大会@福岡大学，平成 28 年 12 月 3 日・4 日）実施し，研究成果を発信した。・来年度開催予定の国際シンポジウムの企画を策定した。海外から招へいする研究者を確定し，研究成果を著名な国際誌の特集号として発信するための準備を開始した。・海外における統語解析情報付きコーパスの主要な拠点（University of Pennsylvania, University of York, University of Colorado Boulder, Brandeis University）で日本語のアノテーション方式について発表し，共同研究について意見交換をした。・NTT コミュニケーション科学基礎研究所との共同研究・共同実験に向けて協議をし，共同研究契約を締結した。・アノテーションマニュアルや検索ツールの説明書のウェブ公開に向けて準備を進めている。・統語・意味解析コーパスプロジェクトと共同でオノマトペ国際シンポジウム（Mimetics in Japanese and Other Languages of the World）を平成 28 年 12 月 17～18 日に開催した（発表件数 30 件，うち学生発表件数が 10 件）。総参加者数は 127 人（うち海外機関所属外国人研究者 26 人，学生 52 人）であった。さらに，オノマトペ国際シンポジウムの開催に合わせて BCCWJ コーパス検索ツール NLB にオノマト検索機能を開発し，12 月 12 日に一般公開した。 <p>（2）研究実施体制等に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none">・コーパスの構築・公開を実施するために，国立国語研究所ユニット，東北大学ユニット，神戸大学ユニットを合わせ，非常勤研究員を 10 名以上雇用し，OJT 方式で育成を行った。非常勤研究員の内 4 名は大学院生である。非常勤研究員以外に，3 名の学部生もアノテーション作業に参加している。・英語，韓国語，中国語など主要な言語の統語解析情報付きコーパス開発の実績のある University of Pennsylvania, University of York, University of Colorado Boulder, Brandeis University と学術交流協定を締結し，研究者間の意見交換，相互訪問，ツールの提供などを行った。	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日英語によるプロジェクトホームページを開設し、随時更新した。 2. 国語研、東北大学、神戸大学ユニット間のコミュニケーションを円滑に進めるためメーリングリストを設置し、情報共有を図るとともにユニット間の研究打ち合わせも行った。 3. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki ツリーバンク検索・検出用のユーザフレンドリインターフェースを開発し、1 万文規模のコーパスと共に公開した。 4. 日本言語学会 153 回大会（福岡大学、平成 28 年 12 月 3-4 日）でワークショップを開催し、プロジェクトの成果を発表した。 5. 統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）の新展開に関する公開研究発表会を 2017 年 3 月 4 日（土）に東北大学で開催した。 6. アノテーション関連の研究を言語処理学会で発表した（NLP2017@筑波大学、2017 年 3 月 15 日）。 <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトの運営と成果発信について助言を求めるために、海外研究者 6 名を含むアドバイザーボードを設置した。随時アドバイスを得ながらアノテーション方法、研究成果の発信、国際シンポジウムの開催の準備などを進めている。 	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーパスに基づく日本語統語論の教育に資する教材を開発・出版する準備作業を進めた。 <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーパスの構築・公開を実施するために、国立国語研究所ユニット、東北大学ユニット、神戸大学ユニットを合わせ、非常勤研究員を 10 名以上雇用し、OJT 方式で育成を行った。非常勤研究員の内 4 名は大学院生である。非常勤研究員以外に、3 名の学部生もアノテーション作業に参加している。また、コーパスに基づく研究の方法論などの指導を行っている。 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<ul style="list-style-type: none"> ・データ使用・公開に関して、仙台の河北新報、『基礎日本語文法』の著者である益岡隆志氏および田窪行則氏から承諾を得て、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki ツリーバンクをインターフェースと共に平成 28 年 12 月に公開した。このデータは国内外の研究者・大学生などが研究目的で自由に使うことができる。 	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<ol style="list-style-type: none"> 1. ヨーク大学（英国）、ペンシルバニア大学（米国）、コロラド大学（米国）、ブランダイス大学（米国）と連携協定を結び、統語解析情報付きコーパス構築に関する共同研究を開始した。また、コロラド大学の大学院生を 1 名招へいし、プロジェクトが共催した国際シンポジウムで共同研究に基づく発表をしてもらった。 	

2. 海外在住の研究者（6名）をアドバイザーとして加え、統語解析情報付きコーパスの構築に関する意見交換を行った。
3. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) のローマ字版構築のための準備を進めた。

6. その他

NTTコミュニケーション科学基礎研究所協創情報科学部との共同研究契約書を締結し、共同研究を実施することになった。本研究は多様な日本語の機能語、句、節及び複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報タグ付き日本語構造体コーパスを開発するための基礎研究であり、十分な規模のコーパスを構築し、公開することを目指している。将来的に、精度の高い日英の機械翻訳の基盤に活用できるコーパスとして、多様な産業の発展に寄与するものと考えられる。

Ⅲ. 全体の状況（総括）

【成果の概要】

1. 研究に関する計画

- ・1万文の日本語のテキストに対して統語・意味解析情報付きコーパス（NPCMJ コーパス・Keyaki ツリーバンク）を構築し、6種類の検索用インターフェースとともに平成28年12月に一般公開した。
- ・国内外の学会で発表を10件、国際ワークショップを1件（Unshared Task on Theory and System analysis with FraCaS, MultiFraCaS and JSeM Test Suites@国立国語研究所、平成28年11月13日）、国内ワークショップを1件（日本語学会第153回大会@福岡大学、平成28年12月3日・4日）実施し、研究成果を発信した。
- ・海外における統語解析情報付きコーパスの主要な拠点（University of Pennsylvania, University of York, University of Colorado Boulder, Brandeis University）で日本語のアノテーション方式について発表し、意見交換をした。
- ・NTTコミュニケーション科学基礎研究所との共同研究・共同実験に向けて協議し、協定を締結した。
- ・統語・意味解析コーパスプロジェクトと共同でオノマトペ国際シンポジウム（Mimetics in Japanese and Other Languages of the World）を平成28年12月17～18日に開催した（発表件数30件、うち学生発表件数が10件）。総参加者数は127人（うち海外機関所属外国人研究者26人、学生52人）であった。さらに、オノマトペ国際シンポジウムの開催に合わせてBCCWJコーパス検索ツールNLBにオノマトペ検索機能を開発し、12月12日に一般公開した。
- ・コーパスの構築・公開を実施するために、国立国語研究所ユニット、東北大学ユニット、神戸大学ユニットを合わせ、非常勤研究員を10名以上雇用し、OJT方式で育成を行った。非常勤研究員の内4名は大学院生である。非常勤研究員以外に、3名の学部生もアノテーション作業に参加している。
- ・英語、韓国語、中国語など主要な言語の統語解析情報付きコーパス開発の実績のある University of Pennsylvania, University of York, University of Colorado Boulder, Brandeis University と交流協定を締結し、研究者間の意見交換、相互訪問、ツールの提供などを行った。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・日英語によるプロジェクトホームページを開設し、随時更新した。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) ・Keyaki ツリーバンク検索・検出用のユーザフレンドリーインターフェースを開発し、1万文規模のコーパスと共に公開した。
- ・日本語学会153回大会（福岡大学、平成28年12月3-4日）でワークショップを開催し、プロジェクトの成果を発表

した。

・プロジェクトの運営と成果発信について助言を求めるために、海外研究者6名を含むアドバイザーボードを設置した。随時アドバイスを得ながらアノテーション方法、研究成果の発信、国際シンポジウムの開催の準備などを進めている。

3. 教育に関する計画

・コーパスに基づく日本語統語論の教育に資する教材を開発・出版する準備作業を進めた。
・コーパスの構築・公開を実施するために、国立国語研究所ユニット、東北大学ユニット、神戸大学ユニットを合わせ、非常勤研究員を10名以上雇用し、OJT方式で育成を行った。非常勤研究員の内4名は大学院生である。非常勤研究員以外に、3名の学部生もアノテーション作業に参加している。また、コーパスに基づく研究の方法論などの指導を行っている。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

・データ使用・公開に関して、仙台の河北新報、『基礎日本語文法』の著者である益岡隆志氏および田窪行則氏から承諾を得て、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) ・Keyaki ツリーバンクを検索用インターフェースと共に平成28年12月に公開した。このデータは国内外の研究者・大学生などが研究目的で自由に使うことができる。

5. グローバル化に関する計画

・ヨーク大学（英国）、ペンシルバニア大学（米国）、コロラド大学（米国）、ブランダイス大学（米国）と連携協定を結び、統語解析情報付きコーパス構築に関する共同研究を開始した。また、コロラド大学の大学院生を1名招へいし、プロジェクトが共催した国際シンポジウムで共同研究に基づく発表をしてもらった。
・海外在住の研究者（6名）をアドバイザーとして加え、統語解析情報付きコーパスの構築に関する意見交換を行った。
・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)のローマ字版構築の準備を進めた。

6. その他

N T Tコミュニケーション科学基礎研究所協創情報科学部との共同研究契約書を締結し、共同研究を実施する体制を整えた。本研究は多様な日本語の機能語、句、節及び複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報タグ付き日本語構造体コーパスを開発するための基礎研究であり、十分な規模のコーパスを構築し、公開することを目指している。将来的に、精度の高い日英の機械翻訳の基盤に活用できるコーパスとして、多様な産業の発展に寄与するものと考えられる。

【今後の課題】

・今後も、国内外の大学等研究機関から若手研究者を受け入れ、プロジェクトの活動を通じて優秀な人材を育成し、当該分野に優秀な人材を送り出すことで大学の機能強化に貢献していく予定である。

平成28年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

コーパスデータに立脚した日本語研究の推進を図ることを目的として、現代日本語を対象とした統語解析情報付きコーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)開発を進めている。日本語の聖書、新聞記事、教科書、wikipedia を対象として、予定された 10,000 文の品詞及び構文木解析情報付きのコーパスを検索ツールとともに開発し、web 上で公開しておりコーパス構築に関しては計画通りの研究成果が得られている。国際的には統語解析情報付きコーパス構築の試みは 1980 年代から進められており、Linguistic Data Consortium を通じたデータ共有化も進められている。本プロジェクトは国際的連携体制の下に進められており、日本語コーパスが国際的な研究協力体制の中に組み入れられることを期待している。コーパスはデータに基づく言語学研究への貢献だけでなく情報技術における自然言語処理応用にも有用性が期待されている。本プロジェクトでは NTT コミュニケーション科学基礎研究所との共同研究体制も構築されており、コーパスの広い有用性を示す運営が期待できる。初年度は主にコーパス作成のための体制構築に注力しており、コーパスを利用した研究については目立った成果を得るには至っていない。次年度以降に期待したい。

《評価項目》

1. 研究成果について

コーパスデータに基づく言語学研究の国際的潮流に合流し、コーパスデータに立脚した日本語研究の推進を図るためには、基盤となるコーパス構築が必須であるという認識に基づき、現代日本語を対象とした統語解析情報付きコーパスの開発・公開とそれを用いた言語研究の進展を目指し NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)作成に着手した。日本語の聖書、新聞記事、教科書、wikipedia を対象として、予定された 10,000 文の品詞及び構文木解析情報付きのコーパスを構築し、6 種類の検索用インタフェースとともに一般公開した。計画通りの研究成果が得られている。

コーパス作成にあたっては国立国語研究所、東北大学、神戸大学の共同構築体制を作り、大学院生を含む非常勤研究員を雇用して作業を進めている。海外研究者を含むアドバイザーボードを設けて研究推進に関する助言を得ている。統語・意味解析コーパスプロジェクトと共同でオノマトペ国際シンポジウムを開催、また来年度には国際シンポジウムを企画中であり、初年度として計画通りに進行していると認められる。

2. 研究水準について

University of Pennsylvania を中心として作成・蓄積されてきた歴史・実績を持つ Penn Treebank を模範として日本語コーパスの構築を行うというプロジェクトの性格上、主に既に確立されたアノテーション方法を準用してコーパス作成作業を進めることが中心となっている。そのため現状では研究に大きな新規性は認められない。国立国語研究所の内外を問わず、NINJAL コーパスを利用したために初めて可能となった優れた日本語研究がどの程度行われるかによって本プロジェクトの真価が問われる。次年度以降に進められるコーパスを利用した日本語研究に期待する。

米国・英国の大学との共同研究協定の締結、日本国内でも NTT 研究所との共同研究契約の締結がなされ、外部研究機関との研究協力の体制が構築されている。コーパスのローマ字化の準備も進められている。国内外での学会発表、国立国語研究所においてアノテーションに関するワークショップ

プ、オノマトペ国際シンポジウムを開催している。国内外での研究機関との共同によるコーパスを用いた日本語研究推進は予定通り進んでいる。

3. 研究体制について

日本国内では国立国語研究所、東北大学、神戸大学の共同体制の下で大学院生を含む非常勤研究員を雇用してコーパス構築作業を進めている。国外とは University of Pennsylvania, University of York, University of Colorado Boulder, Brandeis University と学術交流協定を締結し、研究協力によって、コーパスの国際的標準化とコーパスを用いた言語研究を進める体制を構築している。また海外研究者を含むアドバイザーボードを設けて研究推進に関する助言を得る体制を構築している。研究推進のために優れた体制を構築していると判断される。

日本語・英語によるプロジェクトページを開設・公開してプロジェクト進行状況の情報や構築が進められているコーパスへのアクセスが可能となっている。NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) のツリーバンク検索ツールを提供して構文・意味情報からの検索が可能となっている。日本言語学会におけるワークショップ、コーパス開発に関する公開研究発表会の開催などを通じてコーパスの利用拡大に向けた試みを行なっている。コーパス共同利用推進に向けた活動は順調に進められている。

4. 教育について

コーパスを利用した日本語統語論の教育教材の開発・出版が予定されており、その成果に期待する。

5. 人材育成について

コーパス構築のために大学院生を中心として非常勤研究員を雇用している。コーパスアノテーション作業には学部学生も参加しており、小規模ではあるが、コーパス作成に携わることを通じてコーパスに基づく日本語研究のための研究者人材の育成を着実に進めている。

6. 社会連携について

出版されている新聞（河北新報）・教科書（基礎日本語文法）などの著作物の著作権者から許諾を得てコーパス化と公開を行なっている。国立国語研究所がコーパス公開の意義を示してこのような公開を進めることは高く評価される。

7. 社会貢献について

今年度は該当する活動なし。次年度以降に期待する。

8. 国際連携について

University of Pennsylvania, University of York, University of Colorado Boulder, Brandeis University との国際連携体制が構築されている。今後の成果に期待する。

9. 国際発信について

英語のプロジェクトページを作成して公開している。コーパス(NPCMJ)のローマ字化が計画されている。国際発信については準備的な状況にとどまる。

10. その他特記事項

NTT コミュニケーション科学基礎研究所と共同研究契約を締結し, 共同研究を進める体制を整えている。情報系では, 精密な統語意味情報にはあまり依存せずに大量データと機械学習に基づいて言語処理を行う手法が現状では主流となっており, 統語意味情報の重要性や価値を再評価する研究ができればインパクトは大きいであろう。

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

プロジェクトリーダー：木部 暢子

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献する。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年のユネスコの危機言語リストには、日本で話されている8つの言語－アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語－が含まれている。特に、アイヌ語は危機の度合いが高く、系統関係も不明で、その解明のためのデータの整備と分析が急がれる。それだけでなく、日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

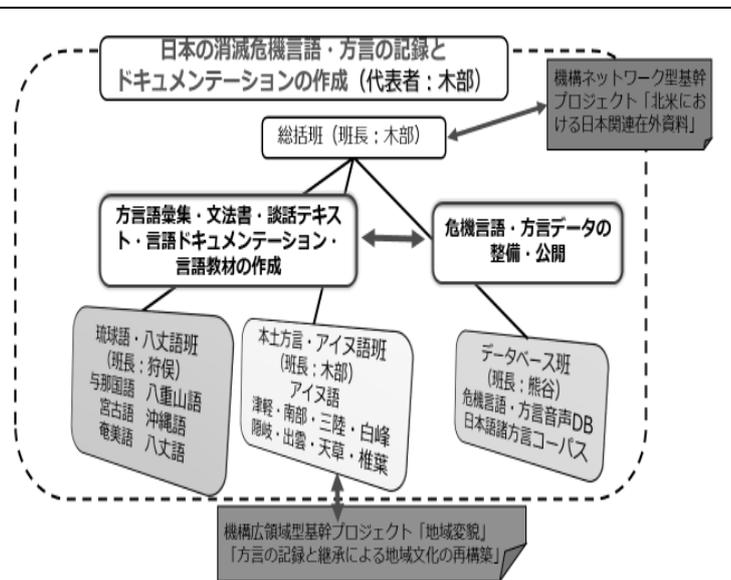
本プロジェクトの実施内容は、以下のとおりである。(1) 語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」をはじめとする言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と連携する。

2. 年次計画（ロードマップ）

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- ・琉球語・八丈語班、本土方言・アイヌ語班は6年間で、琉球8地点、八丈語、本土12地点（東北3地点、関東2地点、中部・関西2地点、中国・四国2地点、九州3地点）の語彙集・文法書・談話テキスト、言語ドキュメンテーション、言語教材、およびアイヌ語の口承文芸コーパスを作成する。
- ・データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」、「アイヌ語口承文芸コーパス」、「日本語諸方言コーパス」、「『日本語地図』データベース」の整備・公開を行う。
- ・研究成果として、以下のものを目指す。



3年目まで：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects* , *Handbook of the Ainu Language*, 論文集『日本語の格』

(仮題), 『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『宮崎県椎葉村方言語彙集』, 『島根県隠岐の島方言語彙集』, 「日本語諸方言コーパス・モニター版」(47地点のデータによる方言横断コーパス), 「日本の危機言語・方言の音声データ」(8地点), 「アイヌ語口承文芸コーパス」。フィールド調査の手引き書。

5年目まで: 論文集 *Endangered languages and dialects in Japan*, 『方言の名詞句』(仮題), 『方言の動詞句』(仮題)。各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材。

◆年次計画

平成 28~29 年度 (1~2 年目)

- ① 調査: 琉球語, 八丈語, 本土方言の調査。
- ② 研究会: 「方言の音韻・音声」, 「方言語彙集の作成」, 「名詞句」, 「動詞句」, 「グロス」に関する研究会を開催。コーパスに関する合同シンポジウムを開催。
- ③ 言語資源: 「日本語諸方言コーパス」, 「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸データ」等を整備。
- ④ 地域との連携: 「日本の危機言語・方言サミット」(年1回), 「方言セミナー」(年1回)を開催。
- ⑤ 若手育成: 大学院生, PD等の調査への参加。フィールド調査の手引き書の作成。
- ⑥ 成果: ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language*, 『日本語の格』(仮題)の出版。『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言語彙集』の刊行。

平成 30 年度 (3 年目)

- ① 調査: 琉球語, 八丈語, 本土方言, アイヌ語の調査。
- ② 研究会: 国際シンポジウム “Endangered languages and dialects in Japan” を開催。
- ③ 言語資源: 「日本語諸方言コーパス・モニター版」(47地点のデータによる方言横断コーパス)の公開。「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸コーパス」, 『日本言語地図』データベースのデータを補充・公開。
- ④ 地域との連携: 「方言セミナー」(1回)を開催。
- ⑤ 若手育成: 大学院生, PD等の調査への参加。フィールド調査の手引き書の試用。
- ⑥ 成果: 『椎葉村方言語彙集』(音声CD付), 『フィールド調査の手引き書』を出版。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材の中間公開。

平成 31~32 年度 (4~5 年目)

- ① 調査: 琉球語, 八丈語, 本土方言, アイヌ語の調査。
- ② 研究会: 「方言語彙集」, 「文法記述」に関する研究会を開催。コーパス合同シンポジウムを開催。
- ③ 言語資源: 「日本語諸方言コーパス」, 「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸データ」等を整備。
- ④ 地域との連携: 「日本の危機言語・方言サミット」(年1回), 「方言セミナー」(年1回)を開催。
- ⑤ 若手育成: 大学院生, PD等の調査への参加。
- ⑥ 成果: 英文論文集 *Endangered languages and dialects in Japan*, 論文集『方言の名詞句』(仮題), 『方言の動詞句』(仮題)を出版。『石川県白峰方言語彙集』, 『鹿児島県頰娃方言語彙集』, 『津軽方言語彙集』, 『三陸方言語彙集』を刊行。

平成 33 年度 (6 年目)

- ① 調査: 次期準備調査を実施。
- ② 研究会: 研究成果報告会, コーパス合同シンポジウムを開催。
- ③ 言語資源: 「日本語諸方言コーパス」を一般公開。「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸コーパス」, 『日

本言語地図』データベース」のデータを補充・公開。

- ④ 地域との連携：「日本の危機言語・方言サミット」（年1回）、「方言セミナー」（年1回）を開催。
- ⑤ 若手育成：大学院生、PD等の調査への参加。
- ⑥ 成果：各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材の公開。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none">1. 日本各地の危機言語・方言の記録・保存のために、各地方言の3点セット（語彙集、文法書、談話テキスト）を作成する。目標は琉球8地点、本土12地点、八丈、アイヌ語の22地点であるが、40地点の記述と担当者を決定した。地点の内訳は次のとおりである。琉語21地点、八丈1地点、本土18地点（東北4地点、関東2地点、中部・関西4地点、中国・四国3地点、九州5地点）。なお、担当者には調査経費を支援し、調査を開始した。2. 上記の3点セットの作成に関して、担当者間の共通理解を形成するために、研究打合せを28年9月19日に開催し、地点担当者の確認、3点セット（語彙集、文法書、談話テキスト）の概要等に関する説明を行った。また、29年3月10日に2回目の研究打合せを行い、簡易文法書作成のための調査票に関する説明を行った。3. 上記各地点の3点セットの作成のための調査のほか、地域語の記録・保存と継承活動として、地域と協力して(1)宮崎県椎葉村方言、(2)島根県隠岐の島方言の合同調査、(3)石川県白峰方言の合同調査を実施した。(1)は宮崎県東臼杵郡椎葉村教育委員会、椎葉民俗芸能博物館研究事業における5ヶ年計画「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」(H26～H30)との共同事業の一環として実施するもので、今年度は事業の3年目にあたる。調査日時は28年9月4～8日、29年3月25～28日の2回、調査地点はこれまでの尾手納、日当、日添、尾前、不土野、小崎、梅尾の調査に加え、今年度は椎葉村仲塔地区、梅尾地区、松尾地区、上椎葉地区の4地区、調査者は9月4～8日が外国人研究者1人を含む9人、3月25～28日が5人、話者は、仲塔地区7人、梅尾地区4人、松尾地区14人、上椎葉地区3人、調査内容は基礎語彙約400語（例文付き）、自然談話である。(2)は島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共同で実施したもので、27年度に続き2回目である。調査日は、28年11月3日～6日、調査地点は中村地区、都万地区の2地点（昨年度は五箇、西郷）、参加者は28人（うち大学院生6人、学振PD2人、学生8人）、話者は中村地区8人、都万地区10人、調査内容は方言語彙約300語（例文付き）、動詞活用約300例文、アクセントである。報告書は来年度、刊行する予定である。(3)は石川県白山市白峰町の協力を得て実施したもので、調査日は29年1月20～23日、参加者は13人（うち大学院生2人、学振PD1人）、話者は8人、調査内容は方言語彙約600語（例文付き）、動詞活用約300例文、アクセントである。その他、次年度以降の東北方言の記録と継承活動の準備調査を29年2月26～28日に青森県八戸市で行った。なお、宮崎県椎葉方言調査、隠岐の島方言調査は、機構広領域型共同研究プロジェクト「地域社会」との連携による実施である。4. 研究会に関しては、(1)公開研究発表会「格と取り立て」、(2)危機言語・方言セミナー、(3)コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーションー助詞のすがたー」を開催した。(1)は科研費(A)「日本語諸方言コーパスの構築」、科研費(C)「日本語の分裂自動詞性」との共同開催で、28年9月19～20日に国立国語研究所講堂で開催した。発表件数は8件（竹内、佐々木、小西、木部、かりまた、下地、原田、金田）、招待講演1件（風間）、参加者数は66人（19日）、41人（20日）、うち、学生の参加者は9人（19日）、6人（20日）であった。(2)は、岩崎勝一氏（UCLA、	

国立国語研究所客員教授)による講演会で、28年9月15日に国立国語研究所2階多目的室で開催した。タイトルは「話者の言語経験談からみた危機言語の過去と現状：宮古島（池間，西原）」で、参加者は研究者12人である。(3)はコーパスの構築に関わるプロジェクトが共同で開催したもので、研究所の28年度計画の「研究集会」と位置づけられるものである。主催は、「危機言語・方言」「歴史コーパス」「会話コーパス」「学習者コーパス」の各プロジェクト、および科研費(A)「日本語諸方言コーパスの構築」「日本語歴史コーパス」「海外連携による日本語学習者コーパスの構築」、基盤(B)「会話音声の韻律特徴の体系化」で、29年3月9日に国立国語研究所で開催した。発表件数は5件(木部，迫田，小木曾，浅原・岡，小磯)，招待講演1件(下地)，デモンストレーション4件(会話コーパス，歴史コーパス，方言コーパス，学習者コーパス)，参加者は112人，うち学生の参加者は13人であった。

5. 成果の公開に関しては、平成25年度に実施した沖縄県久米島方言の調査報告書『沖縄県久米島方言調査報告書』、『首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査2010-2016報告書』を29年3月に刊行した。また、次年度以降の出版計画として、椎葉方言調査の報告書『椎葉方言調査報告書(不土野・梅尾)』(29年5月刊行予定)，『かたりの中の方言』(勉誠出版，29年10月出版予定)，『日本語の格表現』(くろしお出版，29年10月刊行予定)，ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language*, *Handbook of Japanese Sociolinguistics* (30年刊行予定)の準備を進めた。
6. この他、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文46件，報告書・論集4冊，図書2冊，発表・講演83件，データベース等5件，その他46件を公開した。
7. 世界的に言語や文化の多様性が重視される中、危機言語・方言に関する本プロジェクトの活動は、学術的・社会的に大きな意義を持つ。例えば、学術的には、プロジェクト共同研究員の五十嵐陽介，平子達也が日本音声学会全国大会で琉球と九州のアクセントの対応関係を新たに指摘した「「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本土方言—佐賀県杵島方言と琉球語の比較—」を発表し，第30回日本音声学会全国大会 優秀発表賞を受賞した。社会的には、プロジェクトリーダー木部の研究が東京新聞2016年10月30日朝刊の社説に取り上げられ，地域語の復権の重要性が紹介された。また，松森，山田の方言の記録，復興の業績が南海日日新聞，京都新聞等に取り上げられた。
8. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(以下東京外大AA研)と共同で，フィールド調査に関する教育プログラムの開発と教科書の作成を行う。そのための検討をAA研と進め，その一部を「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」で実践した(詳細については「人材育成」の項目を参照)。

(2) 研究実施体制等に関する計画

9. 研究体制を強化するために，(1)東京外大AA研，(2)琉球大学と連携協定を締結した。(1)は，28年度東京外大概算要求「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携協定体制の構築」に基づくもので，これに基づき，今年度は，クロスアポイントメントによる特別研究員1名の選考(29年4月1日赴任)，フィールドワークに関する教育プログラムと教科書の開発に関する打合せ，フィールドワークに関するワークショップを実施した。(2)は，従来から行っていた琉球大学との連携を強化するもので，これに基づき，琉球大学に事業を委託し，沖縄本島北部方言の調査を実施した。
10. プロジェクトの推進のために，共同研究員65人(うち大学院生5人，学振PD6人)を組織した。共同研究員の所属大学は37大学(うち外国の大学3大学)である。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <p>1. 言語資源に関しては、日本の危機言語・方言データを公開し、広く共同利用に資するために、(1)「日本の危機言語・方言音声データ」、(2)「アイヌ語口承文芸コーパス」、(3)『『日本言語地図』データベース』、(4)首都圏の言語の実態と動向に関するデータを補充・整備した。(1)については、「沖縄県与那国方言の基礎語彙」、「沖縄県首里方言の談話」(桃太郎の話(1) 真栄平房敬, 桃太郎の話(2) 渡名喜聡, 五月の行事について 真栄平房敬)を増補し、公開した。(2)については、これまでに公開したホームページにジャンプ機能を付加した。(3)については、『日本言語地図』5項目のデータを追加整備し、29年3月に公開した。(4)については、上記『首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査2010-2016 報告書』(29年3月刊行)において、首都圏の言語の実態と動向に関するデータを増補した。</p> <p>2. 方言の音声データがほとんど公開されていない現状を改善するために、日本語諸方言の音声付きデータベース『日本語諸方言コーパス』(CJD)の構築を進めている。今年度は、『ふるさとことば集成』の音声データを検索システムに載せるための整備を進め、47地点の音声データ、方言テキストデータの整備を行った。今後、整備を継続し、30年度に47地点、23時間分の自然談話によるCJDモニター版を公開、平成33年度に50地点75時間分の自然談話によるCJDを一般公開する予定である。</p> <p>3. 『日本語諸方言コーパス』を活用して、論文1件(木部暢子「地域語に見る大和言葉」『日本語学』36-1)、発表5件(木部暢子「対格表現の地域差 -助詞ゼロをめぐる-」東京外国語大学語学定例研究会 他)を行った(別紙「研究成果一覧」参照)。</p> <p>4. 危機言語・方言のデータベース、特に、アイヌ語のコーパス、琉球語のデータベース、日本語諸方言の記述、および諸方言コーパスは、学術的、社会的意義が大きいですが、まだ、データの整備と公開を始めたばかりで、データ量も多くないことから、これらを活用した研究成果はそれほどあがっていない。データの整備には時間がかかるが、今後、データ量を増やし、これらを活用したパイロット的な研究を推進する予定である。</p> <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p> <p>5. コーパスを作成する他の国語研プロジェクト(「歴史コーパス」、「会話コーパス」、「学習者コーパス」等)と定期的に研究会を開催し、コーパス構築に関する研究面、技術面での意見交換を行った。</p> <p>6. コーパスのための音声データ、テキストデータを整備するために、科研費(A)で非常勤研究員2人を雇用し、データ整備を進めた。また、作業を効率的に進めるために、情報処理を担当する大学院生と週1回、研究会を開催している。</p>	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>1. 東京外大 AA 研との連携協定に基づき、AA 研 LingDy3 プロジェクトと共同でクロスアポイントメントによる特別研究員1名を公募し、選考を行った(29年4月1日赴任)。</p> <p>2. また、東京外大 AA 研 LingDy3 プロジェクトと共同で、フィールド調査に関するワークショップ「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」を実施した。実施日は28年10月23~24日、参加教員は、国語研から木部、原田、佐藤、友定賢治(県立広島大学名誉教授)の4人、東京外大 AA 研から中山、児倉の2人、受講学生は、島根大学3・4年生8人、一般公募により選抜された大学院生3人である。プログラムは、(1)隠岐の島方言調査の概要(木部)、(2)調査票の説明(原</p>	

田), (3)調査説明書・同意書, フェイスシートの説明 (佐藤), (4)隠岐方言の概要 (友定), (5)言語資料のいい録音のための5+1 (児倉), (6)談話の収集 (中山), (7)録音・調査実習。

(2) 人材育成に関する計画

若手育成に関して, 本プロジェクトでは, フィールドワークを通じて若手研究者を育成するという方針を立てている。そのために, 以下のことを実施した。

3. プロジェクト非常勤研究員 (PD フェロー) を2人 (乙武, 坂井), 非常勤研究員を3人 (佐藤, 盛, 大内) 雇用し, フィールドワークに基づく言語研究, および音声処理に関する共同研究を行い, 言語資源ワークショップで共同発表した。4月には1名が常勤の研究職, 1名が学振PDに採用された。また, 機構の広領域型プロジェクトに琉球語のフィールド調査を専門とする特任助教1人 (原田) を雇用し, 共同でフィールド調査を行った。
4. プロジェクト共同研究員として, 大学院生5人, 学振PD6人をプロジェクトに加え, 研究会や調査に参加させることにより, フィールド言語学の指導を行った。大学院生の所属は, 東京大学3人, 一橋大学, 九州大学各1人である。
5. 上記の大学院生のほか, 島根県隠岐の島方言調査に参加する大学院生を全国に公募し, 書類審査で3人を選抜した。3人の所属は, 名古屋大学, 徳島大学, 九州大学各1人である。
6. 島根県隠岐の島方言調査を実施するにあたり, 地元の大学である島根大学の学生に調査への参加を呼びかけた。その結果, 3・4年生8人が隠岐の島調査に参加した。この8人と公募による大学院生3人に対して, 「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」, およびフィールドワークを通じて, 言語調査の基礎と地域貢献について指導を行った。
7. 各地点の3点セットの作成に若手研究者が積極的に関わられるように, 若手研究者を中心に調査経費を支援する制度を設けた。今年度は24人に対し, 調査経費を支援した。
8. 「危機的な状況にある言語・方言サミット (奄美大会) in 与論」(28年11月13日) や国語研セミナー「隠岐の島方言・調査のつどい」(28年12月10日) を通じて, 地域の言語・方言の継承活動に携わる社会人に学び直しの場を提供した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
1.	地域との連携に関しては, 宮崎県椎葉村椎葉民俗芸能博物館研究事業における5ヶ年計画「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」(H26~H30)に基づき, 椎葉方言調査を実施した。また, 島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共同で隠岐の島方言調査を実施した。
2.	文化庁, 鹿児島県, 与論町, 与論町教育委員会, 琉球大学と共催で, 「危機的な状況にある言語・方言サミット (奄美大会) in 与論」を開催した。これは, 全国の方言研究者と方言継承活動に携わる人たちが集まり, 方言の記録や継承に関する問題について意見交換を行う会議で, 今年度は3回目である。日時は28年11月13日 (日), 場所は鹿児島県大島郡与論町の砂美地来館, 来場者は289人であった。
3.	島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共催で, 国立国語研究所セミナー「隠岐の島方言・調査のつどい」を開催した。方言継承活動の一環として開催したもので, 日時は28年12月10日 (土), 場所は隠岐の島町文化会館, 対象は一般市民, プログラムは「使えるかもしれない隠岐弁講座」吉井重伸, 坂本忠司 (隠岐の島在住, 方言継承活動家), 「隠岐方言の特徴—合同調査の報告を兼ねて」平子達也 (駒澤大学 講師), 「隠岐弁の魅力」友定賢治 (県立広島大学 名誉教授) で, 来場者は44人であった。
4.	鹿児島県大島郡与論島で「危機的な状況にある言語・方言サミット (奄美大会) in 与論」を, 島根県隠岐の島町文化

会館で「隠岐の島方言・調査のつどい」を開催し、研究成果を地域に発信した（上記2, 3参照）。

5. ninjal ジュニアプログラムとして、東京都青梅市および青梅市立図書館と連携し、青梅市郷土博物館の協力を得て、講演「学んでみよう！多摩のことは青梅のことは」（青梅市立若草小学校）を行った。開催日は28年12月1日、聴講者は232人（児童215人、教員13人、その他4人）であった。
6. 研究データを広く社会へ発信するために、日本の危機言語・方言音声データ、アイヌ語口承文芸コーパス、『日本語地図』データベース、首都圏の言語の実態と動向に関するデータを補充・改善し、29年3月にウェブサイトで公開した。
7. 研究のプロセスと成果を発信するために、プロジェクトのホームページを充実させ、「プロジェクトの成果物」、「フィールドワーク」の情報を発信した。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
	<ol style="list-style-type: none">1. 海外の研究者2人を共同研究員に加え（ローレンス、ペラール）、琉球語、九州方言に関する共同研究を行った。このうち、椎葉方言調査に1人が参加した。2. UCLAの岩崎勝一氏を客員教員、及びプロジェクト共同研究員に迎え、30年開催予定の国際シンポジウムの準備を進めた。3. ムートン社 <i>Handbook of Japanese Dialects</i>, <i>Handbook of the Ainu Language</i>, <i>Handbook of Japanese Sociolinguistics</i> (30年刊行予定) の準備を進めた。4. 30年度に危機言語に関する国際シンポジウムを国立国語研究所で開催する。また、そのプレシンポジウムとして、29年5月16～18日にハワイ大学で危機言語に関するシンポジウムを開催する。そのための打合せ、及び準備を岩崎勝一氏（UCLA, 国立国語研究所客員教授）、田窪行則氏（国立国語研究所運営委員）、東京外大 AA 研 LngD3 プロジェクトと行った。

6. その他

- ・宮崎県東臼杵郡椎葉村教育委員会との連携について

宮崎県椎葉村とは、これまで村と連携協力して方言の調査・記録を進めてきたが、まだ正式な連携協定を締結していない。今後、データの所有、公開等の問題が発生するので、今後、村と協定文書を交わす方向で交渉を進める予定である。

Ⅲ. 全体の状況（総括）

【成果の概要】

1. 研究に関する計画

- ・日本各地の危機言語・方言の記録・保存のために、全国40地点の点セット（語彙集、文法書、談話テキスト）の担当者を決定し、調査を開始した。
- ・地域語の記録・保存、継承活動として、(1)宮崎県椎葉村方言、(2)島根県隠岐の島方言の合同調査、(3)石川県白峰方言の合同調査を実施した。(1)は宮崎県東臼杵郡椎葉村教育委員会、椎葉民俗芸能博物館研究事業における5ヶ年計画「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」(H26～H30)との共同事業、(2)は島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共同実施、(3)は石川県白峰町の協力を得て実施したものである。これらの報告書は来年度作成の予定である。

- ・調査報告書として、『沖縄県久米島方言調査報告書』（調査は25度実施）、『首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査2010-2016報告書』を29年3月に刊行した。
- ・この他、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文46件、報告書・論集4冊、図書2冊、発表・講演83件、データベース等5件、その他46件を公開した。
- ・世界的に言語や文化の多様性が重視される中、危機言語・方言に関する本プロジェクトの活動は、学術的・社会的に大きな意義を持つ。例えば、学術的には、プロジェクト共同研究員の五十嵐陽介、平子達也が日本音声学会全国大会で琉球と九州のアクセントの対応関係を新たに指摘した「「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本土方言—佐賀県杵島方言と琉球語の比較—」を発表し、第30回日本音声学会全国大会 優秀発表賞を受賞した。社会的には、プロジェクトリーダー木部の研究や松森、山田の研究が東京新聞・中日新聞の社説、南海日日新聞、京都新聞等に取り上げられ、

地域語の復権の重要性が紹介された。

- ・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下東京外大AA研）と共同で、フィールド調査に関する教育プログラムの開発と教科書の作成を行う。そのための検討をAA研と進め、その一部を「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」で実践した。
- ・研究体制を強化するために、(1)東京外大AA研、(2)琉球大学と連携協定を締結した。(1)は、29年度東京外大概算要求に基づくもので、今年度は、クロスアポイントメントによる特別研究員1名の選考（29年4月1日赴任）、フィールドワークに関する教育プログラムと教科書の開発に関する打合せ、「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」を実施した。(2)は、従来から行っていた琉球大学との連携を強化するもので、これに基づき、琉球大学に事業を委託し、沖縄本島北部方言の調査を実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・「日本の危機言語・方言音声データ」、「アイヌ語口承文芸コーパス」、「『日本言語地図』データベース」、「首都圏の言語の実態と動向に関するデータ」を補充・整備し、公開した。
- ・方言の音声データがほとんど公開されていない現状を改善するために、日本語諸方言の音声付きデータベース『日本語諸方言コーパス』（CJD）の構築を進めている。今年度は、『ふるさとことば集成』の音声データと方言テキストデータを検索システムに載せるための整備を進め、47地点の音声データの整備を行った。30年度にモニター版の公開を予定している。
- ・アイヌ語のコーパス、琉球語のデータベース、日本語諸方言の記述、諸方言コーパス等の危機言語・方言のデータは、学術的、社会的意義が大きいが、まだ、これらを活用した研究成果はそれほどあがっていない。今後、データ量を増やし、これらを活用したパイロット的な研究を推進する予定である。

3. 教育に関する計画

- ・AA研LingDy3プロジェクトと共同でクロスアポイントメントによる特別研究員1名を公募し、選考を行った（29年4月1日赴任）。
- ・東京外大AA研LingDy3プロジェクトと共同で、フィールド調査に関するワークショップ「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」を島根大学で開催した。
- ・フィールドワークを通じて若手研究者を育成するという本プロジェクトの人材育成方針に沿い、島根県隠岐の島方言調

査に参加する大学院生を全国に公募し、書類審査で3人を選抜した。

- ・島根県隠岐の島方言調査を実施するにあたり、地元の大学である島根大学の学生に調査への参加を呼びかけ、3・4年生8人が隠岐の島調査に参加した。この8人と公募による大学院生3人に対しては、「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」、およびフィールドワークを通じて、言語調査の基礎と地域貢献について指導を行った。
- ・「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）in 与論」（28年11月13日）や国語研セミナー「隠岐の島方言・調査のつどい」（28年12月10日）を通じて、地域の言語・方言の継承活動に携わる社会人に学び直しの場を提供した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・宮崎県椎葉村椎葉民俗芸能博物館研究事業における5ヶ年計画「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」（H26～H30）に基づき、椎葉方言調査を実施した。また、島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共同で隠岐の島方言合同調査を、石川県白峰町の協力を得て白峰方言合同調査を実施した。
- ・文化庁、鹿児島県、与論町、与論町教育委員会、琉球大学と共催で、全国の方言研究者と方言継承活動に携わる人たちが方言の記録や継承に関する問題について意見交換を行う「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）in 与論」を開催した。
- ・方言継承活動の一環として島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共催で、市民向けセミナー「隠岐の島方言・調査のつどい」を隠岐の島町文化会館で開催した。
- ・上記の催し物を通して、研究成果を地域に発信した。
- ・プロジェクトのホームページを充実させ、「プロジェクトの成果物」、「フィールドワーク」の情報を発信した。

5. グローバル化に関する計画

- ・30年度に危機言語に関する国際シンポジウムを国立国語研究所で開催する。また、言語の記録に関するワークショップを29年5月にハワイ大学で開催する。今年度はその準備を進めた。

6. その他

特になし。

【今後の課題】

- ・危機言語・方言のデータベース、特に、アイヌ語のコーパス、琉球語のデータベース、日本語諸方言の記述、および諸方言コーパスは、学術的、社会的意義が大きいが、まだ、データの整備と公開を始めたばかりで、データ量も多くないことから、これらを活用した研究成果はそれほどあがっていない。データの整備には時間がかかるが、今後、データ量を増やし、これらを活用したパイロット的な研究を推進する予定である。
- ・グローバル化に関する計画が遅れている。来年度、国際学会での発表を何件か行う予定である。また、ハワイ大学で言語の記録に関するワークショップを開催し、30年度の国際シンポジウムにつなげる予定である。さらに、今後、危機言語・方言のデータの英語での発信に力を入れる。

平成28年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した

ほぼすべての評価項目に関して、初年度としては十分な成果を上げており、A評価が妥当であると考えられる。ちなみに、本プロジェクトは、昨年度終了したプロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」を継承しているが、その最終年度に、本プロジェクトへの接続のための準備研究が行われ、高い評価を得ていた。こうした準備が奏功して、初年度にもかかわらず多数の成果を上げ得たものと考えられる。

本プロジェクトの研究上、特に評価されると思われる点は、各地方言の3点セット（語彙集、文法書、談話テキスト）作成のために、40地点を対象とした記述担当者を決定したことである。一人の研究者が責任をもって当該地点を担当する方法は、望ましい記述研究の本来の姿であり、今後の成果が期待される。

また、今後は、次の3点の検討が望まれる。

- (1) データベースの、構築方法と利用に関する展望がほしい。データベースは、研究目的によって、構築の方法が変化する。汎用的利用を目的とするか、研究目的をしぼった利用をめざすかによって、収集整備の方向性が異なるであろう。初年度であるため、データベースを利用した研究論文が少ないことは問題にならないが、今後の利用を考えると、次年度は、データベースの構築整備に関する基礎研究を集中して行っておくことが望ましいように思われる。
- (2) 琉球・八丈語班と、アイヌ語班、本土方言班の成果が共有され、「消滅危機言語・方言の記録・分析・継承」という大きな主題のもとで何が見いだせるのか、統括する視点の検討が望まれる。必要であれば、アドバイザリーボードを設置し、長期的に検討する姿勢を持つことが望ましいと思われる。
- (3) 国際的連携や発信を英語世界だけに求めず、近隣諸国の当該学界との連携も地道に探ることが必要であると思われる。なぜなら、琉球語、アイヌ語、本土方言は、国境を越えて、隣接する諸地域との接触や交流があるためである。消滅危機言語・方言の、記録・分析・継承をグローバルに行うためにも、韓国、中国、ロシア等々の言語学界を視野に入れ、研究者交流を地道に長期的に築く努力を、わずかでよいから、始めることが望ましいと思われる。

《評価項目》

1. 研究成果について

プロジェクトが主催する公開研究発表会・講演会等については、(1) 公開研究発表会「格と取り立て」を、科研費(A)、(C)プロジェクトとの共催で開催、(2) 危機言語・方言セミナーを、海外客員教授の講演会として開催、(3) コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—助詞のすがた—」を、科研費(A)、基盤(B)と共同開催した。国際シンポジウムは、29年および30年開催予定であり、それに向けた準備に入った。本年度の研究成果としては、『沖縄県久米島方言調査報告書』、『椎葉方言調査報告書(不土野・梅尾)』(椎葉村と共同出版)、『首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査2010-2016報告書』を刊行。次年度以降の出版計画の準備として、さらに3冊が挙げられている。フィールド調査は、各地方言の3点セット（語彙集、文法書、談話テキスト）作成のために、40地点を対象とした記述担当者を決定し、調査を開始した。そのほか、(1) 宮崎県椎葉村方言調査、(2) 島根県隠岐の島方言の合同調査（島根県隠岐郡

隠岐の島町今日委員会と共同実施), (3)石川県白山市白峰方言調査を行った。また, 次年度以降に予定している東北方言の記録と継承活動のための予備調査も, 青森県八戸市で実施した。

データベースの公開については, 現在公開中のデータベースに, なんらかの増補を加える形で, 整備を行った。具体的には, (1)「日本の危機言語・方言音声データベース」において, 「沖縄県与那国方言の基礎語彙」, 「沖縄県首里方言の談話(桃太郎の話(1)(2), 五月の行事について)」を増補, (2)「アイヌ語口承文芸コーパス」について, これまでに録音されたアイヌ語の音声データを利用し, ジャンプ機能を付加, (3)「日本語地図データベース」において, 5項目のデータを増補公開した。また, (4)「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」のデータを増補刊行した。(5)日本語諸方言の音声付データベース「日本語諸方言コーパス」について, 30年度モニター版公開を目指して整備を行った。研究論文・研究発表等のアウトプットについては, プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて, 論文46件, 報告書・論集4冊, 図書2冊, 発表・講演83件, データベース等5件を数える。

2. 研究水準について

書評・新聞等については, 新聞記事として37本を執筆, 公共放送(NHK大分放送局)として5本を放送した。また, 本プロジェクトが, 新聞社説に取り上げられたのは1件であった(プロジェクトリーダーの研究について, 東京新聞の社説が紹介)。新聞社説において, 地域語の復権の重要性が取り上げられたことは, 本プロジェクトの社会的意義の重要性が認識されたものであろう。また, プロジェクト共同研究員2名の共同発表が, 第30回日本音声学会全国大会にて, 優秀発表賞を受賞したことも, 特筆される。ただし, 発表物には謝辞の記載がなかったため, 今後は, 関係する成果物に対する謝辞記載の徹底が望まれる。

データベースの利用状況については, 30年公開をめざして整備中の「日本語諸方言コーパス」を利用した, 研究論文1件, および発表5件があった。

3. 研究体制について

研究体制としては, プロジェクト推進のために, 共同研究員65名を, 37大学(国外の3大学を含む)にわたって組織した。共同研究員には, 5名の大学院生, 3名の学振PDを含み, また, 所属37大学のうちには, 国外の3大学を含んでいる。若手育成や国際化も考慮した, 多様な研究員体制を敷いている。また, 大学・研究機関との連携については, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 琉球大学と, 連携協定を締結した。東京外大AA研とは, フィールド調査に関する教育プログラムの開発と教科書の作成を行う。また, クロスアポイントメントによる特別研究員1名を公募, 選考した。これにより, 両組織間を橋渡しする人材活用が目指されている。琉球大学には, 琉球語調査の事業委託をし, 沖縄本島北部方言の調査を実施した。

大学・研究機関との連携については, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 琉球大学沖縄研究所と連携協定を締結し, 消滅危機言語・方言に関する研究を共同で行う体制が構築できている。東京外国語大学AA研とは, クロスアポイントメントによる特別研究員1名の選考がなされ, 教育プログラムの開発と教科書作成の打ち合わせ, フィールドワークに関するワークショップ実施を行った。また, 琉球語の調査については, 琉球大学に事業委託されたが, これと並行して, 機構

においては琉球語のフィールド調査を専門とする特任助教授1名が雇用されているため、琉球大学と機構の研究交流のパイプも併せて構築されているといえる。アドバイザーボードの設置については、特になされていない。

4. 教育について

研究過程および研究成果の教育的普及については、東京外大AA研と共同でクロスアポイントメントによる特別研究員1名を公募によって選考した(29年4月1日赴任)。また、フィールド調査に関するワークショップ「隠岐の島方言調査事前ワークショップ」を、東京外大AA研、島根大学とともに共同で開催した。教材開発については、フィールド調査に関する教育プログラムの開発と教科書の作成を、東京外大AA研と共同でおこなう。前述のワークショップの実践は、その一環として実施された。大学の機能強化については、東京外語大AA研、琉球大学との連携協定締結により、クロスアポイントメント制度の活用による人材の流動化、研究事業委託、研究の共同推進が展開されている。

5. 人材育成について

若手研究者の育成は、明確な方針のもとで、多岐にわたった育成を行った。(1)プロジェクト非常勤研究員(PDフェロー)2名、非常勤研究員3名、および特任助教1名を雇用、(2)プロジェクト共同研究員として、大学院生5名、学振PD6名を加え、フィールド言語学の指導を行いつつ、共同調査を実施、(3)島根県隠岐の島調査への参加を呼びかけ、全国公募における書類審査で3名の大学院生(名古屋大、徳島大、九州大)を加えて実施、(4)島根県隠岐の島調査の実施にあたり、地元の島根大学の学生に調査への参加を呼びかけ、3、4年生8名の希望者に対して、事前指導を行ったうえで調査に加えて実施している。社会人の学び直しは、実績なしとされている。ただし、地域貢献として行われた鹿児島県でのサミットの来場者289人や、島根県での「使えるかもしれない隠岐弁講座」への来場者44人は、ひろく社会人の学び直しの機会提供を行ったと捉えてもよい。消滅危機方言の継承を、プロジェクトの目的のひとつに掲げていることからすれば、方言の継承に関心が高い地元の社会人に対して行うセミナーは有意義である。

6. 社会連携について

産業界との連携については、プロジェクトの性格上、特段考慮されていない。地域社会との連携については、多様かつ精力的に展開された。(1)宮崎県椎葉村椎葉民俗芸能博物館研究事業における5ヶ年計画「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成に基づいた椎葉方言調査」の実施、(2)島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共同でおこなった隠岐の島方言調査の実施、(3)青梅市立図書館との連携、青梅市郷土博物館の協力によるジュニアプログラムの開催、(4)鹿児島県、島根県等自治体との共催によるサミット、セミナーの開催を行った。

7. 社会貢献について

一般向け講義・講演会等については、(1)文化庁、鹿児島県、与論町、与論町教育委員会、琉球大学との共催で「危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)in与論」を開催し、289人

の来場者があった，(2) 島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共催で，「国立国語研究所セミナー隠岐の島方言・調査のつどい」を開催し，44 人の来場者があった，(3) 東京都青梅市および青梅市立図書館との連携，青梅市郷土博物館協力で，講演「NINJAL ジュニアプログラム 学んでみよう！多摩のことば青梅のことば」を行い，児童 215 人，教員 13 人の聴講者があった。研究成果の社会への発信については，先に述べてきた，研究刊行物，一般向け講義，講演会のほか，各種コーパスのウェブサイトでの公開，および，プロジェクトの成果物，フィールドワーク情報を記載したホームページの充実を行った。

8. 国際連携について

海外の研究者の受入については，海外の研究者 2 名を共同研究員に加え，琉球語，九州方言に関する共同研究を行った。海外の大学との連携については，UCLA から 1 名を，客員教員兼プロジェクト共同研究員として迎えた。

9. 国際発信について

国際シンポジウムの開催については，30 年に，危機言語に関する国際シンポジウムを国立国語研究所で開催するための準備を始めた。また，29 年 5 月に，そのキックオフとして，ハワイ大学で危機言語に関するシンポジウムを開催予定であるが，その準備を始めた。英語による研究成果の発信については，30 年に，ムートン社から 2 冊を刊行する準備が始められている。

10. その他特記事項

初年度にもかかわらず，入念な準備のもとに，すべての評価項目にわたって，バランスよく成果を上げている点が，高く評価できる。

通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

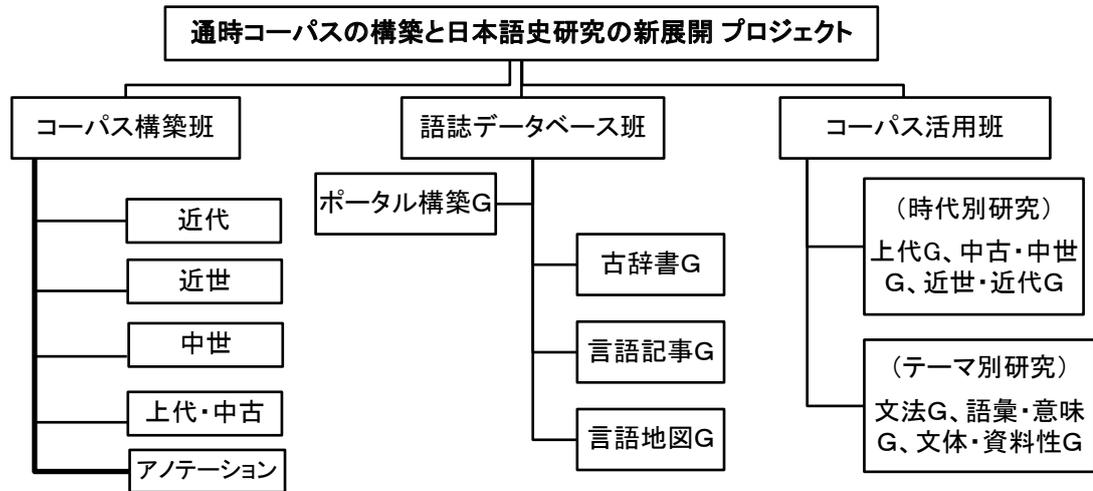
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリシタン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

2. 年次計画（ロードマップ）

本プロジェクト実施のために下図の研究班・グループを組織する。



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古、中世、近世、近代の時代ごとにグループを置き、プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。また、アノテーショングループを置き、コーパスへの情報付与について研究を行う。「語誌データベース班」は、コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書、言語記事、言語地図のグループを置き、各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き、コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は、時代別に中古・中世、近世・近代の研究グループを置き、コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に、文法、語彙・意味の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか、文体・資料性のグループを置き、それぞれコーパスに追加する資料に関する研究を行う。このほか、人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー、PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

■年次計画

※各年、研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。

- ◆ 平成 28 年度(1年目)
 - ・「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」、「明治・大正編Ⅰ雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
 - ・日本語学会でワークショップを開催。
- ◆ 平成 29 年度(2年目)
 - ・「奈良時代編Ⅰ万葉集」、「室町時代編Ⅱキリシタン資料」、「江戸時代編Ⅰ洒落本」を公開。
 - ・書き言葉コーパス入門書を執筆。
- ◆ 平成 30 年度(3年目)
 - ・「江戸時代編Ⅱ人情本」、「明治・大正編Ⅱ教科書」を公開。
 - ・古辞書データベースの試作版を公開。

●3年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」「室町時代編Ⅱキリシタン資料」「奈良時代編Ⅰ万葉集」「明治・大正編Ⅰ雑誌」「明治・大正編Ⅱ教科書」「江戸時代編Ⅰ洒落本」「江戸時代編Ⅱ人情本」

語誌データベース班は、語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は、ワークショップ・公開研究会を2回以上、国際シンポジウムを1回開催し、書籍1冊を刊行する。また、プロジェクト全体として一般向けのNINJALフォーラムを1回開催する。

- ◆ 平成31年度(4年目)
 - ・「和歌集編(八代集)」、「奈良時代編Ⅱ宣命」を公開。
- ◆ 平成32年度(5年目)
 - ・「明治・大正編Ⅲ文学作品」、「鎌倉時代編Ⅲ軍記」、「江戸時代編Ⅲ近松」を公開。
 - ・語誌情報ポータルサイトの公開。
 - ・研究論文集の出版。

●5年目までの成果物

コーパス構築班は、奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は、各種語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルサイトを公開する。コーパス活用班は、国際シンポジウムを1回開催し、研究論文集を1冊以上出版する。

- ◆ 平成33年度(6年目)
 - ・『日本語歴史コーパス』(奈良時代～明治・大正時代)の拡張完了。
 - ・語誌情報ポータルサイトの完成。

Ⅱ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. コーパスを活用した日本語史研究の対象を拡大するために、『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編Ⅰ雑誌」ver. 1.0(約1,400万語)、および「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」(「十六夜日記」「東関紀行」「海道記」「建礼門院右京大夫集」と「はすがたり」)の5作品、計約11万語)の構築を完了した。</p> <p>2. 来年度以降の研究活用の準備のため、「奈良時代編Ⅰ万葉集」、「室町時代編Ⅱキリシタン資料」の本文・形態論情報の整備を予定通り実施した。</p> <p>3. コーパス活用班の研究会を各グループに分かれて合計12回行い、この中で①日本語史研究に資する資料選定と資料性検討、②日本語史研究に資するアノテーションの研究、③コーパスを活用した日本語史の研究を行った。</p> <p>4. コーパス活用班を中心とする全体の研究成果の発表会として「通時コーパス」シンポジウム2017を3月11日に開催し、18件の研究発表(口頭発表8件、ポスター発表10件)を行った(参加者数78名)。</p> <p>5. コーパスの構築と活用について広い視野からの検討を行うために、方言・日常会話・日本語教育のコーパス構築を行うプロジェクトと合同で「コーパス合同シンポジウム」を3月9日に開催した(参加者112名、うち学生13名)。</p> <p>6. プロジェクトに関連する研究活動の成果は、謝辞を含まない関連する研究を含めて論文で56件、研究発表で79件に及び、計画を大きく上回った。</p>	

7. 『日本語歴史コーパス』とその関連研究について、『日本語の研究』学界展望（第12巻3号 p.32）において白百合女子大学中里理子教授により「2014年3月、国立国語研究所により日本語歴史コーパス「平安時代編完成版」が公開され、現在は「室町時代編Ⅰ狂言」、試作版「江戸時代編」等も公開されている。コーパスについては、『日本語学』（33-14, 2014.11）の特集「日本語史研究と歴史コーパス」や、近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』（ひつじ書房、2015.10）によって、その意義と活用法を具体的に知ることができる。日本語史研究にコーパスが重要な位置を占めることを改めて感じる（下略、下点線引用者）」と評価された。また、大阪大学田野村忠温教授による書評「近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』（『日本語の研究』第12巻4号 2016年10月）でも、「本書で概略が述べられ、応用事例の示された『日本語歴史コーパス』の完成は日本語研究史の時代を画する出来事となるであろう。」（p.158）と評価された。
 8. コーパスを活用する教育プログラムとして、連携大学院である東京外国語大学国際日本学研究科において「Japan Studies I コーパス日本語学入門」「Japan Studies II 日本語コーパスの活用」の授業を実施した。
 9. コーパス研究の普及のためNINJALチュートリアル『日本語歴史コーパス』活用入門―「中納言」による検索と集計―を9月（大阪）、2月（東京）で開催した。
- （2）研究実施体制等に関する計画**
10. 共同研究員は56名（うち大学院生5名）、共同研究員の所属機関数は33（うち外国の大学は4機関）である。
 11. コーパス構築のため、プロジェクト非常勤研究員を5名、プロジェクトPDフェローを1名雇用した。
 12. 「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
（1）共同利用・共同研究に関する計画	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「明治・大正編Ⅰ雑誌」ver. 1.0（約1,400万語）を2016年10月に一般公開した。 2. 「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」（5作品、約11万語）を2017年3月に一般公開した。 3. 「奈良時代編Ⅰ万葉集」および「室町時代編Ⅱキリシタン資料」を整備し、平成29年度に公開するための準備を予定通り行った。 4. 日本語学会春季大会（2016年5月、学習院大学）において、ワークショップ『日本語歴史コーパス』の拡張とその課題―「通時コーパス」をめざして―を開催し約80名が参加した。 5. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会としてNINJALチュートリアル『日本語歴史コーパス』活用入門を9月に大阪で行い18名が参加、2017年2月に東京で開催し32名が参加した。 6. 今後3月11日に「通時コーパス」シンポジウム2017を公開で開催した（参加者78名）。 7. 『日本語歴史コーパス』の普及活動を行うとともに、コーパス開発センターと協力して中納言のユーザ登録をウェブで受け付けるシステムを導入し、利用しやすい登録システムを整備したことで、2016年4月～12月だけで2,050名以上の新規登録ユーザーがあり、計約2,700名となった（2016年12月現在）。 8. 『日本語歴史コーパス』は日本語史研究の分野において広く参照されており、これを直接利用した研究論文（学会予稿集を含む）が2016年4月から10月までの半年間で33件発表された。こうした研究成果リスト「CHJを用いた研究業績一覧」を作成し、Webページ上での公開を開始した。 	
（2）共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画	

9. オックスフォード大学と交流協定の下、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムにより PD フェロー1 名を同大学に派遣し万葉集コーパスの統語情報アノテーションの研究を行うなど、共同研究を推進した。
10. 実践女子大学との交流協定に基づき、同大学図書館が所蔵する『今昔物語集』の画像公開を行った。また、公開予定の万葉集データについて、高岡市万葉歴史館の協力を得た。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学院生 5 名（うちプロジェクト非常勤研究員 3 名）、PD フェロー1 名をコーパス活用班に参加させ、近代語等に関する研究の援助と指導を行った。 <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. PD フェロー、プロジェクトで雇用したプロジェクト非常勤研究員に対しコーパスの構築・活用法を指導することにより、コーパスを活用した日本語史研究を展開できる人材の育成に努めた。その結果、来年度より教育職として大学に採用される者が複数出る見込みである。 3. 人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムにより PD フェロー1 名を連携協定先であるオックスフォード大学に派遣した。 4. 大学院生ら若手研究者に対して、通時コーパスを活用した研究発表のための費用（出張費、大会参加費）を援助した。 5. NINJAL チュートリアルとして一般社会人も対象として『日本語歴史コーパス』活用の講習会を行った。 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<ol style="list-style-type: none"> 1. (株)小学館および(株)ネットアドバンスと連携して『日本語歴史コーパス』検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」とのダイレクトリンクを実現した（11 月）。また、「明治・大正編 I 雑誌」と JKBooks 「太陽」本文画像とのリンクを行った（10 月）。 2. 『日本語歴史コーパス』を拡充しインターネット上で無償にて一般公開した。 3. コーパス開発センターと協力して形態素解析用の電子辞書 UniDic を拡充し、これによる解析用ツール「Web 茶まめ」をインターネット上で一般公開した。 4. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会（チュートリアル）を実施した。 	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<ol style="list-style-type: none"> 1. オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で万葉集のコーパス構築、統語情報アノテーション、上代語に関する研究を共同で行った。また、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムにより PD フェロー1 名を同大学に派遣し共同研究を推進した。 2. 海外の大学の研究者 4 名が共同研究員として参加した。 3. オックスフォード大学の大学院生を 1 名特別共同利用研究員として受け入れ指導を行った。 4. 台湾の国立台湾大学において NINJAL セミナー「データが主導する日本語研究」として『日本語歴史コーパス』の講習会を行った（9 月 15 日）。参加者数は 35 人（うち学生 32 人）。 	

5. 『日本語歴史コーパス』の英文ホームページを作成し10月より海外に向けて発信を開始した。
6. 国際会議で計5件の研究発表を行った。

6. その他

情報・システム研究機構人文学オープンデータ共同利用センター準備室（国立情報学研究所、統計数理研究所）、コーパス開発センターと共同で、近代文献のOCR技術開発の研究プロジェクトの準備を開始した。

Ⅲ. 全体の状況（総括）

【成果の概要】

1. 研究に関する計画

日本語の歴史を通時的に研究することのできる『日本語歴史コーパス』を構築し、これを活用した新しい日本語史研究を実施すること、さらにはコーパスの活用を広く普及することが、本研究プロジェクトの目的の一つである。これを実現するために次の取り組みを行った。

コーパスを活用した日本語史研究の対象を拡大するために、『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編 I 雑誌」ver. 1.0（約1,400万語）、および「鎌倉時代編 II 日記・紀行」（「十六夜日記」「東関紀行」「海道記」「建礼門院右京大夫集」「とはずがたり」の5作品、計約11万語）の構築を完了した。また、来年度以降の研究活用の準備のため、「奈良時代編 I 万葉集」、「室町時代編 II キリシタン資料」の本文・形態論情報の整備を予定通り実施した。

上記資料を活用した日本語史研究を展開するため、コーパス活用班の研究会を各グループに分かれて合計12回行い、この中で①日本語史研究に資する資料選定と資料性検討、②日本語史研究に資するアノテーションの研究、③コーパスを活用した日本語史の研究を行った。また、このコーパス活用班を中心とする全体の研究成果の発表会として「通時コーパス」シンポジウム2017を3月11日に開催し、18件の研究発表（口頭発表8件、ポスター発表10件）を行った（参加者数78名）。

共同研究員のプロジェクトに関連する研究活動の成果は、謝辞を含まない関連する研究を含めて論文で56件、研究発表で79件に及び、計画を大きく上回った。

『日本語歴史コーパス』とその関連研究について、『日本語の研究』学界展望（第12巻3号p.32）において白百合女子大学中里理子教授により「2014年3月、国立国語研究所により日本語歴史コーパス「平安時代編完成版」が公開され、現在は「室町時代編 I 狂言」、試作版「江戸時代編」等も公開されている。コーパスについては、『日本語学』（33-14, 2014. 11）の特集「日本語史研究と歴史コーパス」や、近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』（ひつじ書房、2015. 10）によって、その意義と活用法を具体的に知ることができる。日本語史研究にコーパスが重要な位置を占めることを改めて感じる（下略、下点線引用者）」と評価された。

また、大阪大学田野村忠温教授による書評「近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』（『日本語の研究』第12巻4号 2016年10月）でも、「本書で概略が述べられ、応用事例の示された『日本語歴史コーパス』の完成は日本語研究史の時代を画する出来事となるであろう。」（p.158）と評価された。

コーパスを活用する教育プログラムとして、連携大学院である東京外国語大学国際日本学研究科において「Japan Studies I コーパス日本語学入門」「Japan Studies II 日本語コーパスの活用」の授業を実施した。

また、コーパス研究の普及のためNINJALチュートリアル『日本語歴史コーパス』活用入門―「中納言」による検索と集計―を9月（大阪）、2月（東京）で開催した。

共同研究員は56名（うち大学院生5名）、共同研究員の所属機関数は33（うち外国の大学は4機関）である。また、コーパス構築のため、プロジェクト非常勤研究員を5名、プロジェクトPDフェローを1名雇用した。さらに「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

大学の研究・教育活動で利用可能な『日本語歴史コーパス』を通時コーパスとして構築し、公開するのが本プロジェクトの重要な貢献の一つである。これを実現するために下記の取り組みを行った。

「明治・大正編I雑誌」ver. 1.0（約1,400万語）を2016年10月に一般公開した。さらに、「鎌倉時代編II日記・紀行」（5作品、約11万語）を2017年3月に一般公開した。

日本語学会春季大会（2016年5月、学習院大学）において、ワークショップ『日本語歴史コーパス』の拡張とその課題—「通時コーパス」をめざして—を開催した。

『日本語歴史コーパス』の普及活動を行うとともに、コーパス開発センターと協力して利用しやすい登録システムを整備したことで、2016年4月～12月だけで2,050名以上の新規登録ユーザーがあり、計約2,700名となった（2016年12月現在）。

日本語学会でのワークショップ『日本語歴史コーパス』の拡張とその課題—「通時コーパス」をめざして—には約80名の聴衆が参加し高い関心を得た。

『日本語歴史コーパス』は日本語史研究の分野において広く参照されており、これを直接利用した研究論文（学会予稿集を含む）が2016年4月から10月までの半年間で33件発表された。なお、こうした研究成果のリスト「CHJを用いた研究業績一覧」を作成し、Webページ上での公開を開始した。

オックスフォード大学と連携協定の下、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を同大学に派遣し万葉集コーパスの統語情報アノテーションの研究を行うなど、共同研究を推進した。

3. 教育に関する計画

コーパスを活用する教育プログラムとして、連携大学院である東京外国語大学国際日本学研究科において「Japan Studies I コーパス日本語学入門」「Japan Studies II 日本語コーパスの活用」の授業を実施した。

また、コーパス研究の普及のためNINJALチュートリアル『日本語歴史コーパス』活用入門—「中納言」による検索と集計—を9月（大阪）、2月（東京）で開催した。

大学院生5名（うちプロジェクト非常勤研究員3名）、PDフェロー1名をプロジェクトのコーパス活用班に参加させ、日本語の歴史研究のための指導と援助を行った。

PDフェロー、プロジェクトで雇用したプロジェクト非常勤研究員に対しコーパスの構築・活用法を指導することにより、コーパスを活用した日本語史研究を展開できる人材の育成に努めた。

人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を連携協定先であるオックスフォード大学に派遣した。また、大学院生ら若手研究者に対して、通時コーパスを活用した研究発表のための費用（出張費、大会参加費）を援助した。

こうした若手研究者育成の成果として、来年度より教育職として大学に採用される者が複数出る見込みである。

NINJALチュートリアルとして一般社会人も対象として『日本語歴史コーパス』活用の講習会を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

(株)小学館および(株)ネットアドバンスと連携して『日本語歴史コーパス』検索アプリケーション「中納言」とジャパンレッジ「新編日本古典文学全集」とのダイレクトリンクを実現した(11月)。また、「明治・大正編Ⅰ雑誌」とJKBooks「太陽」本文画像とのリンクを行った(10月)。

『日本語歴史コーパス』を拡充しインターネット上で無償にて一般公開したほか、コーパス開発センターと協力して形態素解析用の電子辞書 UniDic を拡充し、これによる解析用ツール「Web 茶まめ」をインターネット上で一般公開した。また、『日本語歴史コーパス』利用の講習会(チュートリアル)を実施してコーパス利用の社会への普及を図った。

5. グローバル化に関する計画

プロジェクトの共同研究員として海外の大学の研究者4名が参加した。

また、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で万葉集のコーパス構築、統語情報アノテーション、上代語に関する研究を共同で行った。また、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を同大学に派遣し共同研究を推進したほか、オックスフォード大学の大学院生を1名特別共同利用研究員として受け入れ指導を行った。

『日本語歴史コーパス』の英文ホームページを作成し10月より海外に向けて発信を開始した。

台湾の国立台湾大学においてNINJALセミナー「データが主導する日本語研究」として『日本語歴史コーパス』の講習会を行った(9月15日)。また、国際会議で計5本の研究発表を行った。

6. その他

情報・システム研究機構人文学オープンデータ共同利用センター準備室(国立情報学研究所、統計数理研究所)、コーパス開発センターと共同で、近代文献のOCR技術開発の研究プロジェクトの準備を開始した。

【今後の課題】

- ・『日本語歴史コーパス』の構築は着実に進んでおり、来年度以降も対象とする資料の時代と幅を広げながら、通時コーパスとしての完成に近づけていく予定である。
- ・プロジェクト関連の日本語史研究も充実していたが、今後はよりコーパスを活用した研究方法を探究し、新しい研究手法への取り組みを行いたい。
- ・今後も、国内外の大学等研究機関から若手研究者を受け入れ、プロジェクトの活動を通じて優秀な人材を育成し、当該分野に優秀な人材を送り出すことで大学の機能強化に貢献していく予定である。

平成28年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した

豊富な人材を擁した研究体制のもと、研究会を精力的に重ね、『日本語歴史コーパス』の構築を着実に推進し、また、それらの成果を、インターネット上の無償の一般公開により、広く速やかに対外発信し、社会的普及に努め、学術面での共同利用にも大きく貢献したことは高く評価される。

平成28年度は、「明治・大正編Ⅰ雑誌」ならびに「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」の構築を完了し、

さらに「奈良時代編Ⅰ万葉集」、「室町時代編Ⅱキリシタン資料」の本文・形態論情報の整備を予定通り実施している点、まさに、通時コーパスの名に恥じぬ展開を行なっており、また、統語情報アノテーションに関わる研究支援などを通して、多様な観点から国内外の研究機関と緊密に連携し、研究資料やデータの共同利用のための体制強化にも積極的に取り組んでいる点も評価にあたいする。なお、共同利用に大いに資するものとして、形態素解析用辞書 UniDic の存在を挙げておきたい。この辞書の存在により、通時コーパスが適正なデータを提供することを考えれば、この拡充が継続的に行なわれていることは、言わば縁の下の力持ちとして評価できる。

なお、海外の4機関に属する研究者を含め56名の共同研究員を擁するという組織規模からすれば、国際会議での研究発表が5本という数字はやや物足りないとも言え、今後は海外の学術誌での論文発表や海外の著名な出版社からの成果公刊などを目指すなど、より積極的な国際発信に取り組まれることが期待される。

《評価項目》

1. 研究成果について

コーパスを活用した日本語史研究の対象を拡大するために、『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編Ⅰ雑誌」ver. 1.0（約1,400万語）、ならびに「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」（「十六夜日記」「東関紀行」「海道記」「建礼門院右京大夫集」「とはずがたり」の5作品、計約11万語）の構築と公開を完了したこと、来年度以降の研究活用の準備のため、「奈良時代編Ⅰ万葉集」、「室町時代編Ⅱキリシタン資料」の本文・形態論情報の整備を予定通り実施し、コーパス活用班の研究会を各グループに分かれて合計12回行い、この中で①日本語史研究に資する資料選定と資料性検討、②日本語史研究に資するアノテーションの研究、③コーパスを活用した日本語史の研究を行ったこと、研究成果発表の場としてのシンポジウムが2回開催され多くの参加者があったこと、当初計画では35名だった共同研究員が56名に達し、成果が論文で56件、研究発表で79件に及んでいることは、極めて旺盛な研究活動とその成果であったと評価できる。

『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編Ⅰ雑誌」ver. 1.0（約1,400万語）ならびに「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」（「十六夜日記」「東関紀行」「海道記」「建礼門院右京大夫集」「とはずがたり」の5作品、計約11万語）を一般公開するなど、研究成果の共同利用を着実に実現させている点が評価される。また、盛んな普及活動を行うとともに、コーパス開発センターと協力して利用しやすい登録システムを整備したことで、4月～12月の間で2,700名にいたるユーザを得たことは、共同利用の実績として評価できる。さらに、本コーパスは日本語史研究の分野において広く参照されており、これを直接利用した研究論文が2016年4月から10月までの半年間で33件発表されていることも、共同利用の推進の賜物である。さらには、台湾の国立台湾大学においてNINJALセミナー「データが主導する日本語研究」として同コーパスの講習会を行うなど、海外を射程に入れた発信と普及に意欲的に取り組んでいる点が、共同利用の実践として高く評価される。

2. 研究水準について

『日本語歴史コーパス』とその関連研究について、日本語学会機関誌『日本語の研究』における「〈学界展望〉語彙（史的研究）」（第12巻3号、2016.7、白百合女子大学・中里理子教授執筆）

により「2014年3月、国立国語研究所により日本語歴史コーパス「平安時代編完成版」が公開され、現在は「室町時代編 I 狂言」、試作版「江戸時代編」等も公開されている。コーパスについては、『日本語学』(33-14, 2014. 11) の特集「日本語史研究と歴史コーパス」や、近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』(ひつじ書房, 2015. 10)によって、その意義と活用法を具体的に知ることができる。日本語史研究にコーパスが重要な位置を占めることを改めて感じる」と評価されており、また、大阪大学・田野村忠温教授の書評「近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』」(『日本語の研究』第12巻4号 2016年10月)においても、「本書で概略が述べられ、応用事例の示された『日本語歴史コーパス』の完成は日本語研究史の時代を画する出来事となるであろう。」などと評価されていることは、本コーパスの学界における評価と期待が極めて高く、研究動向が大いに注目されていることを示す。特に、本年度特有の成果ではないものの、近代と中古について構築・整備されている(順次、他の時代にも対応すると聞いている)形態素解析用辞書 UniDic は、論文等の研究物の体裁はとっていないものの、時代ごとに変わってくる形態素解析の情報を的確に反映させなければならないものであり、それが高い信頼性を獲得しているということは、研究水準の高さを如実に示して余りあるものである。

『日本語歴史コーパス』の普及活動を行うとともに、コーパス開発センターと協力して中納言のユーザ登録をウェブで受け付けるシステムを導入し、利用しやすい登録システムを整備したことで、同コーパスの新規登録ユーザが28年4月から12月の間で2,700名を越えたこと、また、本コーパスを直接利用して執筆された研究論文が28年4月から10月までの半年間で33件発表されたことはいずれも特筆に値する成果であり、本コーパスの学術的水準への信頼性の高さを窺い知ることができる。なお、このような研究成果のリストは、「CHJを用いた研究業績一覧」としてWebページ上での公開が開始されている。これらもまた共同利用の対象となることで、本コーパスに基づく研究の水準がさらに高まっていくことが期待される。なお欲を言えば、Web画面上で、執筆者、論文名、掲載誌名等がソートできるとありがたい。

3. 研究体制について

共同研究員は56名(うち大学院生5名)、共同研究員の所属機関数は33(うち外国の大学は4機関)である点、また、コーパス構築のために、プロジェクト非常勤研究員5名、プロジェクトPDフェロー1名を雇用した点、さらに「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施している点など、量・質共に研究体制としては充実したものと評価できる。

実践女子大学と交流協定を結び、同大学図書館が所蔵する『今昔物語集』の画像公開を行ったこと、高岡市万葉歴史館の協力を得て万葉集データの公開を可能にしたこと、また、連携先のオックスフォード大学に、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を派遣し、万葉集コーパスの統語情報アノテーションの研究を支援したこと、さらには、情報・システム研究機構人文学オープンデータ共同利用センター準備室(国立情報学研究所、統計数理研究所)および国語研コーパス開発センターと共同で、近代文献のOCR技術開発のための研究プロジェクトの準備に着手したことなど、多様な観点から国内外の研究機関と広く緊密に連携し、研究資料やデータの共同利用のための体制強化を図った点が評価される。

4. 教育について

『日本語歴史コーパス』を活用する教育プログラムとして、連携大学院である東京外国語大学（TUFS）国際日本学研究科において「Japan Studies I コーパス日本語学入門」「Japan Studies II 日本語コーパスの活用」の授業を実施したこと、コーパス研究の普及のため NINJAL チュートリアル「『日本語歴史コーパス』活用入門 — 「中納言」による検索と集計—」を大阪と東京で2回開催したこと、大学院生5名（うちプロジェクト非常勤研究員3名）、PDフェロー1名をプロジェクトのコーパス活用班に参加させ、日本語の歴史研究のための指導と援助を行ったことなどは、大学院生・一般社会人に対する教育活動として評価できる。特に、TUFS との連携は、教育研究機関そのものとの連携であって、効果が期待できる。次代の研究を担う人々と、本プロジェクトを理解してもらう人々への教育活動は、次年度以降も計画的に推進していくことが望まれる。

5. 人材育成について

PDフェロー、プロジェクトで雇用したプロジェクト非常勤研究員に対し『日本語歴史コーパス』の構築・活用法を指導することにより、コーパスを活用した日本語史研究を展開できる人材の育成に努めたこと、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を連携協定先であるオックスフォード大学に派遣したこと、また、大学院生ら若手研究者に対して、通時コーパスを活用した研究発表のための費用（出張費、大会参加費）を援助したことなど、『日本語歴史コーパス』の理解と活用ができ、そのことで日本語史研究を推進できる人材の育成に尽力していることは、高く評価できる。なお、こうした若手研究者の中から教育職として研究機関に採用される者が複数輩出したとのことであるが、それは、このプロジェクトだけによる成果と即断するわけにはいかないものの、幾ばくかの寄与があることは認められよう。なお、大学院生ら若手研究者に対して、「通時コーパスを活用した研究発表のための費用を援助した」とあるが、対象者の人数が明記されていることが望ましい。

6. 社会連携について

(株)小学館および(株)ネットアドバンスと連携して『日本語歴史コーパス』検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」とのダイレクトリンクを実現したこと、また、「明治・大正編 I 雑誌」とJKBooks「太陽」本文画像とのリンクを行ったことは、社会との連携として評価できる。「中納言」と「新編日本古典文学全集」とがダイレクトリンクできるということは、検索画面からの本文参照を可能にし、さらに、注釈・現代語訳等も同時に参照できるということであり、利便性が格段に高まった。そのような連携の実現を成功させたことは、産業界との協業としても、特に評価すべきことと思われる。なお、杞憂に過ぎればよいことではあるが、このことによって、一企業による「新編日本古典文学全集」の本文だけが権威化してしまわないよう、学界・社会に向けてさらなる注意喚起を続けていく必要があると思われる。

7. 社会貢献について

『日本語歴史コーパス』を拡充しインターネット上で無償にて一般公開したほか、「鎌倉時代編

Ⅱ 日記・紀行」（「十六夜日記」「東関紀行」「海道記」「建礼門院右京大夫集」「とはずがたり」の5作品、計約11万語）を一般公開したこと、また、コーパス開発センターと協力して形態素解析用の電子辞書UniDicを拡充し、これによる解析用ツール「Web茶まめ」をインターネット上で一般公開した点、『日本語歴史コーパス』利用の講習会をNINJALチュートリアルとして一般社会人をも対象に実施し、コーパス利用の普及に努めている点は、社会に対する貢献として評価できる。特に、UniDicは、本年度特有の成果ではないが、近代と中古のバージョンがあって歴史的变化にも対応している点がすぐれており、これほどまでの精度を有する形態素解析用辞書が無償で社会に提供していることは特筆に価する。また、「Web茶まめ」も、特別なアプリケーションの知識（インストール等の）を持たなくても利用可能という点が有用である。また、特に一般社会人をも対象とした講習会の開催は、社会人に学び直しの機会を提供するものであり、有益な社会貢献として評価できる。

8. 国際連携について

『日本語歴史コーパス』プロジェクトの共同研究員として海外の大学の研究者4名が参加したこと、また、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で万葉集のコーパス構築、統語情報アノテーション、上代語に関する研究を共同で行ったこと、また、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムによりPDフェロー1名を同大学に派遣し共同研究を推進したほか、特別共同利用研究員としてオックスフォード大学の大学院生を1名受け入れ、指導を行ったことなど、国際的な研究のネットワーク構築に意を尽していることは評価される。

『日本語歴史コーパス』の覆う時代と文献は極めて広いので、さらに、今後は、特定の地域と時代に留まらず、時代や文献に関する計画性をもって、研究ネットワークの一層の広域化と多様化を目指した取り組みが期待される。

9. 国際発信について

『日本語歴史コーパス』の英文ホームページを作成し10月より海外に向けて発信を開始し、台湾の国立台湾大学においてNINJALセミナー「データが主導する日本語研究」として『日本語歴史コーパス』の講習会を行い（9月15日）、また、国際会議で計5本の研究発表を行った点は、国際発信への積極的な取り組みとして評価できる。特に、『日本語歴史コーパス』の「英文ホームページ」は、日本文のページに共存するかたちで、日本語の説明の下をクリックすれば英文ページに跳べるもので、見やすく使い勝手がよいと考えられる。ただし、英文だけでホームページを構成しているわけではないので、リンクの張りかたをもう少し工夫してもよい。また、海外の4機関に属する研究者を含め56名の共同研究員を擁するという組織規模に鑑みれば、国際会議での研究発表5本という数字をさらに大きくすることが望まれる。

10. その他特記事項

情報・システム研究機構人文学オープンデータ共同利用センター準備室（国立情報学研究所、統計数理研究所）、コーパス開発センターと共同で、近代文献のOCR技術開発の研究プロジェクトの準備を開始したが、同準備室では、現在、国文学研究資料館が所蔵する古典籍のデータを、画像・書誌・本文テキスト等のデータセットとして提供することを計画しているものであり、ここに、近代

文献も加われば、全体としてかなり強力な歴史的コーパスが形成されていくことが期待できる。近代文献は、肉筆によって書写されたり、くずし字・連綿等で印字されたりする古典籍とは異なり、活字による版面が OCR による読み取りの際には有利であるが、他面、印字面の欠損、振り仮名の処理といった問題もあり、今後、関係機関が情報と技術を提供し合うことによって困難を解決していくことが期待される。

大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、

(1) 多様な日常場面の会話 200 時間を納めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性や仕組みを研究するレジスター班、(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の四つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話や発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、50 年前の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、大規模日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

2. 年次計画（ロードマップ）

28 年度	会話コーパス整備	会話収録・データ整備の開始 アノテーション仕様策定・自動付与システム整備
	その他のデータ整備	[昭和話し言葉データ] 転記テキスト作成開始 [国会会議録検索システム] 構築開始 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 [名大会話コーパス] 形態論情報付与
	研究	班ごとに研究会合を持ち研究を始動
	成果発表	シンポジウム 1 回、班合同研究発表会 1 回開催
	若手育成	コーパス利用講習会 2 回開催

	成果物公開	『名大会話コーパス』一般公開（形態論情報付きテキスト検索版）
29年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>その他のデータ整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正開始</p> <p>プロジェクト内部のデータ公開</p> <p>[昭和話し言葉データ] 転記テキスト作成継続</p> <p>[BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続</p> <p>既存データを中心とする予備研究を推進</p> <p>シンポジウム1回、班合同公開研究発表会1回開催</p> <p>コーパス講習会2回開催</p> <p>『国会会議録検索システム』一般公開</p>
30年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>その他のデータ整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正継続</p> <p>[昭和話し言葉データ] アノテーション開始、モニタ公開準備</p> <p>[BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始</p> <p>既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開</p> <p>シンポジウム1回、班合同公開研究発表会1回</p> <p>フォーラム（話し言葉の経年変化）1回開催</p> <p>コーパス講習会2回開催</p> <p>『日常会話コーパス』50時間モニタ公開（形態論情報付きテキスト版）</p> <p>『昭和話し言葉データ』20時間モニタ公開（形態論情報付きテキスト版）</p>
31年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>その他のデータ整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正継続</p> <p>[昭和話し言葉データ] アノテーション継続</p> <p>既存データにモニタ公開データを加えて本研究を開始・コーパス評価</p> <p>シンポジウム1回、班合同公開研究発表会1回開催</p> <p>コーパス講習会2回開催</p> <p>『日常会話コーパス』50時間モニタ公開（音声・テキスト版）</p> <p>『BCCWJ 発話者情報』一般公開（中納言版）</p>
32年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>若手育成</p> <p>成果物公開</p>	<p>会話収録・データ整備の継続</p> <p>コアデータ・アノテーション人手修正継続</p> <p>既存データにモニタ公開データを加えて本研究を推進・コーパス評価</p> <p>シンポジウム1回、班合同公開研究発表会1回開催</p> <p>コーパス講習会2回開催</p> <p>『昭和話し言葉データ』本公開</p>
33年度	<p>会話コーパス整備</p> <p>研究</p> <p>成果発表</p> <p>成果物公開</p>	<p>公開準備（データ統合・検証、個人情報処理など）</p> <p>研究成果のとりまとめ</p> <p>シンポジウム1回開催</p> <p>『日常会話コーパス』本公開</p>

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. コーパスに基づく実証的な話し言葉研究を推進するために、次のことを実施した。</p> <ul style="list-style-type: none">●『日常会話コーパス』のデータとして 190 時間(延べ話者数 793 名)を収録し、公開データを選別した上で、34 時間分の文字化作業を行い、平成 33 年度の本公開 200 時間(30 年度のモニター公開 50 時間)の準備を進めた。また、データ公開に伴う倫理的な問題等について、福井健康弁護士(著作権法律、芸術・文化法を専門)に面会して相談し、公開のための準備を進めた。●『名大会話コーパス』14 万語に形態論情報を付与し、メタ情報(性別・年齢・出生地など 9 種)を整理した上で、2016 年 12 月 14 日にオンライン検索システム『中納言』および全文検索システム『ひまわり』にて公開した。『中納言』の実装はコーパス開発センターと共同で進めた。●『昭和話し言葉データ』50 時間(独話・対話各 25 時間)の文字化を完了させた上で、音声へのアライメント作業に着手した。●『国会会議録検索システム』ひまわり版として、1947～2012 年のデータ(11106 会議、4.5 億字)を整備し、開発版を 2016 年 5 月 24 日に、発言者の生年情報を付与した拡張版を 2016 年 12 月 8 日に公開した。●『BCCWJ』会話文への話者情報(話者名・性別・年代)付与作業を進め、1930 サンプル(小説の 39%)が終了した。●『女性のことば・男性のことば-職場編-』(ひつじ書房)の転記テキストを、出版社の許諾を得て形態素解析した上で、全文検索システム「ひまわり」で研究利用できるよう整備し、プロジェクトメンバーに限定して内部公開した。●『日本語話し言葉コーパス』中納言版をコーパス開発センターと共同で構築し、2016 年 9 月 1 日に試験公開を、2017 年 3 月に一般公開を行った。 <p>2. 日常会話コーパスを含む各種データベースの設計方針などについて研究者コミュニティの意見を収集して方針を定めるために、シンポジウム『日常会話コーパス』I を 2016 年 9 月 1 日に開催した(参加者 133 人、うち国外機関所属者 1 人、大学院生 15 人、学生 4 人)。またデータ公開に伴う倫理的問題に関する意見を集約するために、シンポジウム『日常会話コーパス』II を 2017 年 3 月 1 日に開催した(参加者 111 人、うち国外機関所属者 1 人、大学院生 10 人、学生 2 人)。更に、方言・歴史・学習者コーパスのプロジェクトと連携してコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション-助詞のすがた-」を 2017 年 3 月 9 日に開催した(うち国外機関所属者 1 人、学生 13 人)。</p> <p>3. コーパス言語学分野の人材を育成するために、第 1 回コーパス講習会(ひまわり講習会・中納言講習会の 2 コース)を 2016 年 9 月 1 日に、第 2 回コーパス講習会(同 2 コース)を 2017 年 3 月 1 日に開催し、それぞれ 27 人、22 人が参加した。</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <p>5. 大規模日常会話コーパスの構築を主導する(1)会話コーパス構築班と、構築したコーパスを研究に利用し評価する研究班として(2)レジスター班、(3)相互行為班、(4)経年変化班の四つの班を組織し、相互に連携させて研究を進めた。</p> <p>6. 共同研究員は 32 人(うち大学院生 1 人、学振 PD1 人)、共同研究員の所属機関数は 16(うち外国の大学・研究所は 11)である。</p> <p>7. プロジェクト非常勤研究員(PD フェロー)を 1 人、非常勤研究員を 6 人雇用した。</p>	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した-
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『日常会話コーパス』のデータとして190時間(延べ話者数793名)を収録し、平成33年度の本公開200時間(30年度のモニター公開50時間)の準備を進めた。 2. 『名大会話コーパス』14万語に形態論情報を付与し、2016年12月14日にオンライン検索システム『中納言』および全文検索システム『ひまわり』にて公開した。『中納言』の実装はコーパス開発センターと共同で進めた。 3. 『昭和話し言葉データ』50時間(独話・対話各25時間)の文字化を完了させた上で、音声へのアライメント作業に着手した。 4. 『国会会議録検索システム』ひまわり版として、(11106会議、4.5億字)を整備し、開発版を2016年5月24日に、発言者の生年情報を付与した拡張版を2016年12月8日に公開した。 5. 『BCCWJ』会話文への話者情報付与作業を進め、1930サンプル(小説の39%)が終了した。 6. 『女性のことば・男性のことば-職場編-』(ひつじ書房)の転記テキストを、出版社の許諾を得て形態素解析した上で、全文検索システム「ひまわり」で研究利用できるよう整備し、プロジェクトメンバーに限定して内部公開した。 7. 『日本語話し言葉コーパス』中納言版をコーパス開発センターと共同で構築し、2016年9月1日に試験公開を、2017年3月に一般公開を行った。 8. シンポジウム『日常会話コーパス』Iを2016年9月1日に開催した。データ公開に伴う倫理的問題に関する意見を集約するために、公開研究発表会に変えてシンポジウム『日常会話コーパス』IIを2017年3月1日に開催した。またコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション-助詞のすがた-」を2017年3月9日に開催した。 9. 第1回コーパス講習会(ひまわり講習会・中納言講習会の2コース)を2016年9月1日に、第2回コーパス講習会を2017年3月1日に開催した。 10. 上記に基づき、論文17件、報告書1冊、データベース3種4件を公開した。また100件の研究発表・講演を行った。 <p>『国会会議録』は経年変化・レジスター研究において、『名大会話コーパス』は会話研究・日本語教育研究において広く利用されており、ひまわりパッケージ版について、前者は302件、後者は100件の利用があった。</p> <p>なお、『名大会話コーパス』中納言版は全ての中納言ユーザに無償提供されており、幅広い利用が期待される。</p> <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p> <p>該当する活動なし</p>	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した-
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大学生4名、大学院生2名をコーパス構築やそれに基づく話し言葉研究に参加させた。 <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大学院生1人、学振PD1人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。 ● 若手研究者を非常勤研究員として6人雇用し、プロジェクトに参画させた。 ● 若手研究者2名に対し研究発表の経費を援助した。 ● 若手研究者4名に対し、3月1日開催のシンポジウムで発表の機会を提供した。 ● 若手研究者や大学院生を主対象に、コーパス利用に関する講習会を2回開催した。- 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した-
<p>次のコーパスをウェブサイトで公開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版 『国会会議録』ひまわり版 『日本語話し言葉コーパス』中納言版 	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した-
<ul style="list-style-type: none"> 海外の研究者 1 人を共同研究員に加え、日常会話コーパスの設計・構築に関する共同研究を行った。 共同研究員の鈴木亮子氏が代表をつとめる国際プロジェクト(日本学術振興会と Academy of Finland: 二国間共同事業)「会話における言語と相互行為の「単位」:複数言語からの創発的アプローチ」と連携し、発話単位などアノテーションの仕様について協議した。 ロマンス語のコーパスプロジェクト「C-ORAL-ROM」を主宰するフィレンツェ大学の Emanuela Cresti 氏、Massimo Moneglia 氏と会話行動調査にもとづく日常会話コーパスの設計について議論した。 <p>次のコーパスをウェブサイトにより海外に向けて発信した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版 『国会会議録』ひまわり版 『日本語話し言葉コーパス』中納言版 	

6. その他

自己点検評価	計画どおりに実施した-
特に無し	

Ⅲ. 全体の状況（総括）

<p>【成果の概要】</p> <p>1. 研究に関する計画</p> <p>コーパスに基づく実証的な話し言葉研究を推進するために、次のことを実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『日常会話コーパス』の整備(予定を少し上回るペースで進行) 『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版の公開(予定通り公開) 『昭和話し言葉データ』の整備(予定通り整備中) 『国会会議録検索システム』ひまわり版の公開(29年度公開だったものを前倒して公開) 『BCCWJ』会話文への話者情報の付与(予定通り整備中) 『日本語話し言葉コーパス』の公開(予定通り公開) 『女性のことば・男性のことば-職場編-』ひまわり版の内部公開(予定外のデータ整備) <p>公開のシンポジウムを次の通り開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウム『日常会話コーパス』I (2016年9月1日、国立国語研究所、133名参加)
--

・シンポジウム『日常会話コーパス』II(2017年3月1日、国立国語研究所)

・コーパス合同シンポジウム(2017年3月9日、国立国語研究所)

講習会を次の通り開催した。

・コーパス講習会 I(2コース)(2016年9月1日、国立国語研究所、27名参加)

・コーパス講習会 II(2コース)(2017年3月1日、国立国語研究所)

2. 共同利用・共同研究に関する計画

コーパスに基づく実証的な話し言葉研究を推進するために、次のことを実施した。

『日常会話コーパス』の整備(予定を少し上回るペースで進行)

『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版の公開(予定通り公開)

『昭和話し言葉データ』の整備(予定通り整備中)

『国会会議録検索システム』ひまわり版の公開(29年度公開だったものを前倒して公開)

『BCCWJ』会話文への話者情報の付与(予定通り整備中)

『日本語話し言葉コーパス』の公開(予定通り公開)

『女性のことば・男性のことば-職場編-』ひまわり版の内部公開(予定外のデータ整備)

公開のシンポジウムを次の通り開催した。

・シンポジウム『日常会話コーパス』I(2016年9月1日、国立国語研究所、133名参加)

・シンポジウム『日常会話コーパス』II(2017年3月1日、国立国語研究所)

・コーパス合同シンポジウム(2017年3月9日、国立国語研究所)

講習会を次の通り開催した。

・コーパス講習会 I(2コース)(2016年9月1日、国立国語研究所、27名参加)

・コーパス講習会 II(2コース)(2017年3月1日、国立国語研究所)

論文14件、報告書1冊、データベース3件を公開した。また44件の研究発表・講演を行った。

『国会会議録』ひまわり版は209件、『名大会話コーパス』ひまわり版は64件の利用があった。

3. 教育に関する計画

- ・大学生4名、大学院生2名をコーパス構築・話し言葉研究に参加させた。
- ・大学院生1人、学振PD1人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
- ・若手研究者を非常勤研究員として6人雇用し、プロジェクトに参画させた。
- ・若手研究者2名に対し研究発表の経費を援助した*1。
- ・若手研究者や大学院生を主対象にコーパス講習会を2回開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

・次のコーパスをウェブサイトで公開した:『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版,『国会会議録』ひまわり版,『日本語話し言葉コーパス』中納言版

5. グローバル化に関する計画

- ・海外の研究者1人を共同研究員に加えて共同研究を行った。
- ・共同研究員の鈴木亮子氏が代表をつとめる国際プロジェクト「会話における言語と相互行為の「単位」と連携し、発話単位などアノテーションの仕様について協議した。
- ・ロマンス語のコーパスプロジェクト「C-ORAL-ROM」を主宰する Emanuela Cresti 氏、Massimo Moneglia 氏と日常会話コーパスの設計について議論した。

・次のコーパスをウェブサイトで公開した:『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版,『国会会議録』ひまわり版,『日本語話し言葉コーパス』中納言版

6. その他

・該当する活動なし

【今後の課題】

・今年度は、第三期計画終了時の公開を目指す各種コーパスやデータベース構築のための環境を整備することができた。次年度には、各種コーパスやデータベースの作成を継続し、その一部を試験公開して国内外の大学等研究機関の日本語教育研究者への周知に努め、実証的なデータによる日本語教育研究の質的向上につなげ、大学の機能強化に貢献していく予定である。

平成28年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

本プロジェクトは、大規模な日本語の「日常会話コーパス」を構築して、日常会話における話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することを目的とする。

(1) 日常会話 200 時間を納めた大規模会話のコーパス構築班、そのコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声等の多様性と仕組みを研究するレジスター班、(3) 文法の果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声等の話し言葉の経年変化班の4班からなる。日常会話の他にも、講演などのシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、50年前の話し言葉など、多様なデータを整備することにより、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為等の特性や仕組み、その経年変化の実態を解明する。以上のコーパス等を一般公開することによって、共同利用・共同研究の基盤強化も目指すものである。

初年度は、(1)による日常会話の収録とデータ整備を開始し、(2)～(4)によるその他のデータの整備を主な目的とした班別の研究会合と合同研究発表会、シンポジウム、コーパス講習会を開催した。そのコーパスを用いた研究成果が挙がるのは来年度以降と考えられる。コーパスの有効性を示す具体的な研究の内容と成果に関する報告が待たれる。

研究プロジェクト全体の内容や進め方に関しては、以下のような検討が必要だと考えられる。

- レジスターや相互行為について研究するには、語彙・文法・音声だけでなく、対話行為、談話関係、照応・共参照等にも着目する必要がある、それらを明示するアノテーションが必要となるのではないか。書き言葉に関してこうした情報を明示したコーパスはすでいくつかあるが、日常会話についてはそのようなコーパスはまだ少なく、関連研究への貢献が大きいと考えられる。ISO等においてアノテーションの国際標準化も進んでおり、機は熟しているといえよう。
- 日本語の日常会話に関する大規模なコーパスを構成するデータとして、約200時間の談話資料の場面や参加者、目的、話題等の種類と範囲は、質と量ともに適切かつ十分か否かを明確にすべきである。既存の各種データベースをさらに整備するに際しても、「日常会話コーパス」と併せて、日本語の日常会話のデータとしての均衡性をどのように担保するのかを明らかにすることが望まれる。

コーパスの構築・整備は、その実際の利用方法の観点から、コーパスの構造や構築方法に関する検討を加え、随時改良しつつ推進する必要がある。公開後の「日常会話コーパス」の利用促進と保守・改良・拡張を持続可能にするために、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけではなく、日本語教育や辞書の編纂、音声情報処理、ロボット工学などへの応用も含めて、さまざまなユースケースから得られる知見をコーパスの仕様やメンテナンスに反映させる体制の構築が重要なのではないかと。

《評価項目》

1. 研究成果について

本研究の初年度であるため、新たな「日常会話コーパス」の構築に向けた準備と、既存の各種コーパス等の整備を中心に進めている。「日常会話コーパス」については、190時間（延べ話者数793名）を収録した音声データから公開すべき部分を選別した上で34時間分の文字化作業を行っており、平成33年度に200時間のデータを本公開するための準備が予定より速く進捗している。

このコーパスを用いて日常会話の多角的研究を実施するための分析方法等に関する検討がさらに期待される。特に、初年度に実施した公開シンポジウム「日常会話コーパス」ⅠⅡおよび「コーパス合同シンポジウム」において、日常会話コーパスを含む各種データベースの設計方針や日常会話研究の方向性に関する研究者コミュニティの意見収集の知見が共有されることにより、本プロジェクトの今後の推進に資するところが大きいと期待される。

以下の各種コーパスとデータベースの整備・公開においても、種々の成果が得られている。(1)「名大会話コーパス」の形態論情報の付与・メタ情報の整理及び「中納言」「ひまわり」版の公開。(2)「昭和話し言葉データ」の文字化と音声へのアライメント作業の着手。(3)「国会会議録検索システム」ひまわり版の整備・公開。(4)「BCCJ」会話文の話者情報付与作業の実施。(5)「女性のことば・男性のことば—職場編—」の転記テキストのひまわり版の内部公開。(6)「日本語話し言葉コーパス」中納言の構築と一般公開。

研究論文・研究発表等については、論文14件、報告書1冊、発表・講演44件、プロジェクトの発表会等6件、データベース等5件、その他9件の書評等が公刊された。

2. 研究水準について

本プロジェクトで開発する「日常会話コーパス」は、世界的にも最先端に位置付けられ、日本語の日常会話の研究において有意義であるばかりか、その知見は他の言語における関連研究にも波及し得るものと認められる。

しかしながら、なお、質・量ともに必ずしも十分であるとはいえないのではないだろうか。どのような範囲と種類と量の会話データからどのような意味で多角的な成果が得られるのかについて検討を深めるべきである。それによって、多角的アプローチによる大規模な日常会話コーパスを構築する必要性をさらに明確化し、日本語の日常会話の研究の可能性を拡大することができると思われる。「日常会話コーパス」に基づく分析は「音韻・語彙・文法などに着目して」なされることになっているが、それによる研究の範囲は限られるのではないかと。前述のように、対話行為、談話関係、照応・共参照等のアノテーションをコーパスに取り入れることを検討することが望ましい。

コーパス等の利用状況については、「国会会議録」のひまわりパッケージ版が経年変化・レジスタ

一研究に 209 件、「名大会話コーパス」は会話研究・日本語教育研究に 64 件と、広く利用されている。本プロジェクトの成果がこのように多くの研究に活用されていることは特筆すべきであり、今後のさらなる共同利用の拡大が期待される。また、プロジェクト全体のコーパスとデータベース活用の促進を図るために、合同研究発表会を国語研において開催されている。

3. 研究体制について

講演などのシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、50 年前の話し言葉などのデータに対するアノテーション等の作業は、コーパス構築班が担当し、そのデータを用いた日常会話の研究をレジスター班、相互行為班、経年変化班が担当するものと予想されるが、その旨が報告書に明記されていない。

共同研究員 32 名（うち大学院生、学振 PD フェロー各 1 名）、共同研究員の所属機関数は 16 機関（うち海外の大学・研究所 11 機関）、プロジェクト非常勤研究員（PD フェロー）1 名、非常勤研究員 6 名からなる。メンバーにやや偏りがあり、日本語学や日本語教育・国語教育の分野の音韻・音声論、語彙論、文法論、文章・談話論等を専攻する研究者の関与が少ないように見受けられる。

4. 教育について

研究成果の教育的普及については、大学生 4 名と大学院生 2 名をコーパス構築やそれに基づく話し言葉の研究に参加させ、若手研究者や大学院生を対象に、コーパス利用に関する講習会を 2 回実施した点が評価される。ただ、そこで参加者からどのような評価や反応があったのかが報告書に記されていないので、その教育効果が不明である。講習会等をその評価に基づいて改善し続ける体制の構築が期待される。

5. 人材育成について

若手研究者の育成については、(1)プロジェクト共同研究員(大学院生・学振 PD フェロー各 1 名)、非常勤研究員 6 名が参加した。(2)うち 2 名に対し、研究発表の経費を援助した。(3)若手研究者に対し、2017 年 3 月開催のシンポジウムに研究発表の機会を提供するなどの成果が認められる。大学院生等を共同研究に参加させたことは評価できる。しかし、具体的にどのような内容の指導助言を行なったのかが報告書に記されていないので、改善を望む。

6. 社会連携について

社会との協働に関しては該当する活動が記されていないが、人工知能の研究開発とその事業化が広く展開されつつある現状にあっては、さまざまな可能性があるのではないかと。研究成果の社会への普及に関する成果としては、「名大会話コーパス」、「国会会議録」、「日本語話し言葉コーパス」の公開が挙げられているが、人工知能の意味理解の能力がまだ人間に及ばない現状においては、意味理解を支援するアノテーションが施された、本研究プロジェクトによる各種データが人工知能の研究開発にも、実社会における活用にも必須であることから、これらのコーパスを産業や教育において、これまでの想定よりも多様な仕方による活用可能性を検討すべきであろう。

7. 社会貢献について

大規模な日常会話コーパスを構築するために、相当多数の会話参加者の会話データを収録することだが、調査協力者である会話参加者に対する本プロジェクトの意義や成果の還元等をどのように図るのが報告書に記されていない。日常会話の談話資料は、収集後に調査協力者へのフォローアップ・インタビュー等を実施して、発話意図や相互作用の実態について解明していく必要があるが、そのための配慮がどの程度なされているかが不明である。

8. 国際連携について

(1) 海外の研究者1名を共同研究員に加え、日常会話コーパスの設計・構築に関する共同研究を行った。(2) 海外連携については、共同研究員の鈴木亮子氏が代表の国際プロジェクト(日本学術振興会とAcademy of Finland: 二国間共同事業)の「会話における言語と相互行為の「単位」と連携し、発話単位等のアノテーションの仕様について協議した。(3) フィレンツェ大学の共同研究者2名と会話行動調査に基づく日常会話コーパスの設計について議論した。海外連携については偏りがあるものの、特に(2)の分析単位の検討は、日常会話コーパス構築のための重要な観点をもたらすものとして評価できる。

9. 国際発信について

次の3種類のコーパスをウェブサイトから国内・海外に向けて発信した。

- 「名大会話コーパス」中納言版・ひまわり版
- 「国会会議録検索システム」ひまわり版
- 「日本語話し言葉コーパス」中納言版

これらのうち、「名大会話コーパス」のサイトと「ひまわり」には日本語のコンテンツしかないようだが、日本語が読めなくても、日本語のデータの統計的分析をしたいと思う研究者はいると思われるので、そのような研究者に向けて英語版も用意することが望ましい。

10. その他特記事項

特になし。

日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

2. 年次計画（ロードマップ）

【平成 28（2016）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ・ウェブ版読解教材の開発に着手する。

【平成 29（2017）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ・NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) を開催する。

【平成 30 (2018) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ・学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の読解過程に関する教師指導書を刊行する。

【平成 31 (2019) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

【平成 32 (2020) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ・読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ・日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

【平成 33 (2021) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ・学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none">1. 言語使用の実態を会話能力の観点から解明するという目的を達成するために、母語話者と学習者の自然会話コーパスである「BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語会話コーパス」の構築に着手した。2. 多言語を母語とする日本語学習者の日本語習得過程を解明するという目的を達成するために、多言語を母語とする日本語学習者コーパスである「I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の構築に着手した。2016年5月9日に、検索システムであるI-JAS中納言とともに、第一次公開として225名分の発話データ、および145名分の作文データを公開した。3. 日本語学習者の文章理解過程の実態を解明するために、文脈情報を用いた文章理解過程調査を中国とベトナムで計3回実施した。調査対象者は、中国哈爾濱調査(2016年6月1日～5日)では黒竜江大学日本語学科の学部生37名、ベトナムハノイ調査(2016年8月23～25日および2016年8月29日～9月14日)ではハノイ国家大学日本語言語文化学部の学部生60名、中国青島調査(2016年11月13日～16日、中国青島大学日本語学科の学部生26名である。また、国内・海外(中国・欧州等)の調査協力者に依頼し、それぞれの所属機関の日本語学習者を対象にした調査にも着手した。4. オンライン日本語基本動詞辞典(『基本動詞ハンドブック』)を拡充し、そこに15見出しを新たに追加した(累計80見出し)。また、例文音声を1173文追加(累計3563文)、ショートアニメを31点追加した(累計70点)。5. 日本語学習者用の読解教材を作成するための共同研究を開始し、試験公開の準備を整えた。6. 研究成果については、論文47件、図書4冊、報告書・論集1冊、発表・講演89件、プロジェクトの発表会等10件、データベース2件を公開した。7. 次年度に向けて、BTSJ日本語会話コーパス、I-JAS多言語母語の日本語学習者横断コーパス、日本語学習者の読解コーパス、オンライン日本語基本動詞辞典、ウェブ版読解教材の公開・拡充のための準備を進めた。8. 『基本動詞ハンドブック』に対して、九州大学の内田諭准教授から「コーパスに基づいた先進的な取り組みとして一見の価値がある」と評価された。9. 母語話者と学習者の自然会話コーパスの活用促進を図るという目的を達成するために、BTSJ活用方法講習会を3回国語研で実施した。講習会の参加者は、第1回(2016年5月28日)が47名(うち外国人研究者が4名、大学院生が26名)、第2回(2016年11月19日)が26名(うち外国人研究者1名、大学院生14名、学生1名)、第3回(2016年12月12日)が26名(うち外国人研究者1名、大学院生20名、学生1名)であった。また、2017年1月28日開催した日本語教師セミナー(国内・国語研)において、BTSJ日本語会話コーパスの多様な活用方法を紹介し、さらに、2017年3月4日(国語研)の「第1回BTSJ日本語会話コーパス活用シンポジウム」において、より専門的な観点からBTSJ日本語会話コーパスの活用方法を論じた。10. 多言語を母語とする日本語学習者コーパスの活用促進を図るという目的を達成するために、日本語教師セミナー(海外)を1回、学習者コーパス・ワークショップ(国語研)を2回開催した。日本語教師セミナー(海外)は2016年10月21日に中国の北京師範大学で開催し、60名が参加した(うち外国人研究者11名、大学院生38名、学生5名)。学習	

者コーパス・ワークショップは、2016年12月3日の開催の第一回は87名が参加し（うち外国人研究者22名、大学院生23名、学生1名）、2017年3月10日開催の第二回は、100名が参加した（うち外国人研究者7名、大学院生18名、学生1名）。

11. 日本語学習者の文章理解過程を記述した読解コーパスの活用促進を図るという目的を達成するために、NINJAL チューリアルを2回開催し、2017年2月17日（大阪大学）には27名が参加し（うち大学院生12名、学生6名）、24日（国語研）には21名が参加した（うち外国人研究者3名、大学院生10名、学生1名）。

（2）研究実施体制等に関する計画

12. サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」の研究遂行のために、プロジェクト共同研究員を32名組織した。
13. サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」の研究遂行のために、プロジェクト共同研究員を47名組織した。
14. サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」の研究遂行のために、プロジェクト共同研究員を22名組織した。
15. 共同研究員は101名（うち大学院生4名）、共同研究員の所属機関数は73機関（うち外国の大学・研究所は28機関）である。
16. プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）を3名、非常勤研究員を11名、技術補佐員を4名雇用した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>（1）共同利用・共同研究に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 言語使用の実態を会話能力の観点から解明するという目的を達成するために、母語話者と学習者の自然会話コーパスである「BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語会話コーパス」の構築に着手し、共同利用・共同研究に供する準備を整えた。 2. 多言語を母語とする日本語学習者の日本語習得過程を解明するという目的を達成するために、多言語を母語とする日本語学習者コーパスである「I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の構築に着手した。2016年5月9日に、検索システムであるI-JAS 中納言とともに、第一次公開として225名分の発話データ、および145名分の作文データを公開した。 3. 収集された調査データを整理し、公開のための枠組みを固め、文字化や翻訳の作業に着手した。次年度には試験公開を予定している。 4. オンライン日本語基本動詞辞典（『基本動詞ハンドブック』）を拡充し、そこに15見出しを新たに追加した（累計80見出し）。また、例文音声を1173文追加（累計3563文）、ショートアニメを31点追加した（累計70点）。 5. 日本語学習者用の読解教材を作成するための共同研究を開始した。ウェブ版読解教材のサンプルを平成29（2017）年度に試験公開する予定である。 6. プロジェクト全体のデータベースの活用促進を図るという目的を達成するために、合同研究発表会を2017年2月4日に国語研で開催し、120名が参加した（うち外国人研究者9名、大学院生19名、学生4名）。 7. オンライン日本語基本動詞辞典に関わる研究成果であるBCCWJコーパス検索ツールNINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)が、コーパスに基づいて編纂された日本初の国語辞典である『現代国語例解辞典』〔第5版〕（小学館）の編纂に使用された。 	

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

8. 日本語学習者の4年間の変容と成長のデータ収集および縦断コーパスの構築という目的を達成するために、北京日本語学センターと共同で、中国・北京師範大学日本語学科の学部生18名を対象に調査を実施した。実施期間は、2016年5月14日～15日と10月22日～23日の2回であった。なお、下記調査方法はI-JASの調査項目に準じたものとなっている。次年度も含め、2019年7月に調査対象者が大学を卒業するまで今後も継続的に年に2回調査を行う予定である。
9. 2016年4月に結んだ連携協定に基づいて、国際交流基金日本語国際センターと、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究の一部を共同で推進した。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<h3>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</h3> <ol style="list-style-type: none">1. 文脈情報を用いた文章理解過程を記述するコーパス構築作業に2名の大学院生が参加し、指導を行った。また、作文や読解に関わるピア・ラーニングの教室談話の分析に4名の大学院生が参加し、国際学会で発表を行った。さらに、インド在住の大学院生1名が視聴覚コンテンツ開発作業に携わり、インドの日本語教育現場との連携を深めた。2. 1名のスタッフが一橋大学の連携教授として修士課程3名、博士後期課程10名の指導教員として研究論文の指導を担当した。また、非常勤講師として、3名のスタッフが首都大学東京、大阪府立大学、南山大学、東海大学で大学院教育に協力した。 <h3>(2) 人材育成に関する計画</h3> <ol style="list-style-type: none">3. プロジェクト非常勤研究員(PDフェロー)を3名雇用した。うち1名が博士論文を基にした著作を2017年2月に刊行した。残る2名もNINJALサロンで自身の研究成果を発表し、次年度以降、研究が本格化できる態勢を整えた。4. 日本語教師セミナーを国内外で開催した。海外については、2016年10月21日に中国の北京師範大学で開催し、参加者は60名(うち外国人研究者11名、大学院生38名、学生5名)であった。国内については2016年1月28日に国立国語研究所で開催し、参加者は163名であった(うち外国人研究者6名、大学院生30名、学生6名)。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<ol style="list-style-type: none">1. 外国人にとってわかりやすい日本語という視点を取り入れたビジネス日本語のプロジェクトを、企業関係者を中心とした日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと開始した。2. 日本語教師セミナーを国内と国外で1回ずつ開催し、研究成果の社会への普及に努めた。海外については、2016年10月21日に中国の北京師範大学で開催し、参加者は60名(うち外国人研究者11名、大学院生38名、学生5名)であった。国内については2016年1月28日に国立国語研究所で開催し、参加者は163名であった(うち外国人研究者6名、大学院生30名、学生6名)。3. 日本語教師を主な対象とする研修会を、北海道大学(2016年7月2日)、国際日本語普及協会(2016年7月28日)、アメリカン・スクール・イン・ジャパン(2016年10月22日)、福岡YWCA(2016年10月22日)で行った。また、日本語ボランティアを対象とする講座を福岡県国際交流センター(2016年11月19～21日)で行った。4. 2016年10月24日に、中国の大学の日本語学習者の訪日団を前に、中国人の日本語の話し方について講演した。また、	

2016年11月27日の大学共同利用機関シンポジウム2016において、高校生らを対象に日本語教育の魅力を紹介した。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
	<ol style="list-style-type: none">1. 海外在住の研究者28名をプロジェクト共同研究員として加え、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施している。2. 連携協定を結んでいる北京日本語学研究中心と共同で、日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を半年ごとに行っている。3. 日本語学習者の読解コーパスに掲載するデータを収集するための調査を、中国、ベトナム、ヨーロッパ等で現地の研究者の協力を得て行った。4. ウェブ版読解教材の開発を、中国、台湾、米国等の研究者と行った。5. 『基本動詞ハンドブック』に関して、言語類型論についての講演をデリーのネルー大学で2017年3月22日に行い、70名（うち外国人研究者10名、大学院生60名）が参加した。また、『基本動詞ハンドブック』の紹介とデモンストレーションを、ブータン日本語学校で2017年3月24日に行い、22名（うち学生20名）が参加した。6. 日本語教師セミナー（海外）を、2016年10月21日に中国の北京師範大学で開催した。7. NCRBの開発の趣旨と活用方法についての発表を、北京外国語大学および仁川大学の特別講義、韓国外語教育学会の招待講演、2016年日本語教育国際研究大会の口頭発表として行った。また、BTSJやNCRBを生かした談話の理論研究やポライトネス研究を、第31回国際心理学会（横浜）の口頭発表、2016年日本語教育国際研究大会の口頭発表、第8回中日対照言語学シンポジウムの招待パネルにて発表した。8. 日本語教育の作文や読解に関わるピア・ラーニングの教室談話（BTSJを用いた分析）の発表を、2016年度中国日本語教育研究会年次大会で、大学院生や現地の共同研究員とともに行った。9. 日本語読解教材の作成に関するパネル発表を、第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムで、ヨーロッパの共同研究員とともに行った。

Ⅲ. 全体の状況（総括）

【成果の概要】

1. 研究に関する計画

- ・学習者の日本語使用面では、母語話者と学習者の自然会話コーパスである「BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語会話コーパス」と多言語を母語とする日本語学習者コーパスである「I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の構築に、当初の計画のとおりに着手した。とくに、後者は準備段階を越え、検索システムであるI-JAS中納言とともに、第一次公開として225名分の発話データ、および145名分の作文データの公開に至った。
- ・学習者の日本語理解面では、中国・ベトナムで3回、計123名の学習者への文章理解過程調査を行うと同時に、国内・海外（中国・欧州等）の現地の調査協力者による所属機関の日本語学習者を対象にした読解調査を、当初の計画のとおり推進した。
- ・学習者のためのリソース開発面では、日本語学習者用の読解教材を作成するための共同研究を、当初の計画のとおり開始する一方、オンライン日本語基本動詞辞典である『基本動詞ハンドブック』の拡充を、当初の計画を超えて進め、

後者が15見出し、例文音声1173文、ショートアニメを31点それぞれ新たに追加することができた。

- ・『基本動詞ハンドブック』に対して、九州大学の内田諭准教授から「コーパスに基づいた先進的な取り組みとして一見の価値がある」と評価された。
- ・「BTSJ」に関わる講習会等を5回、「I-JAS」に関わるワークショップ等を3回、読解コーパスに関わるチュートリアルを2回開催し、大学院生を含む日本語教育研究者、および現場の日本語教師を対象に、研究成果の教育的普及に努めた。
- ・プロジェクト全体として、73機関（うち外国の大学・研究所は28機関）、101名の共同研究員（うち大学院生4名）を組織し（当初の計画では約90名）、プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）を3名、非常勤研究員を11名、技術補佐員を4名雇用了（当初の計画では順に3名、約7名、約3名）。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・学習者の日本語使用面では、母語話者と学習者の自然会話コーパスである「BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語会話コーパス」と多言語を母語とする日本語学習者コーパスである「I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の構築に、当初の計画のとおりに着手した。とくに、後者は準備段階を越え、検索システムであるI-JAS中納言とともに、第一次公開として225名分の発話データ、および145名分の作文データの公開に至った。
- ・学習者の日本語理解面では、中国・ベトナムで3回、計123名の学習者への文章理解過程調査を行うと同時に、国内・海外（中国・欧州等）の現地の調査協力者による所属機関の日本語学習者を対象にした読解調査を、当初の計画のとおりに進捗した。
- ・学習者のためのリソース開発面では、日本語学習者用の読解教材を作成するための共同研究を、当初の計画のとおりを開始する一方、オンライン日本語基本動詞辞典である『基本動詞ハンドブック』の拡充を、当初の計画を超えて進め、後者が15見出し、例文音声1173文、ショートアニメを31点それぞれ新たに追加することができた。
- ・その結果、プロジェクト全体のデータベースの活用促進を図るという目的を達成するために、合同研究発表会を開催することが可能になり、プロジェクトの成果を共同利用・共同研究できる環境が整った。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典に関わる研究成果であるBCCWJコーパス検索ツールNINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)が、コーパスに基づいて編纂された日本初の国語辞典である『現代国語例解辞典』[第5版] (小学館) の編纂に使用された。
- ・日本語学習者の4年間の変容と成長のデータ収集および縦断コーパスの構築のために、連携協定を結んでいる北京日本語学センターと共同で年2回の現地調査を計画どおりに継続する一方、2016年4月に新たに連携協定を結んだ国際交流基金日本語国際センターとも、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究の一部を共同で推進した。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス構築作業に2名の大学院生が参加し、指導を行う一方、教室談話の分析に4名の大学院生が参加し、国際学会で発表を行った。さらに、インド在住の大学院生1名に視聴覚コンテンツ開発作業に携わり、インドの日本語教育現場との連携を深めた。
- ・一橋大学との連携講座に参画し、修士3名、博士10名の指導教員として研究論文の指導に当たる一方、非常勤講師として首都大学東京、大阪府立大学、南山大学、東海大学で大学院教育に協力した。
- ・雇用したプロジェクト非常勤研究員 (PDフェロー) 3名のうち、1名は博士論文を基にした著作を2017年2月に刊行し、残る2名もNINJALサロンで自身の研究成果を発表し、次年度以降、研究が本格化できる態勢を整えた。
- ・日本語教師セミナーを当初の計画どおりに国内・海外で1回ずつ開催し、社会人日本語教師の研修に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・外国人にとってわかりやすい日本語という視点を取り入れたビジネス日本語のプロジェクトを、企業関係者を中心とした日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと開始した。
- ・日本語教師セミナーを国内と国外で1回ずつ開催し、研究成果の社会への普及に努めたほか、日本語教師やボランティアを主な対象とする研修会を5回、そのほか、学習者、高校生らを対象とする講演を各地で開催した。

5. グローバル化に関する計画

- ・海外在住のプロジェクト共同研究員28名を軸に、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を推進しているほか、連携協定を結んでいる北京日本語学研究センターと共同で、学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を継続している。さらに、『基本動詞ハンドブック』に関する発表とデモンストレーションをインドの2大学で開催した。
- ・日本語教師セミナー（海外）を中国の北京師範大学で計画どおりに実施した。
- ・NCRBの開発の趣旨と活用方法についての発表を、北京外国語大学および仁川大学の特別講義、韓国外国語教育学会の招待講演、2016年日本語教育国際研究大会の口頭発表として行った。また、BTSJやNCRBを生かした談話の理論研究やポライトネス研究を、第31回国際心理学会（横浜）の口頭発表、2016年日本語教育国際研究大会の口頭発表、第8回中日対照言語学シンポジウムの招待パネルにて発表した。
- ・日本語教育の教室談話（使用・理解）についての発表を、2016年度中国日本語教育研究会年次大会で、大学院生や現地の共同研究員とともに行った。
- ・日本語読解教材の作成に関するパネル発表を、第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムで、ヨーロッパの共同研究員とともに行った。

6. その他

- ・該当する活動なし

【今後の課題】

- ・今年度は、第三期計画終了時の公開を目指す各種コーパスやデータベース構築のための環境を整備することができた。次年度には、各種コーパスやデータベースの作成を継続し、その一部を試験公開して国内外の大学等研究機関の日本語教育研究者への周知に努め、実証的なデータによる日本語教育研究の質的向上につなげ、大学の機能強化に貢献していく予定である。

平成28年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることであり、そのためのサブプロジェクトとして、①「日本語学習者の日本語使用の解明」、②「日本語学習者の日本語理解の解明」、③「日本語学習のためのリソース開発」の3部門を設けている。

初年度の研究成果としては、上記①②③の各種コーパスの開発に着手してデータの収集がなされ、次年度以降の試験公開に向けての準備が整いつつあるが、①の I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパスと③のオンライン日本語基本動詞辞典が予定以上に進展し、それぞれ、研究成果の一部を公開・追加した結果、新たにコーパスの使用方法に関する講習会やワークショップを予定より早期に複数回開催する等の成果を上げた。今後は、本プロジェクトの研究目的に即して、サブプロジ

エクト間の有機的な相互連携から得られた研究成果を、広範かつ具体的に提示して、一層多様化しつつある日本語教育への貢献が大いに期待される。

そこで、本プロジェクトには、次のような要検討の課題が課されているように思う。

- (1) 上記の3部門のうち、①は「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得課程の解明」、②は「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」、③は「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」という具体的な目標を掲げて、各種コーパスの構築やウェブ版教材の作成と公開、各種の日本語学習者の調査や共同研究の計画が進行しつつあるが、3部門間の各種の調査結果と研究成果の本格的な統合を図るとともに、効率よく展開していく必要があるのではないか。
- (2) 日本語教師を対象とするセミナー等の国内外での開催は、十分な意義はあるが、それは、本プロジェクトの研究成果の利用方法を説明するためなのか、あるいは、研究成果の公開目的の研究の推進のためなのか、わかりにくいものがある。本来は連続する性質のものであることから、両者の相違と関連を明確にした上で、国際シンポジウム等を含む今後の実施計画を進めるべきではないか。
- (3) 各種コーパスの利用方法に関する検討を加えながら、構築と整備を進める必要があるように思う。初年度の利用状況に問題はないが、各種コーパスを用いた今後の研究の展開や本格的な公開後の利用促進に向けて、何のために、何をどこまで、コーパスとして構築するのかをより明確にしつつ、本研究を進める必要があるのではないか。
- (4) 研究体制として、海外在住の研究者個人との連携なのか、大学等の日本語教育機関との連携なのか、不明瞭なものがある。内外の多種多様な共同研究員を多数擁する研究課題として、全体の有機的な連携と研究成果の効果的な統合を図ることが肝要なのではないか。

《評価項目》

1. 研究成果について

公開研究発表会・講演会等：プロジェクト全体のデータベースの活用促進を図るという目的で、合同研究発表会「日本語学習者のコミュニケーションの解明に向けて」を2017年2月4日に国語研で開催し、120名（うち、外国人研究者9名、大学院生19名、大学生4名）が参加した。

また、以下の研究発表や講演等を行った。(1) NCRBの開発の趣旨と活用方法に関する、中国の北京外国語大学、韓国の仁川大学の特別講義、韓国外国語教育学会の招待講演、日本語教育国際研究大会の口頭発表。(2) BTSJとNCRBに基づく談話理論やポライトネスの研究に関する、国際心理学会、日本語教育国際研究大会、中日対照言語学シンポジウムの招待パネルの研究発表。(3) 日本語教育の作文と読解のピア・ラーニングの教室談話のBTSJによる分析に関する、中国日本語教育研究会（於上海大学）で共同研究員とともに行った発表。(4) 日本語の読解教材に関する、ヨーロッパ日本語教育シンポジウムで共同研究員とともに行ったパネル。

国際シンポジウム：初年度には実施されていないが、次年度以降の開催が予定されている。

研究成果：多言語母語の日本語学習者横断コーパス I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language) のデータ（日本語学習者225名分の発話と145名分の作文）の第一次公開、および、検索システム I-JAS 中納言の公開。

フィールド調査：中国（黒竜江大学、青島大学）とベトナム（ハノイ国家大学）で、文脈情報を用いた文章理解過程調査を計3回実施した。また、中国、欧州等の調査協力者に依頼し、各所属機関の日本語学習者対象の調査に着手した。

コーパス、データベースの公開：以下の共同利用の成果があった。(1) 母語話者と学習者の自然会話コーパス BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 構築の着手、(2) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language) 構築の着手とデータの公開と、検索システム I-JAS 中納言の公開。(3) オンライン日本語基本動詞辞典(『基本動詞ハンドブック』)のデータの拡充と、BCCWJ コーパス検索ツール NINJAL-LWP for BCCWJ(NLB)の『現代例解国語辞典』[第5版](小学館)の編纂への使用。

研究論文・研究発表等のアウトプット：論文47件、図書4冊、報告書・論集1冊、発表・講演89件、プロジェクトの発表会等10件、データベース2件を公開した。

2. 研究水準について

今日の日本語教育分野における本プロジェクトの目的と課題は、内外の需要に応じた時宜を得たものとして、量的・質的な研究水準は高度なものであり、広範かつ有効な研究成果が徐々に上げられている。

書評・新聞等：『基本動詞ハンドブック』に対して、「コーパスに基づいた先進的な取り組みとして一見の価値がある」と評価された(内田諭「書評 日本語コーパス入門」『英語教育』2016年10月号, 93頁)。

データベースの利用状況：オンライン『日本語基本動詞辞典』のコーパス検索ツール NINJAL - LWP for BCCWJ(NLB)が、コーパスに基づく日本初の国語辞典の『現代国語例解辞典』[第5版](小学館)の編纂に使用された。また、プロジェクト全体のデータベースの活用促進を図る目的で、合同研究発表会を国語研で開催し、共同利用・共同研究が促進された。

3. 研究体制について

研究体制：共同研究員101名(うち大学院生4名)、共同研究員の所属機関数73機関(うち外国の大学・研究所28機関)、プロジェクト非常勤研究員(PDフェロー)3名、非常勤研究員11名、技術補佐員4名である。3種のサブプロジェクトが①32名、②47名、③22名から組織されている。大学・研究機関との連携：共同研究員の所属機関数が73機関(うち外国の大学・研究所28機関)にのぼる。

大学・研究機関との連携：(1)北京日本語学研究センターとの共同で、中国の北京師範大学日本語学科の学部生18名対象に、日本語学習者の日本語習得過程に関する縦断調査(2019年7月まで年2回継続する予定)を実施した。(2)インドの2大学(デリー大学、ネルー大学)で、『基本動詞ハンドブック』に関する発表とデモンストレーションを行った。(3)2016年4月の連携協定により、国際交流基金日本語国際センターと、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究の一部を共同で推進した。

アドバイザーボード：現在は、設置されていない。

4. 教育について

研究過程および研究成果の教育的普及：共同研究と成果発表が国内外で精力的に展開された。教材開発：日本語の読解教材の作成のための共同研究を開始し、試験的公開の準備を整えた。大学の機能強化：(1)中国の北京日本語学研究センターと共同研究を行った。(2)スタッフ1名が、一橋大学の連携教授として、修士課程3名と博士課程10名の研究指導をした。(3)スタッフ3名が、首都大学東京、大阪府立大学、南山大学、東海大学で大学院教育に協力した。

5. 人材育成について

若手研究者の育成：(1)プロジェクト非常勤研究員(PDフェロー)3名を雇用し、うち1名が博士論文の著作を刊行した。(2)文脈情報を用いた文章理解過程を記述するコーパス構築作業に大学院生2名が参加した。(3)ピア・ラーニングの教室談話の分析に大学院生4名が参加した。(4)インド在住の大学院生1名が視聴覚コンテンツの開発作業に携わった。社会人の学び直し：日本語教師セミナーを、国内では国語研で1回、国外では北京師範大学で1回(参加者60名)開催した。

6. 社会連携について

産業界との連携：ビジネス日本語のプロジェクトを、企業関係者中心の日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力で開始した。地域社会との連携：国際交流基金日本語国際センターとの共同で、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を推進した。

7. 社会貢献について

一般向け講義・講演会等：(1)日本語教師セミナーを内外で各1回開催し、研究成果の社会への普及を行った。(2)日本語教師対象の研修会を、北海道大学、国際日本語普及協会、アメリカン・スクール・イン・ジャパン、福岡YWCAで行った。(3)日本語ボランティア対象の講座を福岡県で行った。(4)中国の大学の日本語学習者の訪日団に、中国人の日本語の話し方について講演した。(5)大学共同利用機関シンポジウム2016で、高校生に対し日本語教育の魅力を紹介した。以上は、研究成果の社会への発信にもなっている。

8. 国際連携について

海外の研究者の受入：海外在住の研究者28名をプロジェクト共同研究員として迎え入れた。海外の大学との連携：(1)北京日本語学研究センターと連携協定を結び、共同で調査を実施した。今後も同一対象者に対する継続調査を行う予定である。(2)『基本動詞ハンドブック』に関する研究発表とデモンストレーションをインドの2大学(デリー大学、ネルー大学)で行った。

9. 国際発信について

国際シンポジウムの開催：初年度は実施されていない。なお、日本語教師セミナーを中国の北京師範大学で開催した。英語による研究成果の発信：特にない。ただし、本プロジェクトは、日本語学習や日本語学習者に役立つ研究でもあるため、日本語による研究成果の国際発信は、以下の通りなされた。(1)NCRBの開発趣旨と活用方法に関して、中国・北京外国語大学、韓国・仁川大学の特別

講義，韓国外国語教育学会の招待講演，日本語教育国際研究大会の口頭発表で行った。(2) BTSJ や NCRB に基づく談話理論やポライトネス研究を，国際心理学会，日本語教育国際研究大会，中日対照言語学シンポジウムの招待パネルで発表した。(3) 日本語教育の作文や読解のピア・ラーニングの教室談話の BTSJ を用いた研究発表を，中国日本語教育研究会（於上海大学）で共同研究員とともに行った。(4) 読解教材の作成に関するパネルを，ヨーロッパ日本語教育シンポジウムで共同研究員とともに行った。

10. その他特記事項

特になし。

コーパス開発センター センター長：前川 喜久雄

I. 平成 28 年度計画

(1) 研究実施体制

1. 特任助教 2 名・非常勤研究員 4 名の人事をおこなう。
2. センターの共同研究体制を整える。

(2) 共同利用の推進

1. 『国語研日本語ウェブコーパス』と検索系『梵天』を公開する。
2. 『日本語話し言葉コーパス』、『名大会話コーパス』、『太陽コーパス』を『中納言』上で検索可能とする。
3. 包括的検索環境の構築に向けて検討を進め、『中納言』への音声配信機能の実装と一部コーパスでの試用および『日本語話し言葉コーパス』の形態論情報の仕様変換を実施する。
4. 学習者コーパスおよび方言コーパスの音声およびテキストアライメントに関する基礎研究および共同研究を実施する。また、そのために必要な委託研究を実施する。
5. UniDic の拡張に向けての作業体制を構築する。
6. 『日本語話し言葉コーパス』第 5 刷を作成する。
7. 所内全体で利用可能なジャパンナレッジ(日本国語大辞典オンライン版他多数のコンテンツのライセンス)を導入する。
8. 言語資源の開発と言語研究における先端的な利用等をテーマとしたワークショップ(3 日間)を開催する

II. 平成 28 年度実績

(1) 共同研究の推進

2016 年 10 月よりコーパス開発センターの共同研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」を開始した。浅原をリーダーとし、所外共同研究者は、音声アノテーション関係が 10 名、意味アノテーション関係が 3 名、係り受け構造アノテーション関係が 7 名である。所内からは、石本、岡、加藤、西川、近藤、山崎、前川が参加している。

2017 年 3 月開催の「言語資源活用ワークショップ」および「語彙資源活用シンポジウム」では、この共同研究関係で 15 件の発表が行われた(下記(5)「研究成果の発信と社会貢献」参照)。

(2) 研究実施体制

特任助教 2 名(音声処理関係 1 名、テキスト処理関係 1 名)を公募で採用した。プロジェクト非常勤研究員 4 名(音声処理関係 1 名、テキスト処理関係 1 名、意味処理関係 1 名、その他 1 名)も公募で採用した。

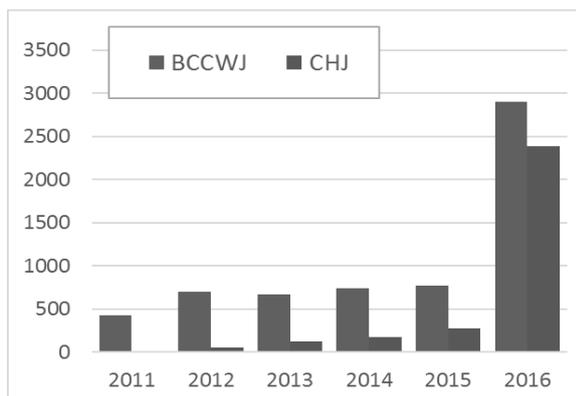
他に『大納言』『中納言』等のデータベースシステムの開発と維持管理業務のために、データベースプログラマー 1 名を派遣社員として雇用し、研究系から、山崎、小木曾、小磯、柏野、山口が併任している。

(3) 共同利用の推進

1. 昨年度末に構築を終えた『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC, 258 億語)とその検索系『梵天』を 2017 年 3 月 6 日に一般公開した。一般公開は文字列検索のみの利用であるが、『中納言』ユーザーで講習会を受講したユーザーは『梵天』の全機能(形態論情報検索および文節係り受け構造検索)を利用できる。講習会は 2 月までに全国で 20 回開催し、参加者は延べ 154 名であった。3 月末に 4 回開催予定で、申込者数は 50 名(3 月 16 日時点)である。
2. さらに研究系プロジェクトと協力して以下の新規コーパスを『中納言』上で公開した。また、そのために必要な『中納言』の機能

改善を行った。

- A) I-JAS(多言語母語の日本語学習者横断コーパス)(2016年5月9日, 178万語)
 - B) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』『太陽コーパス』と『女性雑誌コーパス』に短単位情報を付与したもの(10月26日, 1240万語)
 - C) 『名大会話コーパス』(12月15日, 100万語)
 - D) 『日本語話し言葉コーパス』(2017年2月15日, 752万語)
3. 包括的検索系の設計に関わる諸問題の検討を進め, その成果の一部を「言語資源活用ワークショップ 2016」(下記(5)参照)で発表した。音声配信機能については, HTML5のaudio要素を利用する方法とストリーミングサーバーを利用する方法の得失を比較検討した。
 4. I-JAS, 諸方言コーパス, 日常会話コーパス等に対する重要な技術支援項目である音声・テキスト間自動アラインメント技術について基礎研究を進めた。京都大学工学部河原達也教授との共同研究である。成果の一部を言語資源活用ワークショップ」(下記(5)参照)で発表した。当初河原研究室に対する委託研究(字幕自動付与システムのライセンス料等)を予定していたが, 京都大学で検討の結果, 当面無償提供していただけることになった。
 5. UniDic への分類語彙表番号付与作業について多面的に検討を進めた。茨城大学工学部新納研究室との共同研究を含む。成果は「言語資源活用ワークショップ 2016」(下記(5)参照)および言語処理学会第23回年次大会で発表した。
 6. 『日本語話し言葉コーパス』第5刷を作成した。今回からUSBメモリでの提供とした。
 7. ジャパンナレッジのライセンスを10組導入した。
主に『日本語歴史コーパス』の構築作業で利用されているが, 所内にいれれば誰でも利用できる。
 8. ワークショップについては下記(5)第2項参照。
 9. 2016年5月以降, 『中納言』の利用申し込みを電子化した(商業利用を除く)。その結果, 利用者数が劇的に増加した(図参照)。
 10. 『少納言』検索件数は2015年の年間80万件から大幅に増加して年間160万件以上に達した。ただしこれは一時的増加である可能性がある。
 11. 『中納言』によるBCCWJの検索件数は2015年の28万件から33万件に増加した。
 12. 『中納言』によるCHJの検索件数は2015年の3.5万件から9万件へと急伸した。
 13. 『梵天』(2017年3月一般公開)によるNWJCの検索件数は一般公開版5万件, 多機能版は15000件であった(3月28日時点)。
 14. 『日本語話し言葉コーパス』(DVD版・USB版)の新規契約は53件, うち商業利用3件。
 15. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(DVD版)の新規契約は48件, うち商業利用11件。
 16. 『国語研日本語ウェブコーパス』の分散表現データを47件の組織と個人に無償配布(Creative Commons BY 4.0ライセンス)。
 17. 上記14-15による今年度の収入は約1000万円。



『中納言』利用申請件数の推移

(4) 国際化

1. 韓国国立国語院から韓国語ウェブコーパス構築のための情報収集を目的とした視察の申し込みがあった。12月15日に

Language Information and Resources Division の Kim Seoncheol センター長ほか 4 名が来訪し、熱心に情報を収集していった。これを機会に今後とも情報交換を行うことで合意した。

2. 博報財団の「国際日本語研究フェローシップ」の長期招聘研究者として中国内蒙古大学蒙古語学院の玉栄教授を受け入れた。同氏は、前川・西川の協力のもと、モンゴル語韻律データベースの設計と構築を進めている。成果の一部は「言語資源活用ワークショップ」(下記(5)参照)で発表した。
3. 共同研究プロジェクトの係り受け班は Universal Dependency プロジェクトに参加し、2016 年 12 月に大阪で開かれた国際会議 COLING-2016 の招待講演者 Joakim Nivre ほか 3 名と日本語の Universal Dependency 適応について議論を行った。その成果は言語処理学会第 23 回年次大会のチュートリアル(聴講者約 200 名)で紹介したほか、CoNLL-2017 の Shared Task (評価型ワークショップ) に日本語の係り受けデータを提供した。
4. 台湾中央研究院言語学研究所の Shu-Chuan Tseng 氏と中国語の filled pause について共同研究を実施した。成果の一部を日本音声学会の第 334 回研究例会のシンポジウム「フィルターの音声学と言語学: 日英中を対象に」において発表した。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

1. 『国語研日本語ウェブコーパス』公開時にプレスリリースを実施した。INTERNET WATCH および CERON による報道があり、前者の記事は同サイトの週間アクセスランキング1位となった。はてなブックマークにも 947 件(3 月 16 日時点)の感想が記入され、週間ランキングで総合 3 位(「世の中」カテゴリでは 1 位)となった。
2. 「言語資源活用ワークショップ」(2017 年 3 月 7, 8 日)と、そのサテライトである「語彙資源シンポジウム」(3 月 6 日)を開催した。異なり参加者数は前者が 260 名、後者が 100 名であった。前者では 47 件(うち招待講演 2 件)、後者では 8 件の発表があり、中期計画で目標としていた 40 件を上回った。
3. 共同研究プロジェクトの語義班は、言語処理学会第 23 回年次大会において「語義タグとその利用」と題したテーマセッション(2 部制: 午前 82 名・午後 42 名参加)を企画した。発表は 8 件であり、そのうち 7 件が語義班からの発表であった。
4. 音声情報処理・自然言語処理・認知科学領域の国際会議(INTERSPEECH, COLING, Oriental COCODSA 等)で 10 件の論文(査読あり)を発表した。うち 1 件は Oriental COCODSA の Best Paper Award を受賞した。
5. 上記ワークショップ・国際会議以外の研究発表(言語処理学会など)
和文論文誌 3 件(前川 1 件, 浅原・加藤 1 件, 近藤 1 件)
ブックチャプター 2 件(近藤 2 件)
シンポジウム(指名, invited)登壇 7 件: 前川 4 件(音声学会全国大会・日本音声学会研究例会・IPSJ じんもんこん・所内
日常会話コーパス II)・浅原 2 件(所内合同シンポジウム・所内通時コーパスシンポジウム)・岡 1 件(コーパス開発センター
主催語彙資源シンポジウム)
国内会議発表 26 件(但し, 上に述べたシンポジウム登壇や言語資源活用ワークショップを除く)

(6) 若手研究者育成

所内 Ruby 勉強会 (11 名参加:52 回実施) ・Python 勉強会 (5 名参加:22 回実施) を実施した。
2 月までに実施した所外向け「梵天講習会」20 回の参加者 154 名中 73 名が学生であった。また 3 月に計画している所外向け「梵天講習会」4 回の申込者 50 名中 12 名が学生である。

自己点検評価

計画を上回って実施した

平成28年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した

コーパス開発センターでは、国語研究所内外の共同研究体制を拡充し、各種コーパス収集・アノテーション付与、コーパスと検索系の公開、ワークショップ開催などを通じてコーパス共同利用を推進することが計画された。その計画に沿って、日本語ウェブコーパス・日本語歴史コーパス・日本語話し言葉コーパスをはじめとする各種コーパスの整備と公開が行われた。利用申し込み電子化などの施策によってコーパス検索利用者の増大、商業利用を含むコーパス利用契約締結などを実現しており、コーパス開発・公開は順調に進展している。3月には言語資源活用ワークショップ・語彙資源シンポジウムを開催し多数の参加者を集めている。それらに加えて、受賞を含む国際会議発表、論文発表など研究成果も多数得られている。国際会議評価型ワークショップに標準データを提供するなど、コーパスを利用した日本語研究の基礎データ提供に主導的役割を果たしている。コーパス構築について韓国国立国語院との情報交換の可能性が開かれた点も評価できる。言語資源は機械学習を用いた自然言語処理分野でも重要な位置を占めており、日本語学研究に加えて自然言語処理分野でも一層の貢献を期待する。また、プレスリリースへのアクセス件数の多さや、『中納言』利用申請者の激増は、国語研のコーパス構築への期待の表れとして評価できる。『梵天』ユーザー講習会を20数回開催する等、利用普及の努力も地道に積み重ねてきているが、ウェブでの講習公開やコーパス利用に関する質問への常駐的な対応等によって、より広範な普及を目指すことを期待する。

研究情報発信センター

センター長：プラシャント・パルデシ

I. 平成 28 年度の計画

研究情報発信センターでは、日本語研究の国際拠点である国立国語研究所の一部として、情報発信に関わる研究開発や、研究資料の収集・管理を行っている。第 3 期初年度となる平成 28 年度は、各種言語資源及び研究情報の発信を効率化するため、研究情報・資料・成果の発信を一元的に行うこととし、以下の取組を計画している。

- (1) 研究情報発信センターへの組織改編，体制整備
- (2) ウェブサイトの整備
- (3) 研究資料室にて，過去の研究で蓄積されてきた各種データや資料の保管
- (4) 日本語学・言語学・日本語教育に関わる各種データベースの公開
- (5) 機関リポジトリの整備
- (6) 国立国語研究所論集の刊行
- (7) ことばに関する質問や相談への対応
- (8) 情報システムの整備

II. 平成 28 年度の実績

(1) 体制整備

平成 28 年 4 月より従来の「研究情報資料センター」を「研究情報発信センター」に改め、初代センター長に、プラシャント・パルデシ教授が就任した。改編に伴う諸規定の改正のほか、センターの運営に関する事項を決定する、「研究情報発信センター運営委員会」を同月に設置し、月 1 回の頻度で開催した。(28 年度は 8 回開催)

(2) ウェブサイトの整備

- ・ 国語研のウェブサイトを一覧に見やすいよう改善を図るため、サイトのアクセス調査・分析を行い、頻度の高い「コーパス・データベース」、「刊行物情報」のカテゴリページ、及びユーザーがサイト構成を理解しやすいよう、ナビゲーション機能の向上を図るトップページの改良プロトタイプを作成した。平成 29 年度上半期までにウェブサイトに反映し、利活用促進を図る。
- ・ ウェブサイトの英文化を進め、トップページからの第 3 層までの情報を英文化した。

(3) 研究資料室の環境整備

- ・ 「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」サイトを開設し、収蔵資料群概要を一般公開した。(平成 29 年 3 月 24 日)
- ・ 「研究資料室の資料利用の手引き」を作成・公開し、資料室の利用促進の環境整備に努めた。
- ・ 国語研の過去の研究で収集した「収蔵音源資料」の所内配信システムのサービス開始に向けたシステムの調整を実施し、「収蔵音源データベース」として、488 点の音源資料を所内公開した(平成 29 年 3 月 24 日)。所外公開にあたっては、著作権等の処理を検討することが必要となる。
- ・ 資料室の「中央資料庫収蔵資料」を資料群 ID 順に配架替えを行い、利用しやすい環境を整えた。
- ・ 資料室が保有する各種メディア目録(ベータテープ、CD、カセットテープ、DAT、DVD、フロッピーディスク、MO・MD、オープンリール、ユーマチック、8mm フィルム)、雑誌目録の整備を行った。

- ・ 音源資料（カセットテープ、ミニディスク）のメディア変換（2,216本）を行った。
- ・ 映像資料（8mmフィルム、ベータテープ）のメディア変換（136本）を行った。
- ・ 研究資料の一元的管理を進めるため、「研究資料移管の手引き」を作成・公開した。
- ・ 研究資料室の大学等の学術利用を進めるため、「研究資料室の資料の利用に関する申し合わせ」を改訂した。

（４）各種データベースの公開

- ・ 日本語研究・日本語教育文献データベース（学術雑誌、論文集等に掲載された日本語関係の論文、及び図書のデータベース）の定期的な情報更新を行い、約22万2千件のデータを公開している（平成29年3月末）。28年度は5回の更新作業を行い、論文約4,000件、図書約23,000件（『国語年鑑1994』以降分）を追加公開した。
- ・ 日本語学会秋季大会（平成28年10月）でブース発表を行い、日本語関係研究者ら利用者の意見集約をしたところ、1993年以前の図書データの遡及登録の重要性が指摘された。これを受けて、『国語年鑑1954-1993年』掲載分の図書データの作成を開始した。
- ・ 文献データベース検索画面の英文表示の作成を行った。
- ・ オンライン・ジャーナル採録手順の策定を行った。

（５）機関リポジトリの整備

- ・ 平成27年度にリポジトリに登録・公開した「国立国語研究所論集」「国語研プロジェクトレビュー」について、ウェブページを整理しリポジトリ（DOI登録）へのリンクに切り替えた。
- ・ ウェブサイトの「刊行物データベース」からリポジトリへデータ移行について本文PDF・メタデータの整備を進め、「NINJALフォーラムシリーズ」（68件）、「国立国語研究所報告」（177件）をリポジトリで公開した。また、「国際シンポジウム」「地方調査員報告」等（約200件）のデータ整備を進めた。
- ・ リポジトリ登録データの英語拡充に向け、「英文の研究成果紹介」の英語データ100件の基礎点検を実施した。詳細点検整備は29年度を予定している。

（６）論集の刊行

- ・ 論集の編集校正を進め、11号（平成28年7月）、12号（29年1月）を刊行した。また、13号の編集を進めるとともに、14号の論文募集・投稿申込対応を行った。
- ・ 英語での投稿者に訴求し利便性を高めるため、英文サイト情報を拡充するとともに、論集の要項、様式等の英語版を作成し公開した。

（７）ことば質問・相談への対応

- ・ ことば質問や相談に専門的に対応するスタッフが常駐しており、28年度は512件の質問や相談に対応した。

（８）情報システムの整備

- ・ 所内ネットワークへの不正アクセス端末検知・遮断システム及びアクセスログ集積サーバーを導入する等、ネットワーク・サーバーの運用保守を年間を通じて適切に実施した。
- ・ 国語研サイボウズを機構サイボウズへの移行を実施、さらに、コンピュータ室の電力量の計測と蓄積を行い、今後の更なる電源容量を予測するため、分電盤の設置工事を実施した（平成29年3月）

平成28年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

研究情報発信センターは平成28年度に研究資料センターを改編して発足した。センター名称の示すとおり、センター機能は資料蓄積から情報発信へと重点が変更された。それに伴って年度計画では、研究資料室での各種データ・資料の保管に加えて、web site 整備、日本語研究・日本語教育に関わる各種データベースの公開、機関リポジトリ整備、論集刊行、外部からの質問・相談対応など様々な情報発信の取り組みが計画された。その計画に沿って、Web site の利活用促進のための見やすさ改善・英語化、研究資料室の収蔵資料、音源資料、映像資料の公開に向けた整備、日本語研究・日本語教育文献データベースの更新、リポジトリのデータ整備・公開・英語拡充、論集刊行などが進められた。

研究文献データベース公開に関しては日本語学会大会において研究者の要望集約を行って公開方針に反映していること、また web site, リポジトリ, 論集刊行において英語化を積極的に進めていることは優れた活動として評価できる。国語研収蔵資料概要の公開、文献データベースの定期的情報更新と遡及の努力、「ことば質問・相談」への常駐対応も評価に値する。一方、Web site については、想定利用者ごとの情報整理が未だ十分とは言えず、情報アクセスへの不便が危惧される。使いやすさの点で一層の改善を期待する。

平成 28 年度「組織・運営」,「管理業務」に関する評価シート

【組織・運営】

I. 教育研究等の質の向上の状況に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 研究に関する目標を達成するための措置

(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置

【計画】

「機関拠点型」,「広領域連携型」,「ネットワーク型(日本関連在外資料調査 研究・活用事業)」の基幹研究プロジェクトを実施する。

【実績】

「機関拠点型」,「広領域連携型」,「ネットワーク型(日本関連在外資料調査研究・活用事業)」の基幹研究プロジェクトを実施した。

《機関拠点型》

1) 「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」を6つの班の大型共同研究により始動させた。参加機関 165, 共同研究員 356 名。

① 「対照言語学」班では, The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference を慶應義塾大学言語文化研究所と共同で誘致共催(28年10月14~16日, 発表件数98件, 参加者数193人), 「統語コーパス」班と共同で国際シンポジウム Mimetics in Japanese and Other Languages of the World を開催した(28年12月17~18日, 発表件数30件, 参加者数127人)。

② 「統語コーパス」班では, 国際ワークショップ(Unshared Task on Theory and System Analysis with FraCaS, MultiFraCaS and JSeM Test Suites) を開催した(28年11月13日, 国立国語研究所, 参加者数29人)。

③ 「危機言語・方言」班では, 宮崎県椎葉村方言調査(28年9月4~8日, 話者25人), 島根県隠岐の島方言調査(28年11月3日~6日, 話者18人), 石川県白峰方言調査(29年1月20~23日, 話者9人)を実施した。また, 文化庁, 鹿児島県, 与論町, 与論町教育委員会, 琉球大学と共催で, 「危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会) in 与論」を開催した(28年11月13日, 鹿児島県大島郡与論町砂美地来館, 来場者289人)。

④ 「通時コーパス」班では, 歴史コーパスのデータ整備に着手し, 日本語学会春季大会においてワークショップ『日本語歴史コーパス』の拡張とその課題—「通時コーパス」をめざして—を開催した(28年5月15日, 学習院大学, 参加者約80人)。

⑤ 「日常会話コーパス」班では, 会話データ(190時間, 延べ話者数793名)の収録を行うとともに, シンポジウム『日常会話コーパス』I(28年9月1日, 参加者133人), 『日常会話コーパス』II(29年3月1日, 参加者111人)を開催した。

⑥ 「学習者のコミュニケーション」班では, 北京日本学研究中心と共同で日本語学習者の4年間の変容と成長のデータ収集を行った(28年5月14日~15日, 10月22日~23日)。また, 日本語学習者の文章理解過程の調査を, 中国哈爾濱(28年6月1日~5日), ベトナムハノイ(28年8月23~25日, 8月29日~9月14日), 中国青島(28年11月13日~16日)で実施した。

○共同研究プロジェクト推進会議(月1回開催)を設置し, 班相互の有機的連携を図る方法を検討するとともに, ③④⑤⑥の4班共同でシンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—助詞のすがた—」を開催した(29年3月9

日、国立国語研究所、参加者 112 人)。

上記の活動を通して、公開研究会 25 件、国際シンポジウム 2 件、一般向け講演会 3 件を開催した。

- 外部研究者をリーダーとする公募型の共同研究として、現行 6 班の研究を補完する領域指定型の他に、将来の研究の方向性を探る新領域創出型を新たに設け、運営会議の議を経て領域指定型 5 件、新領域創出型 3 件を 28 年 10 月から開始した (共同研究員合計 71 名)。
- 共同研究プロジェクト推進会議において総合的日本語研究の成果を教育プログラム化ための検討を開始した。その一環として、アクティブ・ラーニングに対応した日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』(大修館書店)を 29 年 3 月に刊行するとともに、コーパスに基づく日本語統語論の教材、フィールド調査に関する教材、日本語学習者用の読解教材の作成の準備を行った。

《広領域連携型》

- 「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築 (「方言の記録と継承による地域文化の再構築」ユニット)」の研究を開始し、「危機言語・方言」班と共同でフィールド調査、危機言語・方言サミットの開催を行った。
- 「異分野融合による「総合書物学」の構築 (「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」ユニット)」の研究を開始し、バージョンの撮影、翻訳テキスト作成に着手した。また、漢字処理に関する論文集『漢字字体史研究 2—字体と漢字情報—』(勉誠出版)を 28 年 11 月に刊行した。

《ネットワーク型 (日本関連在外資料調査研究・活用事業)》

「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」の研究を開始し、ハワイ・ミシガンでの資料調査に加え、在外資料論構築のための研究会を実施した。また、教育プログラムの実施、企画展示のための準備に着手した。

(2) 研究実施体制に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 従来の 4 研究系と日本語教育研究・情報センターを改組し、「理論・対照研究領域」「言語変異研究領域」「言語変化研究領域」「音声言語研究領域」「日本語教育研究領域」の 5 研究領域で構成される研究系に再編する。
- 2) 従来の研究情報資料センターを「研究情報発信センター」に改め、研究情報・資料・成果の発信を一元的に行うとともに、コーパス開発センターの業務・機能を整備する。
- 3) 所長直属の組織として国際交流室を設置する。

【実績】

- 1) 研究力及び連携体制の強化のため、独立行政法人国立国語研究所から承継した日本語教育研究・情報センター及び第 2 期の 4 研究系を改組し、「理論・対照」、「言語変異」、「言語変化」、「音声言語」、「日本語教育」の 5 つの研究領域で構成される新研究系を設置した。それぞれの研究領域において機関拠点型基幹研究プロジェクトを推進するための研究班 (合計 6 班) を設け、相互に連携しながら機関拠点型基幹研究を推進した。
- 2) 「研究情報資料センター」を「研究情報発信センター」に改め、情報発信の一元化とウェブサイトの利便性向上のため、トップページを刷新するとともに、英語ページの改善に取り組んだ。また、共同利用機能の強化のため、研究資料室

で保管されている過去の研究資料のデジタル化・データベース化、研究図書室所蔵の「日本語史研究資料」のオープンデータ化を進めた。さらにコーパス開発センターは、機関拠点型基幹研究プロジェクトで実施する言語資源開発に対する技術支援と既存コーパス群の運営管理を行う組織として業務内容を整備し、新たにテキスト処理および音声処理の研究開発体制を整えた。

3) 所長室直属の組織として、副所長を室長とする「国際連携室」と「IR推進室」を設置し、国際連携室において国際シンポジウムの企画や新たな海外学術交流協定の締結を進めるとともに、IR推進室には機構長裁量経費による特任助教を採用し、平成28年度実績の収集を行った。

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

《評価結果》

計画を上回って実施した

基幹研究プロジェクトが「総合的日本語学」を開拓するためには、6つの研究班の「有機的連携」が極めて重要である。その点で、国語研の研究資源と研究方法の一つの要とも言えるコーパス研究を軸として4班合同のシンポジウムが助詞をめぐって実施されたことをはじめとして、プロジェクト間、研究領域間の協働が進展している点は高く評価できる。今後も共同プロジェクト推進会議を中心として研究班の間での協働を実りある形で推進していくことが期待される。

研究体制再編において「日本語教育研究領域」が設置された点も適切な再編として評価する。これによって、国内外の日本語教育研究を国語研が牽引していく契機となることを期待したい。

研究情報発信センターに対しては、方言の長期縦断調査などの国語研の貴重な蓄積資料をアクセスしやすい形でオープンデータ化していくことも目指していただきたい。

2. 共同利用・共同研究に関する目標を達成するための措置

(1) 共同利用・共同研究の内容・水準に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 日常会話、古典・近代語、方言、学習者の日本語、文法・意味構造に関する新たな言語資源の整備に着手する。
- 2) 複数コーパスの包括的な検索を実現するための基礎研究に着手する。オンライン検索環境での音声配信機能を実装し、配信試験を実施する。
- 3) 新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする領域指定型共同研究を公募する。

【実績】

1) 会話データに関して、『名大会話コーパス』(14万語)を28年12月14日に、『日本語話し言葉コーパス』中納言版を29年3月に一般公開した。古典・近代語に関しては、『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編I雑誌」ver. 1.0(約1,400万語)を28年10月に、「鎌倉時代編II日記・紀行」(約11万語)を29年3月に一般公開した。方言データに関しては、「沖縄県与那国方言の基礎語彙」、「沖縄県首里方言の談話」、「沖縄のラジオ放送から」を29年3月に公開するとともに、「日本語諸方言コーパス」47地点の音声データの整備を行った。学習者データに関しては、公開中の日本語学習者コーパス(I-JAS)に、225名分の発話データと145名分の作文データを追加して28年5月9日に公開した。また、オン

ライン日本語基本動詞辞典の20見出し、例文音声1173文、ショートアニメ31点を追加した。文法・意味構造のデータに関しては、BCCWJコーパス検索ツールにオノマトペ検索機能を追加し、28年12月12日に一般公開した。また、1万文の日本語のテキストに対して統語・意味解析情報付きコーパス、NPCMJコーパス・Keyakiツリーバンクを構築し、検索用インターフェースとともに28年12月に一般公開した。

2) コーパス開発センターにおいて複数コーパスの包括的な検索を実現するための基礎研究を開始し、拠点型基幹研究プロジェクトとの連携により『日本語話し言葉コーパス』、『名大会話コーパス』、『日本語歴史コーパス』(明治・大正編の一部)の形態論情報を「中納言」で公開した。また、第2期に開発を進めた『国語研日本語ウェブコーパス』(253億語)を新しい検索系「梵天」とともに一般公開した(29年3月予定)。包括的検索環境については、仕様の異なるコーパス群を検索する際の問題点の洗い出しをおこない、その解決にむけ、所外の研究者を含めた共同研究を発足させた。音声配信については、HTMLを利用した配信方式による配信実験を行った。

3) 外部研究者をリーダーとする公募型共同研究の1タイプとして、新たな研究領域の開拓をめざす新領域創出型共同研究プロジェクトの公募を行い、運営会議の議を経て3件を採択しスタートさせた。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 各種言語資源及び研究情報の発信を効率化するため、従来の研究情報資料センターを「研究情報発信センター」に改め、研究情報・資料・成果の発信を一元的に行う。
- 2) 言語対照、日本語教育、危機言語・方言、日常会話、日本語史の各種研究プロジェクト相互の連携を高めるためにプロジェクト合同の研究集会の企画に着手する。
- 3) 機構の「総合人間文化研究推進センター」と連携しつつ、機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施する。
- 4) 共同研究プロジェクトの特徴に応じて海外研究者を含むアドバイザーボードを設置する。

【実績】

- 1) 従来の研究情報資料センターを「研究情報発信センター」に改め、研究情報・資料・成果を国立国語研究所のウェブサイトで一元的に発信する環境を整えた。また、各種情報・資料の利便性を高めるためにトップページの刷新を行うとともに、英語ページの改善を進めた。共同利用機能の強化のため、研究資料室で保管されている過去の研究資料のデジタル化・データベース化、研究図書室所蔵の「日本語史研究資料」のオープンデータ化を進めるとともに、「日本語研究・日本語教育研究文献データベース」及び「研究文献データベース」の拡充・更新等を実施した。さらに、各種データの普及と利活用を促進するため、ワークショップ『『日本語歴史コーパス』の拡張とその課題』(28年5月15日、日本語学会、学習院大学、参加者約80名)、NINJALセミナー「データが主導する日本語研究」(9月15日、国立台湾大学、参加者数35人)、コーパス講習会(ひまわり講習会・中納言講習会の2コース)(28年9月1日、参加者27人、29年3月1日、参加者22人)、日本語教育の作文や読解に関わるピア・ラーニングの教室談話(BTSJ)活用方法講習会(28年5月28日参加者47人、11月19日参加者26人、12月12日参加者26人、いずれも国語研)を開催した。
- 2) 機関拠点型共同研究プロジェクトを構成する班の相互連携を促進するため、合同の研究集会の企画に着手した。28年度は「危機言語・方言」「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者のコミュニケーション」の4プロジェクトが合同でシンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーションー助詞のすがたー」を開催した(29年3月9日、国立国語研究所、参加者112人)。
- 3) 所内に自己点検・評価委員会(委員6人)を設置し、委員会でPDCAサイクルを管理するとともに、外部評価委員8

人による外部評価体制を整備した。これにより、29年1～2月に機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

- 4) 「対照言語学」班では、プロジェクトの運営と成果発信について助言を求めるために、海外機関所属の研究者10人を含むアドバイザーボードを設置し、随時アドバイスを得ながら研究を進めた。また、「統語コーパス」班では、海外在住の研究者6人をアドバイザーとして加え、統語解析情報付きコーパスの構築に関する意見交換を行った。

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

《評価結果》

計画どおりに実施した

日常会話、古典、方言、学習者の日本語などの新たな言語資源の整備と、複数コーパスの包括的な検索を実現するための基礎研究が着実に進展したのは、コーパス等の言語資源の今後の広範な共同利用の土台づくりとして評価できる。

コーパス講習会や言語資源の活用方法講習会が地道に実施されている点も評価に値する。今後は、コーパスおよび関連ツールに関する正確な知識のより広範かつ効率的な普及のために、講習会の内容のインターネット公開などについての検討が期待される。

アドバイザーボードの設置は新しい試みであり、運営方法や効果について自己点検・評価がなされて、所内で情報が共有されることが望ましい。

3. 教育に関する目標を達成するための措置

(1) 大学院等への教育協力に関する目標を達成するための措置

【計画】

一橋大学との協定に基づき、連携大学院を継続するとともに、新たに東京外国語大学との協定に基づき、連携大学院を開始する。

【実績】

第2期から継続している一橋大学との連携大学院において、2名が連携教授、1名が連携准教授として授業を担当するとともに、博士前期課程5名、博士後期課程13名の論文指導を行った。また、新たな協定により、28年4月からは東京外国語大学との連携大学院（国際日本学研究科）を開始し、クロスアポイントメント制度による教授1名、准教授1名がJapan Studies I, IIの授業を担当した。

(2) 人材育成に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 国内外の大学院で博士学位を取得した若手研究者をプロジェクト研究員(PDフェロー)として雇用し、専門的研究指導を行う。
- 2) 若手研究者や大学院生等を共同研究プロジェクトに積極的に参画させ、研究成果発表会において発表の機会を提供する。
- 3) 若手研究者向けの講習会(チュートリアル)を複数回開催する。

【実績】

- 1) 若手研究者の育成のためにプロジェクト研究員(PDフェロー)を10人、非常勤研究員を43人雇用し、それぞれが所属する共同研究プロジェクトにおいて研鑽を積ませた。PDフェローのうち3名は外部にポストを獲得した。

- 2) 若手研究者（大学院生，JSPS 特別研究員）29 人を共同研究員として共同研究プロジェクトに参画させるとともに，大学院生にも研究発表の機会を提供し，研究支援を行った（「対照言語学」班ではプロジェクト主催の国際シンポジウムで 41 人の大学院生に発表の機会を提供した。「統語コーパス」班では作文や読解に関わるピア・ラーニングの教室談話の分析に 4 人の大学院生が参加し国際学会で発表を行った。「危機言語・方言」班では島根県隠岐の島方言調査に公募による大学院生 3 人と島根大学学生 8 人を参加させ，フィールド調査の方法を指導した）。
- 3) 大学院生を主な対象とする NINJAL チュートリアルを関東と関西で計 4 回開催した。「『日本語歴史コーパス』活用入門」（大阪会場，28 年 9 月，受講生 17 人。東京会場，29 年 2 月，受講生 25 人），「日本語学習者の文章理解過程を記述した読解コーパスの活用」（大阪会場，29 年 2 月 17 日，受講生 27 人。国語研，29 年 2 月 24 日，受講生 21 人）。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

《評価結果》

計画どおりに実施した

研究と教育の有機的連関を考慮すると，研究所員が大学院教育や若手研究者の指導に従事することは有意義であり，国語研所員が連携教員，クロスポイントメントの制度に積極的に参画していることは評価できる。

若手研究者の育成にあたっては，共同プロジェクトメンバーとして研鑽させること，特にフィールドワークなど現場での経験を積ませることや国際シンポジウムでの研究発表を促すことは国語研の特徴を生かした育成として評価に値する。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 研究成果を広く一般に発信する NINJAL フォーラムと小・中学生を対象とする「ニホンゴ探検」を開催する。
- 2) 最新の研究情報を発信する『国語研プロジェクトレビュー』を刊行する。

【実績】

- 1) 一般向け講演会 NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」を 29 年 1 月 21 日に開催した（一橋大学一橋講堂，入場者 372 人）。フォーラムの成果は「オノマトペ」に関する啓蒙書『オノマトペの謎（仮題）』（岩波科学ライブラリー）として 29 年に出版する予定。また，小・中学生を対象とした「ニホンゴ探検」を開催した（28 年 7 月 16 日，参加者 340 人）。
- 2) 研究プロセスの可視化と研究成果の普及のため，研究者コミュニティに限られていた従来の機関誌『国語研プロジェクトレビュー』を，一般向けの研究情報誌『国語研 ことばの波止場』として刷新し，創刊号（pdf 版）を 3 月に公開した。

【計画】

- 1) 地方自治体と協力して地域の言語・方言の調査と記録を実施する。
- 2) 方言に関する講演会・セミナーを地方自治体と共同で開催する。
- 3) 危機言語・方言の記録と継承を目的とする「日本の危機言語・方言サミット」を地方自治体や文化庁と共同で開催する。

【実績】

- 1) 宮崎県椎葉村椎葉民俗芸能博物館研究事業における5ヶ年計画「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」(H26～H30)と共同で、椎葉方言調査を実施した(28年9月4～8日、調査者9人、話者25人)。また、島根県隠岐郡隠岐の島町教育委員会と共同で隠岐の島方言調査を実施した(28年11月3～6日、参加者28人、話者18人)。
- 2) 島根県隠岐の島町教育委員会と共同で、国立国語研究所セミナー「隠岐の島方言・調査のつどい」を開催した(28年12月10日、隠岐の島町文化会館、来場者44人)。また、立川市歴史民俗資料館と国語研の協定に基づき、日本語に関する講演「立川は「たちかわ」か「たてかわ」かー日本語の発音とアクセントー」を開催(28年12月11日、参加者50人)、東京都青梅市および青梅市立図書館と連携し、青梅市郷土博物館の協力を得て、NINJAL ジュニアプログラムの講演「学んでみよう！多摩のことは青梅のことは」を開催した(28年12月1日、青梅市立若草小学校、聴講者232人(児童215人、教員13人、その他4人))。
- 3) 文化庁、鹿児島県、与論町、与論町教育委員会、琉球大学と共催で、日本の危機言語・方言の記録と継承を目的とする「危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会) in 与論」を開催した(28年11月13日、鹿児島県大島郡与論町の砂美地来館、来場者289人)。

【計画】

日本語教育水準の向上のため、日本語教師を対象とするセミナーを国内と海外で1回ずつ実施する。

【実績】

日本語教師を対象として、日本語教師セミナーを海外(28年10月21日、中国・北京師範大学、参加者60名)と国内(29年1月28日、国立国語研究所、参加者163名)で開催した。また、日本語教師を主な対象とする研修を、北海道大学(28年7月2日、参加者52人)、国際日本語普及協会(28年7月28日、参加者60人)、アメリカン・スクール・イン・ジャパン(28年10月22日、参加者25人)、福岡YWCA(28年10月22日、参加者38人)で開催、日本語ボランティアを対象とする研修を福岡県国際交流センターこくさいひろば・えーるピア久留米生涯学習センター・八幡西生涯学習総合センター(28年11月19～21日、参加者93人)で行った。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

《評価結果》

計画を上回って実施した

小中学生を対象とする「ニホンゴ探検」、オノマトペをテーマとするフォーラムは言語の「魅力と不思議」を社会的に発信していると評価する。また、危機言語・方言の調査研究班による、地域の自治体、教育委員会と協働した危機言語・方言継承のための継続的努力(特に、危機言語・方言サミットへの貢献)は高く評価できる。「立川の読み方」や「多摩のことは、青梅のことは」といった地元に着目した発信は好感がもてる。『国語研 ことばの波止場』が気軽に読める雑誌のイメージで発行されたのも、社会への発信として有効であろう。

5. その他の目標を達成するための措置

(1) グローバル化に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 海外の研究者を積極的に受け入れ共同研究を行う。
- 2) 国際会議を誘致・開催するとともに、研究成果発信のための国際シンポジウムを開催する。
- 3) 日本語研究に関する研究成果を国際出版する。
- 4) 英文ウェブサイトを拡充し、日本語コーパス・データベースを国内外に向けて公開するための準備を開始する。

【実績】

- 1) 海外機関に所属する研究者 49 人（所属機関数 48）に対して機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究員を委嘱するとともに、海外機関所属の研究者を外来研究員として 8 人、特別共同利用研究員として 1 人受け入れて共同研究を行った。
- 2) 研究成果を海外に発信する国際的研究集会として、NINJAL 国際シンポジウム *Mimetics in Japanese and Other Languages of the World* (28 年 12 月 17~18 日、発表件数 30 件、参加者数 127 人)、国際ワークショップ *Unshared Task on Theory and System Analysis with FraCaS, MultiFraCaS and JSeM Test Suites* (28 年 11 月 13 日、国立国語研究所、参加者数 29 人)、NINJAL セミナー「データが主導する日本語研究」(9 月 15 日、国立台湾大学、参加者数 35 人) を開催した。また、海外に拠点を持つ国際会議 *The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference* を慶應義塾大学言語文化研究所と共同で誘致し、国語研で開催した (28 年 10 月 14~16 日、発表件数 98 件、参加者数 193 人)。
- 3) 英語による研究論文集として、*Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project* をオランダ・JohnBenjamins 社 (28 年 6 月)、*Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* をドイツ・De Gruyter Mouton 社 (28 年 7 月) から出版した。また、*The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press) の原稿を 28 年 6 月に入稿した (29 年 5 月刊行予定)。第 2 期に刊行を開始した日本語研究英文ハンドブック (De Gruyter Mouton) については、*Handbook of Contrastive Linguistics, Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language, Handbook of Japanese Sociolinguistics* の執筆・編集を進めた。その他、論文集 *Tonal Change and Neutralization* (De Gruyter Mouton)、28 年 10 月開催の国際シンポジウム *The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference* の成果論集、28 年 12 月開催のオノマトペ国際シンポジウムの成果論集を刊行するための準備を進めた。
- 4) 『日本語歴史コーパス』の英文ホームページを作成し、10 月より海外に向けて発信を開始した。また、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) のローマ字版構築のための準備を進めた。

自己点検評価

計画どおりに実施した

《評価結果》

計画どおりに実施した

海外の研究者受け入れ、国際会議、国際シンポジウム開催については、相応の規模と回数を行っている」と評価する。グローバル化や英語での発信といっても、欧米にだけ目を向けるのではなく、

台湾，韓国など東アジアとの連携の一端が見られる点は評価できる。-

- 英語による研究論文集の刊行は充実しており，高く評価する。-

- 国語研のホームページの英語版はもっと拡充する必要があるように思える。その際，英語版は誰に対して，何の目的で設定するのかという点を踏まえておきたい。

【総合評価】

大規模なデータベースやコーパスの構築は国語研の研究調査活動の一つの柱となっているが，今年度-

から日常会話，古典・近代語，方言，学習者の日本語，文法・意味構造など，新たな言語資源の蓄積と-

整備が順調に始動していることは高く評価できる。-

こうしたコーパス構築の価値が高いだけに，コーパスの活用法に関する研修や普及活動のより一層の-

充実が望まれる。インターネットでの学習が進んでいる現在，コーパス活用法についてもインターネットで学習できるような環境整備が期待される。

-

-

【管理業務】

Ⅱ. 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

運営会議において、外部委員から教員人事、名誉教授に係る手続きについて意見等をいただき、見直しを図った。また、研究教育職員の選考について審議した。その他に、所内に自己点検・評価委員会（委員6人）を設置し、委員会でPDCAサイクルを管理するとともに、外部評価委員8人による外部評価体制を整備した。これにより、28年11～29年3月に機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

【計画】

所長直属の組織としてIR推進室と国際連携室を設置する。また、機関拠点型基幹研究プロジェクトの効果的な推進のため、従来の4研究系と日本語教育研究・情報センターを改組し、5つの研究領域（理論・対照研究領域、言語変異研究領域、言語変化研究領域、音声言語研究領域、日本語教育研究領域）に再編する。

【実績】

所長室直属の組織として国際連携室とIR推進室を設置し、国際連携室を中心に国際シンポジウムの企画や新たな海外学術交流協定の締結を進め、IR推進室を中心に平成28年度実績の収集を行った。

28年4月に日本語教育を含む5つの研究領域で構成される新研究系を設置し、国語研を拠点とする6つの共同研究プロジェクトから構成される機関拠点型プロジェクトを始動した。

「研究情報資料センター」を「研究情報発信センター」に改め、国語研のウェブサイトを見やすいよう改善を図るとともに、サイトの英文化を進めた。さらに、研究資料室で保管されている過去の研究資料のデジタル化・データベース化、研究図書室の「日本語史研究資料」のオープンデータ化を進め、大学の共同利用の機能強化に努めた。その他に、コーパス開発センターを機関拠点型プロジェクトにおける言語資源開発に対する技術支援と既存コーパス群の運営管理の全所的組織として再発足させ、新たにテキスト処理および音声処理領域での研究開発体制を整えた。

3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

【実績】

第7回西東京地区国立大学法人等共同開催の職員研修（コミュニケーション研修）を実施した【平成28年11月25,28日】。具体的には、「的確に伝えるコミュニケーション、ハラスメントにならないコミュニケーションの取り方について」をテーマとしたより良い職場環境・人間関係の構築を図るコミュニケーション研修に3名の職員を参加させた。また、メンタルヘルスの意義と役職者としての役割を認識させ、部下のモチベーションの向上等のためのラインケアや、職場の人事管理に関するリスクマネジメント等に関する知識を習得し、職場環境の改善を図ることを目的としたライン研修に3名の職員を参加させた。

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

《評価結果》

計画どおりに実施した

運営会議では外部委員の指摘が組織のあり方の見直しにつながっている事態が見受けられる点は評価できる。外部評価委員会による外部評価を毎年度行い、その都度の外部評価に対して的確な対応をしてきていると判断している。

2016年度から設置された国際連携室とIR推進室は、必要な業務を専門的・一元的に担うことにより組織運営の効率化に貢献している。

Ⅲ. 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度80%以上にするため、競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

【実績】

- ・平成28年度の科研費に研究代表者もしくは分担者として参加している常勤研究者は28名(30名のうち)であり、参加率は93%であった。また、平成29年度の科研費の申請においては、常勤・非常勤を問わず全研究者が参加する科研費申請準備会議をH28年10月19~20日の2日間に実施し、研究代表者もしくは分担者として科研費(新規及び継続を含む)に申請(参画)した常勤研究者は30名(31名のうち)であり、申請率は97%であった。
- ・また、外部資金については公募情報を所内グループウェアに掲載し、電子メールでも周知した。特に、科研費は、若手研究者の育成にも配慮しつつ、申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う科研費申請準備会議(10月19, 20日)を実施により申請を奨励、支援した。

2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

【計画】

(1)一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

【実績】

- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、省エネを図った。
- ・複数年契約を実施している契約に関して、仕様の見直しにより、「施設常駐管理・空調設備保守点検・消防設備等点検・清掃環境衛生」の各業務委託契約については、対前年度870千円削減した。
- ・複写機に関しては、従来の賃貸借契約と保守契約を一本化し、一般競争入札にて複数年の複合機複写サービス契約を締結し、対前年度比1,294千円削減した。

【計画】

(2)業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人件費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

【実績】

- ・施設管理業務及びネットワーク管理業務について、専門業者に外部委託を行い、引続き管理業務の効率を図った。
- ・研究図書室で、昨年度に引き続きデータ化の外注を委託した。これにより、比較的単純なデータ作成・修正の大量処理は、他の業務を兼務しながら1点1点進めていくよりも、専門としている業者に委託する方が、短期間で効率よく進めることができ、業務の効率化に繋がると共に超過勤務の抑制に寄与した。
- ・8月の1ヶ月間、管理部職員を対象に「ゆう活(夏的生活スタイル変革)」を実施。実施者に対して定時時刻で帰宅するよう促す他、会議の設定時間や一定の時間以降に仕事の発注を行わないよう全職員へ働きかけるなどして超過勤務の抑制を図り、職員のワークライフバランスに努めた。
- ・毎週、水曜日に定時退勤日の所内放送及びメールでの周知で意識啓発を促し、超過勤務の削減を図った。
- ・研究情報発信センター所属教員の人事異動(12/31 辞職)に伴い業務内容の見直しを行い、効率化・合理化することで後任補充を行わない事とした。

自己点検評価

計画どおりに実施した

《評価結果》

計画どおりに実施した

科研費による研究への研究代表者および研究分担者としての参加率、科研費申請率はともになら高く、積極的な研究姿勢が見受けられる。科研費以外の外部資金の情報がどのように収集されているのかが不明だが、IR推進室などで、外部資金の情報を意欲的に収集する体制が望ましい。

省エネや、仕様、サービス契約の見直し、データ化の外注によって経費節減を実現している点は評価できる。後任補充を行わないことによる人件費削減は、近年の大学における定員削減措置への対応などによく見られる事態だが、今後、必要な人員まで削減することのないよう注意されたい。

IV. 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

【計画】

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

【実績】

所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会(委員6人)を設置し、委員会でPDCAサイクルを管理するとともに、自己点検及び評価の検証を行うため外部評価委員8人による外部評価体制を整備した。これにより、28年11～29年3月に機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

【実績】

・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。

・研究プロセスの可視化と研究成果の普及のため、研究者コミュニティに限られていた従来の機関誌『国語研プロジェクトレビュー』を、一般向けの研究情報誌『国語研 ことばの波止場』として刷新し、創刊号（pdf版）を3月に公開するとともに、一般向け講演会NINJALフォーラム「オノマトペの魅力と不思議」を29年1月21日に開催した（一橋大学一橋講堂、入場者372人）。フォーラムの成果は「オノマトペ」に関する啓蒙書『オノマトペの謎（仮題）』（岩波科学ライブラリー）として29年に出版する予定。また、大変高評であったため29年度は関東の他、新たに関西にて立命館大学との共催で開催予定である。その他に、小・中学生を対象とした「ニホンゴ探検」を開催した（28年7月16日、参加者340人）。また、上記「ニホンゴ探検 2016」で行われたミニ講義を撮影・編集した動画や、鼻濁音をテーマとした動画を新たにウェブで公開した。

・メールマガジン（月2回）を配信し、国語研が開催するシンポジウム、講演会や講習会、データベース公開等の情報について発信した。また、Youtubeに開設した研究所のチャンネルを通じた動画配信も行った。

自己点検評価

計画どおりに実施した

《評価結果》

計画どおりに実施した

自己点検・評価と外部評価の体制は、他機関と比較して、かなりよく機能していると判断する。外部評価報告書をウェブサイトおよび『国立国語研究所年報』で公開している点も評価できる。

新しく刊行された一般向け研究情報誌『国語研 ことばの波止場』は、記事の内容やレイアウト等が読みやすくつくられており、好感がもてる。どのように頒布されているのかも気になるところである。

ウェブサイトにある「国語研ムービー」も親しみやすくできている。こうした形態で、コーパス活用法講習が公開されることが期待される。「国語研ムービー」にも英語サブタイトルがほしい。

V. その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置を達成するための措置

1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

【計画】

1) 施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

【実績】

・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定、通路の補修等）により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。

・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、省エネを図った。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

【計画】

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

【実績】

- ・防災マニュアルを改定(28.9)し、全職員を対象に所内防災設備の取扱い説明を行うなど周知を図った。また、立川防災館で火災や地震発生時に取るべき行動や人命救助の方法について学ぶ体験学習に職員を26名参加させ防災の意識向上を図った(28.12.6,7)。
- ・機構本部から「危機管理体制の整備状況について」で【「危機管理の対象となる事象の範囲」に掲げられる事象を防止するための措置】の照会により国語研内の危機管理体制を再確認することができた。

3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

【計画】

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

【実績】

- ・公的研究費の不正使用防止に関するコンプライアンス教育を実施（平成28年12月22日）。
- ・研究倫理教育研修を実施（平成29年3月17日）。
- ・「人を対象とする研究に関する研究倫理審査」を15件実施した。

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

《評価結果》

計画どおりに実施した

定期的な施設・設備の点検、省エネ、防災マニュアルに基づく訓練等、必要な業務運営措置がとられていると判断する。ただし、長期的な方言縦断調査資料等、貴重資料を保管していることを考慮すると、それらの貴重資料を火災や災害時に的確に保全できるような体制と設備づくりが必要だと思われる。

研究倫理に関するコンプライアンス教育や教育研修も適切に実施されている。言語研究調査では、「人を対象とする」ことが多いが、そうした研究に関する研究倫理審査は重要であり、15件実施されている点は評価できる。

【総合評価】

業務運営の改善および効率化、財務内容の改善、自己点検・評価に関しては、全体的に見て適切に実施されていると評価する。

科研費研究参加率、申請率が高いことは評価できるが、他の外部資金獲得のための情報収集や積

極的な申請も必要と思われる。-

- 『国語研- ことばの波止場』や「国語研ムービー」のような広報活動は、一般の人たち、特に若い世代の日本語への関心を高めるために必要な方途として評価できる。

-

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿(敬称略)

- ◎ 門倉 正美 横浜国立大学名誉教授
専門:日本語教育
- 田野村 忠温 大阪大学大学院文学研究科教授
専門:言語学・日本語学
- 沖 裕子 信州大学人文学部教授
専門:日本語学, 日本語教育学
- 小野 正弘 明治大学文学部教授
専門:国語学
- 片桐 恭弘 公立ほこだて未来大学学長
専門:認知科学
- 木村 英樹 追手門大学院大学国際教養学部教授
専門:言語学
- 佐久間 まゆみ 早稲田大学大学院日本語教育研究科教授
専門:国語学, 日本語教育学
- 橋田 浩一 東京大学大学院情報理工学研究科教授
専門:自然言語処理, 人工知能, 認知科学

任期:平成 28 年 10 月 1 日～平成 30 年 9 月 30 日(2 年)

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所平成28年度業務の実績に関する評価の実施について

1. - 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. - 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、平成28年度の計画及びその実施状況が記入された「28年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証した。-

-

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次の通りである。-

点検項目	観 点
研究成果	研究業績の量的側面- ・どれだけ論文等のアウトプットがあるか
研究水準	研究業績の質的側面- ・ どれほど学術的意義や社会的意義があるか
研究体制	研究推進にあたっての制度的側面- ・ どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか
教育	研究過程及び研究成果の教育的普及- ・ どれほど大学等の機能強化に貢献しているか
人材育成	若手研究者の育成、及び社会人の学び直し- ・ どれだけ受け入れて取り組んでいるか
社会連携	自治体・産業界との連携など社会との協業- ・ どれほど社会と連携しているか
社会貢献	研究成果の社会への普及- ・ どれほど社会に向けて発信しているか
国際連携	研究体制における国際的協業- ・ どれだけ海外の組織と連携しているか-
国際発信	研究過程及び研究成果の国際的発信- ・ どれだけ国際的に発信しているか-
その他特記事項	-

-
-
機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧-

研究系	プロジェクト名-	プロジェクト略称-	リーダー-
理論・対照研究領域-	対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法-	対照言語学-	窪菌 晴夫-
理論・対照研究領域-	統語・意味解析コーパスの開発と言語研究-	統語コーパス-	プラシヤント・パル デシ-
言語変異研究領域-	日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成-	危機言語・方言-	木部 暢子-
言語変化研究領域-	通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開-	通時コーパス-	小木曾 智信-
音声言語研究領域-	大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究-	日常会話コーパス-	小磯 花絵-
日本語教育研究領域-	日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明-	学習者のコミュニケーション-	石黒 圭-

国立国語研究所外部評価委員会規程-

平成21年10月 1日-
国語研規程第7号
改正平成28年 4月 1日-

(趣旨)-

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程(国語研規程第1号)第15条の規定に基づき、国立国語研究所(以下「研究所」という。)外部評価委員会(以下「委員会」という。)の組織及び運営について定めるものとする。-

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。-
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。-
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。-
- (4) その他評価に関すること。-

(組織)-

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。-

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。-

(任期)-

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)-

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。-

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。-

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。-

(議事)-

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。-

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。-

(意見の聴取)-

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。-

(外部評価の実施等)-

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。-

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。-

(庶務)-

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。-

(その他)-

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。-

-

附 則-

この規程は、平成21年10月1日から施行する。-

附 則-

この規程は、平成28年4月1日から施行する。-

-

-

-

国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第 1 回)

日 時:平成 29 年 1 月 13 日(金)15:00～17:00

場 所:ステーションコンファレンス東京

議 事:

1. 平成 28 年度国立国語研究所外部評価について
2. 今後のスケジュールについて
3. その他

資 料

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（平成 29 年 1 月 1 日現在）
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
- 3-1. 国立国語研究所 外部評価委員会 作業の流れ
- 3-2. 国立国語研究所プロジェクト別 平成 28 年度評価担当
- 4-1. 「共同研究プロジェクト」,「機関拠点型基幹研究プロジェクト」の点検項目及び観点
- 4-2. 国立国語研究所プロジェクト評価実施の手引き
- 5-1. 共同研究プロジェクト自己点検報告書（平成 28 年度）
- 5-2. 平成 28 年度共同研究プロジェクト暫定評価シート【A】
- 5-3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト 平成 28 年度 年次計画
- 5-4. 機関拠点型基幹研究プロジェクト 平成 28 年度実績報告書
- 5-5. 機関拠点型基幹研究プロジェクト 平成 28 年度 点検・評価報告書【B】
6. 今後のスケジュールについて

参考

1. 機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」基本計画
2. 第 3 期中期目標（計画）・平成 28 年度年度計画対応表
3. 平成 27 年度国立国語研究所外部評価報告書
4. 国立国語研究所要覧

国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第2回)

日 時：平成 29 年 2 月 20 日（月）14:00～16:00

場 所：ステーションコンファレンス東京 会議室 402-C, D

議 事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 28 年度共同研究プロジェクト暫定評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト 平成28年度 点検・評価報告書について
4. その他

資 料

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿(平成 29 年 1 月 1 日現在)
2. 前回議事概要(案)
3. 国立国語研究所プロジェクト別 平成 28 年度評価担当
4. 平成 28 年度共同研究プロジェクト暫定評価シート【A】
5. 機関拠点型基幹研究プロジェクト 平成 28 年度 点検・評価報告書【B】

国立国語研究所外部評価委員会【平成 28 年度実績評価】(第3回)

日 時：平成 29 年 6 月 22 日（木）13:30～15:30

場 所：TKP 東京駅前カンファレンスセンター カンファレンスルーム 4A

議 事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 28 年度共同研究プロジェクト評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価シートについて
4. 平成 28 年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 平成 28 年度「組織・運営」、「管理業務」の評価について
6. その他

資 料

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（平成 29 年 4 月 1 日現在）
2. 前回議事概要（案）
3. 国立国語研究所プロジェクト別 平成 28 年度評価担当
4. 平成 28 年度共同研究プロジェクト自己点検報告書
5. 平成 28 年度共同研究プロジェクト評価シート【A´】
6. 異議申し立て書
7. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価シート
8. 平成 28 年度国立国語研究所 2 センターに関する実績報告書
9. 平成 28 年度国立国語研究所 2 センターに関する評価結果
10. 平成 28 年度「組織・運営」、「管理業務」に関する評価結果
11. 平成 28 年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
12. 基幹研究プロジェクトに係る平成 28 年の実施状況に関する評価結果について
13. 今後のスケジュールについて（イメージ）

国立国語研究所 年報 2016年度

2018年2月20日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町10-2

TEL：042-540-4300 FAX：042-540-4333

<https://www.ninjal.ac.jp/>

